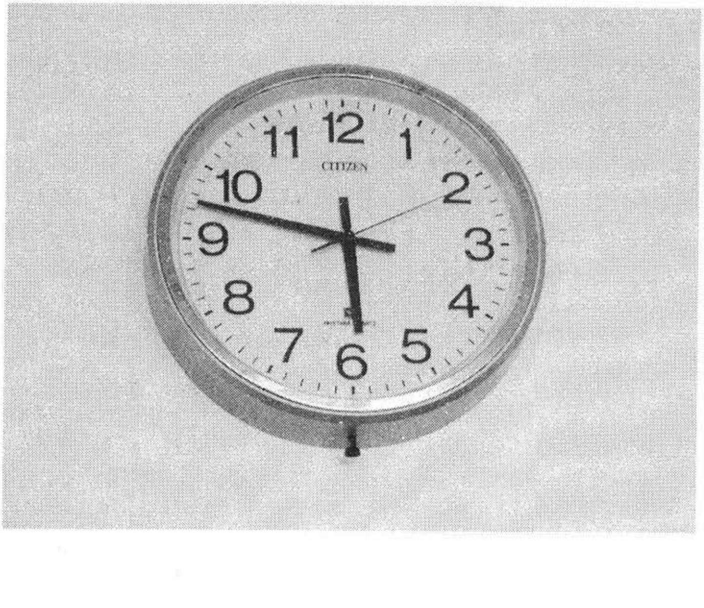
甲　　　陽

第 33 号

— 阪神大震災特集 —



甲陽学院高等学校出版委員会

甲　　陽

第33号

—阪神大震災特集—

目　　次

1	1月17日、その時私は	1994年度第1学年169名……	1
2	瞬時の変貌　−1月19日、西宮北口から高校へ−	西村　大典 …………………	125
3	自分は何をし、どう慌てたか　−自為録−	田治　宏敬 …………………	127
4	大震災・私の言い分	東海　太郎 …………………	129
5	阪神大震災における情報の役割と現状	松村　新一 …………………	130
6	震災余録　−あとがきに代えて	山内　英正 …………………	132

表紙写真　甲陽学院高等学校会議室の時計

1月17日、その時私は

青石　　勉　　神戸市垂水区つつじが丘

まず飛び起きたのは母である。祖母から関東大震災のことを耳が痛くなるまで聞かされていたのが、功を奏したらしい。その次の揺れで頭の上の所に鏡台が落ち、粉々になったガラスの破片が布団の上に降ったそうだ。自分は目を覚ましたが特に動こうとはせず、「毛布をかぶれ」の声に、毛布をかぶって再び眠りにつこうとしたところを母に起こされたのである。熟睡していた姉は言うまでもない。ところで最も役に立ったのは、姉が懐中電灯の場所を覚えていたことである。が、暗闇の中での捜探は手惑い、常備灯の設置を痛感した。まあ、その後1時間ぐらいは待期し、その後片付け始めた訳だが、我が家の被害はかなり軽かったと言うべきなのかもしれない。瓦が落ちた程度だった。築10年のこの建物、つい先日、壁の塗りかえた屋根の補修をしたところなのだが。ガラスの破片の掃除には手間取ったが、引き戸以外は外に落ちず当日中に片付いたのである。ところで、1～2時間後にすぐ電気が復興したのは幸運だった。それよりも我が家は夏に断水もせずポリタンクも買っていなかったので、水が出ていたというのはかなり幸運だった。ただ、2～3日後ぐらいに突然ガスが止まり、それまでガスにたよっていた生活だったので、数日後に姫路から親せきに来てもらうまでは電子レンジだけであった。それでも水は出ていたので食べられなくなることはなかった。が、親せきがプロパンと電磁調理器を持って来てくれるとほぼいつも通りの生活となり、ほとんど不自由もしなくなった。風呂の問題も他の家に入れてもらったり、家で行水をしてほぼ解決した。他の人々の好意には非常に感謝した。その上、水と電気が通っており幸運だった。買い物には多くの人々が来ていたのだが、考えてみればスーパーが初日から開いていたこと自体ラッキーだった。ただ、そのすさまじい長さの列の4～5回も並んだ自分の根性に感心すると同時に、四日後、客がかなり少ないスーパーを見て空しくもなった。それでも、ギックリ腰の母と腰痛の姉は自分よりもかなり働いていたので感謝している。ところで父は赴任先の栃木から山陰を回ってかけつけてくれたのだが、その父の言うことには、コレクトコールの電話は自宅の電話でかけてもかかりやすいらしいということである。ちなみに、このような状況下では、直後は電話がかかるらしいので、もし万が一、再びこのようなことになれば、すぐに電話をかけることを覚えておこうと思う。さて、このような中で、心暖まることに多く出会ったが、一つだけ気まずいことがあった。屋根のシートの件である。我が家は東急にたのんだのだが、離りの家の主人のいとこが大工だったので重なることを承知でたのんでもらったのである。その結果、東急にシートをかぶせてもらっている時に、大工の方も長時間かけて来てくれたので、少しいざこざがあったのである。このようなとき、信用して1人にたのむか、確実性を求めて複数にたのむか、折しも次の日の降水確率が70%だったので難しい所だった。物がこわれ瓦が落ちたが、家族全員無事で家もしっかりしているだけで充分すぎるほどだ。ただ通学に往復8時間とは、ちょっと長すぎるかもしれない。とにかく非常用リュックと懐中電灯を持って、我が家の愛犬がびびって再び脱走しないよう願いながら眠る日々が続いている。そういえば最近地震ににぶくなったような気もするが…。

赤松　雅夫　　芦屋市浜風町

地震のゆれ自体は、眠っていたために全く感じなかった。だが、自分が寝ているすぐ横に置いてあった棚の上のCDラック－120枚入り×２に約200枚のCDを収納－がふとんの上に落ちてきて、その時に、そのラックのガラス戸びらが４枚中２枚割れた。目を覚ましたのはその瞬間であった。初めは何事か分からず、ねぼけていたためもあり、何か割れたなっと思っただけであった。しかし、大事に思えてきたので、手さぐりで部屋を出ると家族も同時に部屋から出てきた。家全体の電気が切れたいたようなので、まず懐中電灯を手に取って、次に、数センチのところで、CDラックの落ちてくるのからまぬがれた携帯テレビを手に取ってスイッチを入れた。さいわい電池で作動する物があったので、そのテレビのおかげで事態はすぐに把握することができた。ニュースで震度５や６などと言っているので大変おどろいた。このような経験は誰にとっても初めてのことであろう。家族はみな手に懐中電灯を持って、一通り家の中の様子を見ると、ベッドに戻り、夜が明けるのを待った。

夜が明けて外を見ると、打出の方や、もう少し上の方で合計３ヶ所から煙が上がっているのが見えた。埋め立て地だったので、ゆれはいく分吸収されたようだが、土壌がやわらかいために、逆に道路の被害はすさまじいものであったろう。家にもわずかながら傾きが感じられる。さらに驚いたことに、土手の上を通って、環境処理センター付近まで延びる道、仁丹テニスクラブから浜風南公園までが明らかに陥没している。普段は隠れて見えない部分が見えているのが、直感的に分かる。家の周辺は液状化して、道がどろ水だらけ。一般道路の被害は他の地区よりもひどく思えた。

まずは、割れたガラス類をかたづけた。食器類は向きの関係か、ほとんど無事であった。西向きの棚は、ほとんどが落ちていた。額や花びんの多くは落ちて、置き物のガラス製品も落ちたが、全体的に損害は少なかったと思う。机の上や床に落ちた物を拾って、家の中をかたづけ終えると外に出た。その頃にはすでに電気は通っていた。庭の棚がゆがんでいて、そこの戸びらの開閉ができなくなっている所もあり、ホースを巻きつけて閉じたままにしてある。

やはり水が問題だ。海が近いので（歩いて２分)、トイレに流すために海水を風呂おけいっぱいに入れてためている。打出浜小学校に行けば、いつでも好きなだけ水があるので、飲料水には全く苦労しない。あの辺りは被害が大きかったので、みんな避難しているために、近所からくみに行く人が少ないのだろう。うちの近所から行っている人が多い。２日目か３日目から近くのスーパーが営業を再開し、その次の日には薬局も開いた。みんなティッシュやラップを買っていたが、うちではそれに加えて消毒液なども買った。数日後には湯沸かしポットも買った。これは結構重宝する。やはり水だけでも出て欲しい。

浅田　剛正　　神戸市須磨区竜が台

この日の前日までインフルエンザで体調をくずしていたぼくは、日曜、月曜の連休が明けて

さあがんばろうという気分で、めずらしく学校へ行く準備を完全に整えていた。前夜もいつもに比べてかなり早めに床についたと思う。地震が起こっている間の記憶は、はっきり言ってあまりない。たぶん今思うと、最初のドーンというつきあげるゆれで目が覚めたのだと思う。そのあとの横ゆれは、自分の左下方向にあるタンスと、その上にあったものが、激しくゆれていることと、周りの物や本などが落ちる音しか分からなかった。目が覚めて、５秒ほどたって、やっと意識がはっきりし始めた。「え、これは地震とちゃうんか。」と思い、まだ半分夢の中にいるような感覚だった。実はぼくは地震自体は始めての経験ではない。５年ほど前までは東京に住んでいたのだ。東京ではけっこうゆれることが多かったし、年に３回ほど地震を想定した避難訓練をしていた。そのせいかどうかは知らないが、とにかく落ちてくるものから頭を守らないといけないと思い、とっさにふとんをかぶっていた。だけど残念ながら、そこまでの判断力がおそすぎて、ふとんをかぶったとたんに、ゆれは小さくなっていった。ゆれが小さくなると、ふとんをかぶっている自分が少しむなしくなり頭を出した。まだ余震は続いていたが、こういう時は動かないほうがよいと思い、しばらくふとんでボーとしていた。そのうちとなりの寝室から、父の「大丈夫か」という声があり、ぼくは「生きてるよ」と返事をした。実のところはまだ少し怖かったのだけど、眼鏡をかけて、電気をつけようとした。当然つくはずもなく、真暗な部屋を歩いてとなりの部屋に行くドアをあけようとしたが、なにかが引っかかってあけられなかった。向こうからあけてくれたが、なんせ暗いのでしょうがなく、とりあえずふとんにもどってゴロゴロしていた。そのうち少し外が明るくなったので窓から外を見たが、あまり目に見えた被害はなかった。その時、正直なところ「なんだ、こんなものか」と思ってしまったが、外に出てみると、自分の家の門とそれとくっついてた壁がくずれていた。その後近所の人や友達と少し話した。話していると空から灰のような燃えかすのようなものが降っているのに気がついた。どこかが火事なのかと思って自転車で周りを見まわったが、どこが火事なのか分からなかった。７時ごろ電気が通ったので、テレビを見て驚いた。昼ごろまでテレビを見たり外を見回ったりした。割れた皿やグチャグチャになった部屋を片付ける気にはならなかったのだ。父は10時頃に近所の人の車で会社に行ったので、午後からの家のかたづけはしんどかった。驚いたことに、その日の夕方まで水が出ていたので助かった。水を使っているとなんとなく出が悪くなってきたので急いで風呂やなべなどに水をためると、夕方には出なくなっていた。電話は５本ぐらいしかかかってこず、こっちからもほとんどかからなかった。結局その日以降、電話はときどきかかり、水は次の日に出て、ガスは止まらなかった。

梅谷　洋介　　芦屋市浜風町

少し床が動き始めるとすぐに飛び起きました。それから１～２秒後に大きな激しい揺れがあり、ふとんの真横の高さ2.5m、横４ｍの本棚がおそいかかってきました。偶然にも、起きてすぐ階段を下りようとしていました。兄も全く同じ状況であったようです。父、母は、地震がおそってくるまえに起きて出勤の仕度をしていました。母は食器棚の北側、父は洗面所にいました。食器棚の中の物はすべて飛び出し割れ、さらに食器棚までもが２～３ｍもふっとびまし

た。運よく家族全員無事でした。まず、全員が玄関に集合してケガがないか確認して、それぞれ行動しはじめました。自分は、まずメガネを捜しました。ハッキリ視界が見えないと危険だからです。本棚の下じきになっていましたが、なんとか見つけだしました。目が悪い人は不便であると実感しました。母は懐中電灯をとりだし、父は登山用のヘッドランプを取り出していた（父の趣味は登山)。父は「ヘッドランプは役に立つだろう」と自慢げに言っていました。兄はボケーとしていました。次に、自分たち家族はラジオによる情報の必要性を感じ、僕が公立中学の技術の時に作ったラジオをとり出し、スイッチを入れました。そのころからずいぶんガス臭いことに気づき母がガス管を止めにいきました。そのころ、僕は外に出て家の周りを見ていました。まず気づいたのは、庭において液状化現象がおきていました。その現象の瞬間はとらえられませんでしたが、庭中ドロだらけでした。さらに周りを見ると、山の手で火の手が上がっていました。すぐに見にいきたくなりましたが、まだ暗く、危険であるので家でじっとしていました。明るくなり始めたのが６時30分ごろでした。やっと周りの様子がはっきりとみえてきました。まず驚いたのは、地面の亀裂です。大きいものでは１ｍぐらい段差がありました。このころ父・母・兄は、たくましくも部屋のそうじをはじめていました。すごい！僕の家のあたりは、全壊もしくは半壊の家が一軒もなかったのでこの地域は大事にいたりませんでした。こうして10時ごろになって、僕はすぐにスーパーに食糧を買いにいった。時はすでにおそく、人の行列ができていた。でもなんとかたくさん買えました。こうして後の時間は家で、ゆっくりテレビを見たり、電話したりしてすごしました。この地震を通して、いくらマルチメディアの時代といっても、こういう状態には、どうすることもできない現代のなさけない一面を見ました。

鵜山　　淳　　神戸市東灘区住吉台

５時46分に地震が起きたとき２階で寝ていました。目を覚ましたらすごくゆれていて、ふとんをすぐに頭からかぶりました。地震がおさまってしばらく何が起こったのか全くわかりませんでした。そしてまず部屋の電気をつけようとしたのですが、停電でつきませんでした。しばらく、じっとふとんの中にいました。しばらくすると母が２階に上がってきて懐中電灯をさがしだして、無事を確認しにきました。父は２階にいたのですが、母が来たあと下に様子をみにいきました。ぼくはラジオをつけてはじめて地震が起きたのだと知っておどろきました。しばらくして、ガスくさいと母が言っていたのでおどろきました。気分が悪くなりました。それから、母は風呂の浴槽に水をためていました。これは、後にトイレの水に使えたのでよかったなあと思いました。祖父の家から電話がかかってきて、無事を確認しあっていました。祖父の家は加古川なのでそんなに被害はありませんでした、夜が明けて太陽がのぼってきて周りが明るくなってくると、家の中がメチャクチャでタンスや本たなが倒れて本やいろんな物が散乱していました。窓から外を見ると、海の方で黒いけむりがたっていておどろきました。着がえて下におりていくと、食器はさいわい半分くらい残っていました。しかし、破片はちらかっていました。そして、家の中でおそらく一番高級なものだと思う馬の置物の足がおれていて、もった

いないと思いました。それから、家の中を見回してみると、ひびが入ったり柱が折れたりしていなくて、家の周りもたいして被害がなかったのでそれほどたいしたことはないのだろうと思っていましたが、ラジオで高速道路が倒れているとか、鉄道の高架がおちているとか、被害の状況がわかるにつれて震災のおそろしさを感じ、そして7時や8時とかに起こっていたら自分はどうなっていたかと考えました。やっと落ち着いてきて10時ごろ朝食を母がつくっていました。居間に一つだけの石油ストーブをおいて、そこで家族5人で食べました。もちろん、水・ガス・電気はつかないのでカセットコンロを使って、前日は水だきだったのでそこにごはんをいれておじやをつくっていました。飯を食べたあと、自分の部屋をかたづけました。何もこわれてなくてよかったと思いました。かたづけには1時間かかりました。昼になると、近くに水がでているところがあるのでそこに水をくみにいきました。3回くらいバケツに水をくんで風呂場にためておきました。父が車で阪急・JRの方にいってみるとすごい被害だと言っていて、当分学校はないと思いました。夕方に電気は復旧してテレビをみて被害の大きさにおどろきました。夜は朝と同じぞう水をたべました。寒いので夜はすぐにねたのですが、余震がくるたびに、目がさめてなかなか眠れませんでした。

川崎　宗男　　尼崎市水堂町

17日、僕は5時15分ごろに起き、英語の予習をしていた。僕の部屋は二階の南向きにある。父と母はもう起きていてともに一階にいた。姉は二階で寝ていた。僕の家では家族四人が同じ部屋で寝るのだ。僕は頭を休めるためにいすをひいてぼんやりしていた。突然いすがゆれた。その直後に部屋全体がゆれ、真っ暗になった。僕は無我夢中で机の下にかくれた。どれくらいゆれていたのかわからない。僕の部屋の向かいのアパートでベルが鳴っていて、人の声が聞こえた。僕は真っ暗なのでじっとするしかなかった。父が大声で僕と姉の名前を呼んだ。僕は大声で「大丈夫や」と応答した。姉は何かわめいていた。母が懐中電灯で照らしながら僕の部屋へやって来た。照らし出された部屋の様子を見て僕はびっくりした。今まで座っていたいすに本棚がもたれていた。他の本棚も倒れて、部屋は足の踏み場もないほどちらかっていた。一階に行くと父が部屋をかたづけていた。僕たちはラジオを聞いていた。マグニチュード7.2というとほうもない大きな地震だった。僕の家は運送会社をしていたので、おっちゃんたちが二・三人来てどこどこで火事がある、などということを父や母に話した。おっちゃんたちが帰って、日が昇ってきたので外に出て家を眺めた。表側がくずれていて無残だった。破片が道路にとび散っていた。父の話では屋根は大丈夫らしかった。となりの救急病院の窓ガラスが二・三枚割れているのが印象的だった。僕の家の周りの建物はあまり傷んでない様子だった。母は地震が起きるまで僕の弁当を作っていたので、そのおかずも朝食にした。新聞を読んで二階の部屋のそうじを始めた。もちろん電気は使えないので、ほうきとちり取りでやった。改めて自分の部屋を見て、僕はよくもまあ無傷だったなあと思った。あの時机の下にもぐりこまなければ、負傷をしたにちがいなかった。壁にひびが入って、その砂で汚れていた。四人が寝ていた部屋もひどかった。父は四時ごろに起きていたので何ともなかったが、ちょうどその場所に大きなタ

ンスが倒れていた。壁にはひびが入り、その砂で家中が汚れていた。僕はまず自分の部屋を片づけたあと、二階をひととおりそうじした。電話はこちらからはかけられなかった。外を見ると公衆電話にみんな並んでいた。

衣畑　成紀　　高槻市登美の里町

僕は1月14日の土曜日に吹雪の中、クラブをして風邪をひいて流感になっていた。地震当日も寝こんでいて学校には行けない状態だった。17日は地震で目が覚めた。目が覚めた時は激しい横ゆれだった。恐かったので布団を頭からかぶり、足の上のかべにひっかけてある棚が落ちてこないか気づかいながら、おさまるのを待った。おさまると父・母・祖父・祖母が部屋から出てきて、すごい地震やったな、と話をした。明かりがつかないので、父と祖父は懐中電灯とろうそくを探しに下に降りた。僕は母が「大丈夫か。」と言ったので、「大丈夫」と言って、もう一度寝た。朝おきると、電気がついていた。ニュースを見ると伊丹駅や、阪神高速が写されていた。すごいなーと思いながら飯を食った。それからずっとニュースを見てた。こりゃ、学校はないなと思った。それから父と本棚をまずたてた。うちは電気・ガス・水道全て使えた。次の日から部屋を片づけようと思ったが、床一面本まみれで片づける気がしなかった。その次の日から片づけ始め、丸三日かかってやっと片づけた。部屋の模様変えをしながらいらないものは捨てるかあげるかすると、めっちゃきれいになった。僕はいったん掃除しだすととまらなくなるたちなので夜中の1時くらいまでやった。マスクをしてほこりをふきながら…。外は何もこわれてないし、家も大丈夫だった。それから母と祖父が風邪をひいた。僕は熱が下がった。はっきりいってその日その日がひまだった。24日火曜日に塾へ行って、同級生の甲陽生としゃべって何か元気になっていくのがわかった。1月30日は西宮北口から甲陽まで歩いた。友人といっしょだったけれどかなり疲れた。帰りも同じだった。2月1日からはＪＲ芦屋からバスに乗った。楽だった。結論と言うと、高槻は平和だった。しかし、高槻が得なのはこんなことぐらいだろう。いつも学校の近く（東灘区）に住んでいる人がうらやましかった。1月30日に歩いた時はこわれている家や線路をみて、テレビとは迫力がちがうと思った。勉強になった。

小深田博紀　　豊中市螢池中町

5時46分に恐怖の地震がやって来た。僕の家は震源地から遠く離れていたので　震度4程であった。その時は寝ていたので、すぐに起きて本だなが落ちてこないように支えた。家の中の食器の割れる音がとてもはげしかった。そして何とか地震も止まり、父がガスの栓を止めに行った。普段から防災について何の知識も持たずに生活していたので、懐中電灯を探すのに苦労した。家はマンションだったので、ひび割れは大丈夫か外に出て調べたところ、そういう形跡はなかったので安心した。すぐに停電となり、ついたのは9時ぐらいであった。外の家とマンションとの電気の回路が違っていたので、かなり豊中市としては遅かったであろうと思う。そしてなんとか電気がつき、テレビを見たときには、がくぜんとしてしまった。本当に阪神高速

道路が横に倒れていたのである。こんなことはアクション映画でしか見たことがなかった。それが現実になっているのを見て、自然とは何と恐ろしいものだと改めて思った。そしてテレビは全てが阪神大震災の状況をやっていたが、なぜ自衛隊がすぐ派遣されないのであろうかと思った。長田区での火事はどうしようもないほど広がっていた。ただそれを見ているだけしかないというのはどんなにつらいことであるかよく分かった。こういう時に日本の総理大臣はいったい何をしていたのであろうと思う。どうせ朝ゆっくり寝ていて、テレビをつけてみるとやっと大変なことだと気付いたぐらいであろう。外国は地震発生から30分で日本へ助けのために行きたいと申し出ている。その時、政府は「海外からの助けはいらない。自分たちでどうにかする。」などと、状況把握ができていないために、そんなことを言っている。「スイスの犬よりも対応が遅い」などと国民に文句を言われてもしょうがないと思った。そして国会では最善の策をしただとか体制がどうだとか、そんなことばかり言って遅々として進まない。それをテレビで見て、結局は、自分の家がそうじゃないから人事なのであると思った。国民はそんなことを見たくないと思う。総理が「自分が何とかしてやる。」という強い意見を望んでいる。今のこと、過去のことでなく、これからどうするか、住居をどうするか、などというのを国民は聞きたいと思う。そして、兵庫県の隣である大阪府の対応は特におくれていた。地震後3日たってからやっと毛布を送ったのである。大阪でも古い家はかわらが落ちたりしている、それを見て、なぜ中川知事は「自分らで炊き出しをしろ。」などと常識外れのことを言うのであろうか。大阪の人の中には避難場所に行っている人もいるのに、知事は各自治体まかせで災害対策本部すら置かない。神戸の人は、24時間休みなく働いているのに、土日に休みをとり府庁の門をかたく閉めているのはどういうことかと思った。そして避難場所に村山総理が来ても、「これからこうしてやる。」という言葉はなく、ただ単にがんばれという気休めの言葉だけであった。被災者が怒るのも、無理はないと思った、そしてさらに悪いことに、避難しているすきに、がれきの中から金目の物を盗んでしまう。そういう人がいるというのはとても悲しいことだと思う。最後に神戸の復興を願っています。

小松原健裕　神戸市須磨区横尾

あの日はかぜを引いていたので、ねてる間に何回か目が覚めた。そして目が覚めて、又ねようとしたら地震があった。最初はかぜのせいかと思ったが、すさまじかったので地震と分かった。そして地震の間、1回、パット部屋の蛍光灯が勝手についてそして消えた。それから両親が2階から降りてきて全員無事ということを確かめてから、今考えるととんでもないことだが、又ねてしまった。そして8時頃、横浜の祖母から電話があって地震のことを知ったが、僕の家の回りは何ともなってなかったので、この地震がこれほどすさまじいものとは知らずにのん気に電話に答えてしまった。電気が通ってなかったので、車の中のラジオをきいていた両親が空が黒いといってきた。山を挟んだ向こう側は長田区だったので、その灰で空が黒かったのだ。家の中を見てみると全然倒れていなかった。カウンターの上にブランデーとかを置いているのだが、それすら倒れてなかった。食器棚も割れたのは安物のコップ1つで、本棚からも1冊も

本がおちていなかった。僕の部屋の本棚なんかは軽くぶつかっただけでも１冊ぐらいは落ちるのに、それさえも落ちていなかったことなどは、今考えると奇跡に近いことだった。15分ほどして、家に電気が通りテレビを見て、そのすさまじさが分かった。自分の知っている場所や店が壊れているのを見てア然とした、それから水やガスなどを調べたが、この日は普段通りだった。家族の無事を親族に知らせようとしても、電話は通じないし、公衆電話は行列ができている。その日はそれから断水のことを考え、風呂に水を入れたり、電話の番などして終わった。２日目になると断水していた。まず近くのデパートに買い物に入ったら、ありあまるほど置いてあるのだ。これには驚いた。この時、企業の行動の速さが分かった。そして、すぐ上にある山へ水をくみにいった。風呂に水をためていたので助かった。トイレがあんなに水を使うとは思わなかった。この日、父の会社が１つ潰れたが、ほかは建物は無事ホットした、結局断水も２日でおわったが、水の大切さは十分にわかった。５日目からは普通の生活にもどった。

西塔　純人　豊中市西緑丘

グラッとベッドが揺れ、本棚が前後に揺れ、本と共にたおれてきた。はっと起きると本棚は足のすぐ左にたおれていた。「びっくりした」と思って部屋を出た。家族も出て来て、「恐かった」と言っていた。僕は恐怖心がなかったので、「また寝るか」と思って、本棚をそのままにして寝ようとした。ふと時計を目をこらして見ると６時前だった。そこでしかたないから起きて朝食を食べることにした、今考えると電気、ガス、水すべてが出ていたのはとてもよかったと思う。朝食を食べた僕は学校に行くことにした。その時、僕はまさか、鉄道が通っていないとは思いもしなかった。バスがいつもよりすいている気がした。豊中の駅に行く途中、古そうな家の立派な壁は倒れていたが、大阪モノレールはいつもと変わらない。駅の辺りではガラスが道路をうめていた。駅の改札口の前には人だかりが出来ていた。駅員は「地震のため運行の目度がたっていません」と言っていた。そこでぼくはこの事を早く家に伝えようと思って電話をすることにした。だが駅前の電話は列ができていて使えない。だから近くのコンビニの前にある電話で受話器をとってみたのだが、通じない。仕方ないのでいったん駅に戻って見ると、数台ならんでいた１台だけにしか人が並んでいない。「他のは通じないんだろう」と思って、あきらめて帰ることにした。書くのを忘れていたが、朝バス停まで行く時、いつもとうってかわって、どこの家も電気がついていた。駅からバスに乗ってバス停でおりて、家に帰る途中、朝は暗くてわからなかったが、道路の隅が少し離れていたり、浮いているのがわかった。家について、母にドアを開けてもらった時、大きな余震が起こった。僕はドアの横を立つことができずにとっさにつかんだ。母はとっさにゲタ箱にもたれかかった。これまた「びっくりした」と思った。家の中に入ってテレビを見ると阪神高速の横に倒れた映像が写っていた。そして伊丹の駅の一階のつぶれた映像が写っていて、その時確か死者２人と出ていた。そして「この地震による津波の被害はありません」と言っていた。そして自分の部屋の本棚をかたずけた。その夜テレビを見て次々に増える死者の数に圧倒され、医者である父が忙しくて今日は帰れないんじゃないかと思ったが、その日はいつも通り帰って来た。

島崎　覚　神戸市灘区篠原中町

夜中にまず揺れの途中で目が覚めて、目が覚めた途端に本棚が倒れかかってきた。幸い本棚はベッドの柵にぶつかったため、中の本が大量にふりかかっただけで無事だった。携帯ラジオはすぐ父が持ってきたが、懐中電灯がどういうわけか僕の本棚に置いてあった。当然電気はつかなかった。僕の部屋ではガラスなどの割れ物は顕微鏡のカバーガラスだけだったので、腕時計のライトを使って、ベッドに倒れかかっている本棚の下から懐中電灯をとりだした。居間では物がすこし落ちている程度で、父の部屋も同様だったが、食器だなの扉が全て開いてしまっていて、棚の前に割れた食器類が散乱していた。数十枚は割れただろう。母の部屋は和室で、僕の部屋と同様に本棚が倒れていた。母は大丈夫かと思ったら、何とスペアのふとんが頭の上に載ってきて、それで九死に一生を得たらしい。以上の事を確認し、登校は不可能である事が分かるし、疲れが急に出てきて、本棚をどかして、すぐ寝た。

起きると夕方で、死者多数の情報に驚いた。どうも体調がおかしいので熱を計ると38′を越えていた。寒い服装で何時間もウロウロしていたために風邪をひいた様だった。あんな情況下ですぐに眠ったりしたのもこのせいらしい。回復には二日ほどかかった、翌日に阪急御影付近に住んでいた祖母が来た。水もガスもでないというので父が連れて来たのだ。この家だって水もガスも出はしないが、カセットコンロと電気ポットがあるし、家のすぐ近くの公園にちゃんとした救水施設もあるし、まだましなのだろう。祖母は数日して父の兄の家に行った。そこは水とガスがある。我が家も今は水が出ている。

阪急は横に伸びているが、それより上か下かで様子が全然違った。阪急より上はほとんど何事もなかったかの様だが、線路より下は悲惨だった。ＪＲ六甲道などは悲惨だった。駅の文字板などは打ちつけてあったカベごと落ちて来ていた。あれではＪＲはほとんど永久にこないだろう。阪急も駅ビルはまともだったが、線路はねじ曲がっていて、上は人が歩いていた。僕も歩いた。今も生活状況はほとんど同じ、学校には二号線から歩いてきいる。

嶋本　敦　芦屋市高浜町

寝ていたら、突然ドーンと突き上げられるような感じがした。そのあとガシャーンと大きな音がして食器棚の倒れる音がした。最初は何が起きたので、全くわからなかったが、揺れが激しくなってきて地震だと気付き、本能的に布団にもぐりこんだ。家は団地の15階なので、地震のおさまった後もまだユラリユラリと揺れていて、気持ちが悪かった。父が少し上ずった声で「大丈夫か！！」と叫んできた。「大丈夫やでー」と答えると、母と妹の部屋へ行ったようだ。後で聞いたのだが、父はトイレに入って出たときに地震に遇ったという。幸いそこに懐中電灯があったので助かったらしい。母と妹は各々自分の部屋で、タンスが「入」の字の形になり、その間で身動きがとれなかったらしく、父が助けたという。そのときは父１人でタンスをどけたというが、後日戻そうとしても、２人がかりでやっとだった。人間必死になればすごい力が

出るものだ。僕はといえば、ベッドの足元にあった本棚が手前にたおれてきていて、右手にあった机の上の本立てのところが、顔まであと15センチぐらいのところにふっ飛んできていた。窓から外を見ると、たぶん東灘区のあたりで、火の手が2つ3つあがっていた。春日野道にガスタンクが2つあったのを思い出して恐ろしかった。母と妹を助けた父が僕の部屋に来てくれた。本棚が倒れていて入ってこれないので、懐中電灯を渡してもらって部屋を出た。居間にあった大きな本棚がたおれ、本が散乱しているのがみえた。台所は冷蔵庫がたおれ、食器棚もたおれていた。ピアノがたおれなかったのはさすがだ。電池式のラジオが見付かったのでNHKをつけて聞いていると、なんと震源地は淡路島だという。10年ほど前に関西に来たとき、関西は地震がないと聞いていたので、驚きだった。さらに震度が6だと聞き、ぞっとした。なるほどあれだけ揺れるわけだ。7時ごろになって日が昇り、明るくなってきた。たまたまドアを開けた妹がガスくさいと言い出した。話し合った結果、近所の海技大へ避難することにした。貴重品と水を持って（我が家では、三八商店街まで宮水をくんで飲料水につかっていたのです。）海技大へ。途中宮川沿いの道で大きく地割れしているのを見て驚いてしまった。人間が長い間かけて作り上げたものが、わずか1分たらずでズタズタになってしまうとは…。海技大では暖房の入った研修室のようなところへ入れられた。毛布もたくさんあり、ひとまずホッとした。電話が通じないので公衆電話へ。すでに何人か並んでいた。テレホンカードは何枚もあったが、停電で硬貨しか使えず、困ってしまった。10円玉が7枚くらいしかなく、親せきの家に連絡しただけにとどまった。その日は海技大に行き、そこで泊ったが避難してきた人が多く、4人で毛布2枚のスペースに寝た。床が冷たく寒かった、これからのことが不安な一日目だった。

末広　浩一　　西宮市大井手町

1月17日、午前5時46分、大きな地震があった。ぼくはその時、当然ねていたが、父と母のさけび声で目が覚めた。見ると回りがまっくらで、ぐらぐらゆれていた。最初は何がなんだかかわからなかったが、倒れている本棚やまわりの物が散乱しているのを見て、だいたい自分の置かれている状況がわかった。とてもガスくさかったので、ひとまず外に出ようとすると、女の人が一階がつぶれて、娘が下じきになったので、懐中電灯と履くものをかしてください、と言うので、かしてあげると、急いでこわれた家の方へ走っていった。しかし、もうがれきの山で手のつけようがないようだった。みんなが近くの小学校に避難しようと言っていたので、そこに行った。途中あらゆる所が地割れしていて、ガスくさいし、とても生きた心地がしなかった。小学校につくと門が閉まっていて、だんだん明るくなってきたので、家に帰ることにした。暗いからわからなかったが明るくなると、ほとんどの家がつぶれていた。木造が多かったからかもしれないが、ぼくの家はマンションだったのでだいじょうぶであった。ぼくの家は父の本がとても多いので片づけるのにとても苦労した。なぜか自分の部屋はいつもとあまり変わっていないような気がした。特に高い食器もなかったので、よかった。その日は昼までは、タンクの水が出ていたので、それほど気にかけなかったが、その日片付けが一応全ておわると、水が出ないことに気付いた。近くに破裂している水道もないので、夙川の水をくみに行ったが、と

てもきたないので、トイレの水にしか使えなかった。次の日になると、いろいろ親せきの人が水をもってきてくれたので40ℓぐらいの水は確保できた。周りの住宅はほとんど倒壊し、あの女の人の娘もなくなったようだ。前の家の前市長で、この学校（甲陽）の前理事長もなくなられた。夙川駅もぼろぼろになっていた。今回の地震では、知人にけがはなかったのでよかったが、今度から十分な備えをしておきたいと思う。後は水さえ出てくれればそれでいい。

曽根　英彰　　神戸市中央区中山手通

１月17日午前５時46分、自分はまだ寝ていた。突然ゆれだした時は、夢を見ているのかと思い、次に、だれかにゆり起こされているのではと思った。20秒ほどで本震はおさまったが、まだゆれているように体は感じた。その時は目は完全に覚めていた。まず、家は大丈夫かと考えた。壊れるような音も聞こえなかったし、窓も割れていなかったので、とりあえず傾いていないことを知り、ひとまず安心した。そして自分の部屋は家の一番奥にあるので、外に出ようとするより、そこにいる方が安全だと考えた。ゆれだした時から、反射的に布団をかぶっていたが、母が呼ぶ声が聞こえたので布団をはらいのけ、部屋の電気をつけようとした。そして停電だと気付き、手元に懐中電灯もないので、うかつに動くと危ないと思い、一応母に返事をして、じっとしていた。それから、大きな地震の後には、すぐ大きな余震がくることを知っていたので、また布団をかぶって丸まっていた。そして、余震がきた後、だれかが部屋の戸をこじ開ける音が聞こえたので、ほっとした。懐中電灯で照らされた床を見ると、重ねていた雑誌類が一面に散乱していた。暗闇でそこを歩くのは危険だった。なんとか自分の部屋から出て、ひとまず明るくなるまで一番安全だと思われる廊下でじっとしていた。明るくなってくると家の中もよく見えるようになってきた。居間や台所を見ると、開き戸の食器棚からは、ほとんどの食器が落ち、床一面に飛び散っていた。さらに、横にすべらす戸の棚に入れていた食器もゆれで戸が開き、いくらか食器が落ちていた。しかし、不思議なことにタンスや棚などの家具類は全然倒れていなかった。中には耐震のために金具を付けているものもあったのでそのせいだと思った。うちの家では薬局をやっているので店を見てみると、めちゃくちゃになっていた。かなり重いショーケースがひっくりかえっていたし、ドリンク類を入れるストッカーは倒れてガラスが割れていた。調剤室では多くの薬品が散乱し、すごい臭いが鼻をついた。こんな時だから薬を買いにくる人が多いだろうと思い、店の整理を最初にした。案の定その日からしばらくの間、ひっきりなしに客が来た。毎日普段の５～６倍は売れた。喜ぶべきことではないが、店の責任者のおばあちゃんは、多少テンションが上がっていた。自分の部屋を見ると、あまりにもひどかったので、しばらくは片付ける気がしなかった。お母さんは、２階と３階の９部屋を貸しているオーナー兼管理人であり、すぐに全ての部屋のガスの元栓を閉じ、安否を確認していた。うちの家は鉄筋コンクリートではあったが、全く被害がなかった。どの柱もひび一つ入ることなく無事であった。家族にケガ人もなく、あまり大きな被害ではなかったのでは、と思っていた。しかし、家の近辺で、五階建てのビルが倒れ、教会が崩れ、木造住宅がのきなみ倒れているのを見、そしてテレビで各地の被害を見ているうちに、だんだんこの震災の深刻さが分かっ

てきた。まさかこんなことが関西で起こるとは、それがその日の私の考えであり、また多くの人がそう考えただろう。天災は忘れたころにやってくる。まさにその通りであった。今まで、テレビで大地震のニュースを見ても、いつも他人事だと思い、防災意識を全く持とうとしなかったことを反省した。

高山　弘平　　　豊中市上新田

地震が起こる15分くらい前、5時30分ごろなんとなく目が覚めてぼーとしていたら5時45分にすごい大きなゆれを感じました。僕は本棚のすぐそばに寝ていたが、本は一冊も落ちてきませんでした。ゆれている時に金魚ばちの音が聞こえたので、ゆれがおさまってから部屋のすぐ外においてある金魚を見にいきました。金魚は無事でした。僕の家はマンションで1階だったので被害は全くなく、本棚などから落ちてきたものはありませんでした。電気も普通にきていたのでテレビをつけました。その時はまだ地震がそんなにひどいものとは知らず、朝食をとって駅に向かいました。駅では電車が止まっていてたくさんの人が待っていました。僕も電車がすぐ復旧すると思って待っていましたが、駅員が復旧のめどがつかない、阪急・阪神も止まっていると言ったので家に帰りました。一番下の小学生の弟は学校へ行きましたが、3時間目で帰ってきました。小学校は次の日から普通どおりにありました。その弟の話によると、うちは1階で被害がなかったが上の階の人はピアノが倒れたり、高価なものがこわれたりしたと聞きました。また、阪神高速が倒れているのを見てびっくりしました。僕の家は災害対策をほとんどしておらず、お母さんがその日にかん詰などを買ってきました。その後は一日中テレビで地震情報を見ていました。次の日に義援金を送りました。友達から電話がかかってきて、学校がいつまで休みとかを聞いて、いろいろな友達に電話をかけました。

立花　伸一　　　神戸市垂水区西舞子

地震がおこった時は、まだ寝ていた。起きて地震だと分かって、一番初めにふとんを頭からかぶった。そして地震がおさまるまで待とうと思った。でも、小さいゆれはなかなか止まらなかったので起きた。すると、停電していて、まずメガネをとろうとすると、置いていた場所になくて、まずそれで困った。そして部屋から出ようとすると、本だなとタンスがたおれていることが分かった。居間に行くと、祖父母がロウソクをつけていた。そしてロウソクを1本借りてメガネを探した。部屋の中は、タンスが倒れてその上に本だながのりかかっていた。だから、南北にゆれてから東西にゆれたのだと思う。メガネを見つけて、とりあえずタンスを起こして服を着がえた。そして台所のかたづけを手つだった。台所は、米を入れていたのや、電子レンジやテレビが落ちていた。そして食器だなは、部屋のすみのでっぱりの上にのって傾いていた。食器やコップは3分の1ほどわれていた。手つだいをしているとだいぶ明るくなってきたので自分の部屋のかたづけをした。本だなに入れていた参考書やマンガは、一番下をのぞいて全部落ちていた。そして机の上に置いてあったスタンドは下に落ちてわれていた。部屋のかたづけ

がだいたい終わると、昼ごはんを食べた。水道と電気はなかったが、ガスは出ていたのでハムを焼いたのと、地震までにたきあがっていたごはんを食べた。非常においしく感じた。昼からラジオをきいていると震源地は淡路島の北と言っていた。すぐ近くの自分の家はたいした被害はなかったので、2、3日すれば元に戻るのかなと思っていた。完全復旧まで1年以上かかるとは、まったく思わなかった。昼ごろになると庭に落ちていた瓦をどけ始めた。周りの家の瓦も落ちていた。また、壁がくずれて、木が見えている所もあった。全壊していた家は2つぐらいしかなかった。瓦はたくさん落ちていたので、その日の内にかたづけるのはあきらめた。夕方ぐらいに、缶コーヒーを買いに行ったらホットの方は、売り切れが目立っていた。2、3時ごろに電気がきてテレビが見れるようになった。そして初めて、想像以上にひどいことを知った。そしてその夜はテレビを見て眠った。

立本　海　　西宮市薬師町

1月17日午前5時46分、そのとき私は寝ていた。周りの人が直前に地鳴りを聞いたと言うが、寝ていたので私は知らなかった。突然、下から突きあげられたかと思うと、直後に激しい横揺れが襲ってきた。本棚から本が落ちてきて、上に積んでいたものがことごとく下へ落ちてきた。そのとき私は呆然としていて、起き上がることも何もできなかった。揺れがおさまると、私は3階に寝ていたのだが、2階で寝ていた父がすぐさま、上の私と妹の部屋の戸を開けに来た。電気のつかない暗い部屋で洋服に着がえ、ラジオや預金通帳など必要なものをバッグにつめ、父にそのとき渡された懐中電灯をもって外へ出た。近所の人のほとんどがもうそこにいた。見たところ、周りで倒壊している家は幸い見当たらなかった。ラジオをつけてみると、神戸方面でかなり大きな地震があったということだけだった。悲鳴や叫び声は聞こえず、みんなかなり冷静ではあった。ガスの臭いが辺りにただよっていた。少々心臓の弱い母は地震のショックで顔面蒼白となり、「気分が悪い」といって家に入って横になってしまった。そうこうしているうちに、7時前にはもう電気が復旧したので、一応家族全員は家に戻り、テレビを見た。神戸方面の映像が映し出されると、想像を絶する被害に言葉が出なかった。西宮北口駅近くのマンションに一人で暮らしている祖母が心配なので、電話してみたが、全く通じない。他の京都や大阪の親類に電話してもだめだった。時間がたつにつれて、テレビによって、事の詳細が分かってくるとともに、その悲惨さを実感した。高速道路が倒れ、ビルが崩れ、鉄道の高架が落ちた。そのころには、死亡が確認されていたのはまだ2ケタの前半だった。でもこのときはまだ、自宅が壊れていなかったためか、現在のような状態になるとは思ってもいなかった。このころにはもう母も回復していた。家の中を調べると、1階では、食器棚の食器は観音開きだったためか、ことごとく落ちて割れていた。電子レンジは棚から落ちていた。しかし食器棚は作り付けであり、冷蔵庫も倒れてこなかった。テレビも32型のワイドテレビで重く、下の台にも密着していたためか、台ごと多少移動しただけで落ちていなかった。2階では、両親が大きな洋服ダンスのそばで寝ていたのだが、タンスは倒れてこなかったが、その上のアルバムの入ったダンボールが父の頭にもう少しで直撃するところに落ちた。3階の自分の部屋には本棚とたんす

があったが2つとも倒れず、たんすの上にあった模型の船の入ったガラスケースは奇跡的にも、下に落下することはなかった。家の中の壁紙は所々にひびが入っていた。下で食器をかたづけているうちに、京都の親類からやっと電話がつながった。祖母の家の方には電話がかからないと言っていた。そこで父は自転車で祖母の家まで行った。。父が帰ってくるまで、電気カーペットの上に毛布をひいてその中でずっと寝ていた。2時間近く後に、父が祖母を連れて帰ってきた。たんすが倒れかかってきたが、体に直撃せず、すきまができたので、そこから出ようとしたのだがドアが開かなかったそうだ。父の話によると、西宮北口の本通りが倒壊し、祖母の近くのマンションも一階がつぶれていたと言っていた。それからすぐ父は食料を調達してきた。そうこうしているうちに、 171号線の高架が阪急今津線の上に落ちている”などの話を聞いているうちに、夜が更けてきた。家族5人が1階の和室の電気カーペットにひいた毛布や布団の中で、不安な夜を過ごした。

田中　晃司　　　宝塚市武庫山

僕は地震が起こった時、少々寝ぼけていた。しかし、なんとなくは覚えている。ゴゴゴゴという音がしてからゆれ始めた。そして窓の外が青白く光った。僕はこの時には、とてつもなく大きい雷が落ちたと思った。でも部屋全体が、ずっとゆれ続けているのでおかしいと思った。そうすると、下の方でガチャガチャという大きい音が起こり、横で何か恐ろしい音が聞こえた。そしてゆれが止まった。僕はこの時になって初めて動き始めた。そして、まず父と母が寝ている部屋に行った。そして、弟がいないことに気付き、弟の部屋に行った。そして弟も父と母の部屋につれて行った。そして明るくなるのを待つために、父が一階からスリッパと懐中電灯とラジオとロウソクを持ってきた。父は、「一階を見たら驚くぞ。」と言った。そして、やっと明るくなった。そして、まず自分の部屋に行ってみた。さっきのものすごい音の原因が分かった。本棚が倒れていて、ギターのアンプにぶつかり、本が全部投げ出されていた。そして次に、一階に行った。そこには、自分の部屋よりも悲惨な光景があった。食器が全て外に投げ出され、粉々になっていた。そしてテレビも台の上から落ちて、プレイステーションが下じきになっていた。そして家の中全体をみれたあと、ひびだらけだった。壁や階段などは特にひどかった。でも、この時点では、それほどひどい地震とは思っていなかった。しかし、いままでには経験したことのない恐怖心もあった。上で言い忘れたが、父が地震直後近くの親戚の家に安否をたしかめに行って帰ってきた。そして母が食器を片づけ始めて、半分ぐらいの所で、宝塚ホテルだったら、朝食がとれるかもしれないと思ったので、車でホテルに行ったが、ホテルも壁が崩れて、ガラスも粉々になっていたので、朝食はとれなかった。そこで、ついでなので、親戚の家に行った。そして、この時になって地震の恐ろしさを見た。僕の家は水もガスも電気も通ってなかったが、その親戚の家（あまり遠くない）は電気だけは通っていた。だからそこでテレビを見てびっくりした。高速道路がひっくり返り、線路はずたずたになっていた。ただ、驚いただけで、実感はできなかった。今でもそうなのだが、まるで夢の中を漂っている気分だ。実際に地震が来たことが、まだ信じられない。そして、親戚の家で卵御飯をごちそうになって、

少しうとうとした所で、家に帰った。そして家に帰ってから、僕と弟は弟の部屋を片付けた。この部屋はすぐに片付いた。でもここでも驚いたのは、エアコンのリモコンが本棚の下敷きになっていたのだ。これで、縦ゆれがあったのだと分かった。そして居間に降りて行った。そして、しばらくすると電気が通った様で、こたつとテレビがついていた。そして、しばらくテレビをみてから、自分の部屋の整理をやり始めた。さすがに時間がかかった。そして疲れた。三時間強はかかったと思う。それでも完全にはきれいにならなかった。そして親戚がやって来た。そしてハムとか鳥のくんせいとかを夕食にした。そして食事が終わってからファミコンをした（実は昼間も電気が通ったと分かって数時間プレイステーションをした）。そして途中で友人に電話をかけることにした。今度もかけたが、かからなかった。あきらめて、又ゲームをした。すると友人の母から電話があって、無事という事が分かった。そして、市役所に水をもらいに行った。10ℓ入りの袋を6袋ぐらいもらった。その日はなかなか眠れなかった。そして、やっとの事でねむった。しかし、余震のたびに目がさめた。次の日もゲームをしてすごした。そして、次の日は和泉市の祖母の所に避難した。大阪はほとんど被害がなく、なんとなく疎外感を感じた。

谷口　智利　　大阪市住吉区我孫子

前日から風邪で寝ていた。二階建てで、父母と自分は二階に、祖母は一階に寝ていた。目が覚めた時はもう揺れていた。父はすぐにたくさん着込み靴下を重ねてはくように言った。家に避難袋は用意していなかった。少しおさまると、自分は一階に下り、車椅子で祖母を運ぶ用意をした。電気はついていたが、両親がすぐに水を確保しようと水道をひねったが水は出なかった。揺れはおさまり、部屋から出てきた祖母に、父は寝ておくように言い、自動販売機でペットボトルのジュースを何本か買ってきた。電話がなり、地下鉄に勤務している父は緊急体制をとるため自転車で中百舌鳥に向かった。自分は二階に戻り、テレビを見ながら寝ていた。NHKではもう地震のことを知らせていた。かなりたってから再び大きな余震があり、一度一階に下りたが、家は大丈夫のようなので、僕は下りなかった。直後に外に出ていた人は数人だったので、避難の用意はしなかったが、母はポットの湯を水筒に分けて入れ、玄関に置いておき、車椅子も玄関先に出しておいた。家にはひびはなく、タンスも重いものが多く、上に載せてあるものが落ちることはなかったが、玄関の壺と皿は下に置いた。自分の部屋も何も落ちていなかったが、余震に備えてステレオや楽器を下ろして机の下に入れてソファーのシートをかぶせ、ピアノの上のものは全て下に下ろした。本棚も組み立て式だったが、全て奥の方に本が入っていて、重心が壁よりにあったせいか、倒れなかった。水道もガスも通ったが、電話はかからなかった。医者に行こうとした時、初めてラジオとジュース・水筒・チョコレートなどをリュックに入れ、玄関に置いてから行った。医者はあいていて、帰りに駅の公衆電話で電話をかけた。兵庫県はかからなかったが、名簿で中倉先生は大阪だったのでかけるとつながった。先生は家の中はぐちゃぐちゃとおっしゃったが、学校については、阪急が開通するまではないだろうとおっしゃった。周辺では地下鉄御堂筋線もＪＲ阪和線も止まっていた。午後になって、

だんだんと状況が分かり、兵庫県の先生、友人に電話をかけたがかからず、やがてテレビで電話をかけないように言っていたのでしばらく控え、夜再びかけたが全くかからなかった。スーパーは全てひらいていて、食事は変わりなかった。夜遅くに父が帰って来て、中津以北の橋脚が破損していて、電車は通らないと言った。以後、ガスストーブは使わない時は元栓を閉め、電気のコンセントを抜き、避難袋を枕元に置いて寝ていたが、二、三日して余震も殆んどなくなった。地震の時は電気の元を切ることは近ごろ知った。今はもう普通の状態です。

津田　匡保　　芦屋市三条町

僕は地震のあった17日の前日の夜からかぜをひいていて、寝こんでいた。頭が痛く、寒気がして、普通の人で熟睡していた。朝の5時30分ごろにうなされて起きた。とてもイヤな夢をみていたらしく、起きずにはいられなかったような感じだった。また寒気がしてきたので、とりあえずフトンを頭からかぶり毛布にくるまっていると、少しベッドが小刻みにゆれるような感じがした。どうしたのかなと思った瞬間に地下からつき上げるようにドーンという音がして、ビックリしていると、ベッドから体が浮き上がるような縦ゆれがきた。すると枕元のラジカセがとんできて毛布をかぶっていた頭に当たった。毛布をかぶっていてよかったと思う。その後台風のような感じで風が吹いたように横ゆれがきて、何がなんだか分からなかった。20秒ぐらいその揺れを耐えていると、何とか収まった。当たりの家では、早くも人の声や犬の鳴き声がして、とてもさわがしかった。僕の家は5年前に建てられたマンションなので、これぐらいの揺れでどうなるもんでもあるまいと安心して、明るくなるまでじっとしていようと思っていた。枕元に窓があるのでちょっとカーテンをあけてみると、もう窓から見えるのは炎だけだった。隣近所（といっても100mぐらいは離れている）の家が燃えていた。うちのマンションまで燃えうつることはないだろうと思ったが、とりあえず親に知らせようと立ち上がるともう一発余震がきた。立っていたので、一層揺れが大きかったように思う。僕のCDコレクションは100枚ぐらいあるのだが、それが棚の中からとび出して自分の足元につもった。苦労して集めたCDが僕の足場を固めてくれて、転ばずにすんだ。転んだらガラス等で顔や手を切っていたと思う。しばらくして余震がやみ、消防車の音がした。従兄たちがマンションのとなりの部屋にすんでいるので、みんなうちの様子をみにきた。親達は全くけががなかったが、従姉はタンスの下じきになって少しケガをしていて痛々しかった。電気がつかないので、とても暗く、とても寒かった。ラジオで様子を聞いていると、芦屋市だけでなく、兵庫全体が被害をうけているらしかった。水もとまっていて、どうしようもなかったが、運よく風呂の水が入れたままになっていて、この水はトイレを流すために使うことにきめた。今年の水不足に備えて、母が水を20ℓぐらいかいこんでいたので、何とかそれで生活できそうだった。その日は一日中電気がつかず、家の片づけも全て手作業だった。夜になるとローソクをたてて明るくし、バーベキュー用の炭で暖をとり、その火でお湯をわかしたり、ご飯をたいたりした。普段情ない父がこの時ばかりは頼もしく見えた。風邪が段々ひどくなり、寒くて死にそうだった。一刻も早く風邪をなおして働きたかったので、夜の9時頃には薬をのんで寝た。もちろんその日は電話も使えなかった

ために、誰がどうしているかなどは全然分からなかった。次の日の朝に友達から電話がかかってきた。みんな無事らしく安心したが、まだ分からない人もいるらしかった。僕の風邪もなおったらしく、早速自転車にのって街に出た。ひどいもので、周りの家は全てこわれて、残っているのはうちのマンションと公園のすべり台だけだった。友人の家も3軒ほどまわり、みんな無事だったので安心した。父は西宮北口まで歩いてそこからバスにのって会社へ行った。電気はまだつかず、水もでなかった。芦屋市は全国で一番税金が高いのに復旧が一番おそいらしい。夜中に市役所に行ったが、いるのはおじさん1人で他の人はみんなご飯を食べにいったらしく、母が激怒していた。なだめるのに大変だった。

都筑　康一　　西宮市東山台

5時46分大きな地鳴りのようなものが来たと思った瞬間に異様なゆれを感じた。タテゆれかヨコゆれかの区別はできなかったが、とにかくゆれている時間が長く、その後も何度も余震が来た。しかし最初、被害がこれほど大きいものだとは思えなかった。それまでうつらうつら半分起きていたような状態ではあったが、地震が来た時、興味深かったと言えば言えるかもしれない。不謹心であるのはわかっているが、最初そう感じていたのだから仕方がない。いつものような小さな地震の少し大きなものくらいに思えた。というのは、家の中のものが皿一枚こわれていないからだ。家の周りも何の影響もなかった。ただ机などが少し動いていた。このような激しい地震は初めてだったし、余震がくる度に、その前にゴーという地響きのようなものが感じられ、貴重な体験をしたと思った。しかし、ニュースと見てその地震の激しさを思い知らされた。震度6というのはあまりピンとこなかった。まああれくらいが震度6なのかくらいの印象だ。しかし、家が倒壊したり、特に電車が脱線したりしたのを聞くと、少し信じられない思いだった。そして衝撃的だったのは、阪神高速だった。これについてだけは最初冷静に意味がわからなかった。なぜなら、その道は以前中学に車で行くときには、繁に利用していた道だったからだ。このようにして、僕の場合、テレビであとからあとから地震の大きさを知っていったので、序々に自分の身の周りの人やこれからの事について不安が生じてきた。幸い水と電気はすぐに元にもどったので、給水車の列に並んだりすることはなかった。ガスが出なかったので風呂と暖房が使えなかった。しかしこれくらいはなんとかなった。知人や友達には連絡がつかなかったので非常に心配だった。しかし、これも命にかかわる被害を受けた人はなかった。やはりあのようなときに電話でもかけてもらえるとうれしいものである。僕の場合、第一報は東京の友人だった。その彼女も隣にいて、なぜだか、ほのぼのと、大阪弁と東京弁で会話を長々としていた。しかし、それからというもの、妙に心が落ち着いて、友達の安否を確認しなくはと思い立ち、つながらない電話を何度も何度もかけていた。その時にも、電気がつかない友人の家などがあり、地震の被害がかなり身近に起こったことを知った。そして、最も運がよかったと思ったのは、つい4、5か月前まで住んでいた家が倒壊していたことだった。宝塚市だが、現在の家が建つまでそこに居た。古い木造の2階建で、今回、有無を言わさず倒壊した部類の家だった。もう見るも無残な形で、今の家が建つのが遅れていれば、おそらくもうこの世

にはいていなかったのではないかと思う。避難所生活の人々のボランティア活動に行こうかとも思ったが、どうも何をしていいのかわからなかったので、行かないことにした。それにしても、長田区をはじめとする、神戸、西宮などは救援物資が余っているのに、他のあまりニュースにならない地域には何もないという状況には疑問が残る。そして、その後もニュースに縛りつけられたが、興味深ったのは、外国メディアの反応だった。米ＣＮＮは、ロス地震の時に、日本の建築家が、ロスの高速道路のような事は日本では起きないと言っていたのを批判的に言っていたし、韓国ＫＢＳは、在日韓国人の安否しかしていなかった。関東大震災のときの危険を警戒していたのだろう。しかし、後々、被害状況が明確になるにつれて、批判的な内容は減ったようだった。日本に批判的でないと売れないと言われる韓国の新聞の社説に、日本人の冷静さに感動したという内容があったのは驚いた。やはりこのような時に、世界の人々と友好関係を深めるべきだと思う。

徳永　浩二　　西宮市上之町

安全だと言われていた関西で地震が起こった。僕はつまらない事を考えるのが好きで、もし寝ている時に地震がおこったらタンスのない方へ逃げないといけない、といつも考えていた。そのおかげでタンスの下敷きになることは避けられた。地震が起きた時、父はすぐ母の上におおいかぶさったらしい。後でこのことを聞いて僕は本当にえらいと思った。前からそう思っていたが。母はパニックになっていたのか、高い声で叫んでいた。兄は参考書、問題集等が床に置いてあり寝ていた場所が本棚から少し離れていたので助かった。えらいことになったと苦笑していた。停電していたので一階から懐中電灯を持ってきたが、電池が切れては困るので明るくなるまで家族皆、両親の部屋に入ることにした。やがて明るくなり片付けを始めた。九時頃Ｃ組の武井君が来てくれた。自分の家も大変だろうのに来てくれるなんて本当に感動した。ご近所では、古い家が全壊しているところがあり何人かが亡くなられた。

中井　敦史　　神戸市北区唐櫃台

快く寝ていたその瞬間、５時46分に激しい横揺れを感じた。縦揺れはあまり感じなかった。ぱっと目が覚め、間もなく停電した。父が何か叫んでいたが、よく聞きとれなかった。さすがに恐怖を感じた。揺れがおさまるまで身動きがとれなかった。揺れがおさまると、家屋も家族も無事だったので、もう一度、床についた。２、３時間して起きてみると、まだ停電しているのに驚いた。父と母はじっとラジオを聞いていた。そのラジオが僕の耳にも入り、その時はじめて、震度６であったことに気付き驚いた。部屋の中が真っ暗なので、とりあえず雨戸を開けてみた。どこの家も騒がしい様子だった。北区ということもあり被害はあまりなかった。我が家は引っ越ししたところで、食器棚もほとんどダンボールの中だったので、植木バチ４個程が割れただけで済んだ。近所の家々も屋根が傷んだ所があるぐらいでその数も少なかった。まだ停電が続いていたのでどうすることもできなかった。トイレに行くと水が流れなかった。「シ

マッタ」と思ったがもう遅かった。そうこうしているうちにやっと電気がついた。学校のことが気になり電話をかけたが、回線が混乱していてかからなかった。まあ、とにかく神戸電鉄も動いてなかったので、学校は当分休みだろうと、勝手に思っていた。しばらくして家の中も落ち着くと、昔からの友達と一緒に唐櫃の町を安全パトロールに出かけた。さまざまな人が町にあふれていた。3丁目の団地の辺りに来ると、急にガス臭くなった。どうもガスもれしているようだった。それよりも、もっとすごい事に出くわした。大きな団地が、1mも隆起していた。その団地の人は今でも住めない状態で避難している。また歩き出すと大きな地割れを見つけた。子供なら簡単に入れる位である。改めて震度6がどれ位、すごいものかを感じた。そうこうしていると小学校で水がもらえるという、うわさを聞いた。すぐに家に帰り、水をくみに行った。その日は計15回行った。特に水と電気がこなくなった時の不便さを痛感した。

さて、ようやく学校も始まり、通学時間は非常に長く、大変な毎日である。その通学の途中に三宮や灘区や東灘区を通ると、実際に自分の目で震災の傷跡を見ることができた。傾いている家やら崩れている家、そして焼けてしまって何も残っていないもの、テレビで見るよりもリアリティがあって、心に痛むものを感じた。改めて地震の恐ろしさを感じた。貴重というよりも充分すぎる経験をしたと思っている。そして身内や友人、そして家屋などが無事で良かったと思っている。

中前　貴　　大阪市住之江区粉浜

揺れ終わった後テレビがつかなったので、ラジオを付けた。すると住之江区で火事があったと言っていたが被害はほとんどなかったので、たいした事ではないだろうと思い、あわてることはなかった。しかも、はじめの1時間ぐらいは死者が二十人程度と報道されていたため、こんなに大災害になるとは思わなかった。また、水道は最初出なかったが、すぐでるようになったし、電気とガスは何ともなかった。数時間したらテレビがうつるようになったので、その日は一日中見ていると、自宅周辺ではほとんど何ともないのに、神戸が崩壊しているのを見てびっくりした。そして大きな余震で自分の家もつぶれるかもしれないと思ったので、食料や貴重品をまとめたり、タンスの上にあるものを降ろしたりして、一応防災の準備はしておいた。

新原　伸栄　　三田市弥生が丘

1月17日火曜日、ゴーッという地鳴りがなった瞬間目が覚めた。それと同時に家がガタガタと揺れ始め、僕は一気に目を覚まされた。これまでに経験したことにない揺れだった。といっても机の上のノートが一冊落ちたぐらいだったのだが、揺れがおさまった後、父や母と共に一階に下りていってすぐにテレビをつけた。(僕は二階で寝ていた。) しかしこれは後で知ったことなのだが、神戸や芦屋や西宮など友達のいるほとんどの地域では地震と同時に停電になり、真っ暗で、何も見えず手さぐりの状態だったらしい、自分の家の被害が全くといっていいほどなかったこともあり、初めは、「まあ電車が遅れて学校が始まるのが遅くなるだけだろう」と

いう安易な考えしかなかった。テレビでも初めは死者も2、3人と言っており、大阪に住んでいるお年寄りが、あわてて外に出たため石にころんでケガをしたという、今にして思えば、まったくどうでもいいと言うことはできないが、あまりたいしたことはない情報を言っているだけだった。しかし時がたつに伴ってだんだんと現状がはっきりしてきた。神戸では震度6の烈震だったと聞いたときは本当におどろいた、また神戸の街の様子などが次第に映像で写し出されるようになったが、それはすさまじいものだった。まったく予想もしていなかった光景であった。あの阪神高速の橋脚から根こそぎ倒れ、長田区や兵庫区では火の手も上がり始めていた。地震直後には全く予想もしていなかった光景だった。(そうは言ってもまだ完全に現状を把握していたわけではなかったのだが。)時間が経過するにつれて死者の数もうなぎ上りのように増え始め、改めてこの地震の被害の大きさを実感させられるようになった。三宮駅付近はほとんどの建築物がこわれており、中には真っ二つに折れたビルが路上にたおれている映像もあった。

地震当日はこのように自分の家や近所の家などが、ほとんど無事だったこともあり、一日中余震におびえながらもテレビを見ていた。今にして考えると、本当に被災に遭った人に対して何だか悪いことをしていたような気がする。2日目は地震当日よりもさらに現状がはっきりしてきた。死者の数もどんどん増え千人はこえていたように思う。僕が調べた本では、関東大震災での死者と行方不明の数は14万人ぐらいだったらしい。福井地震では5000人くらいの人が亡くなったそうだ。そういったことを知ると、今回の地震がそれらに匹敵するほどの大きな地震だったことが改めて感じられた。しかし今回の地震が僕が一番感じたのは政府や県や市の対応の悪さと、マスコミの無責任、非人道的な報道だ。確かにこの近畿地方は一般に地震が少ない場所だと言われており、市民が地震対策をほとんどしていなかったということもあるが、それにしても救援物資の配送や交通網の警備などの手配が遅すぎる。もっと手段を工夫して創造的なアイデアの思いつかなかったのだろうか。神戸は港町なのだから海の利用もできるはずだし、また、火事の火を消すにしてもヘリで空から水をかけるなどということを考えなかったのだろうか。国会中継なども見たが、責任がどうのこうのとか、全く意味のないことばかり言っている。こんな政府に何ができるのかというような感じだ。またテレビでも東大教授などが出てきて活断層がどうのこうのとかそういったことばかり言っている。そんなことよりも、救援活動のエキスパートを出して救援の説明をさせるほうがよっぽど意味のあることだ。地震など予知できなければ、他に何の説明をしても空しいだけだ。しかし今日の地震をよい糧として、政府やマスコミが反省し、今後にいかしてくれることを期待している。

沼田　秀一　　西宮市小松町

17日午前5時46分、目覚めた直後は何が起きたか分からなかった。机の上から物が落ち、台所で食器が次々と割れる音を聞いて地震だと思う。ベッドの下に入らなければと思ったが、体が動かない。腕時計をつけ、秒針を見ているうちに地震がおさまる。すぐに起き上がり、足下のスリッパ(前日の夜、足が寒いのではいていた。)をはいて眼鏡を探す。眼鏡をかけて自分

の部屋を出ると、母も弟も廊下まで出てきている。母と顔を合わせた瞬間、単身赴任中の父の代わりに自分がしっかりしなくてはと思う。すぐにブレーカーを切り、ドアを開けたままの状態にしてからそれぞれの部屋を見、服を着る。弟の眼鏡を探すのに手間取ったが、倒れた机を上げると無傷で出てきた。社宅（6階建て、70世帯）を出て上を見るが、大きなひび割れがない（と思い込んでいた、後から考えるとあの暗さで見えるわけがない）のに安心し、家に戻って懐中電灯を探す。家族用の大型が1つ見つかり、机の中からも何かの参加賞でもらった小型が2つ見つかった。幸い電池を入れたままだ。居間に集まった直後、電話が鳴る。父方の祖父母がテレビを見ていて、すぐに電話をかけたのでつながったらしい。祖父母に父への連絡をたのみ、後は夜が開けるまでコートやジャンパーを着て待つ。7時頃母方の祖父母から電話が通じる。西宮市弓場町（西宮と芦屋との境）に住む祖父母によると、家の南は全壊、向かいの2階建てもガレキと化しているらしい。父から母方の祖父母に連絡が入っていたらしく、父も横浜からすぐに帰ると聞く。喜びかけるが、交通手段を考えると楽観できない。父は今日中は帰れないと考えて行動しようと思う。7時過ぎに電気が復旧。食器の後片付けをする。水が出ていたので弟と共に自転車で電池と食料を買いに出るが、どこも長蛇の列。あきらめて家に帰る。途中、道路のひびや、ブロック塀が倒れている所を数ヶ所見かけるが、家が倒れている所はない。家に帰ってテレビを見ると神戸の惨状を見て家族全員息を呑む。後は家の片付け、高い所の物を下に置くことに終始する。夕方、水が出なくなる。社宅のタンクにたまっていた水を使い切ったのだと知り、愕然とする。深夜、父が梅田から歩いて家まで帰って来る。余震の可能性があるので普段着のまま寝ようとするが、ほとんど眠れないまま朝になる。18日は父、弟と共に大阪の京橋まで買い出しに行く。水を入れるポリタンク・ガスコンロ・ガスボンベ・インスタント食品・紙製品を買う。ファーストフード店で女子高生がハンバーガーを食べているのが違う世界の出来事のように見えた。社宅の電気室の裏の水道から水が出たので、そこで水をくむ。午後6時前、弓場町の祖父母に水を持って行こうと車で家を出るが、臨港線、43号線、2号線が通行止め、酒蔵通りは通行不能、2号線の北も通行できる状態ではなく、泣く泣く家に帰る。19日、阪神電車の線路沿いに夙川東まで入る。小・中学校時代に寄り道していた経験が役に立つ。歩いて夙川を越えて西へと進む。夙川の東西の違いを見て驚く。家に残ると言い張る祖父母を怒鳴りつけるようにして車に乗せ、家に帰る。翌日より、水くみ、買い出し、昼間家を整理する祖父母と、祖父母の家への水等の輸送が日課となり、本日に至る。

林　大樹　　伊丹市伊丹

1月17日当日は地震が発生する10分程前になぜか目が覚めた。時計を見ると5時30分位であった。まだこんな時間だと思い、再び床に着いて眠り始め意識がうすれていく瞬間、ドドン、ドドンという厳しい音と共に自分が寝ているベッドが下からつき上げられ、ほぼ同時に左右にも大きく揺れた。一瞬何かわらなかったが反射的にふとんを頭からかぶった。自分の机の本棚からもドサドサと本が落ちてきたが、幸い自分の周りには落ちてこなかった。揺れがおさまるとすぐに母が隣の部屋からスリッパをはいて、食器や瀬戸物の破片だらけの中を通って自分の

部屋と妹の部屋に安否を確認しにきた。まだ時間的に真暗だったので、まず妹の部屋からマッチやライターを取り出し、それでろうそくに灯をともしていったん父と母の寝室に戻った。母と妹は割れなかった食器を片付け始め、自分は倉庫にある懐中電灯を取りに行った。もちろんこの時、電気、ガス、水道のライフラインは全て停止していた。6時5分頃に会社に向かっていた父から電話がかかってきた。電気は全く全て止まっていたが、電話は新しく付け変えた時、電気が止まっても向こうから家にかける時はつながるようになっていたのである。父に家族全員の無事を知らせた。父も会社の自転車で戻ってくると言った。ようやく空も明るくなり始め6時20分頃に電気が、7時前にはガス復旧した。母と妹はスーパーの袋5杯分ものガラスを片付けるのに忙しく、自分はカゼをひいていようやく治りかかっていた頃なのでじっと部屋にいてテレビをつけた。驚いたことに阪神高速の落下や長田の火災などが時間がたつごとに次々と写った。母は向かいの家にタンクがあると聞いてバケツに水をもらいに行った。10時30分頃に家の前を車が通って、ガスがもれているので臭いや音がする時には使用しないように、また換気扇を回すと火花が出るので使用しないように言っていた。午後になると近くの祖母の家で水が出るようになったので、水の心配はだいぶんなくなった。3時頃には父も会社から帰ってきた。帰り際にちゃんとウーロン茶や飲料水を買ってきてくれたので安心した。父の話によると、父は5時40分頃に阪急の十三駅に着いた。そこから自転車で会社に向かっている途中に、まず奇妙な音と共に空気がうなるようにして震えて、閉まっている店のシャッターが厳しく揺れる音が聞こえたかと思うと、縦と横に揺れ始めたそうだ、父はとっさに自転車を投げ捨ててその場にかがみ込んで頭を押さえて守ったそうだ。道路の真ん中にでも行って落下物から身を守ろうと考えたが、その場から動くことはできなかったらしい。自分は当日はまだ熱があったので、その日は母と妹が必要は物を買いに行ったが、どこでもすぐに水・食料・電池・ガスボンベは売り切れて品薄状態が続いていたそうだ。次の日には体調もかなり回復したので近所を自転車で回ってみると、古い家はほとんどと言っていいほど全壊あるいは半壊していた。テレビでたくさん映っていた阪急伊丹駅を見に行くと、自衛隊がたくさん来ておりビルの2階の上の3階にあたる部分からまず電車を取り除いていた。駅やビルの一階にある派出所では警官が1人亡くなったそうだ。その次の新伊丹駅では新伊丹から折り返し運転ができるように昼夜の区別なく駅に木材を運び、伊丹から新伊丹までの片方の線路の上を歩けるようにして大勢の客が乗れるようにしていた。

藤田　典之　　宝塚市売布東の町

目が覚めたのがだいたい5時40分ごろで、起きるのが面倒でもう一度寝ようと思っていた。その時ベッドが軽く揺れたかと思うと強く、2回、突き上がる様なゆれが来た。思考能力が働かずただゆれていることだけを認識したとたんに、頭すれすれに昨晩聞いていたCDラジカセが落ちてきて、ようやく地震だと認識した。その後横揺れがはじまったので、頭から布団をかぶり丸くなった。部屋の中の音もほとんど聞こえず、ただガタガタという音しか聞こえなかった。けっこう長い地震だと思ったが、揺れがおさまって来たので布団から出て部屋を見ると、

机はずれ天井の方にあった棚から全ての箱が落ちたりしていた。わが家は2階建てで、2階に僕が1人、下に父、母、祖母、妹2人が寝ていたので、階段の所まで出て「生きてるか」と叫んで1階に下りた。全員無事のようだったが、そこら中に物が散らばり足の踏み場もなかった。台所では食器だなの上等の方が倒れてしまいそこら中にガラスや皿の破片が散らばり、調理台に置かれていたなべから油がこぼれていたりもした。居間では本棚がそのままたおれていた。どうやらガラスはまだ割れていないようだった。ピアノはずれ、テレビは落ちていた。ひどかったのは2階の八畳と1階の応接だった。どちらも、つい1週間ほど前に父が単身赴任から帰ってきた所で、引っ越しの荷物がつんであったのがくずれたのだ。着替えて外に出ると、家の被害は外では、道路の方のブロックが全て45度ほどかたむき、瓦が落ちていた。その日は、父が買い出しに行ったりピアノをもどす程度で近所の見回りもしなかった。結局の所、僕はその日は昼ごろからずっと頭痛と寒さで、次の日の昼まで寝込んでしまっていた。その後はどうも日々がはっきりしない。いつどんなことがあったかははっきりしない。周囲では、向かいの家が2部屋ほどの2階を広い1階がかたむきながらささえている危険な状態だったり、裏の方で長屋的なマンションが1階だけつぶれて1人おじいさんが亡くなったりしていた。20日にはある程度元気になったので、宝塚まで阪急に乗り、そこから西ノ宮北口駅まで歩いた。全てくずれた家もたくさんあった。そして宝塚からほどではないが同じ方向へ歩いて行く人もたくさんいた。往復で5時間ほどはかかった。20日には学校に部室の整理で行った。それまでにも来ていたようで、ある程度は片づいていて安心した。2月に入って思うこととしては、関西の人々がみなこれでかなり地震慣れしたことである。予震がたびたび起こってもこわがらない。これが少々こわいと思う。

宮脇　淳　伊丹市昆陽

地震発生時、私は2階で寝ていて起きてしばらく経ったところであった。突然「ゴオー」という地鳴りのようなものと同時に、窓がガタガタと震え、そして強い縦揺れが起こり、横揺れがそれ続いた。私の座っていた部屋では四畳半の部屋に机と2つの棚があったため、全てが倒れると居場所がないと思ったので、1つの棚を倒れないように支えてた。そのために下敷きになるということはなく、直ちに行動ができた。しかし階下へ行くためには階段の手前に倒れていたたんすを暗い中、手探りで歩かねばならず苦労した。なんとか階段を下り、外に出た。私の家の周りには、プロパンガスボンベを8本程を使っている所が、すぐ近くにあったので、それが爆発でもしたら大変だと思い、見に行ってみると倒れていたが、その時はすでに使っていた人が栓を閉めていたので、爆発は起こるまいと思って少し安心をした。私の家は、新しいとは言えないくらいのもので、倒壊する可能性であったのでしばらく外で様子と見ていた。7時30分位に電気がついたので家の中に入ってみると案の上、食器はほとんど全てのものが観音閉めの食器棚だったので落ちて割れていた。それからは、倒壊はないだろうと判断して家の片付けをし始めた。午後にはほぼ片づき、家を確かめてみると、窓に隙間が少しあいていた。2、3度傾いているようだ。

片付けが終わったので、伊丹駅に駐輪していた自転車を取りに行くついでに、被害の様子を見て歩いた。古い家は倒壊していたが、新しい家では全く害がなかった。しかし、なんと言っても伊丹駅の倒壊を目の当たりにすると、恐怖心が起こった。

守田　佳史　　高槻市大手町

僕の家は京都に近い田舎のほうなのであまりひどくなかった。

僕は寝ぼけていて、初めは前の道路をとても大きな車が通ったのかと思って、また寝ようとしていた。そのとき、姉と母が3階から降りてきて地震？と大きな声で言い、僕はそれで目が覚めた。電気がやはりきていなかった。僕はすぐにラジオを机の引き出しから取り出して聞いた。母は仏壇のロウソクをともし、20分ぐらいすると明かりがついた。僕らはほっとした。僕は朝食を食べ、いつもと同じように学校に向かった。駅につくまでは何一つ町の風景は変わっていなかった。しかし駅に着くと、サラリーマンたちがいっぱいおり電車が動いていなかった。僕はこの時、学校はないと決断し、家に帰ろうとしていたその時、また地震があった、電線がブョンブョンゆれていた。家に帰った僕は、部屋を見ても何一つ落ちていなかった。僕はテレビをずっと見ていた。僕が一番最初に見た死者数は11人だった。それが昼にはもう200人を超えていたように思われる。テレビではやはり阪神高速道路の倒れている場所が中心に写されていた。それを見ていると、あることに気がついた。あの山の手には僕らの祖父と祖母が2人で住んでいる。母は祖母のところに電話をしたけれど通じない。そこで僕は公衆電話を使うほうがかかりやすいということ母に言って、母はようやく無事だということがわかった。僕らは石油ストーブと食料を持って12時ぐらいに出た。いつもたった1時間半ぐらいで行ける距離だ。それが超渋滞にまきこまれ、なんと母の家についたのが午後10時だった。なんと10時間かかってしまった。そして石油ストーブをわたし、1時間ぐらいいてまた帰った。帰ったのは午前5時ぐらいだった。僕はずっと寝ていたけれど、母はバタンキュウー状態だった。

あとから考えると地震が起こる前の晩、僕と母は静電気でバチバチいっていたのを思い出した。やはり人間の第6感はすごいのだと思う。

3日目再び私は祖父のところに行った。祖父の所は、うちよりはるかにひどく茶わんは全部われ、燈篭も倒れていた。幸い家はがんじょうにたててあってびくともしていなかったけれども、僕らは水を約70リットル持っていった。そして年寄2人だけじゃ水くみはできないので、何回も手伝った、となりの家は、完全にくずれており、いつでも逃げだせるようにそこら中車だらけだった。祖父の家の横には住吉川が流れており、川で洗たくする者もいた。家の前にはガスタンクみたいな水道タンクがあり、水にはあまり不自由しなかった。水は朝一番に100mぐらい並ばないとだめなので、昼ごろにいくのがかしこかった。トイレ用として川の水もくんでいた。食事はおにぎりとか果物とかパンとかだった。帰る時は、通れない道路が多いので全部国道に集まってきて5～6時は必ずかかる。けれども困っているときは助けてあげないと、何か悪いことをしたような気がする。水はまだでない。

山口　真　三田市狭間が丘

朝5時45分頃はちょうど学校に行くために起きる時刻だったので、地震が起きた時、僕は目覚ましを止めようとしていた。ズズンと強い縦揺れがあった後、南北方向に強烈な横揺れが来た。僕は東西方向に寝ていたため、横揺れの間はベッドから振り落とされまいとするだけで精一杯だった。家具の上に置いてあるものが落ちる音と、マンションがきしむ音が大きく、目覚まし時計のアラームは聞こえなくなった。本震が終わると、直ぐ着がえて居間に行き、テレビをつけた。この地域は電気も水道もガスも止まっていなかった。我が家では地震対策と言えるものはなかったが、背が高い家具がほとんどなく、またそれぞれの家具に物がぎっしり詰め込んであったので、倒れた家具はなかった。母はいつもなら弁当を作っている時間だが、地震の時は、寝坊していたらしく火は使っていなかった。金魚の水槽から水がこぼれ、辺りが水びたしになったり、部屋の中にあった植木が倒れて土が少々こぼれていたが、母がてきぱきと片付けた。初めのうちは情報が不足し、電車が動いているのかどうか分からず、学校の用意をして待機していたが、しばらくして事態が相当ひどいことが分かった。父は宝塚市の職員で、市役所に出勤するべきかどうか心配していたようだが、僕は電話はしばらく控えた方が良いと提案した。しばらくの間機械式の地下駐車場が動かず車は出せず、電車も全て止まっていたので、僕や父、妹は学校や職場に行けなかった。結局その日は一日中家でテレビを見たりして、情報収集するぐらいしかできなかった。翌日になって近所の人の様子なら少しずつ分かるようになり、我が家が幸運だっただけだということが分かった。ニュータウンだったのが良かったのか、小さなひびわれ程度の被害は多々あったが、倒壊したりした建物はなかった。母は近くのスーパーに、パートに行っているが、付近の住民が買いだめをしようと大勢店に押しかけてきたと言っていた。かなり遅れたものの新聞は届いた。余震に備えて（本当は最初から備えておくべきだったのだが）一応重要な書類や、避難した場合に必要なものなどをまとめておいた。父は出勤したがやはり災害救助の一環としてどこかの避難所に派遣されたようだ。（この後も毎日出勤して、時には夜勤もあった。）僕はどこにも出かけることができず、家で物理と化学の復習をやるぐらいしかすることがなかった。日曜日になると電話がたまにかかってくるようになり、母は宝塚市の友人が負傷したのを知って見舞いに行った。僕は家に居たが、親しい友人からは安否を気遣う電話や、学校についての相談があり、友人達は皆無事であることが分かった。食物は普段よりは乏しかったものの、買い置きもあり、全く問題はなかった。父方の祖父は、新神戸の辺りのアパートに住んでいて、アパートは倒壊しなかったが当然相当の打撃を受けたようで避難所生活をせざるを得なかった。アパートは古くて傷んでいて大家は建て替えるつもりらしく、住む場所を失った祖父は仮設住宅を申し込んだようだ。岐阜に住む叔父は、祖父の見舞いに行った帰りに我が家で一泊した。その時に、自衛隊はとっくに準備ができていたのに、市や県の対応が非常に悪く、直ぐに行けなかったと行政を批判していた。また、普段から自衛隊と共同で災害対策について講じておらず、折り合いがうまくいっていないのがその原因だと言っていた。（叔父は自衛隊の関係者）30日になるまで、僕はほとんど家から動かなかったの

で、学校にいくために仁川から片道一時間歩いた結果、すぐに筋肉痛になった。ところで、震源からは比較的近かったものの被害は軽微だったので、義援金を送った。

山瀬　具全　　尼崎市武庫の里

地震が起こった時はまだ眠っていた。大きな揺れで目を覚まし、とっさに頭を腕で覆った。上から様々な物が降ってきた。すぐに起きあがって家族の無事を確認してから外に出た。車のラジオで震度を聞いて驚いた。津波はないことも分かった。余震を怖れて、家の前にある小学校で10時頃まで車で避難。ラジオで様々な情報を聞き、被害の大きさが予想以上のようだったので驚いた。家に戻って後かたづけを始める。家中の物が倒れていて、自分の寝ていた所には本棚２つと洋服ダンスが倒れていた。よく起きあがれたものだと思った。電気はすぐに復旧したようだが、水は出なかった。ガスは止められていなかった。自分の家は外壁に多数ヒビが入っており、東の壁はモルタルがすっかり落ちていたが柱は無事のようだった。おそらく食糧や水が足りなくなるだろうということで、近所の店に買い出しに行った。近くにある。半地下の駐車場のあるマンションが倒壊していた。香川の祖父母に連絡を取ろうとしたが、電話が全く使えないようなのであきらめた。その夜は余震を恐れて向かいの小学校の運動場に車を停め、車中で眠った。公衆電話で電話をするとかかったので、祖父母に連絡をとった。翌日家に戻るが、まだ水は出ていない。買っておいたミネラルウォーターはあるが、断水は長く続くとラジオで聞いたので配給の水をもらいに行った。自分は地震の前夜までインフルエンザにかかっていたので、家で待っていた。祖母から電話があり、祖父がこちらに向かっていると聞いた。午後に祖父が家に来た。母と兄にインフルエンザがうつったようで熱を出したので、病院がやっているかどうか見に行った。病院は閉めていたが薬はもらえた。母と兄はその日のうちに全快した。２日程は小学校の体育館で寝たが、余震の間隔も長くなってきたようなので、それ以後は家の２階で寝ることにする。家中のタンスを固定したり外壁のヒビをなおしたりした。幾日月だったかは忘れたが水も出だした。学校は30日からだと聞いたので家で過ごした。付近の家もへいが倒れたり、瓦が落ちたり、壁がはがれたりはしていたようだが、倒壊したのは、先に書いたマンションとその隣の家だけだった。新幹線が落ちていたので驚いた。

山本健太郎　　神戸市東灘区田中町

激しい縦揺れと共に目が覚め、何事かと考えているうちに横揺れがおそってきた。状況がはっきりと分からない中での35秒間の揺れは、実際にはもっと短く感じた。揺れが止まると体の上に様々な物が乗っており、動けない。生き埋めというのはこういうものなのかと思うと、それまでは不思議となかった恐怖心が出てきた。助けてという叫びが自然に出たが、隣の部屋で寝ていた父・母・妹の３人も必死で、聞こえていないようだ。どうしようかと考えているうちにわずかながら冷静さを取り戻し、自分一人での脱出を試みようとした。数回チャレンジしてみても、体の上の物がビクともしない、次が最後のつもりでありったけの力を出すと下半身が

抜け、上半身を起こすことが出来た。起き上がると立つことが出来ない。仕方なく中腰になって周りがどうなっているかを見ようとしたが、暗くて何も見えず、再びパニックになってきていると、父が部屋の外から声を掛けてきた。「スペースはあるか」あると答えた。外に出ているのなら状況が分かっているかと思い、どうなったのか聞いてみた。「マンションの1階が落ちてる。」驚いた。我が家のあるマンションは7階建てで、120近い家がある。その1階が落ちているというのだ。これはえらいことになったぞと思っていると、なぜかだんだん落ち着いてきて、隣りの部屋で騒いでいる母や妹に話しかける余裕が出来てきた。明るくなるまで待とうと数回怒鳴ったが聞こえていない様子なので諦めた。この時からやっと周りの音が耳に入ってくるようになった。父は助けを求めようと道に向かって叫んでいる。母の声によると妹がタンスに足をはさまれているらしい。隣りの家の子供は泣き叫んでいる。こんなことを聞いているうちに何度となく激しい余震が起こっていたが、すでに感覚がマヒしているのか何も感じない。しばらくして父の叫びが届いたのか、一人の若い男の人が来てくれたが、一人ではどうすることもできないらしく、懐中電灯を持ってきてくれと言っている。するとペンライトを持って4人くらいの若い人達が集まってきてくれ、救出作業が始まった。僕は自分の部屋の前に人が来ると盛んに助けを求めていた。4人の人が部屋の前に積もったコンクリートのガレキをのけてくれ、折れ曲がった枕の下からあお向けの状態で引っ張り出された。助かった、とホッとするものつかの間、妹と母がまだ閉じ込められている。母は何とか自力で出てきたが、妹はタンスに足をはさまれて身動きがとれないらしい。4人の人が力ずくでタンスをのけ、妹も無事出てきた。不思議なことに4人とも全くケガがなく、とりあえずホッと一息。マンションのすぐ南の公園に避難し、寒さと余震におびえているうちに夜が明け、眼鏡がなく詳しいことは分からないながらも周りの状況がおぼろげながら見えてきた。火事が2件起こっている。恐怖は全く感じなかった。いつも見慣れている風景が、目の前にない。大変なことが起こったのだという認識は、このとき本当にはっきりとできた。こんな状態だったので、我が家から10分歩いたところの叔母の家も絶対にダメだと思ったが、念のためという気持ちで見にいくとどうもない。何とかその日はその家にお世話になることができ、屋根のある所で寝ることのできる幸せを感じた。2日目には水ひしゃく1杯もらうのに4時間並んだというような信じられない経験もした。僕の短い人生の中で、もちろん最も変わった体験だったわけだが、この大災害の中で1つ強く感じたことがある。それは、我々の家族が地震直後の一番大変な時期に4人もの人に助け出されたことからも分かるように、人間は自分1人では生きていけないということである。これから先の人生は、そのことを必ず胸のどこかにおいて生きていかなければならないと思った。

横山　昇平　　宝塚市雲雀丘

大きな揺れがきて、揺れの間まず何をしようか瞬時に思いつかず、ひとまず布団の中にもぐることしかできなかった。両親と弟は二階で、祖父と僕は一階で寝ていたが、どうやらみんな無事のようでやがて懐中電灯を持ってきてくれた。祖父は早起きなので、台所と祖父の部屋のストーブをつけていたらしかったが、ゆれで二つとも消えたらしい。祖母の遺影が置いてある

部屋についていた線香も、その横の花びんが倒れて出た水で消えていた。それから石油ストーブをつけて、服を着換え、みんな台所に集まって電池とラジオをもってきて聞いていた。その時初めて淡路島と神戸の間に震源があり、震度が６（この時はまだ６だった）と知ったが、東灘、長田を中心として、あれほどひどい状態であるとは知らなかった。だんだん明るくなってきて、二階から外を見ると黒煙が４、５本上がっているのが見えた。家の中の被害と言えば、花びんが少し欠けただけだったし、電気もまだ通っていなかったので、する事がないので明るくなるまでひとまず横になっていようと思い、少しうつらうつしかけたころ、母が電気がきたよと言い、みんな台所に集まり、残っていた冷やご飯を電子レンジで暖めにぎり飯にして食べた。まだ電話が使えなかった。午後になって買い出しに行く事になって、母と弟とダイエーまでパン・牛乳・カップラーメンを買いにいったが、その途中でも壊れた家があった。家に帰りテレビを見て神戸の余りのひどさに驚いたが、まだ死者、行方不明者はそれほどでもなかった。が、なぜ火事なのに水をかけないのかと初め思ったが、水がないことに気付いた。家はまだ水は出ないので、消防署前の給水車まで水をもらいに行った。しかし、水も出る所があるらしく、近所の人でひそひそ話をしながら、公園や建設中の他人の家の水道へと水をくみに行った。夜も両親は給水車を一番早くから３時間待ち、弟は留守番をして、祖父と僕は公園まで水をくみに行った。早朝と夜おそくはようやく電話は通るようになり、母が友人にかけたら親戚からかかってきたりした。三日目になって買い出しから帰ってくると、水がちょろちょろではあるが出てきた。これで水くみから解放されたと思いほっとした。紙皿・紙コップ・わりばしなどを使う必要がなくなった。この機会で水のありがたさをあらためて知った。今では、どこかで水がもれている所を見ると、ああもったいないと思うようになってきた。近所の家に２、３台車がとまっている所があったから、被災された人が避難してきたのだろう。まだ時々、サイレンの音が聞こえるときもある。未だにガスは出ないため、風呂は銭湯に入りに行き、石油ストーブ電気がま・カセットコンロを使っている。

吉田　重規　　神戸市東灘区御影町御影字上ノ山

地震前日、風邪をひいたようで頭が痛かった。17日、朝４時頃に頭痛のために目が覚めて薬をのみ、しばらく安静にしていた。今日学校に行けるだろうかと思っていた。少し気分が良くなり、うとうとしていた時に、突然地震が来た。半分意識があった状態であるが、はじめ夢ではないかと思ったようだ。最近ニュースで地震の報道がたびたびあり、それに影響されてこういう夢を見たのではないかと一瞬考えていたようだ。その次の瞬間、電気が消え、棚が倒れてきたので、完全に目が覚めた。電気は４時に起きた時からつけておいたのだった。すぐに立ち上がって、物が落ちてくる恐れのない場所に行ったが、しばらくの間強烈な揺れがつづいた。はじめにいきなり揺れた後、ちょっと揺れが小さくなり、次第に強くなっていった気がする。立ち上がってから、どこまで揺れが大きくなるのか心配だったが、その時の感じとしては適当なところで治まってくれたと思う。家が壊れたり、誰か家族が死ぬなどという心配は全然していなかった。食器はずい分割れる音がしていたので、被害はそのくらいだと思った。揺れが治

まってしばらくの間は、蛍光灯がぼんやりと光っていたために、だいたいの部屋の中の状態は分かった。自分の部屋の外に出られる状態ではなかったが、母が家族の安否を確認する声が聞こえたので、それに答えた。蛍光灯の光が完全に消えてからは真暗やみで何も見えなかった手探りでドアをふさいでいるものを何とかどかして廊下に出ると、ろうそくの明かりが見えた。ガラスが割れているからあまり動かないほうがよい、という声が聞こえたので、しばらくじっとしていた。その後、ろうそくも行きわたり、家の中の状態もだいだいわかり、家族の安否も確認して落ちついた時、みんなはかなり冷静だった。小学校5年の妹は、地震が来てもずっと眠っていたほどだった。停電していたので、電池式のラジオを探してきて聞いた。ラジオもはじめのうちはたいした内容ではなかった。震源地と震度と、最初は死者も1人だった。それまでは震源地は東京方面ではないかとも思っていた。関東大震災の時は、こちらでもかなり揺れたという話も聞いていたし、関西で地震が起こるとは思ってもいなかった。さて、その後次第に神戸あたりの情報も入ってきたため、ラジオの報道も段々被害の大きさを伝えはじめたし、外を見てみると、空が火事で真っ赤になていたのでかなりおどろいた。後日、家の周りを見てまわったが、無論家自体のつくりもあるが、地盤がよかったせいかほとんどこわれていなかった。ガラス一枚割れていない家が、自分の家を含めてかなりある。その点は幸運だったと思う。地震自体については、家が全壊した人などと比べると全く違った印象を持ったと思う。

米澤　亮　西宮市美作町

地震発生当時、インフルエンザで、熱が39度以上あった。17日の5時46分、激しい横揺れによって目が覚めたが、何が起こったのか把握できないまま、じっとしているしかなかった。横揺れが一段と激しくなり、地鳴りのような音がしたので、このまま家が倒壊するのでは…という不安に襲われたが、間もなく揺れが慎まり、とりあえずひと安心した。

停電のため真っ暗だったので、まず懐中電灯を家族で探しまわった。押入れから4つほど探し出し、その明かりで部屋の様子を見た。家具類はまともに立っているものは無いというほど、タンスや食器棚はことごとく倒れており、床には食器やガラスの破片が散乱していた。

危険なのでスリッパを履き、懐中電灯でラジオを探し出して、そこから聞こえるアナウンサーの声を聞いた時は、救われたような気持ちになった。家族にケガは無かったので、夜が明けるまで自宅でラジオを聞いていた。近所には、車の中に避難している人がかなり多くいたようだ。手のつけようがないので、二階部分はそのままにしておき、一階の食卓付近を丸一日かけて掃除した。2月4日現在も、2階の倒れたタンスや本棚は手つかずの状態だ。

17日はインフルエンザが完全に治っていなかったので、早目に就寝した。倒れた本棚や、散乱したガラクタ類の横に布団をしいて、地震発生時と全く同じ所に寝るというのは抵抗があったし、余震の恐怖も去っていなかったが、熱があって疲れていたせいもあってすぐに眠ることができた。

翌日、インフルエンザが治ったので外に出て、自転車で家の周辺を見てまわった。自宅の壁にも数ヶ所亀裂が入っており、玄関のドアが開かなくなっていたので裏口から外に出た。隣の

家のブロック塀が倒壊していたり、強固そうな石垣が崩れ落ちていたりした。自宅の前の道路にもかなり亀裂があった。しかし比較的新しい家が多い所なので、家自体が、全壊している所は無いようだった。自転車で阪急苦楽園口駅付近に行くと、全壊している家がかなり目につくようになった。阪急電車が駅に昨日からずっと停車しているのを見て、今回の地震がどれ程の影響を与えたか実感した。高台から神戸方面を見ると、火山のように白煙が立ち上がっているのが見えて、背筋が寒くなった。アンテナが故障しているらしくてTVの画像もはっきりしていなかった。3日後以降は、ガス・水道が止まっているので、生活用水を汲みに行ったり、買い出しに行ったりと結構忙しかった。今もガス・水道の使えない生活が続いている。

足立　典之　　三田市富士が丘

震災の朝、僕はふとんの中で起きているか起きていないかの状態であった。「ああ、もうそろそろ起きなければならない。」と思いながら、「まだ眠いからもうちょっと寝よう。」と思っていると家が少しゆれ始めた。「ああ、地震か。」とその時はまさかあんなに大きな地震が来るとは思ってもいなかったのだが、その直後に地震のゆれが急に大きくなった。雨戸が、ガンガンという大きな音をたてた。僕は何か落ちてきそうなのもがないかと部屋じゅうを見まわしたが、その部屋には小さな本棚があっただけだった。しかし僕は「まさかこの家が倒れやしないだろうな。」と心配し始めた。大きなゆれが2、3回起きた後、地震は止まった。「ああやっぱり地震は恐ろしいものだなあ。」と安心して思った。もうちょっと寝ようかと思ったけれども、弟がさわぎ出したので、僕は起きて弟たちが寝ている部屋に行ってみた。弟たちが寝ている部屋にはたんすを2段に重ねて置いていたのだが、どうやら倒れてはいないようだった。家族全員が起きて、テレビを見てみようと1階に下りると、玄関内に置いてあった細長い靴入れとかさ立てが合わさった入れもの（高さ約2メートル）がぶっ倒れていた。ちょうど倒れたところにダンボールが置いてあったのでこわれなくてすんだ。テレビをつけてみると、近畿圏外まで地震が起きたということを知って、びっくりした。しかし、僕はいつも通りに学校に行こうと家を出発して駅まで行ってみた。電車は駅に着いていたのだが、駅員さんたちは、「地震のため、復旧のめどは立っていない。」といっていた。僕はせいぜい2、3時間立ったらまた電車は動きだすだろうと思ったのだが、結局家にまた帰った。バスのUターンラッシュがすごかった。家に帰ってからテレビをつけると、神戸の方のさまざまなぶざまな姿が映し出されていた。高速道路がぶっ倒れていたのが印象的であった。しかし弟たちは学校にいつも通り行けた。父と僕とはしばらくの間家にいなければならなくなった。休みの間は地震関連のニュースをずっとみていた。地震が起きた直後にテレビを見た時には、「もしかすると100人ぐらいは死ぬかもしれない。」と思っていたのだが、とんでもなかった。5千人以上の死者が出たのだった。

新井　克人　　池田市荘園

05：40…前日22：00前に寝たため、目がさめるが、さむいのでまたふとんにもぐる。

05：46…ゴゴゴという音が遠くから聞こえ、カタカタという音で地震がきたなと思った後すぐに、突然ドドドーという音にかわり、はげしく横にふられる感じがする。電灯をじっと見つめていると、かなり横にふられているのが見え、電気が消える。その後ガタタという音がして、まわりの家から悲鳴が聞こえる。地震が終わる。机の方を見ると、本棚が倒れており、机の上のガラスが割れていたのが分かり、すぐに服をきがえて、ウォークマンをとり出し、ラジオを聞こうとすると、母と妹が大丈夫かと聞いてくる。この後少しすると電気がついたので（約5分後）テレビをつける。台所で食器が割れているのが分かる。それを片づけようとするとまた少し強めにゆれる。東京の父から電話がかかってきて、そっちの方で地震があったようだけど大丈夫かという電話をうけるが、父の話では、東京では最初中部地方が震源地だと報道されたらしい。その後、大阪府羽曳野市の祖母の所へ電話すると、すこし強めの地震だっただけで、なにも被害はないと言われる。次に、1B市川の家にかけると、停電が続いているといわれる。その後、1D森本の家にかけようとしたが、コール音を40回程ならしてもでなかった。

07：00…そうしているうちに妹の友達（池田市豊島北）から電話がかかってきて、家の壁に穴があいているという話をきく。そのあと、母が前の家の塀がみごとに倒れているというので写真にとる。又、ついでにと、家中全部写真にとった。それから、パソコンから住所録を打ち出し、生物部のみんなに電話をかけつづける。この時点で、ライフラインは1つも異常がないことが分かる。その後はほとんどテレビを見ているか、電話をかけているかかで1日がすぎる。その日のテレビは、ビデオに4時間分おさめている。だた、学校の対応の悪さは信じられなかった。人が電話で連絡をまわしましょうかというのにことわられた。この日の夜に父がむりやり帰ってくる。

次の日…西宮北口に出て、1D十石に会う。その後夙川まで歩いて、1B大西に会う。

3日目…生物部全員の無事を確認する。

次の週の月曜と木曜に学校に行く。ここでいろいろな情報を得る。土曜に先輩（東灘区）の所を片付けにいく。

安藤　浩和　　川西市見野

目が覚めると横に激しくゆれていてベッドがきしんでいた。まだ寝ぼけており、天井が落ちてくるような気がして両手をかざしていた。とにかく電気をつけようとしたが点かなかった。懐中電灯を母がもって入ってきてとりあえず一息ついた。最近この付近で群発地震が起きていて調査をしている、というニュースが前からあったので、この時点ではここが震源地だと思った。しかし家の中は何の被害もなかったので学校はあるだろうと思い着がえていると、6時30分ごろ「ピッ」という音と共に電気が戻った。電車は止まっているということだったので、父と車で家を出た。途中、伊丹のあたりで道路にたてに2ｍぐらいの段差があった。全壊した家や毛布を巻いて立っている人が見られた。西宮北口で降りて電車が動くのを待とうと思っていたが、かなりひどかったので僕は家へ帰ることにし、父は降りた。（車は母が運転した。）このあたりでは2、3ヶ所で火事が見られたし、バイパスが落ちてしまっていた。家に帰って初め

てTVを見ると、電車が高架から落ちとなりで大きな火事が起こっている映像があった。被害の大きさを知り怖くなった。尼崎の祖母から電話が外出中にあったのでくわしいことを聞こうと電話したが全くつながらず、行ってみることにした。行く途中で新幹線の高架が2ヶ所で落下していた。祖母の家は残っていたが瓦がズレていた。またタンスが倒れてきて、もう少しずれていたら下じきになるところだったらしい。また水、ガスがとまっていた。祖母の家から帰ると父がむかえにきてくれと電話してきた。電車が動く由もなかった。駅までは車で行けなかったので途中から歩いていった。朝はしなかったが強烈なガスの臭いがした。また栄養専門学校は新しいのに傾いてしまっていた。もう授業はできないだろう。また歩いている2m程横に、上からガラスが落ちてきた。非常に危なかった。帰りはこんでいてとても時間がかかった。余震があったとき、前の大きなトラックが上下にゆれているのがはっきりとわかり恐かった。車に乗っている時間がとても長い1日だった。家はとまっているものは何もなかったが、付近ではガスが止まっている所が多く、店の品物はあまりなかったようだが全くないということはなかった。次の日に風邪をひいて、しばらく苦しんだ。

石井　圭　　豊中市城山町

当日、僕は5時ぐらいに起きていて、本を読んでいたらいきなり激しくゆれたので驚いた。自分の部屋はたんすや本だなが倒れたぐらいだったからすぐに片付けられたが、一階では食器棚の戸びらが開いていたので、食器のほとんどが床に落ちてわれていた。当日は主にわれた食器を捨てていた。家の近所ではガス管にひびが入ってガスがもれいる家もあったが、僕の家の辺りではすぐに電気がつき、しばらくして水が出たので当日はガスがなかったけれども、そんなに不自由ではなかった。ガスが出たのは次の日だった。僕の家族はみんないつもと変わらず元気でけがもなく、次の日から兄も学校が池田にあるので登校していたし、父も事務所がどうなっているか見てくると、仕事に行った。

市川　洋光　　川西市湯山台

ちょうど目が覚めるころに地震が起こり、目が覚めて、ベッドのすみで小さくなって、おさまるのを待った。ゆらゆらとゆれるだけでなく、上下方向にもドンというはげしい揺れが来たようだが、ベッドのバネが効いたので、そんなに大きい揺れを感じなかった。停電してしまったので、すぐ近くの自分の枕の中から、自転車用のライトを取り出して部屋を出た。後から聞いたところによると、蛍光灯が大きな音をたてて割れたらしいのだが、その時は全く気づかなかった。その自転車用のライトはなぜかすぐ暗くなってしまったので、もう一つあったカギ穴用のライトを使った。幸い家具は一つも倒れなかった。両親が関東育ちなので、家具を壁側に少し傾けるなどの対策がしてあったし、比較的ゆれが小さかったらしい。以前に「猪名川地震」という一連の地震があったので、最初はその地震の一つだと思ったので、学校に行こうと準備した。電池式のラジオを聞いていたら、ひどいことがわかったが、その時は死者数名と言って

いたので、こんなにひどいものだとは思わなかった。周りはとても静かで、まるで何事もなかったようだった。６時過ぎ、無事だという電話を祖父母にかけようとしたが、停電していたのでかかるはずだと思ったが、やってみてかかりそうにないので困っていたら、友達が電話してきてくれたので、電話できることがわかった。この時の頼りない電話機の呼び出し音が、忘れられない。祖父母に電話した後、朝食にパンを食べ、熱いお茶が飲めた。母が弁当の準備をしていた時に地震が起こったので、昼は、弁当と作り置きの料理を食べることができた。朝は暖房がつかなかったので、とても寒かった。何もできずにラジオだけを聞いていて、昼になったら、電気が来た。この時は、うれしかったと同時にとても安心した。水は、父がポンプが止まって出なくなるかもしれないと言うので、いれものにたくさんくんでおいた。あとで見ると、とてもきたない水だった。ガスはいまだに来ていない。

岩井　聡　西宮市神垣町

ギシギシという音で目が覚めた。「地震か」と思った瞬間に大きく揺れた。ベッドからはじき飛ばされそうになっている自分をささえるのに必死だった。揺れがおさまると、私は「ウソだろ」とさけんだ。ベッドから降りて、家族と犬の無事を確認し、無事だとわかったところで夜明けを待った。懐中電灯もどこにあるのかわからない、ラジオもない。防災対策というのは我が家ではゼロに等しかった。夜が明けて向かいの家の塀がたおれているのに驚いた。懐中電灯を持ってうろついている人と話したところ、震源地が淡路島と知った。そして完全に日が出てから、辺りを歩いてみると、木造の家の九割方がこわれている。まるで異世界に入ったみたいである。それから飲み水としてジュースを買いに行くと、「男の人、来て下さい。人が埋まっています」という声がしたので、そこに行ってみたところ、大きな梁の下に、人の背中が見える。一生懸命に梁を切ったりしたが、三十分に一回の割合で余震が来るので、危険だと覚り、中断した。その後、その人が死んでいたのがわかった。家に帰ると電気がきていた。ローソンに食糧を買いに行ったが、長い人の列が出来ていたので、買うのをやめた。辺りには、家がこわれ、茫然としている人がたくさんいる。近所の池では地すべりと液状化現象が起こっていた。地震というのはテレビの中でしか見たことはなかった。また京阪神には、百パーセント地震がこないと信じていた。テレビをつけると、近所にある阪神高速が映っていた。しかも倒壊している。テレビ局のヘリが数機飛んでいた。自衛隊のヘリは一機も飛んでいない。飛んでいるヘリを見て何だか腹が立ってきた。その日は、インスタントの食品を食べて寝た。

岩本雄次郎　尼崎市常吉

午前５時46分カタカタという音で目が覚めた。そして小さい地震かと思っている内に揺れと音がどんどん激しくなって、いきなり枕元の和だんすが倒れてきて下じきになった。その時39′の熱が出ていたので何が何だかわからない思いでようやく和ダンスの下から出てきた。家族は２階の部屋でそれぞれ別れてねていたが２階には懐中電灯は１つもなかったので１階の方へ

降りて行った。そして懐中電灯をもって自分のねていた部屋を見てみると、あらゆるものが倒れグシャグシャになった。しかししんどかったので倒れているものをだいたいのけてまた寝ようとしたが、時々揺れるので不安でなかなか寝られなかったが、しかししばらくすると電気もきたので安心して寝た。次目が覚めると時計は9時30分をさしていた。そして下のテレビをつけてみると、どのチャンネルも地震についてばっかりだった。またしばらくしてすぐにガスもくるようになったが、水はなかなかこなかった。そして給水車に水を取りにいって、その水で朝昼晩とすべてインスタントラメーンで過ごした。そして1週間位の間はずっとインスタント生活だったが、1週間ちょっとして水がチョロチョロ出るようになった。そしてその後3、4日もすると完全に出るようになった。そして2週間もするととり合えずいつもどうりの生活に戻った。

上西　祥平　　芦屋市大原町

電気を消していて、部屋は暗かったので、揺れた時の部屋の様子はよく見えなかったが、ベッドが動いたのがわかった。電気は割合すぐついた。机は足の部分が折れて壁に穴をあけていた。まず、食器類をなおした。つぼはこわれていた。周りの1軒家は全壊で火事も自分が住んでいるマンションの隣りのマンションでおこっていた。神戸の東灘区にも引っ越す前に住んでいた一軒家もあったけれど、そっちはこわれていた。さらにどろぼうが入っていたような形跡があったけれど、何もなかったのでとられなかった。

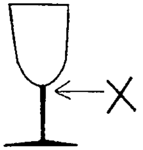
大坂　　聡　　西宮市獅子ヶ口町

16日の夜にかぜをひいていて、自分の部屋では寝ていなかった。高校になって無欠席だったので、あまり学校を休みたくなかったが仕方がないと思って寝た。そして地震の間はふとんにもぐって「おお～」と感動していた。そしてたんすも倒れているので電気もつかないし、多分学校は休みなのでもう1回寝ようと思ったが、その時、兄が入って来て、「お前、何してんねん。逃げなあかんのちゃう。」と言うのでしぶしぶ寒い中、部屋を出た。父は出張でいなかった。すぐに風呂場のラジオを取って来て、いつもは聞かないＮＨＫを聞いた。そして明るくなると部屋はちらかっていて、片付けるのが面倒だと思った。テレビがスーパーファミコンの上に落ちていて、本体にヒビが入っていた。「下取りに出すときに値段が下がるなあ。」と思った。そして高い皿やグラスを入れている棚の戸はひらき戸で、安物の皿の棚はひき戸だったので、高い皿だけが割れて、安物は残った。グランドピアノも動いていた。しかしぼくはかぜをひいているので寝た。そして17日は終わった。次の日に自分の部屋を見た。ゾッとした。いつもと同じように寝ていれば、ステレオが頭に、スピーカーが腰に、本が体全体に落ちていた。そしておばあちゃんから電話がかかってきて、伊万里焼の皿が割れたとか、くだらない話を聞かされた。テレビは地震のことばかりでおもしろくないので、ビデオを貸りに行ったが休みだった。仕方がないので寝た。それから2、3日は部屋の片付けもする気がしないので寝てばかりだっ

た。この時、トイレがつまり、仕方なく大阪のおばあちゃんの家に、車で犬を連れて行った。暇だろうと思って、スーパーファミコンを持って行ったので、日本橋の「でんでんタウン」でカセットを買って、1週間ずっと遊んでいた。そして家に帰ると、水が出るのでましな生活をしながら、今日にいたっている。私は平和である。

大沢　集　豊中市東泉丘

地震が起きた時、僕は自分の部屋で寝ていた。はじめは夢を見ているのかと思ってぼんやりしていたが、あまりのリアルさにびっくりした。外で青白く光ったような気がしたので、雷でも落ちたのではないかと思ったが、縦揺れの後の凄い揺れでこれが地震だとわかった。僕の寝ている部屋は倒れそうなものは、不安定な本棚2つがベッドの前にあったが、揺れの向きのおかげで倒れずにすんだ。揺れがおさまるとすぐに母がやってきた。そして電気をつけて、すぐにテレビをつけた。テレビでは大阪では震度4と言っていたが、うちの付近はもっとあったと思う。この時は、確かに地震はすごかったが学校へ行くつもりでいて、すぐに朝食を食べた。父が会社に行くために駅へ行き、初めて電車が全部止まっていることを知った。これはうれしいことだと思った。しばらくして母が父を車で尼崎の会社の工場まで連れていった。この時に、初めての大きな余震がきた。僕は家で一番危険な電燈の下にいたのですぐにそこをどいた。そして、揺れている電燈を手でとめて落ちないようにした。この余震のせいで僕は揺れにとても敏感になり、震度1でも感じるようになった。母が渋滞を抜けてやっとのことで帰ってから、初めての家での被害が見つかった。左の図のようなグラスが×印の所で折れていたのだ。これは食器棚を開けて初めてわかった。わが家の棚は開き戸ではなく引き戸で全く食器は落ちなかったのだ。午前中の間かずっとテレビを見ていた。昼になり昼食をとりたかったが、母が食料を買いにいってなかったので、マクドナルドに食べに行った。その途中に通った服部緑地で30cmほど地面が盛り上がっていたり割れていたりしているのを見ておどろいた。昼食をとって食料を買って帰ると、テレビをまた見た。死者の数はまだ少なく、すぐに学校に行けるようになるだろうと思っていた。それからずっと寝るまでテレビを見ていた。高速の落ちている所で香枦園付近がうつったのは少しうれしかった。電話をかけまくって見たが、つながったのは豊中市内外では芦屋の1−D松山君のみだった。東灘や灘の友達が心配だったが、どうすることもできなかった。その日は余震がこわかったので、両親の寝ている部屋に布団を4つひいて、家族全員そこで寝た。その翌日からは僕以外みんなまともに活動し始めた。とても暇なので市内の友達の所へ行き、そこでバスケットをして遊んだ。その次の日、友達と何かしよう、ということになり自転車で伊丹の友達の所まで水をカップ一杯持っていった。そこで初めてくずれた家などを目にした。その後2日ほどバスケをするだけの生活をし、友達も他に何人か集まったので、水14ℓとパンを大量に持って芦屋の友達のところまで持っていった。そこは少しかたむいているということだったが、まったくわからなかった。



大谷　英之　　神戸市中央区上筒井通

ぐっすりと眠っていると、下からつきあげる音によって目があいた。その後南北の揺れを感じながらも眠気には勝てずにそのまま眠りかけた。地震など考えもしていなかったので、非常用具は全く用意していなく、懐中電灯は、とっさに見つけられたのは家で1本しかなかった。急いで上着を着て、外に出ようとしたが外は静まり返って人の声は全くしなく、再び家の中に入って、玄関前に居間にひいてあったふとんをひっぱり出してきて、おちついてから取りに入ったラジオをつけてしばらく待った。少し明るくなってきた時に、父方の祖父から電話がかかってきて無事なのを知ったと同時に、母方の祖父母は、まわり一面、棚の中で寝ていて、かつ三宮のビルの4階に住んでいたので心配になった。それで、父と兄がむかえに行った。その後に自分の部屋を見たが、自分の部屋は一番被害が少なく本棚が倒れてきただけで、僕は物入れのガラスがきれいに半円に割れて中に入っていたので危なくはなかった。家の周りも何事もなく、くずれた家もなかったのでそんなにひどくはないと思っていた。父が祖父母といとこの家族をつれて家に帰ってくると、寒いというのでストーブをたき出した。そして父の話に、三宮の駅北側のビル（夜になって倒れた柏井ビル）のことや、ビルの前の学校がくずれていることなどが出てきて、はじめて被害の大きさを知った。昼からは、あてもなく買い出しに行って、水やラーメンなどを何とか買って来た。そしてその夜はある物を適当に、キャンプで使うために買っていたガスボンベで何とか食べて、4畳半の部屋と廊下に計9人がごろ寝して、その日は終わった。次の日は、朝から家族総出で給水車を待ち水くみを終了すると、車2台で買い出しと、祖父母とその上に住んでいるいとこの家の冷蔵庫の中のものをあさりにあさって、電器の調理器などをすべて持って帰ってきた。またその帰りに、被災者らしからぬ食べ物を買いしめて、その日の夜からはせまいコタツに入って、ぜいたくな料理を食べながら、テレビにうつっている腹をすかした人達を見ていた。

尾畑　直樹　　大阪市西区北堀江

約3分前に目が覚めた。しかし、まだ時間があるので寝ようとし、その時はうとうとしていた。ベッドに寝ているので、みんながよく言う「縦揺れ」を感じなかったが、非常に長く家が揺れた。初めて死の恐怖を感じ、どうすることもできなかった。その時から時間が経つのは非常に速く感じた。死の恐怖が和らいだが、家が倒れるのではないかと思い、起きることができななかった。そして地震後はじめてしようと思ったのはテレビをつけることだった。しかし、電気が通じなくなったかもしれないと思った。電気は通じていた。そしてただちに地震度を知った。大阪は「4」とでており、震度5はその時、滋賀、豊岡、京都だった。大したことはないようであるが、どうして神戸がでていないのかわからなかった。しばらくして、「6」がでてきた。おどろいた。これ以上に地が揺らぐと神戸はどうなったのかと思った。そのため、すべての電車が動いていないことを知った。地下鉄も動いていないので、7時半ごろに自転車で

阪急梅田駅に学校に行くため行った。その時はまだすぐに動くだろうと単純な考え方をしていた。駅につくと天井から水道管が割れて水びたしだった。動きそうもないので学校に電話をしてみた。誰かが出てきて、混乱しているようで、先生たちと連絡をしあっているようで、学校があるかどうかわからないと言われたので、家に帰ることにした。母はかたづけをし終わったようであった。そしていつものように生活をしていけることがわかり、そして父が入院していたが無事だったのでほっとした。

川田　良作　　豊中市新千里西町

5：46ごろ、その日はカゼで学校を休むつもりだったのだがウトウトしていた。すると、急に上下に揺れだした。「ああ、地震だ。」と思ったが、やけに縦揺れが長いので驚いていたら、頭に何か落ちてきたのでふとんにもぐって寝ていた。テレビを見ると数人しか死んでなかったのでたいしたことがないと思っていた。ガスは一時的にとまったがボタンを押したらまた出だした。外を見るとたいした影響はないと思っていたら、足がボロボロになった建物があったので驚いた。父親は仕事に行こうとしたので母親が止めていた。自分は一日中寝ていた。

神田　健一　　西宮市老松町

目が覚めたのは、地震の中頃だった。激しい揺れの際に目を覚まし、危険だと思い、部屋の外へ出ようとした。うちは、引っ越す準備をしており、ダンボールに本をつめて部屋につんでいた。そのダンボールが戸の所に落ち、ドアが開かなくなっており、暗く、揺れている中でそのダンボールを手さぐりでどけ、部屋の外へ出て母が無事か確かめた。自分の寝ていた部屋が、一番外に出るのに近く、母と弟がそこまで来た。懐中電灯は、いつもあった場所から落ちていて、明るくなるまで分からなかった。しばらくじっとしていた後、洗面所にあった服を探して着た後、トイレで用を済まし、かぎをしめて外へ出た。芦屋に今建てている家と祖父母の家があり、様子を見るということでそこへ出かけた。その途中の道はひどく、家がつぶれている所はなかったが、道路が陥没していたり、電柱が倒れていたりしたが、母は玄関にあったカメラで写真をとっていたが、すぐにフィルムもなくなった。祖父母の家は無事だったが、玄関が開かず、裏口から入った。そして、祖父母の無事を確認し、そこで夜が開けるのを待った。テレビをつけ、ラジオを聞いているうちに余震がたびたび起こった。軽い朝食をすませ、9時頃に帰ることにした。帰りにローソンで何か買おうとしたが、混んでいたので外に出た。電話もつながらず、ひとまず家に帰ることにした。家の中はひどく、自分が寝ていた床は、ダンボールと棚が落ちてきて、寝ていたふとんが見えなかった。起きてすぐ立ち上がったのがよかったようで、そのままじっとしていたら生き埋めになっていたようだ。あとは、棚が倒れ、ガラスがこなごなになって、足の踏み場もなかった。食器は、高い物だけが割れており、開き戸の中に入って戸を閉めていた安物はすべて無事だった。電気はついていたので、奥の部屋からかたづけ始め、夜には3分の2のかたづけが終わっていたが、かたづけたといっても形だけのもので、

かたづいた奥の部屋にからになった棚などを置き、ゴミもすべてそこへ置いておいたが、２、３日後には外に出した。その日は早く寝ようということで７時くらいには床についたが、いつでも逃げれるようにと服を着たままで、玄関までの道が確保されるようにと机はどけておき、玄関には逃げるときに必要なものをまとめて置いておいた。寝ていても余震でたびたび起こされ、大阪の方から電話がかかってきて、何人かの友達の無事は分かったが、神戸方面の友達についてはさっぱり分からなかった。そしてその日は終わった。次の日は水や食料の確保で小学校に向かう。水はもらえた。給水車というのにはじめてお目にかかったわけである。コープはあいていたが、並んで、必要な物、特に食糧を買った。トイレの水は、歩いて５分位のわき水をくみに行って、それを使って流した。祖母が校長をやっていて、余るくらいの援助物資を教え子が持ってきたようで、食糧は十分にあった。しばらくすると飲み水は、マンションの人が、石油缶で14ℓ入るものを100缶ほどもらってきて、それを配るのを手伝って分けてもらった。トイレを流す水も、マンションの人が川から水をくみあげる道具を使って便利になった。小便は流さず、大便を流すといった生活が続いている。後から分かったことは、友達の家も半壊で不便であり、自分の所が被災地でも何と恵まれていたかということである。２週間後に学校が始まったが、地震は昨日のことのように思えてならない。ラッキーなのは家が学校から歩いて30分の所にあることである。ちなみに２週間たった今も、水とガスはまだ出ない。

小島　健哉　　西宮市菊谷町

地震が起きたときはぐっすり寝ていて、縦揺れのときは大型バスにチェーンをまいて雪道を走っている夢を見ているようで、トランポリンに乗っているような感じがしたが、横揺れになってからようやく目をさまして、地震が起きたと分かった。それから父が起こしに来て、家族４人で３階から鉄筋の造りの１階に下りた。その時はまだ夜が明けていなくて、しかも停電していたので、まったく状況がつかむことができなかった。５分くらいして、２階にラジオをとりにいってラジオをきくと、神戸で震度６とか言っていたが、そんなに大したことない地震だと思っていた。そして、夜が明けて少し明るくなったので、外に出てみると近所の人が集まって話していたが、近所ではつぶれた家とかは見つからなかったが、少し先の家がつぶれていた。だいぶ明るくなって３階の自分の部屋に行って着るものやコートを取りに行ったが、その途中の２階はひどく、足の踏み場もないほどで割れたコップのガラスなどが飛び散ったり、正露丸のビンが割れて悪臭を放ったりしていた。１時間ほどしてようやく電気がついたが、水道はまったく出なかった。電気がついたので片づけようと思って２階に上がると、ガラスがかなりひどく飛び散り、食器がたくさん置いてある台所は割れた食器で床や流し台のところが埋めつくされていた。８時ごろになって、水が出ないのだが、昨日の残り物があったのでそれで朝めしを食べて、それから２階の片づけに入った。気が遠くなるほど多くのガラスがあり、少し揺れてきたので３階の自分の部屋を見に行ったが全然大したことなく、もとから散らかっていたからかもしれないが、あまり被害はなく、片づけるのも10分くらいで済んだ。そして、１階を見ると背の高いスタンドが倒れたくらいでほとんどといっていいほど被害はなく、ほとんど揺れ

なかったと思われるくらいだった。10時くらいになって父が会社を見に行くと言って、大阪の福島へ行ったが道が混んでいたので6時間もかかったそうだ。昼になってニュースで状況が入るのを見ると怖くなるほどだった。また、電話がまったく通じないので、親せきに無事だという連絡をするのに困った。公衆電話で名古屋の兄とやっと連絡をとることができ、そこからだいぶ多くの人に伝わったらしいが、堺方面には全くかからなかった。そして、この日の一番びっくりしたことは、堺の親せきにいた祖父が水をペットボトル20本くらいもって帰ってきたことだ。ただでさえ急がしいのに、祖父の世話をするのにたいへんなので唖然としてしまった。8時くらいになって父が帰ってきて夕食にした。ペットボトルを20本くらいもって帰ってきたので水には苦労しなかった。その日に寝たのは11時くらいだった。その2日後に大阪へ行った。

斉藤　護　西宮市深谷町

地震の前日は真夜中まであそび、寝ついたのが3時半ぐらいだったので、熟睡し始めた頃だった。あの地震がおきた時は、すぐに目が覚め、最初の縦揺れの時に本がくずれ落ちる音がし、地震かと思った。しかし、10秒すぎても地震がおさまらず、下へガラスが割れていく音を聞いた時は、その長さにおどろいてこれは大きいと感じた。揺れがおさまり、静かになると急いでメガネを探してかけた。それからくつ下をはき部屋をとび出し、隣部屋を見てみた。あの時のショックは大きかった。明かりを持っていなかったのでよく分からなかったが、あったはずのパソコンのシルエットがなく、机やオーディオのスピーカーが建つ場所にあるのが分かった。それから懐中電灯とスリッパを親からわたされ、ライトで部屋を見るとあぜんとしてしまった。自分の部屋は無事だったが弟の部屋はタンス（2ｍくらいあるいはもっとある）がたおれ、かろうじてベッドのポールにささって止まっていた。一階はガラスの海だった。ビデオなどは完全につぶれていた。しばらくはダビングできない。外に出てみると、家の近くにきれつがあり、遠くまで一直線に通っている。近所の友人の家が運悪くその上にあり、家は新しいので地震ではつぶれなかったが、地面が一メートルぐらい陥没し、家がひしゃげてつぶれてしまっている。とにかくまりはメチャクチャだった。水もないしガスもない。生活は最悪である。

志田　尚介　豊中市上野東

地震があった日は2階で寝ていました。そして地震が来たけれども揺れて僕の部屋の本棚が倒れただけで他はどうもなかった。家の近所も全然どうもなかった。水もガスも電気もあるから大丈夫だったが近くのコンビニスーパーでオバタリアンどもの買い占めがあったので、2、3日は冷蔵庫の中味だけですごしていたがすぐに品物も戻ってきた。その日は寝て過ごした。電話はパンク状態でかかりづらかった。弟と妹はその日の10時から学校があった。父もその日、車で仕事に行こうとしたが高速がやられていたので家にいた。

清水　純　　西宮市甲東園

寝ていたら突然地震がきた。起きてふとんを頭にかぶろうとしたらふとんが動かなかった。これはきっと津波がくると思い、日本列島沈没という文字が頭にうかんだ。懐中電灯がなかった。眼鏡をさがすのに苦労した。内壁がはがれて下におりるのは困難だった。外に出ようとしても戸があかないのではずした。外に出ると近所の人も外に出ていた。飯はご飯が5時30分にセットされていたのでおにぎりを作って食べた。ラジオで聞くと初め死者1人と言っていたのでたいしたことないと思った。球技ができなくなると思った。町を歩くとガスくさかった。水は井戸が出ている所があるというので、山内先生顔負けのすばやさでとりにいった。しかし1時間待ちだった。腹がたったので放火してやろうとすら思ったが、マッチがないことに気がついた。しかたないので盗みにはいってやろうとすら思ったが店はしまっていた。その日は、余震が何回かあった。その日の終わりで死者は2百人をとっぱしたので、2千人はいってしまうだろうと思った。それから3日間テレビは全部この地震のことばっかりで、「笑っていいとも」と「ヒーローは眠らない」がみれないことはくやしかった。「ヒーローは眠らない」は、ちょうどスペースゴジラになったばかりだった。そのまえの「ヒーローは眠らない」はドロロンえん魔くんだった。私は「ヒーローは眠らない」はバビル2世のときからみていてその後のデビルマン。新造人間キャシャーン、エイトマン、ガンダム、キューティーハニーを末長くみている者などで、「ヒーローは眠らない」をやらないことはくやしかった。現在は水道とガスが出ないで、家も柱一本か二本が折れて内壁がくずれた程度なので心配ない。しかし今は清水純様あての義援金をつのっている。

田村　健一　　西宮市上ヶ原十番町

午前5時46分、ちょうど下で弟が岡山の学校まで帰るため、両親とも起き出していた。父が新大阪まで車で送りに出かけた。それらの物音で僕は目覚めていた。経験したことのない未知の揺れ、というよりは衝撃と轟音ですっかり目覚めた。すぐに辺りがさわがしくなったので、起き出したらいきなり倒れた本だなに頭をぶつけた。停電の上雨戸を閉めているのでほとんどまっ暗に近かったが、部屋が傾いているのがわかった。その時には地震だという認識があったので、余震で僕の家の寝ていた木造部分は倒壊の危険があると思い、家族の寝ている鉄筋部分へ移動した。家の中はまさに倒れた家具などでお化け屋敷と化していた。時計があったので夜明けまで待つことにする。こんなことなら懐中電灯を用意しておけばよかった。7時前になって明るくなってきたので雨戸をあけ、まず家の中の様子を確認しにいく。その間ずっと余震が断続的に続いていた。家具やなんかはかたづければいい。問題は家屋の被害だ。家全体が東西に分かれてしまっていた。裂け目にそって地割れが10メートルぐらい続いており、家の穴のあいた部分にはふすまが落ちこみ地面にまで達している。別の部屋でも15センチほどの段が生じ、先日見てもらったら建て替えの必要ありとのことだ。朝になって着替えて外に出てみると、ま

さにヤンマガのドラゴンヘッドだったかそんな感じの世界だ。倒れた家は自治会で１軒だけだった。新築だが場所が悪かったようだ。住んでいたおばあさんは既に救助されていた。家族が近くに住んでいるおばあさんの安否を確かめにいったが、僕は８時頃になったのでなんと学校へ行った。甲陽園のサンクスは営業していたが、人々が殺到し食料品は品切れ寸前だった。駅では通勤客が不通のため所在なさそうに10人くらいたむろしていた。まずいパンを食べながら、学校へ行くと通用門はあいていた。校舎前までいくと石井先生が、休みだと言っていた。だれもいない校舎では空しく時報が鳴っていた。実際、この限られた情報でも授業があるはずないとわかっていたが、校舎が無事か確かめたかったのだ。しかし地震当日定刻に登校した男は僕くらいのものだろう。帰りに、銀水橋の上に登ってみると、市内４ヶ所で火の手が上がっているのが見えた。家について、引き返してきた父と弟に再会するに及んで、家族とおばあさんの無事がわかった。ただ兵庫区の母方のおばあさんは無事かどうか確かめようもない。近所の建築中のマンションにもひび割れがあった。もう売り物にはなるまい。

鳥井　隆史　　神戸市東灘区田中町

その日は、３時就寝の行動をとった。「ドカン」という縦揺れで飛び起こされた。そして、横揺れた長い間続いた。「メキメキメキ！」という大きな音がしたので、自分の家が倒れると悟った。そして地面に倒れた時の衝撃の対応するため体勢を整えた。しかし、いつまでたっても衝撃はなかった。そのかわりに窓の外で大勢の人が阿鼻叫喚するのがわかった。まず、部屋から出るベシと思い、doorを開けようとした。「開かないゾ」とさけぶと、妹の声が聞こえた。何言を言っていたかは、わからなかった。電気をつけようとした。つかん！！そして、ドアのそばに百科事典（全約40冊くらい）が散乱しているからdoorが開かないと知った。一部を除去した。ドアが半分開いた。むりやり出た。親の寝室で一時一家全員避難した。

中尾　龍太　　明石市西明石北町

前日の16日、風邪をひいて寝ていると午後６時前後に小さな揺れがあった、そのときは、地震が起こるとは珍しいと感じた。当日の17日は、夜明け前に目覚めてトイレに行き、再び眠りに就こうとしたときにその地震は起きた。また地震かと思ったとき、突然大きな揺れにおそわれた。電気はすぐに消え、本棚から本が落ちる音がした。幸いベッドの周囲には、倒れそうなものも落ちてきそうなものもなく安全であった。揺れがおさまった後は、電気がつかなく、また、体調も悪かったので、夜明けまで一眠りすることにした。家族の行動と僕を総計してみると、父親は懐中電灯を手に一階へ降りようとしたが、階段のわきの本棚が階段に倒れ込み、下に降りられないようであった。妹は電池のラジオをつけた。ラジオはひどい地震であることを報じていた。目が覚めて少しすると、10時ごろに電気がついた。家の中の様子を見ながら一階へ降りた。誰の部屋も本や小物が落ちている程度であった。食器等は、土鍋が割れただけで、ほぼ全部が無事であった。両親は職場の状況を見に行っていた。水が出ていないがガスは出て

いた。テレビでは、火災や死者など告げていた。高速道路や新幹線の状態を見て地震の大きさを再確認した。実際に見たのは数日後であったが、近辺の家々は、屋根瓦が落ちたりしていた。両親は、帰りに水を調達してきた。職場には給水タンクがあるため、まだ水が出ていたらしい。近くのスーパー、ローソンなどでは早くも飲料水、ウーロン茶、インスタント食品などが買い占められ、売り切れになっていた。翌日になっても、まだ水は出ないままであった。次の日は、買い出しを行った。震災後3日になってようやくわずかずつではあるが水が出はじめた。また、体調もよくなったので活動を開始した。家の近くの店々は、インスタント食品、レトルト食品等が大量に売れていた。神戸市の長田区に住んでいた母親のいとこが亡くなったという電話がかかってきたので両親は、水や食料を持って自転車でそこへ行った。テレビでどんどん死者が増え続ける中、家の片づけも終わり、震災前の姿に戻った。

中島健太郎　　大阪市東成区東中本

僕の家は大阪にあるので、それほど被害はなかった。7階に住んでいるため、本棚の中身や机の上にのっていたＣＤプレイヤーが枕元に降ってきたが、すぐに机の下に入ったので傷はなかった。妹・弟はベッドでじっとしていて、父や母が棚の中身が落ちないようにおさえていたらしい。1階などでは、安定の悪い物がこけていただけだった。ただ、地下のガス管、水道管にひびが入り、ガスはしばらくの間止まっていた。まわりも一見何もなかったように見える。よっぽど古い家の瓦が落ちていたり、もともとあったひびが少し広がっていたくらいだ。この日は、まず家の前で倒れて中身が出ていた消化器を処分し、本をもとに戻して、午前中はずっとテレビを見ていた。この時は、そんなにひどいとは思っていなくて、まあ今日は休みでも明日には学校があるだろうと思っていた。この時は暇だったので、1－Bの松田君と昼に待ち合わせ、そして、ゲームを借りて無駄話をして家に帰った。この後、午後3時ぐらいに、芦屋にある母の実家にずっと電話がつながらなかったので、様子を見に自転車で父と一緒に行った。二号線を通っていったのだが、西宮あたりから様相はかなりひどくなり、この時になってやっと大変だということに気付いた。母の実家についたのは午後6時ごろ、日も暮れてよくわからなかったが、家は一見つぶれていないように見えたのだが、両親の家が全壊し、母の実家にもたれかかっていた。このとき、親戚達には会えなかったが、探し回ってようやく1人見つけ、全員の無事を確認し、帰って来た。10時頃にいとこの家で夕食を食べ、家に戻ったのは10時半ごろ。途中、親戚中に連絡して、ポリタンク60個ぐらいの水と、大量のおにぎりなどをトラックに積み、再度芦屋に向かった。道路はかなり混んでおり、17日中にはつけなかった。次の日午前3時ごろにようやく到着して、祖父母達のいるという市役所に向かった。そこではとんどの積荷を下ろし、皆に会った。その後、ここでいろいろなことを手伝い、昼に家にむかって出発した。途中、忘れてきてしまってた眼鏡を取りに学校へ行き、そこでだいたいの状況を事務長さんから聞いた。家に着いたのは午後3時。それから友達に電話をかけたがほとんどつながらなく、4時すぎにようやくふとんに入ってねむった。次の日の昼にようやく起き、この日の午後11時ごろにもう一度いろいろな物を積んで芦屋に向かい、次の日の昼に帰ってきた。それ

からは家で退屈な日々をすごした。大阪はほぼ平常通りの生活に戻っていた。ちなみに1月17日は僕の誕生日。もし時間が2時間ほど遅かったら、誕生日に死んでいたかもしれない。日がたつにつれて、どんどんこの事が他人事にように感じられてゆく。

仲田　利樹　　西宮市甲陽園東山町

地震が起こった時、ぼくは自宅の2階のある自室で寝ていた。まず縦揺れで目が覚め、身を起こそうとした瞬間に激しい横揺れがきた。ベッドは前後に大きく動き、周りで物が落ちたり、割れたりする大きな音を聞いた。ぼくは、揺れがおさまるまでベッドの中にもぐってじっとして、揺れがおさまった後、“地震のときは大声を出さずに、机の下にもぐれ”という合言葉を思い出し、机の下にもぐってうずくまった。しばらくすると母が部屋に来て、ぼくの無事を確かめた。幸い家族は4人全員無事だった。父が懐中電灯をさがしてきて、とりあえず家の状況を調べることにした。下の階に行ってみると、キッチンとダイニングの食器はすべて落ちてこなごなに割れ、棚の上の小物はみんな倒れていた。その後、携帯ラジオをもって2階にもどりしばらく1つの部屋に集まってじっとすることにした。数分後、戸のすき間から日が差しこんできたので、雨戸を開けた。周辺の家は、門が倒れていたり、窓ガラスが割れたりしてとても驚いた。しかし、全壊した家はまったくなかった。我が家は、玄関のタイルが割れたりしていた。

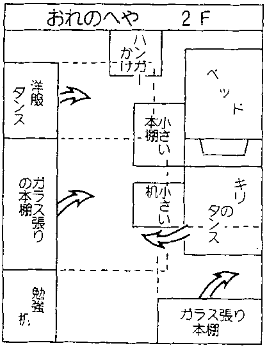
中部竜太郎　　豊中市上新田

5時46分、強い揺れがあり目が覚めた。しばらくして、大きな余震があった。その頃母親と妹は非常に大きな恐怖の為、かなりおびえていた。テレビをつけてみると、神戸の震度が6で、すごいことが起きたと思った。家の周りでは道に亀裂が入って、壁にひびがいっていた。自分が住んでるマンションは、3、4階の壁が最もぼろぼろだった。近くにいとこがマンションの10階に住んでいるのだが、見に行くと、廊下が水びたしになって、食器もほとんどわれていた。家に帰りテレビをみたら長田区のあたりがもえていた。そこで母親が「次は大阪に震度6が来る」と言い、近くのスーパーで水や食料や電池を買いこんできた。その日ごろから母は「京都へ行こう」といい出した。しかしその日は自分の家で寝た。次の日、地震による死者が二千人をこえるようになり、被害の大きさにおどろいた。その日の夕方、ついに京都へ行く事になった。京都へ向かう電車の中で一人のおじさんが読んでいる新聞に、次は震度8、と大きく書いてあった。たしかそれは大阪スポーツという、いつもいいかげんな事がかいてある新聞だ。それを見た母親はパニックになってしまい手が付けられなくなった。次の日、せっかく京都にきたのに、とつぜん母が「長崎のおばあちゃんの所へ行く」と言いだした。僕はやめろといったのに、結局行く事になった。長崎ではさすがにゆれなかった。2日後大阪に帰ってきた。その頃ぐらいからようやく母も落ちついてきた。これ以下はふつうの生活を送る。

永田　啓明　　西宮市川東町

その時間、僕は夢を見ていた。そしてその夢が、不気味な音と共に震れ出した。「なんや！？」と思っていると、ズズーン…とごっつい音がした。僕は、「なんや、地震か？」と思ったが、眠かったので、再び目をつぶった。再び夢が出て、心地よくなった頃、一階から、オヤジとオカンが「ヒロアキー、ノリコー（妹）、大丈夫かー！？」とドタドタ上がって来た。そして、僕が何事かなあと思って、ベッドのすぐ左手の机の上の電気スタンドをつけようと思った時、僕は何か、異変に気づいた。左手にさわったのは、本棚のようだった。僕は、まっくらで、メガネもどこかへふっ飛んだので、「ひどくめんどうな事になった。」と思っていると、親がライターの火を頼りに、スリッパを持ってきた。その火の光で、部屋を見回すと、タンス類が図の様に倒れていて、僕は「ベッドの上で寝てなかったら死んどった」と思い、ぞっとした。その時に我が家の、こういう非常事態に対する備えのなさに悲しくなった。懐中電灯の一本もなかったので、飛び散っているガラスをよけて、外に出てみると、異常にガスくさく、道がわれていた。車庫へ行って、車についている懐中電灯を持って、もう一度、家の中に入った。台所は10cm程、食器棚から飛び出た皿類で、ガレキの山ができていて、足の踏み場もなかった。それからしばらくすると、電気が通った。テレビを見ても、その頃は、死者の数も、大した事なかったし、僕の家の周りを見る限りでは、倒壊した家もなかったので、何か、非常にめずらしい体験をして、浮いた気持ちだった。その後、すぐに、オヤジと近くのファミリーマーケットまで、食料＆飲料物etc.を買い込みに行った。店内もごたごたで、ジュースか何かが、割れてニオイが充満していた。１時間程待って、一万円分ぐらい買って帰った。僕のうちには、井戸水があって、今回それが非常に役立った。そのおかげで、ウンコもちゃんとできた。

昼頃から、妹とオカンと１階の足場を戻す事に専念した。オヤジは、ウラの古いアパートが倒壊したとの事で、手伝いに行っていたが、何時間かかけて、四人の仏様を掘り出して来て戻ってきた時は、さすがに暗い顔をしていた。夕方から夜まで、はっきりした記憶はないが、まあ、ずっと家の片づけをしていたと思う。また、いろんな人から、電話がクサる程かかってきた。しかし、こっちから神戸の方へは全くかからなかったので、向こうの友達が非常に心配だった。暗くなったので、もう倒れる物がなくなって、かえって安全な自分の部屋へ戻って、ヘルメット・懐中電灯・電話をおいて、服のままで眠った。こんな具合で、17日は、あっと言う間に終わってしまった。



まあ、別に自分の周りでたいした不幸は起こらなかったのでよかった。それなりに、貴重な体験をしたと思う。

橋本　大輔　　神戸市兵庫区吉田町

自分は兵庫区の海辺で和田岬という辺に住んでいるが、そこら辺は兵庫区にしては被害の少ない方だったと思う。倒壊した家も少なくないが、家の壁にひびが入る程度のものが多かった。自分ちも築6年で、そこらでは新しい方の家だがひびが入った程度だった。しかし地震がきたときには、無茶苦茶びっくりした。まず蛍光灯が顔面に落ちてきて、その次にＣＤラジカセが自分の頭ギリギリに落ちてきた。けがはあまりなかったが真っ暗闇なので恐かった。暗い所では悪いことばかりを想像してしまうもので、屋根裏へ行く隠し階段が落ちてきたりしないだろうか。家が倒れたりしないかどうかなどといろんなことを考えてしまった。こんなことで死んでたまるかと思ったが、実は前夜から39度の熱が出て頭痛がしていて最悪のコンディションだった。

2時間後、電気がついて一階に降りてバファリンを飲みテレビを見ていたら、いつの間にか寝ていた。起きたら水がポリバケツに2杯とでっかい鍋にいっぱい水が入っていた。まあなんとか水には困らなかったが、食べ物に困った。その日に限って買いだめもなく、一日中腹がへってしょうがなかった。何もすることがなく暇なのでテレビを見るしかなかった。しかしそのテレビも午後6時頃に映らなくなってしまった。仕方なくラジオを聞いていたが、面白くなかった。とにかく地震当日は熱が出て頭が痛く、ボーッとしていたので何が何だかわからなかった。

翌日、窓の外を見たら家がまだ黒い煙に覆われていた。長田区の火事のようだった。気にしないことにした。その日はトイレに困った。小便大便はできるが、それを流すのに飲料水を使うのはもったいないので、自分はまだ頭が痛かったが、近くの公立中学のプールの水をくみに行った。その日の食料は、父の友達が明石からおにぎりを持って来てくれて助かった。その日以後の食料は、近くの中学の配給をもらってすました。今でも配給で暮らしている。

五日もたつと、落ち着いてきて学校のことが心配になった。学校は大丈夫らしいが、30日まで休校だということだった。うれしかったが、ただでさえ勉強のできない自分が、全国にあるいろんな進学校の生徒に離されていくようで、ちょっと心配だった。

今困っていることは、通学するのに4時間以上かかることである。

早川　公章　　神戸市垂水区美山台

地震が起きた後すぐに電話がかかってきた。祖父からだった。とりあえず無事を確認していた。こっちからの電話は通じないのが分かった。電話がかかってきて聞いてみると、いとこの家（須磨）が半壊しているということで父が見に行った。一応みんな無事だった。でもその辺りはひどかったらしい。夜には電気がついた。

林田　泰幸　　交野市郡津

地震の起こった時すでに起きていたが、たいした揺れじゃなかったし、電気、水道、ガスどれも平気だったので、テレビのニュースを見たあと、いつもどおり出発した。しかし、電車が点検のために２時間ほど止まっていたので、家に帰った。父と妹はいつもどおり会社と学校に行った。その後僕は一日中ニュースを見ていた。そして、学校が始まるまで、普通の休みと同じようにゆっくりすごしていた。しかし、テレビで見てるだけだったので、今回の地震は他人事にように感じてので、学校が始まって西宮に来てみると、その被害の大きさに非常におどろいた。

藤田　善宏　　大阪市淀川区田川北

僕はちょうど地震の前に目が覚め、まだ、朝早かったのでもうひと寝入りしようと、うとうとしかけていたら、“ドーン”とゆれがおこりました。これではっきり目が覚めましたが、大阪では縦揺れは小さかったようで僕としても“うわぁ”と思うぐらいでした。でも、横揺れによって本が落ちる音やガラスの割れる音がしてきたので少し怖くなり、上から物がふってきても大丈夫なように頭から布団をかぶりました。ゆれは長く、“これはすごいなあ”と思いながらはやくおさまるのを待っていました。揺れがおさまると同時に母親の“大丈夫かあ”という声が聞こえ、“大丈夫だ”と返事を返しました。ちょうどその時に電気が切れ、僕の寝ている２階へ、１階にいた両親が懐中電灯を持ってきてくれるのをしばらく待ちました。それで、部屋の様子が分かり、ちょうど入口の前、布団の足のほうに人形ケースのガラスの破片が散乱していました。変に動かなくて正解だったと幸運に思いました。後、１階で全員、ひとまず一緒になり、ラジオとろうそくを持ち出し、夜が明けるのを待ちました。途中、隣に住んでいるおばあちゃんのことを思い出し、お父さんが確認にいそいでいきましたが、災いにもそばのタンスが倒れなかったので助かっていました。電気がとまった時の気持ちは今でも忘れられません。１時間後、ガスと電気が回復しました。何かほっとするようなものを感じました。僕と弟はひとまず、テレビにはしりました。まだ情報が乏しいようでくわしく分かりませんでしたが、マグニチュード６ぐらいということを知り、やっぱりすごかったのだと再び感じました。何はともあれ、僕と弟は学校の用意をし、母は弁当を作りにいきました。また、この時点では水道も出ていなかったのですが、日頃から貯めている水が役に立ちました。そして、朝ごはんを食べていたのですが、しばらくして大きな余震がまた来ました。テレビの情報も集まってくるにつれ、学校どころではないと知り、ひとまず部屋をかたづけようと大そうじをはじめました。被害は、ビンが２つ、人形のガラスケースが２つ、あと、とうろうが倒れもう少しで部屋につっこんできそうなところまでとんでいました。おばあちゃんの家は瓦が１コずつ下にずれており道路に少し散らばっていた位か、僕の家と同じようにとうろうがこわれた程度でした。この一日は、大そうじとテレビにおわりました。後からテレビで知ったことですが神戸の被害の大き

さにはびっくりしました。僕の家は大阪でもかなり神戸よりですが、こんなにも違うのに、いかに自分が幸運であるかをしみじみと感じました。（まわりの被害なし）

古本　伸也　　尼崎市塚口本町

当日、大地震の初めのカタカタという音で目が覚めた。その後、大きな縦揺れを感じあわてて布団を頭からかぶった。そのうち横揺れになりいろんなものが体に落ちて来たが、恐怖で頭が真っ白になり、痛みも何も感じなかった。その後１階におじいちゃんとおばあちゃんが寝ていたので心配になり下りていった。懐中電灯の明かりで部屋をみると、金庫が落ちていてその近くにおじいちゃんがいた。間一髪、命をとりとめた。電気がつかないので行動がとれず、しばらく夜が明けるのをまった。７時少し前に電気がつきＴＶで状況を確かめた。とりあえず自分の部屋を片づけにいった。すると自分の布団の上には、地球儀・百科事典などが落ちていて、よく傷一つなく無事だったものだと思った。10時頃、家の近くに水が出るという話をきいて早速、父と兄と３人で水をもらいにいった。水はトイレ用と飲料用とがあったが、飲料用の水をカセットコンロで沸かしてみると、悪臭がして、とてものめるようなものではなかった。それから昼すぎ隣のおばちゃんが、小学校で飲める水が出ると教えてくれたので車で向かった。このとき余震で大きいのが来た時のためにと、懐中電灯を買った。帰りにはローソンに寄ったが、品物が減っていた。その隣にすし屋さんがあったので買って帰った。自分の家の周辺は倒れている家が１つだけで比較的被害が少なく、電気・ガスは当日、水は翌日には出た。中には被害のおそろしさがわかっていない小さな子供達が外で走りまわっていた。当日にある程度家は片づき、その日が過ぎた。翌日、余震をおそれてタンスなど固定をした。また瓦がこわれていてその片づけもした。いろいろスーパーなどもまわり買い出しにいった。この日からある程度普段の暮らしが出来るようになったが、地震の恐怖がぬけず、寝ている時も何か揺れている感じがした。学校にこれからどうなるか気になったので電話を何度も入れたが無駄だった。３日目には大工さんが来て屋根の修理をしたので一応手伝った。おじいちゃんがアパートを持っていたので、そっちの方にいってみるとまわりの壁が見事にはがれ、一番南側の柱が下がっていた。とりあえず雨が降ったらいけないので、シートをかぶすのを大工さんといっしょにやった。その日には家の中は完全にかたづいていて、大きな余震が来ないのを祈りつづけた。その後何ともなく日曜日が過ぎ、月曜日の朝、父は単身赴任で東京にもどるので兄が車で大阪空港へおくった。地震の影響で大渋滞で、普段30分でいけるところを２時間かかった。

細山田俊英　　西宮市大屋町

震災の１週間ほど前から変な習慣がついていて、午前６時ごろになるといつも目が覚めるようになっていた。あの日も例外なく目がさめていた。また前日には３月に始まるアマゴ釣り用に、蛍光ライトを押入れから机の中に移していた。机は枕元のすぐ横においてある。目がさめたので、「また目がさめたな、もう30分ぐらい寝ようか」と思った時、何かすごく嫌な感じと

いうか、まるで人に命令されて嫌な事をする直前のような感じがし、地鳴りがした。地鳴りと言っても我が家はマンションの1階で、地面から15メートルほどの高さにあり、地下には倉庫もあるので、鉄筋のきしむような、まるで水に濡れた窓ガラスをワイパーで拭き取る時にギューという音がするあの音がしたのだ。その瞬間、まるでチンドン屋が来たように、台所の食器は気持ちいいぐらいにガチャガチャと落ち書棚のガラスは割れ、中の本が落ちてきた。枕元の学習机には本棚が足りないので、1年前に三段の棚を上にのせ、それにギッシリ本がつまっていて、一度に顔に降ってきた。足もとには鏡台を置いており、その三面鏡は広がってパソコンの上に倒れかかった。鏡が割れたと思ったら幸運にも、モニターの上に前日着ていた厚いセーターがかけてあって、鏡台は無事だった。自分の体はまるでトランポリンの上のハリコのトラのように、立ち上がろうとしてもふり回されガタガタである。ようやく本震もおさまったので、学校に行くのに遅刻しそうだなと思ったが、誰も何も言わないので、まさか、と思った。父と母の部屋には20年前の巨大なステレオとカセットプレーヤーがあり、その上にはテレビとビデオがのっていた。母の横にはこれまた年代物のどでかいミシンがあり、不安になった。急いで、「大丈夫かー？」と叫ぶと父の声がした。「生きとるかー、ガラスが割れてるからフトンから出るなよー！」姉はひとまず「大丈夫！」と叫び「タンスとガラスケースが落ちてきた」と言った。これは学校に今日は行けないなと思い、少し嬉しくなって部屋の扉を全部開けた。なんと姉の部屋では、僕の部屋より恐ろしかった。姉の枕元のイスは倒れ、縮こまらなかったら足がつぶされていたであろう。タンスが完全に下にたおれていた。姉は瞬時に縮まっており、かろうじて助かっていた。しかし不吉なことに、フクサやジュズなどがタンスから飛び出して枕元に落ちていた。「気味悪いなあ」と思った時グラッと余震が来た。とっさの反応で柱のもとによった。夜が明けてきて、片付けていると悲惨である。人形は首がとれ、手は折れていた。玄関にはクツ箱が倒れていた。「これじゃあ、逃げる時も無理やな」と言った。その後すぐに電気が復旧した。その後の対策として、タンスやピアノ等は一部屋にまとめた。ガスについては10日程かかったので、会社の関係からカセットコンロやガスボンベを大量に持って来てもらい不自由しなかった。水については、トイレに流すのに、近くの井戸の水をくみに行った。飲料水は宝塚の方にポリタンクにくんできてもらったので、これも不自由しなかった。風呂は20リットルタンク約20本で一杯になるのには驚いた。地震があった時、父がすぐに風呂を洗い水を張っていたので、1週間ほどは水くみも必要なかった。震災後にまわりの建物を見てまわると、一階の駐車場等柱で支えている建造物は、ほとんどすべてたおれていた。

堀　敬輔　西宮市門戸東町

17日、寝ている最中に地震が来て、揺れが止まった時には、タンスと本とガラスの破片にうずもれていた。揺れが終わった時、姉が「お母さん」とさけび出した。そして、僕は、ふとんから出ようとすると、ガラスのこすれる音がするのに気付き、一人で出るのは危ないと悟り、父に助けを求めた。父と母は広い部屋に居たので、寝ている上に物は落ちてこなかったので、すぐ助け出してくれた。ふとんからでると、すごくほこりくさく感じた。そして、僕は父と懐

中電灯を求めて下におりようとしたが、スリッパが無いことに気付き、スリッパをさがしたが見つからなかった。仕様が無いからそのまま下に降りると、台所はぐちゃぐちゃ、壁にすえ付けてあった物入れも、壁からおち、そして、玄関も開かなかった。玄関の戸のガラスはすべて割れていた。玄関の戸をつぶして、外へ出てみると、門も石の塀も無かった。ぼう然としたが、最初は、軽く考えていた。しかし、そのうち日が出てくると、たいへんなことに気が付いた。家がかたむき、下の1階の窓ガラスがすべて割れていた。これは、もう住めないな、と思った。とにかく、寒いので、服をとってこようと思った。中へ入ると、ガラスだらけだ。注意深く入り、二階に上がろうとした。階段がかたむいていた。しかし、降りてこれたのだから安全だと思って、二階の自分の部屋に入った。壁がくずれ、サイドボードがたおれ、タンスがたおれ、僕のフトンは見えなかった。懐中電灯で照らすと、ガラスが光っている。確か、寝ている頭の方からサイドボードがたおれ、足の方からはタンスがたおれたはずだ。よくこんなので、助かったなと思った。自分の部屋の本などを土足でふむのがつらかった。そして長い日が続くのでした。

松田　良成　　大阪市北区同心

5：46　まどろみつつも、普段のものとは桁の違う地震であることに気づき、揺れがおさまったときにはねおきて服装をととのえた。

5：50～6：10ほど　ダイニングにいくと母親がいた。テレビをつけながら、キッチンで物が落ちないようガムテープなどでとめた。ガス、水道の確認、水道が一時的であったがとまっていたので急いでサンチェーンに行った。人は皆、普段と同じように生活していて、あまり被害のほどの様子を感じなかったので、ペットボトル2本とポカリスエット粉末5袋ほどを買って帰った。

6：15　緊急の時のための準備を押入れから取り出し、電池、粉末などを取り換えておいた。

様子が平生通りなので安心し、電車が不通となっていると聞き、学校もないだろうと思い、もう一度寝た。寝る前に電話をかけたが通じなかった。

10：00ごろ　目を覚ますと、淡路島あたりの直下型地震であるということが放送されていた。死者293人、少なかったのを安心した。その頃大阪でこんなにもひどいことになると思っていた人は極わずかだったろうと思う。

11：00ごろ　周囲の様子を見てまわった。ひびの入っている建物はなし。地割れも2cmでひどい方だった。

1：00ごろ　家に帰ると死者は500数人に増えていた。被害の模様を放映していたので見ると予想外にひどかったので、もう一度サンチェーンなど数店をまわったが、ペットボトル・カンパンなどが売り切れていた。電話を再度かけたが不通ばかりだった。

2：00～　落着いたのでトランペットの練習ばかりした。

その週の金曜　被害状況がはっきりしてきたので、リンゴを持って自転車で高校まで行った。

甲子園あたりはそんなにひどくなかったが、西宮に入っていくと次第にひどくなってきた。

芦屋に寄ってみると一気にひどくなりたくさんの人が水をくみにいっていた。

水野　博章　　神戸市垂水区塩屋北町

縦揺れの時は部屋はなんともなかったが、横揺れで、机や棚がすべて倒れてきた。3時間後、電気がつくまでは家族4人でじっとしていて、電気がついてから部屋を各自でかたづけたが、1日かかった。家族が、その夜はいっしょに寝ようといったので同じ部屋にいたが、火事が須磨のあたりまできていたので、すぐ避難できるように、荷物をまとめて、ずっとテレビを見ていたので、一睡もできなかった。次の日の朝、水をくみに須磨の冷泉にいったが、まわりの家はつぶれまくって、火事がまだおきていて、水どころではなかった。

御手洗　聡　　宝塚市売布きよしが丘

5時46分に揺れを感じたのだが、その時は布団にしがみついていたみたいな感じで、とりあえずラジオをつけようと思って手を伸ばしたがつかずにパニック。それからは懐中電灯を見つけた。うちは石油ストーブなので火ついたので、家族全員がその前で早朝をすごした。

7時ごろになるとぼくはとりあえず近所を回ってみたところ、あまりまわりには被害がなく、あったとしても壁にひびが入ったり車庫が開かないぐらいのものである。人が死んだとかケガをしたとかいうのは聞かなかった。

昼からは余震を感じながらも、うちは山の上の方なのでとりあえず上に登り、そこにあるわき水をとりに行くことにした。そこでは水がいつも通りにあり、ペットボトル7本分の水を持って帰ってきた。

それから夕方まではとりあえず家のそうじをし、6時ぐらいにはまっ暗で何も見えなかった。そこでろうそくを使用してとりあえず灯りはあった。もう今から寝ようかなという時には、時計は6時半を指しており、その時に電気が通ってめちゃ感激した。

その次の日から父は仕事へ行き、帰ってくる時に京都の方でそうざいをたくさん買ってきたので食料には困るどころか、いつもよりリッチなような気がした。ぼくの家は給水車ではなく、ちょっと下に降りて行けば浄水場があり、そこから水はいくらでもとれるようになった。

次の日からは普段のくらしに戻り、水は2月1日になって通ったが、ガスはまだ来ていません。

光井　俊人　　西宮市今津久寿川町

地震のおこった時刻のちょっと前、僕は半分寝ぼけて起きようとしていた。そして、そのとき、「ゴー」はいう音とともに、これまでに経験したことのない激しい揺れを感じたのだった。そして、とりあえず、弟の安否を気づかい、弟の無事を確認した。そして、次に、母・妹・祖母の無事を確認した。父はこのとき、うまい具合に、信州の方へ旅行へ行っていた。そして、

家族皆で不安をいだきながら、一階でじっとしていた。すると、隣に住んでいるおじさんが、僕らのことを心配して、家にきてくださった。そして、僕は、家の周辺はどうなっているのだろうと思い見にいくと、3軒離れた所で、二階が、そのまま前の道路へ落ちているのを発見した。そして、うわさに、43号線の上の高速道路がおちているということをきいて、それを見にいった。これまでに見たことのない光景であったので驚きを感じた。そして、日が昇ってきてから、家のかたづけをしようと思ったが、どこから手をつけていいか全く分からなかったので、とりあえず、母や祖母のいうとおりにタンスをあげたりした。タンスの上にあった、大和人形の入ったガラスケースなどは、すべておちてわれていた。そして、食器もほとんど飛び出て割れていたのだが、他の人と比べれば、まだまだたいしたことではなかった。そして、自分の部屋をかたづけようと思いドアをひらくと、本棚が一つたおれているだけで、後は、いつもと同じではないかと思い、たいしたかたづけもしなかった。水が出なかったので、割れた水道管から吹き出している水をくみにいった。周りの家の塀は、ほとんどたおれていた。その日はまだガスが出ていたので、たいして食事に困りはしなかった。しかし、まだ大きな余震の心配があったので、その日は、皆で、こたつの中でねむった。ところで、この日、旅行に行っていた父は、朝一番に電話してきて、帰るといってきたのだった。

森　理俊　大阪市西区南堀江

起きた時には、もうすでに地震がおさまりかけていた。まわりを見まわすと、本棚の上にあった本が数冊ちらばっていた。と共に、外では、はげしく非常ベルがなっていた。部屋の外に出て、まっさきにテレビをつけた。食卓の側の食器棚の前には、決して美しいとはいえないガラスの破片の海が出来ていた。なかに、原形をとどめている物があるだけに、不調和であるともいえた。はじめに、家族でそのガラスの破片をかたづける作業に入った。その中に、極めて高価な物や思い出が込められた物も数多くあり、「いろいろな事を思い出す」と母が言っていたのを、今も覚えている。その後、朝食をとったり、友人と学校についての電話のやりとりをしていると、テレビで次第に被害の状況がわかってきた。そして、様子を見に外へ自転車に乗って出かけた。しかし、外はつとめて平穏無事で、心斎橋の百貨店のショーウィンドウの1つが内がわの物があたって、われていたぐらいであった。目についたのは、地下鉄の不通で、御堂筋をひっきりなしに南へTAXIが向かっていることだった。また、歩いている人が非常に多かったのも目に付いた。当日の自分の行動はそれだけだったが、父は梅田の事務所へ出かけて行った。事務所のスチールの棚が3つ倒れていただけで、木の本棚等は被害はなかったようだ。数日して、被災地へ、物をもって幾度か行った。JRで甲子園の方へ行ったり、中学の時の先生の引っこし手伝い等をしたが、身の回りの人に被害が無かったのは、幸せといえよう。大阪に住んでいたのでたいした被害を受けなかったが、被害を受けた方々への自粛の行動が大阪で多かったのは、当然とも言えるが、ほめられるべきものだと思う。

安井　博宣　　宝塚市御殿山

1月17日5時30分頃に目覚まし時計がけたたましくなりあわてて消す。同時にセットしておいたFM放送が流れ出す。それを聞きながらまだ少しうとうとしていた。そして起きようとした時、ドォーンと音がして体が浮き上がるような気がした。その時、FMがブチッときれ暖房ファンヒーターも消えた。そして横揺れが十秒ほど続くが、もういろんな音がした。頭の上にカセットテープが落ちて来た。その十秒程の間、3階に大量の物が置いてあるので、天井が落ちたとその時思った。自分の部屋は12月に増築した所なので、自分が死ぬという事は考えてなかった。それよりも自分以外の家族が死に、孤児になったという事を考えていたような気がする。その時ドアがあいて、兄が顔を出し、とにかく下に下りようとしたが、真っ暗で懐中電灯をさがしていた。父が一つだけ持っていたので下におりた。

そこに家族全員が集まった。兄はもう起きていてストーブもついていたし、火も使ったいたらしい。床にはもういろんな物がおちていた。タンスの上の人形ケースは、人形だけおちてケースはもとのままだった。その外にも皿、兄の食べかけたマヨネーズをかけたキャベツ、電話、そしてとなりの部屋はテレビもおちていた。うちで飼っていた文鳥・インコは兄によると、いつも通りに鳴いていて地震が起こってだまっていたらしい。この事で飼い鳥は役に立たない事が分かった。そんなこんなで6時半に母が出勤した。その15分後に僕も駅までおりてみた。

自分の住んでいる小林住宅の地域は、どの家も15年たつのに無キズだった。しかし中国道のトンネルを抜けるとそこはすごかった。かわらは全ておちていて家がなかった。きれいにつぶれていた。その時母が下からあがってきて、阪急は電気が付いていないし、JRは動いていないと言ったので家に帰った。ラジオの朝日放送を聞き、後かたづけをしていた。たしか12時頃まで死者の発表は5、6人だったようだ。電気、水は来ず、電話もかけられなかった。

駅まで行ったせいか、熱が出て4時まで2階で休んでいた。5時頃下におりると電気がついていた。その日はパンを食べただけだった。余震が何度かあった。

山田　秀樹　　西宮市南昭和町

1月17日、目が覚めた時間は5時40分過ぎだった。風邪が治りかけたので今日は学校に行かないといけないと思っていると、小さくゴゴゴ…と鳴ったような気がした。そして、急に激しい揺れがおそった。しかしこの時は妙に落ち着いていて、安全なようにふとんを頭にかぶってじっとしていた。この時想ったことは、家はプレハブだからつぶれないだろうし、自分の部屋には危険物がないから自分は大丈夫だろうということだけだった。地震がおさまったが部屋の電気が消えていたので、しばらく部屋でじっとしておこうと思った。枕のとなりにウォークマンを置いているのでそれでラジオをきいてみると、神戸震度6…とニュースが流れていた。しばらくして父が「いつまで寝てる」と言ってきたので、しぶしぶ起き出すことにした。スリッパをはいて部屋から出ようとしたが、何かにつっかえて出ることがなかなか出来なかった。後

で見てみるとタンスの扉だけがはずれて倒れていたものだった。ちゃちな家具でよかったと思った。夜が白みはじめて1階に下りて雨戸を開けると、東向かいの木造の少し古い家がくずれかかっていた。南向かいと北向かいの家もくずれかかっていたようであった。父は外へ行って救出作業を手伝っていたが、自分はまだ風邪気味でせきがぶりかえしてきたので、こたつにこもっていた。電気は地震後1、2時間でついた。父だけ救出作業に行って、自分はこたつにこもるのも申し分ないと思ったが、この時は少し利己的になっていたような気がする。9時くらいになってゴゴゴゴ…という音がしたので外を見ると、東向かいの家が沈んでいくように見えた。となりの家はついに全壊してしまった。おばあさんが1人閉じこめられてしまったようである。近所の人が何とかしようとしていたが、近付くのはあまりに危険な状態である、そのおばあさんは亡くなってしまったようである。しばらくしてテレビをつけると地震情報が出ていたので見てみると、壊滅したのは神戸の方であって、大阪は大丈夫であると聞いて少しホッとした。この二大都市が壊滅してしまっては、永久に地震前の活発な姿を取り戻すことはできないだろうと思った。この日は一日中、となりのマンションに住む祖母の部屋と自分の家のそうじに明け暮れた。祖母の部屋は食器が大量に、割れセメント袋7袋くらいにも上った。妹の部屋ではタンスの上に置いていた木製の棚が落ちて、もう少しで妹にあたるところであった。廊下にあった本棚も倒れて本が全て飛び出していた。だが自分の部屋だけはほぼ5分で復旧してしまった。少し外を見に行くと木造の家はほとんどつぶれていた。その日の午後にいとこがうちに来た。いとこから夙川沿いはぼろぼろであることを聞いた。その2日後には阪急梅田一西宮北口が復旧したというので父といっしょに買い出しに行くと、西宮で山口先生にあった。風邪で休んでいて追試を受けていないので少しあせったが、そんなことは言われず友達がどうなったかを聞いてきた。梅田に着くと、西宮とあまりに様子が違うのでおどろいた。そこで食べ物やウェットティッシュなどを買ったが、西宮に帰る気にはとてもならなかった。テレビなどではこの地震で人間の優しさを知ったということばかり言っているが、自分は逆で人間の利己心をかなり見せつけられた。そのことはあまり書きたくないので省かせてもらうことにする。あとこの地震で学んだことは水の大切さである。うちにはまだ水道が来ておらず、毎日、台車を引いて給水車のところに行っている。一刻も早く復旧して、逸速く国際都市神戸の姿を見れることを願う。

山本　正男　　尼崎市南塚口町

うちの家は14階建ての9階だったので、揺れは相当ひどかったように思う。幸いにも、ぼくの部屋のたんすはたおれなかったので、けがはなかった。母が、タンスがたおれてきて、少しけがをした程度ですんだのは不幸中の幸いだった。家の中は惨憺たるもので、食器類はほぼ全滅であった。地震直後は余震の恐れがあったので、家族4人で、物がたおれてこない家の中でじっとしていた。マンションのとなりの方が、懐中電灯をもっていたので、それを少し借りてきて、衣服をとりだしてきて着がえた。わが家にも懐中電灯はあったのだが、電池がなくて、くさっていてつかなかった。地震がおさまったのが5時46分だったので、しばらくすると、明

るくなってきた。明るくなると元気も出てきたので、家の中のかたづけをはじめた。ぼくの部屋は、本やいろいろなものがゴチャゴチャになっており、足のふみ場もないほどだった。かたづけをしている時、大きな余震があったが、それはなんともなかった。その後しばらくすると電気がつき、テレビが見れた。それまでは、ラジオで聞いていたのだが、テレビがついたのは本当にうれしかった。窓の外を見ると、古い家の中にはつぶれている家もあり、木造住宅は瓦がほとんどの家でおちていた。さらに、何ヶ所かで煙があがっており、火事もおきていたようだ。おちついて地震のことを思いかえしてみると、最初にドーンという音がした。その後、揺れはじめた。ぼくは音でハッキリと目がさめたので、その後の様子ははっきり覚えている。下からつき上げられるような感じがして、その後左右に揺れはじめた。ぼくは本だなから本がおちてくるのをはっきりと覚えている。父は両親が、神戸にすんでいるので心配していたようだ。ぼくは兄とともに、水などを買いにでかけた。どこに行ってもなかったのだが、最後に酒屋のシャッターが少し開いていたので中に入ると3本ほど売ってくれた。酒屋の中はビールなどがわれて、破片だらけで、ものすごい酒のにおいが、漂っていた。水や乾電池や食糧などをあちこち行って買って、家に帰った。マンションのエレベーターが動かなかったのでしんどかった。水道はとまっていたのだが、マンションの貯水槽に水がためられていたため、汚い水だったが一応でた。その日はガスは出なかったが、次の日には出た。窓の外の煙は、昼ごろになるころには、だいたいなくなっていた。うちのまわりには、つぶれた家もあったが、だいたいは、ひびが入ったり、瓦がおちていたぐらいですんでいた。うちのマンションにも少しひびが入っていたがなんともなかった。昼になると父は、仕事かなにかで出かけていった。残りの家族3人で家のかたづけをした。うちのマンションでは、けがをした人はいたようだが、みんな無事のようだった。その日はテレビを見ながらかたづけをしておわったように思う。夜になるとぼくのタンスがたおれてこないところで寝たのだが、緊張と不安であまり眠れなかった。友達と連絡をとりたかったが、電話は通じなかった。2日目になるとだいぶおちついていた。コンビニは売るものがないというはりがみがあってしまっていた。しかし、食糧は、ダイエーがあいていたためになんとかなった。3日目には、西宮の知り合いのために、ポリバケツをあちこちさがして買ったり、神戸の親戚のためにもいろいろなものをかいにいった。たった1軒あいていた近くの銭湯は、すごい混雑だった。4日目ぐらいからはおちついて学校に連絡をして、家でテレビを見ていた。その後は、べつに何ごともなく、暮していけた。

吉田　大介　　神戸市垂水区つつじが丘

地震がおきた時は、目をさましてふとんの中で揺れがおさまるまでいた。下におりてみると、電気が通ってなかっので、とにかく情報を知るために、車に乗ってラジオをつけた。家のまわりはたいしてくずれていなかった。1時間ぐらいして、またふとんに入って昼すぎまでねた。起きたらテレビをつけていたので、それをずっと見ていた。父と兄が長田区にすんでいる、親せきの様子を見にいくといって自転車で見に行った。自分は、ずっとテレビを見ていた。電話を友達の家にかけたがつながらなかった。二日目は、一日中家にいたが兄が願書を出しに、明

石の方まで自転車で行った。父は会社に自転車でいった。三日目ぐらいに友達と三宮まで自転車で行った。二号線は救援物資を運ぶ人や車だらけだった。長田につくと鼻をつくにおいがした。三宮までいって学校に無事だと連絡をいれた。公衆電話からかけたが、カードの度数はへらなかった。ファミコンのカセットを買うために、自転車であちこちいったりもした。

渡辺　力也　　大阪市西淀川区佃

5時46分に地震が起こる。本だなの上の花びんなどが足の上に落ちてきたり、机の上のものが落ちまくって散らかった。ペンライトしかなく、メガネをさがすのに苦労した。姉が血相を変えて、両親の寝室に飛びこんでいった。さらに、約1時間ほど停電し、電池を使って、ラジオを聞き情報を聞いた。電気がつくようになってから割れた食器を片づけたりした。その日はずっとテレビを見て情報を聞いていた。居住地周辺は、2号線をこえたところへ行くと、道路が陥没してたりして、大阪にしては被害のあるほうだなと思った。地割れも多く、マンションの入口では、2～3センチ段差ができていた。家族の話によると、ガスくさいところもあったそうだ。家族は、僕を除いて急に地震に敏感になり、地震の備えもし始めた。何日かたつと、2号線はかなり混んでいてバイクまでもが歩道を走っていた。特に僕の住んでいる地域は、兵庫県に一番近いので影響がかなりあった。

麻尾　幸司　　(震災当時)　宝塚市清荒神
(現　　在)　川西市萩原

1／17　午前5時46分兵庫県南部地震起こる。寝ていた私はつきあげられて布団をかぶる。横に揺れが続く。南北に揺れたような気がする。よこで寝ていた親父がたおれてくるタンスを支えてくれる。しかし、ひきだしが私の上にふる。動けない。揺れがやっとおさまる。ひき出しの下じきになって動けない。親父と弟が助けてくれる。母は台所の水屋がたおれたために身動きがとれないが、無傷。少し安心。本だな・コンポ・タンス・テレビ、みなこけている。はりもおち、雨戸がひきさかれている。まどのわくはゆがみ、ガラスなんぞ1枚ものこっていないような状態。外に出る。明るくなってくると、前のアパートがへしゃげかかっている。家にもどり、とりあえずタンス等をおこし、教科書と漫画を集める。足場がようやくできる。いらないもの、こわれたものを外にだし、少しきぎれいにしていると、もう夕方である。安倉のおじの家が無事なので、寝させてもらいにいく。サイレンと余震でねむれない。浅い眠りにしかつけなかった。

1／18　祖父の家の壁がタンスごと外におちているのをみてびっくりする。家に帰り、北側にまわると、地割れがおきていて、がけがくずれている。壁もぼろぼろになっている。水屋をようやくおこす。すごい音とともに皿がわれる。しかし、思った以上に残っていて、ほっとする。ふとみると、台所の床が3cmほど北へ傾いていることに気づく。教科書をいつでも持ちだせるようにかばんにつめる。その中にひそかに漫画もいれる。ゴミステーションには、ゴミの山ができる。ゴミ収集の人が、分けろといった。そんな余裕あるかとおこってみるが規則は規則、

しぶしぶ生ゴミ（もえるゴミ）だけほりだす。前のアパートからもぞくぞくと避難していく人がいる。皆大変だ。雨にそなえて家と祖父の家にシートをかける。この日はつかれて熟睡してしまった。
（日時未詳）引っ越し先がみつかる。あわてて荷物の整理。おじやおばも大勢きてくれる。ありがたい。水とおにぎりを、ベガホールまでとりにいく。避難者が多数いる。家がみつかった自分を少し申し訳なく思うが、遠慮なくおにぎりをもらう。こっちだって食べるものはないのだから……。
（日時未詳）朝、おじの家に、水がもれていると連絡が入り、あわてて家に行く。なるほど、玄関は水びたしであった。おそらくトイレにつうじているパイプがやられたのだと思う。止水栓で水をとめる。
（居住地周辺）水・ガス・電気すべて来ない。家屋半壊の家多数。がけくずれ・地割れも多数。鳥居・とうろう・土壁の倒壊多数。清荒神での死者は３名。（しかし増えているかも）電車の脱線。（大事にいたることはなし）
（自己及び家族の行動）親父は、私と弟を助けようとしてたちあがるが、たおれてくるタンスで頭をうつ。それが結果的に私を助けたことになるが、弟の所までいけず、不安だったという。母は水屋にしがみついてそのまま倒れたという。弟は寝ていたという。

有田　英之　　宝塚市中山桜台

自分の部屋で眠っている時に地震がおきてはっと目を覚ました。おさまると、親が１階におりてくるように言ったが、家がくずれて潰されろというのか、と考えながら自分の部屋の中を見ると、下の方にしか本を入れていなかったせいか、棚は全然倒れていなかったので、安心して一階におりた。そして家族と一緒に懐中電灯を探すのに大騒ぎしていると、飼い犬が散歩に連れていってもらえると思ったのか、喜んでいた。この時、地震・雷・火事・親父の、火事以外のものに対しては何にも気にしない馬鹿犬ということがはっきりした。しばらくして、父が車のラジオを聞きに行くと、東海地方で地震という意味のわからないことが言われていたらしい。関西地方の地震はそこまで珍しいものだったのだろうか。７時半頃、父がローソンへ行くと、電池や食料がほとんどなかったらしい。どこかのおばさんが買いまくったのだろう。オバタリアンパワーとはすごいものだ。明るくなり、家の外へ出てみると、中はあまり荒れていない我が家も、外から見るとヒビがいっぱいあった。でも他の家はほとんどない。外でいろいろ見ていると、母と隣りのおばあさんが話していて、それを聞いていると、その家の食器棚などが倒れまくっているという。我が家の方が古いので、耐震の仕組みがちがうのだろう。その後夕方４時頃、電気が復旧。しかし、ガスもれのせいで、その頃は、ガスが使えなくなった。次の日には、地震の日には水が出たのに、水が出ない。だが、その日の夜、父が買ってきた物はトイレットペーパーと、レトルトパックの食品、そしてパンだった。大阪の方に仕事場があるのに、ろくなものを買ってこない。それに比べて、その次の日に、千里に住むおばの買ってきたものは、うなぎやすし、コロッケやカツなど、ありがたいものばかりだった。情けない。そ

れから、数日後、水が出るようになった。その日、宝塚市の逆瀬川に住む、祖父の家に水を持っていった。また、その日には、ガスボンベを多く入手。２ヶ月ぐらい分である。なぜ、そこまで買う？父に言いたい。１月28日に、ガスは復旧した。だれか、余ったガスボンベをもっていってくれ！

井狩　弥彦　　芦屋市翠ヶ丘町

地震の起こる約６分前ほどから僕は起きていました。電気をつけて本を読んでいました。何となく目が覚めたので…。そして、本を読み、ページをめくったその時に地震が起こりました。起こった時は、あんなにすごいのかがわからなかったので、とりあえず電気を消してふとんにもぐりこみました（母はすぐ目が覚めるので、起きていたことがバレると思ったのです。ちなみにそれで少し怒られたことがある）。変に冷静でした。

とりあえず、第一回目の地震が終わったら、すぐにドアを開けて廊下に出ました。自分の枕元の近くに本棚があったので危ないと思ったのです。その後、２、３度揺れたあと、とりあえず姉、父母の無事を確認した後、居間へ行き、少しでも明るくしようと（電気が通じなかったので真っ暗闇でした）カーテンを全開にし、その明りの中で外に出ていた小鳥をカゴにもどし、そのカゴを床に置きました。それから、ラジオを聞き、懐中電灯を見つけ出して、それを１人１つで持たせて、貴重品をもって明るくなるまで待とうと思いました。明るくなってから、被害を見ました。とりあえず台所から食物をとっておいて、何をするともなしにいると、電気が戻ったのでテレビをつけました。

しばらくしてから、祖父母の家を自転車で見に行きました。自分の所のマンションは、どうにもなっていませんでした（昨年の夏に建ったばかり）から、あまりすさまじくはないと思っていたら、あちこち道は陥没、隆起して、古い家が、全半壊していました。大丈夫かととりあえず夙川の祖母の家に行くと、すぐ前の道は、家が全壊していて向こうが見えませんでした。回って行くと、祖母の家は壁がとれていました（はがれたのではありません、壁そのものがとれて、中が見える状態でした）。しかしとりあえず無事で、おじさんもいたので、次は母方の甲香園の祖母の家へ行きました。その家も新しかったので無事でした。

その後家に帰ってからはずっとテレビ（NHKですよ、もちろん）を見ていました。

その後の日はだいたい似たようなものでした。テレビを見、電話がかかってくるのを待ち、水をくみに行き、行ける所ならば先生や友達の家を見に行ったりしました。

衛藤　将生　　大阪市淀川区西宮原

僕は大阪の15階建てのマンションの15階に住んでいる。僕はその朝早く起きて美術の宿題を仕上げて、又30分くらい眠ろうと思ってふとんをかぶった時にちょうど地震が起きた。これは動いた方が危ないだろうと思ったので、頭の上にある蛍光灯が落ちたらいけないと思いふとんを頭までかぶった。地震が続く中、僕の上に何かが落ちたり、母の悲鳴が聞こえたりした。地

震が止まると、僕はまわりを見たがほとんど何も見えなかった。しかし、蛍光灯がぐるぐる回転しているのが分かったので恐る恐る止めた。そして、父の大丈夫かという問いかけに答えて、ベットを下りようとしたが、物置きがベッドにたおれかかっていた。物置きを起こして、物置きから落ちた本の上を歩いて、自分の部屋を出た。余震が来るかもしれないので廊下で２、３分待った。それから電気がつかなかったので、懐中電灯とウォークマンを持ってきて、ウォークマンでラジオを聞いた。しばらくして、見回りに人が来て、電気がついた。居間に出てみると食器やガラスが散乱していた。テレビをつけて、あらためてこの地震の大きさを思い知らされた。ガスの安全装置を解除して、祖父の家は神戸なので心配して電話をかけたが、もちろんかからなかった。そしてその日は一日中、家の掃除で終わった。

大前　友嗣　　神戸市北区広陵町

1995年１月17日午前５時46分、僕はまだベッドの上で深く寝入っていた。と、突然ベッドが下から何かに突き上げられたかと思うと、「パリパリ、ベキベキ」と家具や、ガラス窓が音をたてて、激しい横揺れにベッドが揺らされ、本棚から本はとびでてくるし、ラジカセがおちてきてトロフィーが飛んでくるし…。すぐさま家中の電気が「ピー」という音とともに消え、外の街灯も何もかもまっ暗になったのだ。僕はスリッパをすぐ手にとり足にはき足元を確かめ、毛布だけ手にもち机の下に何とか隠れた。その間にも揺れはおさまらず、家中がギシギシと音をたて、母親と弟の叫び声がきこえてくる。父親は週のはじめなので、単身赴任先にもう向かったのであろうか？ガスはつけていないか？火事は？いろいろ考えはじめてしまい、もうパニックだった。兵庫県に地震などあるはずないと思っていたので、日本中が沈んだんだと思った。足はガクガクふるえ、目はつぶっているのかあいているのかもわからず、まっ暗で、ラジオをつけようにも電気がきていない。母親が叫ぶ「揺れ返しがくるから、机の下へ行きなさい！！スリッパははいた！？」弟は「恐いー。死ぬー。」と泣き声である。どうやら父はもう出発したようだ。無事だろうか？いろいろ考えながらふるえているともう泣きそうになってきた。この間にもガラスの割れる音やいろいろつぶれる音がやまない。ふるえがとまらない…。

やっと揺れがおちついた。しかし暗くて下手に動くとガラスなどがちらばっていて危ない。「大丈夫か？」とその時父がもどってきた。無事だったらしい。「おやじのところへ行ってくる。」と父は近所の祖父の家に向かった。僕はマッチをさがして何とか辺りが見えた。何ていうことだろう。ベッドはまるで違う向きをむいており、椅子は部屋のはしに、本なんかは足元につみかさなっていて、ガラスはとびちり…。寒さと恐怖でまだふるえていた。

落ちつきをとりどもし日が昇った午後、少しずつ片づけはじめた。といっても足のふみ場をつくったという位で、後はガラスだけバケツに集めたくらいだ。とにかく寒いので家族４人で毛布にくるまり、携帯用のラジオに耳をかたむけていた。夕方になると電気がついた。水も出る。ガスも出る。水はしかし汚いようなさびのような赤い水だった。テレビがつくので、見てみると震源地は淡路ではないか。とてもおどろいて、みんな茫然としていた。その時電話がなって、僕がとるとそれは母方の祖母だった。「家がつぶれてしもた。一史が下じきになってし

もた。」というのである。一史というのは僕のおじで片手が不自由だった。しかし後に助けられたらしかった。それより祖母の家が半壊だというので、父と母は兵庫区のつぶれた家に迎えに行き僕と弟は父方の祖父母のところへ行った。父方の祖父宅はコンクリート製だったので、そのゆれは木造のそれとはまたちがっていたらしい。祖父は通勤のため和式トイレでしゃがんでいたらしい。すると前からエアバックのようなものにおされたようにして後ろへこけてしまったらしい。それにはさすがに笑ってしまった。その日はそのまま祖父宅と自宅の片づけと補強に終わった。

大森　信介　　伊丹市大野

午前5時45分ごろ、浅い眠りについていたころ激しい揺れを感じた。自分は縦の揺れは感じなかった。揺れはだんだんと激しさを増して、ベッドの横にあった本棚に置いてあった物が頭に落ちて来た。実にこわかった。家族は皆、寝ていたが、次々と起き出してきた。居間に入るとテレビやらステレオやらが棚から落ちていた。台所は食器棚が倒れて食器が散乱し、すぐには入れない状況であった。地震当時は、停電で水も出なかったが、しばらくすると電気もつき水も出るようになった。今日学校へ行ったら皆この話でもちきりだろうな、と思っていた。しかし、テレビやラジオをつけると震度は6だとか7だとか言っていて、東京でも震度1も記録されている。次に聞いたのは伊丹駅が崩壊したということである。これで今日は学校へは行けないな、と思っていた。まだその時は、笑っていられた。しかし、神戸市長田区の燃えさかる家々を見ると、地震の規模の大きさに驚き、背筋がぞっとする思いであった。こんなにすごい地震であったとは思わなかった。テレビは、また強い余震が来るかもしれないので警戒して下さい、と伝えている。これでもうかなりびびってしまった。また地震が来たらどうしよう、ということで頭はいっぱいであった。が、父は冷静であった。水が出るうちに浴そうに水を貯めさせ、自分は診療所へと自転車を飛ばした。（父は開業医である）昼になると水はとまってしまった。昼は、家にあった冷凍食品と炊いたごはんを食べた。ちょっと落ち着くと、食料の買い出しに走った。スーパーは同じ事を考えている人達で列ができていた。しかたなくちょっとはずれた所にあるコンビニで、冷凍のギョウザとカップラーメンを買って、酒屋でボトルのジュースを買った。酒屋はとても酒くさかった。近くの八百屋はこんな時に商売根性をわかせて、普段の2倍近い値で野菜を売っていた。それでも買っている人は多かった。こんな店はすぐつぶれるだろうな、と思った。家に帰っても何もする気が起こらずテレビを見ていた。何日だったか忘れたが、神戸のどこかの惣菜屋で、店にあった物を店先に出して、被災した人達に、「どんどん持っていってやー。困った時はお互い様やで。」と言って、配っている店のおばちゃんがテレビに写っていたのを見て、感動した。地震から何日かたったある日、いきなり、大沢と眞鍋と小出がはるばる豊中から自転車で家までやって来てくれた。台風のように部屋を荒して帰っていったが、それでも楽しかった。とても元気づけられた。

岡本　真一　　西宮市神園町

僕はその日　午前3時ごろに、眠りについて、熟睡していた時に、午前5時46分に、地震が起こった。しかし、あまりに熟睡していたために、目が覚めなかったが、頭上に、本棚が落下してきて、はじめて目が覚めた。その時、すでに停電であたりはまっくらでなにも見えないのに、まだ地面がゆれていたので、僕は、かつてない恐怖におそわれた。あの時のことは、一生忘れないと思う。しかし、余震が弱まってからすぐに外はどうなっているかという興味がわき、懐中電灯をもって外に出た。すると、辺り一面ガスのにおいがしており、一階にあるガレージの中では、酒が30本ほどわれまくって、バイクからガソリンがもれてすごいにおいがしていた。だから、少しの間外の様子を見たあと、またすぐ家にもどってまず家族で電気がつくまで、懐中電灯で、居間に散乱したガラスの破片などをかたづけた。電気がついたので、今どうなっているのか、家族でずっとテレビを見ていた。すると思っていたより、被害が大きいので、おどろいた。そしてまた余震がくるかもしれないとテレビで言っていたので、とりあえず、それに備えてガムテープではったりした。その日は、まだなんとか、食料と水があったので、だれも外に出ずに家でくらした。夜ねるときには、また落ちてきたらこまるので、頭の上にクッションをおいてねた。

次の日、ローソンに行ってみると、物資がないためしまっていた。また、父親は仕事があるため、大阪にバイクで出かけて行った。僕はその日は家をかたづけて、近くにあるわき水をトイレ用にくみに行った。そして、夜になって父親が、大量に物資を、大阪から買ってきたので、その時は、本当にうれしかった。

三日目、弟が学校から電話がかかってきて、べつに学校は、なんともなっていないと言ってきたので、大阪にある中学校に、自転車で、西宮北口まで行き、そこから電車で通うことになった。僕は、近くにいる西原君といっしょに自転車で、近くの様子を見るついでに、いろいろなローソンをまわってきた。しかしどこも人がならんでいて、買えたのは、ポカリスウェットぐらいしかなかった。そして家にもどったあと、また水くみにいった。その日、甲陽から電話があって28日まで休みということになった。

四日目以後、30日まで、毎日、水くみに行き、弟は学校に行き、父親は、土・日・水しか帰ってこず、あとは、大阪でねとまりし、ふろは、土曜日に、父親の仕事場まで電車で行き、東大阪にある銭湯に行っている。

現在まだ、ガスも水もないので困っている。早く復旧してほしい。

岡本　卓也　　神戸市東灘区鴨子ヶ原

5時40分頃に母の目覚ましが鳴ってうっすらと意識があった。そして数分後に、揺れだした。こんな体験は初めてだったので、びっくりして布団の中にもぐっていた。数十秒ぐらい続いた地震が終わったみたいだったので、外に逃げた。道路まで出てみると、家はちゃんと形を維持

していて、ホッとした。海の方では炎がめらめらとたちのぼっていたのがよくわかった。しばらくすると、また揺れた。近所の家をみると、瓦が落ちていたり、玄関がこわれていたり、窓ガラスの割れている家、壁が落ちている家などあった。そんな家を見た後で再び海の方をみると、横一文字に炎が走っていた。さっきよりもひどくなったみたいだった。その後、小さなガスの爆発音のような音もきこえた。そんなふうにして、ようやく太陽が昇りはじめた。揺れも大部おさまってきたので家の中に入ることにした。家に入ってまずびっくりしたのは、玄関が靴で一杯になっていることであった。げた箱から落ちたようである。それから自分の部屋に戻った。部屋の洋服を入れていたタンスは、少々移動していたが倒れていなかった。机の上の台においていた本は全て下に落ちていた。それらを整理したあと、和室に入ると、一番重い洋服ダンスが倒れていた。壁にも傷がついていた。鏡台も倒れていて、はめてあったガラスもくだけていた。それを元どおりにした後、水道が出ないということで、ダムに行った。ダムの近くには湧き水が出ていて、それをくみに行った。合計３回行ったが、後になればなるほど多くなった。水をくんできてるうちに、幸運なことに電気が通った。近くに変電所があるためかなと思いつつ、有難くホットプレートを使ってご飯を食べた。その次の日は朝から、六甲山を越えた所にある祖母の家に行った。六甲山を越える道に行くために、阪急御影駅まで行った。すると線路を通って大阪方面に行く人がみえた。そしてさらに進むと、一階がつぶれている家やぺしゃんこになっている家などがあった。ガソリンスタンドは大にぎわいで、10台前後並んでいた。帰りに同じ道を通ると、車の列はさらにのびていて、5、600メートルにのびていた。

１月31日、今日とうとう水が本格的に出るようになった。まだ茶色の水であったが、蛇口をひらくと出てくる水に感動してしまった。有難い。

今は自転車で一時間30分ほどかけてきている。はやく電車が復旧してほしいと心から願っている今日このごろ…。

小倉　武紘　　西宮市甲子園口

１月17日５時46分家族はみんな寝ていた。僕は布団を頭までかぶってじっとしていて、終わった後、暗い中手さぐりで廊下に出て、それから家族＋一匹（犬）で一階に行き、懐中電灯２本を探した。すぐに余震が来たのでみんなで食堂の机の下に入った。余震が終わると、最初に床に散らばっていたつぼの破片を集めゴミ袋に入れておいた。その時はまだそんなにひどいとは思っていなかったが、ピアノや冷蔵庫が50cmぐらい動いているのを見てぞっとした。しかし台の上に乗っていたガラス製の花びん？が全く動いていないのを見て、またびっくりした。後になってからわかったが、これは南北のゆれが大きかったからのようだ。それからひとまず外がちょっと明るくなるのを待って自分の部屋へ行くと、テレビ（30年ぐらい前の物らしい）が落ちていてまたびっくりした。11時ぐらいになると電気がつくようになったので、外を見てくることになった。家の近くでは古い家が全壊していた。そしてJR甲子園口の近くのトンネルでJR甲子園口の北側に出てみると、なんと７階のビルが倒れ火事になっていて本当にびっくりした。その倒れたビルの中に生き埋めになった人がいると聞いて本当に心配だった。その

後近くの自動販売機に行ったが、hotの飲物はほとんど売切れcoldの飲物ぐらいしか売っていなかったので、小さな道路等の自動販売機を探してhotの飲物を10本ぐらい買いだめした。その後帰ろうと近くの「ウハラ」という店の近くを通ると、ガレージで水やパンを売っていたので、それも買いだめした。その後がまた大変で、近くの川で水をくんで風呂に入れるのを何回もして、暗くなったので17日はそのまま一階で寝た。ただ1つ明日学校があるのかどうかという事が心配だった。18日は近くの浄水場に飲水をもらいに行ったが、すでにたくさんの人が並んでいた。19日ぐらいに先生から電話があり、28日まで休校と聞いて安心？した。その後はトイレの水の確保のため何回か水をくみに行く日々が続いたが、29日になってちょっと水が出るようになった。また29日からいとこ1人が僕の家に泊まって、そこから学校へ行くことになった。30日に近くでガス会社の車を見かけたが結局ガスは出ないままである。はやく出てほしいものだ。書き忘れていたが、僕の家自体はほとんど被害はない、と思う。

川上　浩一　　豊中市曽根西町

1月17日午前5時46分…寝ているときに激しい震動を感じて、目が覚めた。自分はフトンを頭までかぶって地震のおさまるのを待った。姉はギャーギャー騒いだらしい。
午前6時ごろ…父が家族の安否を確かめていた。一緒に自分も一階へ下りていき明かりを確保し、サイフなど持ち出すものを一つにまとめて眠りについた。このときは、まだこれほどの震災になるとは思っておらず、学校もあるかもしれないと思っていた。
午前9時ごろ…目が覚めて時計を見ると9時ごろだった。寝過ごしたと思いあわてて、学校の用意を持って一階へ下りていった。すると、家族がテレビにかじりついていた。そこで初めて、大震災であることを知った。しかし、我が家の被害も少なく、付近に倒壊した家屋もないので、実感がわいてこなく、リアルなドラマか映画を見ている気分だった。
午前10時ごろ～午後11時ごろ…まずは、照明と、持ち出すものを確認したあと、テレビを見るか、友達の安否を確かめるために電話をするかだけしていた。
一日中、テレビを見ていただけにもかかわらず、やけに疲れた。体中の気力が失せてしまい、だるかった。人から生きる気力、未来への希望を奪ってしまう震災の恐しさを感じながら、眠りについた。もちろん、枕下に、持ち出すものを用意して。

金　　秀基　　神戸市東灘区深江本町

1月17日5時46分、激しい揺れとごう音に僕は飛び起きた。何が起こったか見当もつかず、あわてて自分の部屋を出た。後からみると、タンスや食器棚などが倒れて出れるような状態では無かったが、とっさに火事場のくそ力がでたのだろう。そして、家族の安否を確かめようとして、居間の方へ行くと、妹の「助けて。」という声が聞こえた。見るとタンスの下じきになっていた。すぐに、タンスを上げ、妹を助け出し、無事だった父と母と共にテーブルの下へもぐり込んだ。しばらくして、懐中電灯をさがし出し、家を見ると家中の物がだいたい倒れ、食

器もほぼ全部われて歩けるスペースが無かった。聞くところによると、今回の地震は南北に揺れたので、南北においていた物などよく倒れたそうだ。そして、とにかくダンボールなどで安全な通路を確保した時点で、父が毛布や服などをひっぱり出して来て、防寒につとめた。もちろん電気は止まっていたが、電話が使えたので、大阪の祖父母に連絡をとって安全を確認した。そして7時ごろマンションの人たちが外に出て、騒がしくなってきた。僕と父は状況把握のために外に出たが、道路にひびは入り、近くの体育館は燃え、周りの家の多くは倒壊していた。そして、父がウォークマンで情報を得ようとしたが、ラジオ局も混乱していたようだった。7時30分頃、僕の父が医者だと知っていたマンションの人が、近所の幼児の呼吸が止まっているから見に来てほしいと言いにきた。父はその幼児がいるというガレージにかけつけて人工呼吸をした。しばらくして救急車が来たので、その子は病院へ運ばれた。そして家に戻ったが、妹は地震の恐怖とタンスで頭や顔を打ったことによる痛みでかなり動揺しショックをうけて、テーブルの下で寝込んでいた。とにかく明るいうちに、動こうという事で、いろいろな所へ電話をかけたり、部屋を片づけたりした。そして11時ごろ父は長田区にある病院が心配だという事で、歩いてでも行こうと出発した。僕は母と二人で家を片づけ出したが、1時ごろ、大阪からバイクで祖父が食料をもって来た。そこで、食事をとり、祖父にも手伝ってもらって、片づけだしたところで、父から病院は無事だったと電話が来た。そして、明るいうちにと、祖父は帰り、夕方をむかえた。灘区に住んでいる親戚の家では電気がついているという事で、夜はそこへ向かい泊めてもらった。そして、二週間にわたり、大阪や奈良の親戚のところへ避難した。

黒岩　陽平　　宝塚市川面

1月17日午前5時46分突然のゆれで私は目を覚ました。そのゆれは30秒ほどだった。その間に私の部屋では、タンスが倒れ、机にのせてあったものは全ておち、出窓にのせてあった植木がベッドの上の私に向かって降ってきた。窓ガラスはかぎをかけていなかったので割れなかったが、全開になっていた。その後一階に降りてみると、ほとんどの食器がおち、足の踏み場のない状態になっていた。そして、外に出てみると近所の人達が集まっていた。日が登るまでは寒い中、外でじっとしていた。だんだん明るくなってきて、世間の様子を見に行こうと歩き出すと驚いた。今まで気付かなかったが庭の横の裏道の石垣がくずれているではないか。その上にはアパートがあるのだが、どうやら手ぬき工事だったらしい。それは今でも、その後ろのアパートは倒れる危険性がある。そしてそこをぬけて裏のガレージに出てみると、ガレージの石垣の上にある家がくずれおち、今にもおちてきそうなのである。それは、ガレージの横にあるアパートにはしっこがひっかかって、なんとかおちないですんだが、それは今にもそのアパートをくずしておちてきそうであった。幸い、その家に住んでいた人は全員無事であった。その危険な家が取り壊されたのは1週間以上たってからであった。それから歩いていくと、ひどいものだった。古い家が多いこの辺りでは、傾いて、もう住めなくなった家も多く、ぺしゃんこになっている家もあった。しばらくすると、ぺしゃんこになった家から声がするというのを聞きそこに行ってみると、ガレキと化した家の上に人が集まっていたので私もそこへ行ってみた。

それからその救出がはじまった。その人は80ぐらいのおばあさんで、運よくガレキのすきまにいたため、たいしたけがもなく救い出された。それから1時頃になってようやく停電が直りテレビがついた。テレビを見て、私はやっと事態のすごさを知った。特に、伊丹駅や三宮駅周辺の光景は衝撃的なものだった。日頃慣れ親しんだ町が壊滅しているという状況は、あまりにもショックだった。私の家の隣には、祖母を伯母が住んでいるのだが、2時頃になって、東京に住んでいる伯母から安否を気遣う電話があった。公衆電話から何十回も電話をかけて、やっとつながったということだった。その後3時頃になって同じ伯母から電話がかかってきて、2人暮らしをしている、伯母の義理の両親につながらないということだった。そこで、私と父は弟を連れて、車でそこまで行ってみることにした。そこの家は甲東園にあり、新幹線の橋げたが落ちた近くだった。私達は4時頃に家を出たが、普通は20分ぐらいで行ける距離を2時間以上かかっていった。甲東園の近くにきてみると大変なことになっていた。私の住んでいる宝塚の川面といえば、被害の多いところであったが、そこは比べものにならないほどすごかった。道路を隔てた半分が停電でまっ暗になっており、そこは、5階建てのマンションの1階部分がなくなっており、木造建築の家などはぺしゃんこになっていた。道は電柱が倒れて、電線がぶらさがっており、非常に危険な状態だった。そして、目的の家に着いてみると、なんと、2階が1階をおしつぶしている状態になっていた。幸い2人とも無事で、元気にしていらっしゃったので、よかった。2人は、2階と1階の間の部屋の間で寝ていて、その部分は無事だったので、近所の人にはしごで助けてもらったそうだった。そして、また帰るのに2時間以上かかって、家についたのは9時頃だった。そして、余震の恐怖におびえながら眠りについたが、度々の余震で目を覚ました。

小出賢一郎　　豊中市北条町

マンションの4階に住んでいて、部屋の床から170cmほど上のベッドで寝ていた。地震が起こった時、誰がベッドを揺らしてるねん、こわれるやろと思いました。ねぼけていて意識もはっきりしていなかったけれど、隣の部屋で、食器の割れてる音、窓の外では、遠くの方でかみなりのような光がちかちかしていて、しだいしだいに状況がわかってきたという感じでした。一回目のゆれが止まるまで、高い鉄パイプのベッドの上でどうすることもできなくて、ただふとんをかぶって揺れが止まるまで待っていました。ベッドに登ると天井がすぐそこで、何も落ちてくる心配はないのですが、自分が落ちてしまえばそれまでです。さいわい、元からグラグラだったので、横揺れは激しかったけれど倒れることはなかったので助かったようなものです。そしてこうして無事生きのびて、自称“大阪一揺れた男”と名乗っています。一回目の揺れがおさまってから、父の下りろという声が聞こえてようやく恐る恐る下りて、リビングルームへ行くと、戸棚のひらきが開いてしまって、中の食器の多くが床に落ちてむちゃくちゃになっていました。そこで余震がきたので、おばさんの指示でテーブルの下にかくれました。去年の暮に母が死んで、家事の手伝いに、ちょうどその前日の晩に東京からきてくれたおばさんでした。

横浜に住んでいて地震については、慣れているのですぐに戸を開けて外に避難するように言

いました。そしてそれから30分ほどマンションの廊下に近所の人たちといました。本当は、近くの学校などに避難しなければならなかったと今は思います。いざという時にまったくその場に適した行動ができないことがはっきりわかりました。そして家の中からラジオをとってきて、ニュースを聞きました。その時は、神戸が震源地で震度6としか言わなくて、あまり大きなこととして取り上げていませんでした。そうしているうちに家の中から電話がなっているので、荒れた床をふみわけて電話の所まで行って受話器をとりました。地震のことを聞いて心配してかけてきた九州の親せきでした。家の中は、停電しているのに電話はつながることに感心しました。

神下　真慶　　神戸市灘区城ノ下通

1月17日の午前4時に目覚めた。その後地震発生までうたたねをしていた。午前5時46分地震発生。気のせいかその時地震が近づいて来るのが聞こえて、真下に来た時に突き上げられた。揺れは数秒間続き、すぐに停電した。夜明け前でまだ眠っている人が多くて辺りは静かだったが、皆一斉に声を上げるのが聞こえた。自分の父親と母親も真っ先に僕の部屋に駆け込み、「大丈夫か。ケガはないか。」とたずねた。ちなみに父親は二階で、母親は一階で寝ていた。幸いにも姉は修学旅行に、兄は学校が他県にあるので家には居なかった。もし二人共家に居たらもっとごたごたして、家から避難するのが遅れたであろう。2～3時間近くの消防署に避難した。そこには多くの人が居て、皆が驚いた顔をして口々に「すごかったですね。」と言っていた。その後家に戻り、家の中を掃除した。幸いにも僕の家は神戸の中心であったにもかかわらず全くの無傷だった。周りの家も結構新しい家ばかりだったのでほとんど無傷の状態だった。最初はどこから掃除をしようか迷っていたが、まず食器を片付けることにした。食器は8割がた食器棚から落ちて割れていた。しかし他の家具はいっさい倒れておらず損傷はなかった。次に僕の部屋についてだが、僕の部屋もほとんど被害はなかった。強いて言えば本棚から本が落ち、ガラスの置き物が少しかけていただけだった。家の掃除を終えると食料の買い出しに行った。時間は11時頃を指していた。父親の車に乗り、母に留守番をたのみ、出かけた。阪急六甲駅の辺りから三宮まで車で走った。辺りはすごいことになっていた。ビルは壊れ、家は完全にくずれ落ちていた。また電柱もほとんど折れ、道路はめちゃくちゃになっていた。特にJR六甲道駅付近は言いようにない。食料の買い出しに行ったものの、全部の店がつぶれて営業出来ない状態だった。仕方なく家に戻りラジオを聞きながらじっとしていた。そして父が大阪に行き、いつも泊まっているホテルに行こうと言い出した。僕らは即座に服や貴重品を少しもって大阪に向かった。時間は午後1時を指していた。しかし街には車があふれかえっており、全く進めなかった。信号がついていないせいで車は秩序を失っていた。一方通行を逆流するものや道路をふさぐものもあった。神戸を過ぎ芦屋に入った時に、店が営業されていたので食料を買いに行った。しかしほとんど何も残っておらず、万引きをしている人もいた。芦屋でも被害の状態は全く違わなかった。買い物が終わり車を走らせると、阪神高速が倒れているのが目に入った。すさまじいとしか言いようがない。やっと大阪に着いた時は9時をまわっていた。それからホ

テルにチェックインし、食事を済ませてからはずっとテレビを見ていた。その時すでに死者は1000人を超していた。この時に、このまま増え続けるのではという不安がよぎったが、まさにその通りになって、死者は1時間に約100人位の割合で増えていった。また、火災のはげしさも報道されていた。神戸の長田区や兵庫区ではすさまじい程の火災が発生していた。しかし僕の家の近所でも10軒程火災が発生していた。ホテルには5日間滞在していたわけだが、その間に姉は帰って来た。また親類全員と連絡をとることが出来た。とりあえず皆無事だということを知ってほっとしていた。その後和歌山の祖父母の家に世話になっている。日1日過ぎるにつれて、報道されている被災者の顔がひきつっている。僕は遠い場所に避難している為に、きちんと食事もとれて、便所や風呂にも入ることが出来る。しかしそんなものがない近所の学校に避難している人々のことを考えるといたたまれない気持ちになる。この2週間程の間に3～4回自宅に戻ってみたが、変わり果てた神戸の姿を見ると悲しくなる。着実に復旧活動が進んではいるが、早く地震がおさまり、きちんとした生活をとり戻したいと思うことはかなわぬことなのだろうか。

近藤　淳一　　伊丹市車塚

地震発生時5時46分にはふとんの上でねむりの底にあった。揺れの間、最初「学校だから早く起きろ」と揺さぶられているのかと思っていたが、異様に揺さぶりの行為が長かったので、ちょうど本震がやむと同時に起きた。回りがさわがしく、夜中にトイレへ行くためにつけておいた豆球も消えていて真っ暗だった。僕は立ちあがって闇の中を歩いて部屋を出た。
父親が地震が伝わってくるゴォーという音ではね起きて、家が揺れている時、外への通路を確保するために雨戸と戸をあけていて、そこから外をみると真っ暗で、やっぱり地震で停電なのか、これだったらすぐにつくだろうと思った。家族がいうには家全体がまるで大きい生物にゆさぶられているようでこわかったと言っていた。これほどまで言うのだから、家の中はどうだろうかと懐中電灯でみてみると、僕の部屋にある本棚はすべてたおれ、居間にあったテレビは2mほどふっとび、応接間の出窓になっている1.8m四方のうすさ3mmのガラスがわれていた。食堂では、冷蔵庫が前へせりだし、砂糖や塩の入っていた容器が、われたガラスとともに散乱していた。まるでよくドラマなんかでみる家捜しされた後の光景のようであった。家の近くに父方の祖父母がいるので心配になり父親と見に行こうとした。外に出たとき回りの家は一切たおれてはいなかったので、それほどの揺れではなかったのではないかとも思った。祖父母の家の中もひっくりかえりたんすはたおれていた。そして夜があけるのをまとうということになり、夜があけやっと7時すぎになったころ電気が回復し、テレビを見たらちょうどニュースをやっていて、ここではじめて今さっきの地震が本当に強烈なものであったことがわかった。ニュースでは地震後の神戸の倒壊したビルや曲がりくねった高速道路や火災を伝えていた。そしてその時の死者はたしか40人くらいであったと思う。当日地震被害に圧倒されて、発生後5日間くらいはテレビを見続けていた。あの日死者40人が1000人にふくれあがり、母方の祖父母の家の帰りに、テレビで見た長田区の火災の甚大さをまのあたりにして、人生観が変わったように思

う。自分というものがちっぽけに見え、ささいな事で喜び悲しんできたのだなぁと痛感した。話はさかのぼるが、16日の夜、「明日からまた学校がはじまるなぁ。いややな」と思って寝たが、一夜あけてみると電車は線路が陥落もしくは曲がっていたりして通行不能、道路も寸断され、交通機能はまひしている。一夜にして日常性がこれほどたたきのめされ、崩壊した世の中を見たことがなかったこともあり、それにくわえ、8時ごろおきたかなり大きい余震によって核シェルターのように強いと思っていた家が、ぎしぎしときしむ音を聞き、いつ余震が来るのかという恐怖からも、その夜から熟睡ができなくなった。

日ごとに明らかになってゆく神戸、芦屋、西宮などの惨事の現状をみることにより、自分が助かったという喜び、友達や先生はどうなったかという不安、いつ来るかわからない余震への恐怖、消火がおぼつかないほど広がり、とめどもなく燃えつづける火への怒りとがごちゃまぜになったものが頭をかけめぐった。こんな気持ちのわるい事を経験したことがなく、今回のような地震は阪神間で二度とおこってほしくない。

後藤　俊彦　　豊中市刀根山

5時46分私の家は豊中であったが揺れはひどかった。揺れ始めてすぐに起きた。あたりが暗く何も見えず非常に恐かった。二階で寝ていたので下に降りて行くと水道管が破裂してザーザーといっている音が聞こえた。風邪をひき熱が出ていたので寒さにふるえながら家族とラジオに耳を傾けていた。最初地震による被害はお年寄が驚いて腰を打ったとか、その程度のものしか伝わっていなかったので、大した事はなかったのだと思いホッとしていたが、それはあやまちで後に死者が五千人を超えるという大地震であったということが次第にわかっていくのであった。その日は阪急線が全線止まっており、父は近所の同じ会社に勤める人に車で送ってもらうことになった。私はといえば、風邪のため熱が40′にまではねあがり、地震の被害の後始末は母に全てまかしてコタツで寝ていた。しかし時々見るテレビの情報で次第に地震の被害の大きさとその恐ろしさがわかり、特に揺れのひどかった地方の友人の安否が非常に気になり出し始めていた。その後熱が下がらず近所の医者にかかる必要ができ、私は地震後初めて家の外に出ることとなり、そこでようやく身近に地震の被害のひどさを感じることになった。（もっとも私の家の中も物がバタバタと落ちてきており、砂壁が落ち、ある所では壁に長い亀裂が生じている所もあった。）いたる所で通行止めがなされており、ガス管が破裂していて、中でも鮮明だったのは近所の木造住宅の二階が落ちてきているものだった。しかし神戸のあたりではこんなものではなく、多くの人が学校などの避難所に逃げており、水にも困り、毎日救援物資が届いており、連日行方不明の人々の捜索が行われていると知っていたので、改めて地震の恐ろしさを再確認した。そして私自身風邪をひいていたので病身の人やお年寄りの人、そして体に障害を持つ人々の安否が気づかわれた。こうして病気の身で何もできない自分の身をはがゆく思いながら日は経ち、病気も快方に向い学校に登校する日が来た。友人達と西宮北口から歩きながら改めて地震の恐ろしさを知ることになった。学校についてみんなの元気な顔を見てホッとし、そして来ていない友人の事が気になった。今回の地震で自分も含め多くの人が自然の

驚異を知ったと思う。自分も含め多くの人々がこの地震で反省し、感じる所があったと思う。自分はこのまさか来るとは思っていなかった地震から、常日頃からの備が必要だということを強く感じた。このことを教訓にして、そして生き残ったことをありがたく思い生きていきたいと思う。

境家　史郎　　大阪狭山市池尻中

私はその前の晩、ソ連型インフルエンザにやられて、夜8時には寝た。そして寝すぎたせいか朝5時ごろに目が覚めた。私はそのままフトンに入りつつ、うとうとしていたのだった。5時46分にそれは起こったのだ、といっても我が家は震源地から遠くはなれている。この学校で最も被害のない男かもしれないのであったが、その揺れは人生において初めて経験するほどの大きさ。私は2階で寝ていたが床がぬけはしないかと思ったほどだったのだ。30秒ほど揺れは続き、おさまったので余震を恐れつつもまた眠りにおちようとしたそのとき、母が私を起こしに来た。母が言うには、なにか大変なことになっているらしかった。で、ニュースを見ようとテレビをつけたら、そのときはまだ「震源地は東海道」とガセネタをテレビが流していた。6時10分ごろから正確なデータが入ってきた。次の瞬間、目をうたがう光景がテレビに映る。なじみ深い神戸の街の惨状であった。それは阪神高速に象徴された。しばらく唖然とするも、続々と来る情報がそれにもまさるものであった。8時頃から交通機関の具体的被害もわかり、学校にも当分行けそうにないと確信した。が、やはり最もインパクトにあふれる映像は火災であったにちがいない。空襲というものを経験してはいないが、おそらくはこんな感じであったにちがいない。自分のよく知る地域が全く別の街になっているのだった。夜になってその火災は視覚的にも恐怖をかりたてるものとなった。そしてその火災は驚いたことに、次の朝にも鎮火していなかったのだった。ヘリから見る神戸は一面の焼け野原とガレキの山であった。しかしそれはテレビを通して見るものにすぎない。私が自分の目で被災地を見たのは1月30日になってからである。そこはテレビからは伝わらぬことを知るのに十分であった。この学校においては被害にあわなかった者の方が少ないので、こんなことを書くのはどうかとも思うが、完全なものが壊れてしまうことへの人間の興味というものは確かに存在した。美しい神戸はガレキの山と化し、道にはゴミがあふれ、人々が食べ物を求めさまよっているのだった。えも言えぬ光景に鳥肌が立つのを抑えることができなかったのだった。私は被害にあわなかった数少ない者の1人として、第三者として客観的に見た街なみを書いたが、それはやはり被災者の見る街なみとは異なるのであろうか。私の意見が貴重な第三者の証言となれば幸いである。

佐郷　賢亮　　生駒市東松ヶ丘

当日の朝、いつも通り6時20分ぐらいに起きて、テレビを見て知った。起こった時は、軽い揺れを感じたが、そのまま寝ていた。自分はいつもの時間に駅へ行ったが電車が止まっていたので、家に電話をすると、阪急が止まっていると聞いたので家に帰った。その後、また眠かっ

たので、昼近くまで寝ていた。目が覚めたのは11時ぐらいで、親は家にいたが、近鉄線が走りだしたので仕事に行った。家も周りも何の変わりもなく、二週間とても暇な毎日だった。

清水　孝洋　　西宮市上ヶ原山田町

1月17日午前5時46分、急にものすごい音がなった。何か爆弾でも落とされたような音だった。その瞬間、縦に激しく揺れ出した。僕は怖くなってふとんをかぶった。すると今度は横に揺れ出し、周りのたんすの上に置いてあった物がふとんをかぶった僕の頭の上にどんどん落ちてきた。ガラスが割れる音もした。そのころにはもう地震だということに気づいていたが、こんな激しい揺れは生まれて初めてだったので、怖くて動くこともできなかった。じっとしている時間がものすごく長い時間に思われた。揺れがとまって、ふとんやふとんの上に乗ってきたものをのけて家の中を見まわしてみると、家の中はめちゃくちゃになっていたが、たんすや冷蔵庫などは倒れていなかった。ただ、電子レンジだけが落ちて割れていた。僕の家はマンションの6階にあって、揺れは激しかったけれども、マンション自体はいつもと変わらなかったので、後に知るようになった被害の大きさは想像もしていなかった。僕の家は真っ暗だったので懐中電灯を探してようやく家の中の様子がつかめてきたのだが、その懐中電灯の数はたった1つだけだったので、自分の家の備えの甘さを思い知らされた。家には電池で聞けるラジオが辛うじて1つあったので、それで情報を聞いてみた。「大阪、震度4、京都、震度4……」などと流れていた。やっぱりそのぐらいだったのかなと思ったとき、「震度6がありますねぇ、神戸です、神戸が震度6です」という声が流れてきた。ほう、震度6かあと思ったのだが、まだそのときは、全壊している家が数多くあることなんか夢にも思わなかった。そのかわり、北海道南西沖地震の時に問題となった津波のことが心配だったが、「津波の心配はありません」ということだったので、ただ地震があっただけが、“おもんない”とまで思っていたものだったが、本当にその時は、被害がこれほど大きくなるとは全く想像もつかなかった。

地震後30分ぐらいたつと電気がついた。しばらくはテレビを見ていて、被害の状況がだんだん明らかになっていって、非常に驚いた。午前8時半ごろ、近くのコンビニに行ってみようとすると、周りの通がガスくさかった。家の塀が倒れている所もあったが、家自体が全壊、半壊の所はなかった。コンビニへ行くと、中は暗く、落ちたものが散乱していて、下はジュースなどでべとべとだったが、店はやっていて、人がたくさんいて、食べ物はほとんど買いつくされていた。その時、僕は初めて周りの家が断水になっていて、飲み水を求めていることを知った。しかし、僕の家は断水してはいなかった。マンションのタンクに水がたまっていたからだった。このため4日間は水運びはまぬがれたのであった。家に帰ってきて家の中の掃除をした。皿などは、食器棚が開き戸ではなく、引き戸だったために全く割れなかった。一番困ったことはガスが出ないことだった。家の中には、電気を使う調理器が電子レンジとホットプレートとトースターしかなかった。そして何でもできる電子レンジは壊れていて使えなかった。このため、マンション内の人から電気炊飯器を借りた。これらだけでは水を温めることはできないので、キャンプ用の火をおこすものをつかった。また、地震後2日間は、家の周りの店はほとんど開

いていなくて、また開いていても食べ物はほとんど売っていなかったので、2日目に大阪まで買い出しに行かなくてはならなかった。そんなふうに、工夫しながら暮らす地震後の生活が始まった。今現在、水は昨日（2月1日）から出ており、ガスはまだ出ていない。問題はふろだけとなった。

白川　敦史　　高槻市日吉台

地震が起こった時、寝ていたのでわからなかった。起きてから母親に言われて知った。家中で被害はロイヤルドルトンのカップが2つ割れていただけだった。水もガスもずっと出たので困らなかった。停電も30分あっただけなので、ぼくは寝ていて気づかなかった。いつも通りJR高槻駅に行くと電車が通ってなかったので、初めてひどい地震だったのだと気付いた。しかたがないので家に帰ってテレビをつけると、神戸市内がめちゃくちゃになっていたので驚いた。友達が心配になったので電話をしたが1人もつながらなかった。そこでもし家が被害にあったときのために必要なものを買いにいった。懐中電灯はどこの店でも売り切れだったので、電池と水と水をためるタンクと非常食を買った。そのあと西武デパートが開いたので、行くとほとんど人がいなかった。そこでは懐中電灯が売っていたので買っておいた。家に帰って断水になったときのために風呂に水をためておいた。そのころから家に電話がかかり出した。親せきの人が多かった。再び友達に電話をかけたら明石の友人だけつながった。家の中がめちゃくちゃで壁にヒビが入っているが水、電気、ガスは出るといっていた。後に入った情報によるとぼくの家の近くでも、タンスやピアノが倒れてきた家があったらしかった。その日から枕もとに懐中電灯をおくようにした。次の日は父の部屋の小銭を集めて数えた。すると1万3千円あったので7千円足して銀行にもっていって札にかえてもらった。数日後に朝日新聞に送った。

杉本　良太　　川西市中央町

震災は5：46におこったわけだが、私は5：44ぐらいに目覚めた。そして、ボーとしていた中で、遠くから地鳴りがして、上につき上げられるように床が動き、その後はまるでスライドするかのように動きに動いた。私はとっさに布団の中に全身を入れて、おさまるのをまったわけだが、実はこのとき重さ20kgほどの、アメリカのバッファローの角が体の上におちてきていたのである。結果、私の部屋だけがつぶれてしまい、他の部屋も一部壁がおちてしまった。私の家は祖父の代につくられたもので、築48年というもので、建設基準のゆるいころのものであったことが原因と思われるが、それにしても、あのときのことは、今でも鮮明におぼえている。ところで、その地震の直後の様子であるが、まず、停電し、ガスもとまった。(依然として、ガスはまだ)。ガラスのおちた部屋に母親がいて、足を負傷し、しかもその部屋の戸があかないので、四苦八苦したが、なんとか窓から脱出。姉は自動車免許の教習が気になり、時間にばかり気がいって、この惨事にまだ気付いていなかった。父はその前日から出張しており不在。隣家の祖母の家は大丈夫。そして、祖父はその時、神戸へお参りにいっていた。祖父の話

では、山からおりてくるときに、地面から何かパッと光って、気がついたら、もうすでに地ひびきがおこっていたという。半信半疑ではあるものの、そのときのすさまじさがうかがえる。電話が通じにくく、なかなか連絡がとれなかったが、御影と伊丹のいとこは、何とか大丈夫で、川西と塚口の親せきも大丈夫ということが明後日にわかったが、それまでは、アメリカのシカゴにいる、おばの家からの国際電話がはじめてだった。とにかく、次の日から買い出しが大変だった。水はでるのでまだ助かった。昼から情報をテレビがつくようになって知って、神戸のすごさにおどろいた。自分の家の方がずっとましなことを、幸せに思わずにはいられないほどだった。食器は、フランスのグラスや、ボーンチャイナや、ドーベルマン型のガラス細工（大きさは２mほど）など、高いものは、ことごとくやられ、パンのヤマザキでもらったりした、安物の方は一枚もわれてないといったカンジで少々、腹立たしく思われた。３日ほどして、少し余裕もではじめ、友人に連絡をとり、何名かの無事を確認。芦屋の友人などに、水や食料を届けにいったりもした。しかし、大阪の平和さには少々おどろいた。しかし、大阪にも大変な地区もあり、その辺りに意外にボランティアが少なかったりすることに気付き、まだ対策がうまくたてられていないことがわかった。しかし、１つ思ったことは、テレビの政治番組（日曜の朝）に、出るのはいいが、いくら腹立つからといって、カメラをたたいたりしてはいけないと思った。しかし、山花氏などは、こんなときに、新党をつくろうとしたり、この地震をネタに、政権をにぎろうと少しは思ったろう。村山氏などは、自衛隊の出動のおくれや、外国からの救助をおくらせた。今の官僚よりも心がくさっていると思う。しかし、ヨーロッパでは大洪水がおこったり、世界中でも色々な異変がおこってきているのは確かなようだ。世に、ノストラダムスの予言によると、1999年に滅亡するといわれている。たしかにそうでも、それを運命としてうけとめるだけでなく、それが、最低限、人間のあやまちから起こされたことによっての滅亡ではないようにすることが大切であり、又、この地球に生まれてきた人間の使命と思われる。日本も今は大変な状況にあるけれど、一刻も早く復興して、世界的な仕事にたずさわれる日が来ることを、私は願っています。私は高校生なので、まだ、世界的いや、まだ、地域社会に対しても無力である。が、あえて、こんなことを書いた。

高木　浩二　　尼崎市崇徳院

ふと目を覚ますと揺れていた。最初は何が起こったのかわからず、体が動かなかった。そうしているうちにタンスの上においていた扇風機が頭のすぐ上に落ちてきた。信じられないほどの揺れで、うずくまってじっとしていることしかできなかった。やっと揺れがおさまり、二階の部屋をみてみると、本棚が倒れていて、すさまじい状況だった。しかしうちの被害はそれだけだった。一階におりてみても食器戸棚は大丈夫だったし、何も変わった所はなかった。うちは地震に対する非常食や、その他の備えは全くしていなかったので、懐中電灯を探すのでさえ、苦労した。停電していたので、テレビもつかず、まっ暗で、その時はまだ地震がおきたということぐらいしかわかっていなくて、その他の情報はまったく知らなかった。うちのラジオは電池が入っていず、使えない。どうしようと困っている時に、うちの親父がガソリンスタンドで

もらってきたむちゃむちゃあやしいラジオ付き懐中電灯なるものが、どこかに眠っているはずだと言いだした。それはもうあやしすぎる代物で、パッケージには中国語らしき文字で、説明書は英語で何か書いてあった。たとえ見つかったとしても使えるのかどうかに大きな不安をいだきながら、一家全員で、それを探しまくった。結局それは見つかり、そのラジオで震源地や規模の大きさなどを知ったわけである。しばらくそれを聞いているうちに40分くらいたった頃、急に電気が回復した。全員速攻、テレビをつける。そして、そのあわれなラジオ付き懐中電灯は皆から忘れさられ、また倉庫の奥深くで眠ることになったのである。

時計をみるともう7時だった。僕は学校へ行こうとして身支度をととのえ始めた。すると兄貴がこんな時に学校があるはずがないという。しかし鉄道がどうなっているのか、その時はまだ全然知らなかった僕は、「阿呆なこと言うな」と言い残し駅へ向かった。しかし、今思うとあの時兄貴の言うことをきいておけばよかった。僕はその後駅でかなりやばい目に会うことになるのである。駅へ行く途中の道はガスのにおいがしまくっていた。そうこうして、やっと駅についたものの、駅員はいないし、電車がいつくるのかもわからない状態でぼくはとりあえず、プラットホームの待合室でずっと電車がくるのを待つことにした。待合室にはすでに5、6人の大人たちがいた。ぼくも彼らと一緒に席にすわっていたその時である、いきなり震度3か4ぐらいのでかい余震がきたのだった。待合室がぎしぎしと音を立ててすごく揺れている。その瞬間中にいた5、6人の大人たちは待合室からとび出し、全員改札口へダッシュし、駅から逃げ出し始めたのだ。するとプラットホームにいた人たちも、つられて次々と駅から逃げ出していく。そんな中で僕はとても面白いおばちゃんを発見してしまった。そのおばちゃんは切符を改札口へ通すのだがすぐランプがついて出られないでいるのだ。それもそのはずである。その駅でかった切符でその駅を出ること自体不可能なのに、そのおばちゃんはわからないらしく、「なんやのォーこれー」と言いながら、何回も改札口を出ようとするが出られない。そこでおばちゃんは大胆な行動に出た。改札口の下をくぐっていき、他の人たちの白い目をよそに駅を去っていってしまったのだ。

今回の地震で非常食などの準備がいかに重要か思い知らされたが、わが家ではまだ何もしていないのが現状だ。

高原　徳守　　大阪市東成区中道

1995年、今年はいいことがありますようにと、初もうでで祈願したことがまだまぶたに新しい1995年1月17日、午前5時46分、ズズズズ…というような、いやゴゴゴゴ…というような激しい揺れで目をさました。当時僕は状況を把握できなかった。というのも、その前日に建て替えたばかりの家に引っ越ししたばかりだったのだ。まさか引っ越しの翌日に地震が起こるなどあるはずがないという思いがあったからだ。目をさますと、部屋全体が揺れていた。本棚からワラワラと本が落ちた。近くの神社でカラスが鳴きわめいていた。

地震が終わるとすぐ父がとんできて、家族全員居間に集ってテレビの画面に見入った。“さきほど近畿地方で強い揺れを感じる地震がおこりました”“各地の震度は次の通りです……”

大阪　震度４　神戸　震度６　と続いていく。震えが止まらなかった。生まれてこの方何も災害にあったことがなかったので、今だに信じられない。

その日の昼すぎ、余震におびえながら、テレビで阪神高速の倒壊を見た。そして初めて地震を実感した。神戸の街に次々に上がる火の手を見て唇をかんだ。そう、世紀末としか言いようがなかった。幸い、僕ら一家に怪我もなかったし、家の中も何ともなかった。でも地震が２時間遅れていたら、僕も夙川学院の巨大な波の中で圧死していたかもしれないと思うと、何となくいやな気分になった。この文章を書いている今も多くの人が恐怖におびえている。明日はわが身かもしれないのだ。

武井　和広　　尼崎市南武庫之荘

食器棚の中のマグカップやグラス類がほとんど割れた。それを捨てるのにはとても苦労した。１時間後に友達の家に安否を確かめにいった。尼崎市から西宮市に武庫川を渡って行くと、明らかに西宮市の方がひどかった。それと武庫川の下流には地震の前までほとんど水がなかったのが、地震後には川が水で満たされていたのがとても印象深かった。ガス、水ともに２日後ぐらいに使用できるようになった。電話は三日後に開通した。私の家の周りはほとんどマンションだったので、家屋には影響をあまり受けていなかったように思われた。それと遠くのコンビニに電池を買いに行ったら、店員が電卓を使って計算しているのを見て、地震の範囲の広さを改めて思い知った気がしたのを覚えている。

田中　宏和　　明石市朝霧町

17日朝５時46分頃、揺れを感じ目を覚ました。ふと横を見ると洋服ダンスが倒れてきたので、手と足を使って何とか防いだ。しかし、タンスの上には日本人形が飾ってあり、しかもそれは人形ケースにいれられていた。その人形ケースが落ちてきて、ガラスがおでこをちょっとかすった。いつも父と母と僕は二階で寝ており、一階には姉が一人いた。まず父は姉の所に無事を確かめに降りて行った。幸い寝ていた部屋にあったピアノは、５センチぐらい動いただけで倒れておらず無事だった。それから父はカメラを取りに行って、姉の部屋を写真にとった。その後二階に上がってきて、僕が救出された。父と母と僕は、一応一階に降りて姉の部屋にかたまっていた。それから数十分して、祖母から電話があった。それから、懐中電灯とラジオを探してきた。余震がおさまってから、外に出てみようとしたが、ドアが歪んだのか出れなかったので、父がドライバーを使って修理していたら庭に懐中電灯の明りが見えた。ドアが開いて外に出ると、近所の親せきが見に来てくれていた。六時半ぐらいには、近所の年寄りが道端で立ち話を始めていた。その頃、洗面台で水道の蛇口から水もれがしていたので修理した。８時30分ぐらいになって電気がついたのでテレビでサンテレビをつけた。その頃から水が出なくなってしまった。昼ぐらいになって、部屋をかたづけ始めた。一応かたづけた後、電話をかけたがつながらなかった。母も自分の母に電話をかけたがつながらなかった。テレビで長田や須磨で火

災が発生していると知った。祖母の家がその付近なのでとても心配だった。晩になってやっと電話がつながって安心した。祖母の知人の話によると1、2、3で家がつぶれたらしい。その人は何とか家族を助け出したが、周りの家々にいた人々が助けを求めていたけれど、火が近づいてきたため、手を合わせながら家族で逃げたらしい。その付近は火事だったのでたぶん近所の人は亡くなったと思われる。二日目は、母の友人が水をたくさん持ってきてくれたので、一応水の心配はなくなった。三日目ぐらいに、父の会社関係の人から電磁調理器を送ってもらい、母の友人からガスコンロと電気炊飯器を借してもらった。また近所のローソンにも買い出しに行ってきた。四日目ぐらいには、水道も回復した。

津田　基嗣　　尼崎市西本町

地震が起こったとき、僕は40′程熱がでていたので寝れず、起きていました。僕が寝ていた部屋は大きいタンスが2つあったので、すぐにふとんを飛び出し、母と妹の寝ているとなりの部屋へ行きました。その時は不思議に熱もしんどさもありませんでした。となりの部屋へ行く途中も行ったあとも、本震が続いていました。母と妹は近くにタンスがあるにもかかわらず、また、僕が「はよどかなあかん。」と言ったにもかかわらずふとんの中で茫然としていました。そのときに妹の足の上にタンスがこけてきました。妹は痛いとも何とも言わず、ただ何が起こっているのかも分からないようでした。僕はすぐにタンスの下から妹を引き抜き、母にも危ないと言いましたが、母もただふとんの中で固まっているだけでした。本震がやむと、ようやく母も妹も周りの状況を理解したようで、妹は改めてガクガクと震えていました。その後は余震もあったので、3人でタンスなどがこけてこない場所でふとんをかぶっていました。父は前の夜に酒を飲みすぎていたので下の階で寝ていましたが、無事でした。そして本震のあと、近くにあった懐中電灯を照らして、同じく下の階の少し離れた部屋で寝ていた祖父母の無事を確認しに行きました。祖父母の部屋は洋酒などが並べてあったタンスがこけてきたのですが、祖父の頭のすぐそばにこけてきていて、もう少しで危ないところでした。その後、父は上の階に来て僕たちの無事を確かめると、情報を得るために車についているラジオを聴きに行き、津波の心配がないことを確認しました。余震が一段落したのち、家族全員が下の階に集まってしばらくの間過ごしていると、6時半ごろ電気が復旧したので、テレビをつけると改めて他の場所の惨状を知りました。7時を過ぎると空も明るくなってきて、だいぶ気持ちも落ち着いてきました。すると急に、熱としんどさを感じるようになり、午前中はずっと家の中で寝ていました。その間に、父と母は台所の食器棚が倒れていたのでそれを起こし、割れた食器の後かたづけをし、台所を使える状態に戻しました。水道が出るかどうか調べてみると出ることは出るのですが、チョロチョロとしか出なくにごってもいました。あちこちに電話をかけましたがどこもつながらず、結局この日に電話がつながったのは大阪にいる母方の祖父母だけでした。午後になると父が辺りをまわってきて、僕の町の南、43号線を越えた所に位置する町では全壊は無いもののほとんど全ての家が半壊もしくは10センチほど家が下がっていると言いました。3時ごろに地震が落ち着いてきたので僕は近くの病院に行きました。病院は意外とすいていました。僕

の家自体はそんなに被害はありませんでした。

中江　啓　　西宮市浜甲子園

震災当日、昨夜から熱があがってきた。インフルエンザにかかったようだ。寝すぎて夜中に目が覚めた。まだ熱かったので、よしこれで合法的に欠席できると思った。すると、いきなりベッドが揺れ出して、階段を花びんがころげ落ちる音が聞こえた。少し楽しかった。すぐに両親が起きて妹を呼び、家中がバタバタしだした。そして近所の人々が学校（避難所）に行っているらしいとの情報で、一時外にとめてある車の中にいようということになり、早く起きて服をきがえろといわれたが、ねむいし、しんどいので、布団にもぐっていたら、えらく怒られた。2日目、父が大阪に買い出しにいった。3日目、父が岸和田の方から、水を1400ℓ持って帰ってきて近所に1000ℓ程くばった。4日目、やっと風邪がなおってきたので、水くみにかりだされる。それから後は毎日水くみの連続、しかし、あたたかな食事にありつけるだけでも、ありがたいと思わねばなるまい。家は一年ほど前に、ミサワホームにたのんで建てかえた。さんざん迷ったあげく、プレハブ方式にしたのが功を奏した。3日目の時点で、ミサワホーム他、大手住宅メーカーはマウンテンバイクを駆り、被災状況をしらべていた。大手はさすがに統率がとれていて、動きがすばやいなと、少し感心してしまった。家の周辺を回ってみると、家から徒歩5分程でいける、浜の湾岸線の橋がおちていた。たしかあれはまだできて半年ぐらいしか経っていなかった。道路公団は泣いているなと思う。更に、家から自転車で5分程の、阪神高速はV字型に落ちていた。車はぺしゃんこ、すさまじかった。甲子園浜に高速艇が行き来するというので、順路をかいた紙をつくって道にはっていった。これも一応ボランティアだなと一人でご満悦。少しさみしい。甲子園プランタン（ダイエーの少しでかい版）は、営業再開、水のいらないシャンプーと、体をふくボディシャンプーは人気商品だった。今津ではパチンコ店が店を開けて、ちょっと反感をかったらしい。阪急が壊滅に近かったので、これは学校当分行けねーなと思い、少しほくそえんでしまった。テレビを見て被害を知る。それと同時に各局の報道の下劣さにキレる。特にフジテレビの、タクシーで神戸の中心部まで何時間かかるかってのは死刑ものです。あんな事を考えついたプロデューサーは抹殺してしまえと思った。更に避難所の人々に、スタジオから、「お風呂はどうなんですか」などとほざいていた女性アナウンサーも殺せと思った。まったく対岸の火事っていうのですかねえ、報道のアホらしさはどうにかしろ。

中山　知　　神戸市北区星和台

地震が起こった当時は、半分寝ていた状況でした。6時の起床の時間を前にしてもうすぐまた一日が始まるのかとぼんやりと思っていました。と、急に何の前ぶれもなくベッドが揺れ始めました。一瞬何が起こったのか、分かりませんでした。直後にああ、地震かなと気が付きましたが、何をすべきか頭が混乱してパニックになってしまいました。ようやく揺れがおさまり、

あたりをみまわしてみると、真っ暗でよくわかりませんでしたが、隣で寝ていた父と弟がいません。何といつのまにか一階におりていってしまっていたのです。(寝室は2階にあります)ゆっくりベッドからぬけだし、暗い中を階下のあかりをたよりにして階段をおりていきました。食堂に父と母と弟がいました。父は地震直後にとびおき、寝室にあった大きなたんすを必死におさえていたそうです。父は単身赴任をしており、土日ぐらいしか家には帰ってきません。たまたま前日の月曜日が祝日であったので幸い家にいたのですが、もし父がいなかったら、あの大きく重たいたんすが寝ている上にかぶさってきたかもしれません。あとで考えて恐ろしくなりました。母は一足早く起きて弁当をこしらえていたのですが、地震が起こるととっさにガスを消そうとしたそうです。しかしとうていそんな状況ではなく、食堂のテーブルの下にもぐりこもうとしているうちに揺れがおさまったようです。幸い冷蔵庫、食器棚なども倒れず、そのようなものの下じきにもなりませんでした。弟は僕と同じようなもので、揺れがおさまると父と階下におりていったようです。もちろん停電していたので懐中電灯をまずさがしました。押し入れの中や車の中からかき集めて3個ぐらい集まりました。あと災害用に電灯とラジオと時計がいっしょになったものがあったのでラジオをつけてみると、電池がきれていました。あわてて予備の電池をさがしてラジオをつけてみると、最初の方は神戸や西宮のことは何も言わず、京都市や広島のことばかり放送していました。二階の寝室からふとんをもってきてそれにくるまりながらラジオを聞いていると、被害はそう大きくないように思えました。だんだん周りが明るくなっていくので雨戸を開けて外を見てみると、犬を散歩させている人や、会社に行こうとしている人が道を歩いていました。その日は月に一度の粗大ゴミ回収の日であったので、母といっしょにゴミを近くの回収所にもっていきました。雪がふって寒かったものの、周辺の様子はさほど変わっているようには思えませんでした。だんだん落ち着いてくると、火が恋しくなってきたので、物置きから七輪をさがし出してお湯をわかし、お茶を飲みました。そして家の中をかたづけているうちに電気がついたのでテレビをつけてみると、自宅とは較べものにならないほどひどい様子がうつしだされていました。同じ神戸の映像とはとても信じられませんでした。水道はしばらく出ていましたがまもなく止まり、二日後に回復しました。ガスは地震当日復旧しました。このように同じ神戸市でも北区は被害が少なかったのです。以前住んでいた東灘区のアパートは全壊したと昨日(2月1日)やっとわかりました。「激震のおそった地域の人々とは較べようもなく幸せな状況で、しかしその時はさほど幸せとも感じないで余震の続く中、眠りについたのでありました。翌日目がさめたときには父はいませんでした。何と枚方まで仕事に行っていたのです。三田回りで車を使って行ったそうですが、8時間ほどかかったとあとで聞きました。

永井　崇之　　池田市天神

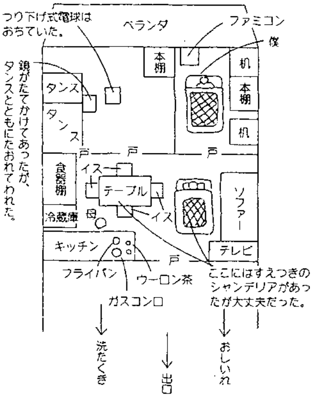
地震が起こった時、自分は2階のベッドで寝ていた。地震が起きて飛び起きると、あまりに揺れが激しいので、とにかく布団をかぶることしかできなかった。地震がおさまって下に降りてみると、家族全員が起きていた。見てみると、壁の所々にヒビが入り、小さなタンスが1つ

倒れていた。床には砂が落ちていた。テレビをつけてみると、淡路島で地震があったということが分かった。ここでもこれだけ揺れたのだから、神戸の方は大変なことになっているだろうと思ったが、神戸の様子はまだテレビでは放送されていなかった。とりあえず、割れたガラスなどを片付け、朝食を食べた。7時ごろになったので、学校へ行こうと思って阪急石橋駅へと向かった。外から見てみると、自分の家は何ともなさそうだった。外を歩いてみると、所々で瓦が落ちたり、ガラスが割れたりはしていたが、大したことは無さそうだった。ところが駅に着いてみると、電車は止まっていた。仕方がないので、家に戻った。その後、時間がたつにつれ、神戸や西宮の状況がテレビで伝えられた。鉄道や高速道路がくずれ、ビルも傾き、大火災が発生していた。そのひどさは池田とは比べものにならなかった。これは当分の間は学校どころではないと思った。その日は1日中テレビに見入っていた。そして、その日はずっと余震が続いていた。その日だけでも数えきれないほどの余震を感じた。次の日、テレビでは被災地からの中継が行われていた。相変わらず、火災が続いていた。三宮などの見慣れた場所も、変わりはてていた。電気もガスも水道も通じず、多くの人が体育館に避難していた。しかし、池田では、この日から学校が始まり、電気もガスも水道も地震の当日から来ていたし、商店街も営業していた。このように、少し場所がちがうだけで、環境が大きく違っているというのは印象的であった。私の家は、築後50年近くたつ古い家なので、揺れがそれほど大きくはなかった割には壁にヒビが入るなど被害が大きかった。もし、ここでも震度7の揺れだったなら、おそらく、家は全壊してしまっていただろう。そう考えると、今でもぞっとする。2月に入って学校が再開するまでは、ずっと家にいた。家にいても、テレビを見るぐらいで、何もしていなかった。行く所もなく、どこかへ行く気もあまり起こらなかった。2月に入るとようやく学校が再開した。友人の内にも、家が全壊した者がいた。また、話を聞いていると、三宮などのような、行き慣れた場所がことごとく変わり果てているというのにもおどろいた。鉄道も、夙川－西宮北口間で線路が崩れ、復旧は夏になるという。つぶれた家や建物を取り除くだけでもかなりかかるだろう。このように考えると、神戸の復興にはまだまだ多くの時間がかかるということを強く感じた。

西原　徹人　　西宮市獅子ヶ口町

体が背中から、まるで金属バットでなぐられたようにつき上げられて目が覚めた。その後、何度も背中をたたかれるようにして体がふとんといっしょに空中にうき、茶の間の電気がパッと消えた。そして体がゆすられるように左右にゆれた。母の悲鳴が聞こえた。暗やみの中で左にある本棚から本がいっぱい落ちてきたので左を見ると、いまにも本棚がたおれそうにゆらゆらと揺れていた。これはヤバい！と思ってすぐに下半身にしかかぶっていなかった掛けぶとんを頭までかぶった。するとその約0.25秒に本棚が僕の体に落ちてきた。そのころから食器の割れる音がしだした。それから20秒ぐらいふとんの中で揺らされていたが、その20秒は10分ぐらいに思えるほど長かった。起きた当時から地震が終わるまで、ずっとゴーという音が聞こえ続けていた。そして地震が止まった。母が僕の名前を呼びながら僕のところまで来たので、本棚

の下からはい出した。母に導かれるように茶の間のソファーのところへきた。真っ暗だった。電気がなかったので、夜が明けるまでそこで待つことにしようとしたが、とてもそんなにのんきにしてはいられないような状態で、何かをしなければ落ちつかなかったので、懐中電灯のある場所へ行こうとした。しかし、懐中電灯は食器棚の下の引き出しにしまっていたので、食器で埋まってとり出せなかった。母がポケットライターを出してくれた。ひととおり家の中を見てまわった後、そのときの状態を母と弟に尋ねた。そのとき、母は弁当をつくっていた。卵焼きを作ろうと卵をかきまぜている最中だった。そこに地震が起きた。母は立っていられなくなり、そこにあるものをつかもうとした。まずつかんだのはフライパンの取っ手だったが、すぐにフライパンは飛んで行ってしまった。その次につかんだものはウーロン茶の入っているやかんだった。それは中身とともに弟のふとんにぶちまけた。そして母はころんだ。地震が終わるまで待っていた。弟は地震の発生とともにふとんにもぐったが、何もおこらなかったらしい。弟の話によると、猫が地震発生直後に走りまわったらしい。



7時すぎ、夜があけた。家の中は散乱していた。猫がいなかった。母が、すこし冷めたごはんでおにぎりを作ってくれた。まず、午前中は食器をかたづけた。150枚近くあった皿と25個くらいあったコップがほとんど割れて、のこったのは皿8枚とコップ3個だけになった。そのころになってやっと猫を発見した。洗たく機の裏でふるえていた。そしてやっと電気がついた。すぐにテレビをつけたが、アンテナがいかれているらしく、4チャンネルがかろうじて白黒で雑音とともに映るだけだった。そのころは死者22人と発表されていた。僕の部屋は400冊のマンガと150冊の小説と、机の棚の本とで埋めつくされていた。水が出ないのでトイレの水は川でくんできた。冷蔵庫の中には2日半分の食べ物と飲料がペットボトルで2つ入っていたのでたすかった。学校は休むことにした。電話はつながらない。僕の部屋はふとんの上に、本棚の割れたドアのガラスと本で埋まっていた。マンションの外へ出てみると、その廊下がかたむき、ヒビが入っていた。夜になると、母の知り合いが11時間かけて水とガスコンロをもってきてくれた。

西垣林太郎　　神戸市東灘区住吉台

前日の夜は、遅かったので、地震が起こった時はぐっすりと寝ていた。フラフラとした揺れで目が覚めた。その直後、激しい揺れに変わった。起きて三秒位は夢かと思ったが、どうも違う様だった。ベッドの上で寝ていたが頭に布団をかぶって小さくなっていた。フライパンの上のポップコーンのごとく、体がはじき上げられる様な感じだった。地鳴りもすごく、ガラスの割れる音が、けたたましく続いた。後のニュースでは、揺れた時間は40秒位と言っていたがもっと短かったのではないだろうか。揺れが止まっても、しばらく余震が続いた。家族3人はリビングに集まり、皆無事だった。懐中電灯が近くにあったので、部屋を照らすと、僕の部屋は、

机の上の物が飛び散っていて、本棚が壁側にたおれかかているだけで、たいして普段と変わらなかったようだ。夜明けまで、一時間程なので、あまり動かず明るくなるのを待った。かなり寒かった。明るくなってみると、寒いのは揺れた時に、ベランダの戸が大きく開いたらしい。明るくなってみると、リビングはたいして被害はなかったが、台所と母の部屋がひどかった。まず、台所を片付けた食器棚が3つ全部倒れていた。それを父と起こして割れた食器をほうきとちり取りで取り除いた。だいぶたくさん割れていたが、絶対に割れないと言われていた、耐熱の皿やコップはほとんど残っていた。それでも、さすがに棚の下じきになったのは割れていた。一時間程でほとんど片付いた。マンションの部屋から出ると何人か、近くの人が集まって話をしていた。中には、怪我をしている人もいるようだが、みんな大丈夫そうだった。昼位になると、水が出なくなった。同じ階の友人宅は、用意がよく、地震の直後の水の出る間に、風呂に一杯水を張っていた。200ℓはあっただろう。飲み水はそこの水を使ったが、トイレの水や他の用途の水がないので、すぐ下を流れる住吉川に水をくみにいった。日頃は水がきれいな川であるが、にごっていた。がけくずれも対岸で起こっていて大きな石がころがっていた。水をポリタンクに20ℓ入れて、それをリュックサックに入れて階段を7階まで昇った。結構きつかった。それにアルコールの消毒液を入れ、トイレの水に使った。今度は、川の水を飲み水にしようということで、もう一度にごりの少ない所でくんできた。それを、コーヒーフィルターに通し、さらに浄水器に通すと、おいしい水になった。さすが、上水道の水源の水だなあと感心した。食事は、カン詰めや、その日の弁当になるはずだったおかずなどを食べた。朝はあまり食欲がなかったが、夜はたくさん食べた。夜は余震を恐れながら寝たが、あまり寝られなかった。

西田　達哉　　神戸市垂水区霞ヶ丘町

まだ眠っている6時前に地震がおこった。ちょっと夢見心地のような感じが最初はした。しかし、これは大変なことだとすぐにわかった。揺れている間は動こうとしても動けなかった。ふとんにもぐり、地震がおさまるのを待った。

揺れがおさまると親がかけつけてきた。家族の安全を確認したあと、二階に行こうとした。電気はつかなかった。懐中電灯を探してきてなんとか行こうとした。けれども、ガラスがわれており前に進めない。地震がおこったときにはスリッパも必要だと思った。

二階にあがってみると、水びたしである。余震がくるかもしれないがひとまず浸水を防ぐため水をふいた。外がガヤガヤしてるので、外に出てみると人が集まって被害状況を話している。どうやら火は出ていないようなので安心し家に入った。

ちょっとひと休みしていると、電気がついたようだ。そこで家を見回ってみると、食器棚から皿がとびでてわれており、ほかの色々な瀬戸物もほとんどわれていた。二階が水びたしだったのは、熱帯魚の水そうからこぼれていたようだ。本棚の本も散乱しており、これから家具や本も無駄なものはすてようと思った。水も出ないことに気付いた。

テレビやラジオをつけてみると、報道特番をやっていた。テレビにうつされる様子をみてい

ると、これはそうとうすごい地震だったようである。高速道路はたおれ、民家はくずれ、ビルはこわれていた。まさか、そこまでひどいとは思わなかった。家のまわりでは瓦がちょっとこわれているぐらいだ。見ためには、これはやっかいなことになったものである。今思いだすとそのときに食料を買っておくべきだったと思う。その日は簡単にその辺をかたづけて家族でかたまって寝た。

次の日あることに気付いた。トイレが流れないのである。まあなんとか一昨日のフロの水があったので、しばらくはやっていけるだろうが無くなったらどうすればいいのだろう。その時は途方にくれた。たびたびくる余震を感じながら不安な日をすごした。

三日目、テレビの給水情報をきき、水を何ばいも、もらいに行った。大変だった。これは日本の水道の作り方に問題があるのではないか、という気もした。だが何といってもトイレが一番こまった。まだ余震がする。

五日目、水が出るようになった。これはかなり早い方ではないだろうか。水が出たことにより、かなりくらしも回復してきた。余震もだいぶ減ってきた。だがテレビでは、一ヶ月ぐらいの間にまた、震度6ぐらいの地震がおこるといっている。

いつだったか忘れたが、担任の石井先生から学校の様子をきいた。1月30日集合とのことだ。しかし、学校に行けないのだ。どうしようか困った。今では友達の家に下宿させてもらっている。いつくるかわからない余震に少々おそれながらくらしている。

西村　大典　　大阪市東淀川区上新庄

寝ていた。揺れた。はじめ、ねぼけながらさけんだ。「おかん、何しよー！！」母がベッドを揺らしているのだと思ったからである。しかし、どんどんひどくなってきて、ようやく自分のおかれている現状が理解できるようになり、布団をかぶり、枕を頭にのせてゆれがなくなるのを待っていた。揺れがなくなり、時計を見ると、5時50分前。突然、阪急上新庄駅からサイレンが鳴った。未だ日が昇らぬ寒い闇にサイレンの音は不気味以外の何ものでもなかった。そして、電気をつけて部屋を見ると、ステレオの上に置いてあったテレビが床に落ちていた。仏壇のある部屋に行くと、不思議な光景を目の当たりにした。そこは和室で、床の間にかざってあった花びんは倒れていて、仏壇の中の花も倒れていたのに、昨秋に亡くなった曽祖母の、たてかけてあるだけの写真と愛用していた湯のみは倒れていなかったのである。その後、居間に家族全員が集まり、テレビをつけた。ニュースをやっていたのか、アナウンサーが必死で、落ち着くように！！と呼びかけていた。お前が落ちつけよ。家族は平然としており、父は便所に行って用を足した。水がでない、流れないのである。父は非難の的となったのは言うまでもない。「凄かったな」などと口にしながら、冷蔵庫に冷やしていた茶とごはんとつけ物を食べた。皆でいっせいに朝飯を食べたのは久しぶりだなと、一家団らんをしていた。神戸がどうなっているかも知らずに…。父は顔も洗わずに仕事に車で出掛けた。自分も、これくらいの地震で学校がないなんて思ってもみなかった。駅に行くと、電気もついておらず、電車が走っていないということを知らす放送がむなしくひびいていた。人々は公衆電話の前に列を作っており、こ

のへんで初めて自分は、あの地震がどれだけのものだったかを悟った。一旦家に帰り、母に頼まれて神棚を直す為に椅子にのっていた。7時38分。来た！余震である。家族は皆机の下などに避難した。自分はイスにのったままであった。先の地震よりこっちの方がこわかった。学校に電話をかける。つながらない。電車も通っていない。好条件だ！！と思って2度寝を試みた。目を覚ますと12時であった。テレビを見ると、神戸市長田区の上空からの中継をしており、ビルや家がもえていた。高速道路もたおれていた。テレビの特撮を見ているような感じであった。再び表に出た。家の前は駅である。上新庄駅が高架であり、その壁に亀裂が入っていた。チャリンコで1km四方を見て回った。塀がたおれているところが1、2軒ほどあったが、特につぶれた家屋はなかった。友達の家にそのまま直行。いけないと思いながらついつい遊んでしまった。家に帰ると、もう水も出ており、普通に晩飯を食べた。普通に風呂に入り、テレビーといっても燃えている長田区の中継ばかりであるがーを見てそのまま寝た。このころ、まだ実感がわかなかったが、日に日に地震のおそろしさをつのらせていった。こんなことはもう一生に一度あるかないかの、貴重な体験である。これを幸運というのか、不幸というのか、なやんでしまう今日この頃である。

菱谷　好洋　　　豊中市少路

なぜかあの朝は嫌な気分で4～5時くらいから目が覚めていた。前日までひどいインフルエンザにかかって寝込んでいたせいかもしれない。起きようか寝ていようか考えていると、突如非常な揺れを感じ、本棚が倒れてきた時のためにそばにあったアイロン台を楯にし、ふとんを厚くしてくるまった。20秒といわれているけれども10分は揺れていたような気がする。机の下に逃げこむべきか否かと考えているうちに揺れが収まった。揺れている間、食器棚が倒れて数百個の食器が割れたり、本棚が倒れたりしたのだから非常な音がしたはずだけれども、何も聞かず、何も見なかった。ただ、手に持っていたふとんのやわらかさやアイロン台の冷たさのみを感じていた。今でも考えるだけでまだ揺れているような気がする。さて、揺れが収まったのでとりあえず寝ていた部屋のふすまを開けてみると、そこは散弾銃を打ちまくったようだった。床の上にはガラスの破片がとびちり、オーディオのスピーカーも台から下に落ちてきていた。家族は皆無事であることを確認し、各部屋を見てまわった。マンションの4階だったので一戸建ての家よりも揺れが激しかったようだ。食器棚は倒れ、食器はほとんど全滅していた。テレビは台から落ち、鏡台は倒れていた。一番遠い自分の部屋を見に行くと、本棚が倒れ、数百冊の本がうず高く散乱していた。テレビをつけ、学校はまあなかろうと思ったけれども、7時ごろ友人のＩＡ20番のS.S.に電話をかけてみると、すでに家を出たといわれた。何とも生真面目なやつだと感動した。近くの店に食料や飲物を確保しようと行ったけれども、水はすでになかった。いくらか買って帰り、家の復旧に全力をそそいだ。一段落ついた所で近所の様子を自転車で見てまわった。あまり大きな被害はなかったようだった。商店街ではガラスが割れていて、道路にはところどころにひびが入っていたけれども、建物が倒れたりはしていなかった。驚いたのは、スーパーに行ってみるとパンのたぐいはともかく、ケーキ・スナック・ハムなど肉類

・卵・米etcあらゆる食料品が売り切れになっていて、昼飯を手に入れる事ができずに、皆手ぶらで出て来ていて、またその所為か、いつもはまずいといううわさでがらがらにすいている近くのレストランの広い駐車場が満車となっていたことだった。また、年中無休の看板を出しているビデオレンタル店も休業となっていた。駅前のデパートなどは元通りになるまでに1週間程度かかることになった。豊中駅周辺の古い家屋などは瓦がだいぶ落ちていたが、倒れてはいなかった。高速道路も寸断されているのか、家からつまっているのがよく見えた。

一日も早い復旧を願い、二度とこのような大災害の起こらないことを祈る。

平松　慎也　西宮市殿山町

当日、5時40分にいつも通り目覚ましが鳴った。それからわずか6分後の事だった。いきなりベッドの上から飛んではねた。ベッドの横の棚から時計と辞書が落ちてきて顔に当たった。それから電気が割れて、ミシミシという音とともに壁のさける音が…棚にあった懐中電灯もどこかに飛んでいった。また揺れると思ってしばらくうずくまっていると、となりの家の人から大声で「かたむいてるで～」との知らせが飛んできた。これは危ないと思って、ドアに手をかけるとドアが開かなかった。しかたがないのでドアをけって破ると、こんどは廊下が半分落ちていた。壁と廊下がくっついていなかった。あんな状態でよく逃げれたと思うが、がれきと化した家を下りて外へ出ると、ガスがピーとかいう音とともにもれていた。あたりを見まわすと、道路に立ちふさがるように家が倒れている所もあり、とにかくひどかった。そのあと近所からSOSの声がした。行ってみると2階建ての家が1階だけになっていた。何人かでその2階だった所に寝ていた子供2人を助けた。1階にも1人いるはずだったが、行ける状態ではなかった。呼びかけてみると「オーイ」との返事が。しかしそれはその家のとなりのオヤジだった。そのオヤジはまもなく死んだとの事だった。そして1階で寝ていた三男は生き埋めに…。とうてい助からないと思っていたらやっぱり死んでいた。あれだけ近くにいっぱい死体があるのは初めてのことだった。それからというもの、明るくなるまで服を着込んで待っていた。冷静に動こうと思ったが、町中がつぶれていて、どこかに行こうにも行けなかった。やはり誰にとっても初めての事。また、起こったばっかりでいったい何がどうなったか分からなかったし、これからの生活はどうなるのだろうなんて考えることもできなかった。今現在、その家は跡形もなくなって、家具などがどうなったか知らないが、自分が今までいたところがなくなってしまっているというのは何か不思議な気がする。それからというもの、ガス、水道のない生活が始まってしまった。それは今だかつて体験したことのないもの。テレビで見ていてかわいそうだと思いながらも自分は関係ないとあざ笑っていたものが、自分の身の上に降りかかってきてしまったのだ。飲料水・お茶は機転が早く、近くの自動販売機で全てなくなるまで買いつくしてしまったので当分困ることはなかったが、身のまわりにいる水・トイレ・風呂も使えないのでこの先いったいどうなってしまうのか？こんなことが続いたら絶対狂ってしまうぞとも思った。当日の11時にはファミリーマートに行った。自転車はその往復だけでパンクしてしまった。ファミリーマートでは1時間半並んでペットボトル・日持ちのする食べ物・テレホンカードなど、

コンビニで初めて１万円を越える買物をした。しかし、その頃にはもうご飯もミネラルウォーターも売り切れていた。多分、ファミリーマート自体で中に隠しているんだろうとも思ったが、とにかく何もなかった。昼過ぎにはこの災害の大きさに気付き、周辺の写真をとった。いつも通っている道、いつも見ている家、マンション、いつも見ている風景そのものがあの一瞬で変わってしまっていた。石垣のある家ではそれが全て道にころがり、道をふさいでいた。木造の由緒ある家ほど跡形もなくつぶれていた。心のゆとりもでてきたころには、今までどんなにがんばってもこの一瞬で終わってしまうことがあるのだなとしみじみ思っていた。一生に一度しかないこと、心に残ると思う。

間部　賢寛　　大阪市中央区高津

私は地震が起きた時当然のごと惰眠をムサぼっていたのだが、ふとんの中で気付いた時、これは大きいと思い、起きたら食器棚から沢山食器が落ち割れていた。（我が家は食器屋であるが割れないと云って売り付けているコレールが割れていた。）「地震やから少しおくれてもいいやろ」と思いいつも、よりおそく自転車で難波の駅へ行くと「御堂筋線、運転見合せ」とカンバンが出ていた。ヒマにまかせて近鉄、南海へ行っても同様であった。特に南海の難波は連休でスキーを楽しんできた人であろう、板をもった人が沢山居た。これを見て脳天気な私は「これは今日は学校サボれる」と思い家路についた。途中何度もゆれた。家でテレビをつけると神戸が震度６と云っていたので、これはすわ一大事、学校は大丈夫か？歴史研究家の山内氏の安否は？などなど色々なこと走馬灯のように頭の中をかけめぐったが、することもないのでその日はテレビばかり見ていた。次の日も同様の一日であった。そして運命の３日目、私は郵便局へ行き貯金をした。定額貯金である。利率は3.05％と表記された。その後西村大典君と共に学校へ行った。又何日かして西村君と西宮市上之町に在住の徳永浩二・裕幸兄弟の家を訪ねた。裕幸さんはこの日大学入試の書類をとりに学校へ行っているとのことだったので会えなかった。その日は浩二（弟）君と西村君と自転車で中学校（上葭原町）へ行き、その後永田君（西宮市川東町）の家へ行った。何故かは知らぬが山内氏の家へ行こうとなった。道のヒビ割れにもめげずに行くと、嫁はんが出てきてこんにちはと云った。私は緊張した。そう、赤面したのである。我々のその日はそんな一日だった。もう何日かは分からないが、ヒマで仕方ないので堺筋を自転車で行くと、北浜の少し南でビルのガラスが８～９割ないビルがあった。中之島公園では天使の像がたおれていて、彼女は「痛い」と云った。そこで私がよく見ると羽根がない。恐らく心ない者が持ち帰ったと思われる。色々書いてきたが、総括して云える事は「ひどかった」と云う事だろう。テレビには出ないが大阪市内でもひどい所も多々有る。この様な状態で日本の行方は大丈夫か？と思うと、現金なことに株がよく上がった。先日の日本経済新聞によると、大阪証券取引所、所謂大証の一部の不動建設は１月の始値と１月の終値は2.37倍になっているらしい。私も定額貯金などせずに株券を買えばよかった、と今更ながらに思う私であった。ここでこっそりと云うのは、今からならエフピコ（100株単位）がよいという事だ。話は変わるが、越木岩筋の両サイドに有るウサギさんの石柱がかなりたおれていたのにはがっかり

した。とりとめのない事を沢山書いてきたが、山内先生の奥様には無礼なことをして悪かったと思う。とりとめのない事なので、この反故っかみは焼きすててしまうべきであろう。我ながらまずい文だが重ねて金のない阪神電鉄は可愛相だ。もう書く事はない。

美内　慎也　　西宮市仁川町

地震で母親がたんすの上から落ちてきた物で、頭をケガした。その後全員無事を確認したあと、異常にガス臭く、もれている所があると聞き、不安だった。電気は地震後二時間近くすると元に戻った。が、水とガスが出ず、食事などは、カップラーメンやホットプレートで焼いたりした物が中心だった。また電話もまったく働かず、いとこなど親せきの事が心配だったので、公衆電話ならだいじょうぶだと聞き行ってみると、たくさんの人が列をなしていた。しばらくすると、少し行った所にある水道局に行くと水がもらえると知り、ありったけの容器を持って行った。そこはさほど混んでいず、知らない人が多かったらしい。そのそばには、新幹線が走っているのだが、その高架を見ておどろいた。その高架をささえている柱がひしゃげて、中の鉄鋼が出てきていた。またその高架自体を落ちている所があり、線路だけが浮いたように残っていた。近所の家も、半分ぐらいが傾き、そのうちの半分が倒壊していた。そこの住人らしき人達が荷物をガレキの下から運び出していた。自分の家ではトイレにこまるので、近くの農業用の水路の水をくみあげて、風呂桶の中にためることにした。しかし自分の家まで、高低差が30mぐらいあるので、少々きつかった。また、ガスが完全に止まってしまっていたので、その後一週間ぐらい風呂に入れずにいた。母親のいとこが梅田に住んでいるので、そこへひさしぶりに風呂に入りに行った。交通の足は電車がたよりだったが、近くの阪急は西宮北口から梅田までしか出ていなかったので、仁川から北口までかなり歩いて行った。電車に乗ると、武庫川をこえると、こわれている家があまりなかった。梅田につくとまるで別世界のようだった。ビルのガラスが少しわれたところがあるぐらいで、まったくと言っていいほど無事だった。そこでひさしぶりに風呂に入り、非常にすっきりした。あとは梅田のんびりとしたかったが、そうもいかず家路を急いだ。今も、水とガスが来ていないので、とても不便だ。今回の地震では水の大切さがよく分かった。

岩本　直章　　宝塚市南ひばりが丘

睡眠中に地震が発生した。物が９割倒れて、大きな音がしたはずだが、眠っていたのであまり聞こえなかった。上から物もふってはこなかったので、親が来なかったらまた睡眠にもどっていたであろうと思われる。倒れてくるものがない廊下に家族で逃げこんだ。さっそく親類の家に電話をかけた。電池式のラジオで、神戸のほうに大きな被害があったというので、芦屋に住んでいる祖母のことが心配であった。中山の親類の家にしか電話はかからなかった。友人のことも心配であったので、麻尾君の家に電話をかけて安否をたしかめた。我家はマンションなので、電気が来ないと水が出ない。おまけに夜が明けきらないので暗くて行動ができなかった。

1時間ほどして電気が回復した。水も出た。おまけにその時はガスも出た。中山の親類の家は何もたいしたことは起こらなかったようである。そして、我家のかたづけを手伝いに来てくれた。1日かけて家中のかたづけをした。芦屋の祖母の無事も確認した。気がつくとガスが出なくなっていた。一台しかない電気コンロをつかい、湯をわかした。翌日、家の周辺の様子を見てみた。付近のマンションはボロボロにくずれて立入禁止となっていた。中学校の様子を見に行くと、体育館の中に大勢の人がいるようである。校長先生が、「一人亡くなった」と話しているのを耳にはさんだ。後日、少し広い範囲に足をのばしてみた。多くの家が倒壊していた。家では、たんすなどが倒れないように応急処置をほどこした。現在もガスは供給を停止している。皿などは8割ほど割れてしまった。観音開きの戸などに、カギをつけて中味が飛びでないようにした。学校に電話をかけたが一向につながらなかった。

水谷　友哉　　神戸市北区鵯台

地震が起こってすぐ目が覚めて、停電していたので電気もテレビも付かないで困った。でも、電話はつながっているみたいだったので友達に電話すると、電車が止まってるから学校へは行かんでいいと言われたので、また寝た。正午頃起きてみると額と食器類が落ちて割れていたらしかった。もう電気も回復していたのでテレビを見ると、ほとんどすべてのチャンネルで地震のことの特集みたいだった。私の家は地震から3日後ぐらいから水が一度止まっただけで、後は水も電気もガスも通常と同じだった。地震の翌日は、午前中に近くのダイエーに買い出しに行ったら、すごい多勢の人がいたので一旦引き返した。道が封鎖されているので商品が全然ないかと思ったら、ヘリで商品が届いたので不自由はしなかった。私の町とほとんど隣接している長田区が大火事で、自宅から赤く燃え上がっているのが見えて、洗濯棹にはすすがたくさんついていた。兵庫区へ行く道路は、大渋滞で、三宮へ行く山麓バイパスも一般車両進入禁止で、どこへも行けなかったので、ずっと家で「食っちゃ寝」状態だった。まさか関西に住んでいてこんな大地震に会うなんて思ってもみなかったので、初めての地震の経験だったが、初めてこんなものをくらっては地震恐怖症になりそうだ。この地震が神戸・淡路を中心として東京から九州まで地震が響いていたので、改めて今回の地震の大きさを知った。学校に来たら多分作文書かせられるだろうなあとは思っていたが、まさか「世界史」の時間に書くとは予想外だった。それにしても一日の1／3以上が通学時間でつぶれるのでむかつく。いつもなら30分のバスが今ならなんと3時間、しかもずっと立ちっぱなしで、足がだるくてしょうがない。私の兄なんか自分の学校が避難所になっているから、もう3週間も休校で、これからのめども立っていないので家では暇そうだ。それに比べて父は、会社が大阪なのでここからじゃ通勤できないということで会社の寮に住み込み中。母は、朝10時頃からボランティアで頑張ってるので忙しそうだ。こんな事が後何ヶ月続くのかと思うと頭が痛くなってくる。本当にこんな経験は、一生に多くても一度きりであってほしい。

宮崎　達夫　　神戸市兵庫区下祇園町

自分の家は兵庫区なので揺れはひどかった。タンスがたおれ、仏壇もたおれた。一瞬にして停電になり、頭がパニックになった。その時、僕がとった行動は、外に出ることだった。何を考えて外に出たのかは忘れたが、とにかく外に出なければと思って外に出た。外に出ると近所の親どうしが何か話し合っていたので、僕は両親に知らせようと思って家にもどった。家にもどると父がラジオを探していたが見つからなかった。妹が電話をかけようとしていたが、どうやらつながらなかったみたいだ。母が僕におじいちゃんの所といとこの所に公衆電話でかけてきてとたのまれたので、僕は家から一番近い公衆電話まで行った。電話ボックスに入ろうとした時、見知らぬ人から、その電話使えませんよと言われた。僕は一度家に帰って自転車に乗って使える公衆電話を探しに出かけた。途中、今までなかった段差や地割れができていて、自転車をこぐのに苦労した。10分ほどすると、1つの公衆電話に10人ぐらい並んでいる所を見つけたので並んだ。20分ぐらいして電話をかけた。家にもどると母が「うわー、水もガスも出えへん。電話もかけられへん」と言っていた。この地震のすごさをだんだん実感し始めた。その日父は会社に行って、いろいろ情報をもらって来た。水はどこにくみに行けばよいかなど教えてもらった。次の日、水をくみに行ってみるとすごい人だった。並ぼうか迷ったけれど並んだ。でも水は全然足りないので、もう一度行って並んだ。結局その日は4回もくみに行った。次の日、はるばる垂水の方から友達が自転車をこいでやってきた。垂水の方はだいぶましと言う。僕の方は店も開いていないし、だんだんと食べる物がなくなってきて、昼なんかおやつのカールしか食べてないと言うと、「明日おれの家まで取りにこい」と言うので、行くことに決めた。次の日がんばって垂水まで行って、友達の家につくと、向こうの家の人が牛乳とおにぎりをくれた。それから垂水のコープに行った。運よくラーメンを売り出した所だった。まるで戦争のようだった。でも僕は30個ほど買えた。それから家に帰った。家につくと9時ぐらいだった。それから何日かたった。毎日暇でしかたがなかった。テレビもずっと同じことしかやっていなくて退屈だった。風呂ももう10日ぐらい入っていなかった。僕と妹がずっと風呂に入りたいといっていたので、父が有馬温泉に連れて行ってくれることになった。家を朝の8時ぐらいに出た。温泉についたのは11時くらいだった。それから1時間くらい並んでやっと入った。頭3回と体3回ぐらい洗った。ひさびさにさっぱりした。次の日、妹の学校が始まるので、送って来いと親に言われたので送って行った。交通の手段は、JRが通っていないかったので船で行った。ひどい込みようだった。つかれはててしまった。今は学校が始まったので、おばあちゃんの家にいる。気を使うので大変だ。はやく元にもどってほしい。

山川　寛之　　神戸市東灘区御影中町

5時46分！急に揺れ出し、目を覚ますと、部屋のたんすや棚が倒れてきて、思わずふとんをかぶる。揺れている中、棚をどけ、家族は大丈夫かと部屋を飛び出すと、来るな！と言われ、

その場にしゃがむ。揺れがおさまると、家族の無事を確認し、足の踏み場のない玄関へ行く。暗くて、どうしようもないので、しばらく、身震いしながら10分ほどいる。その後、外が騒がしいので、外へ出ると、そこは別世界であった。周りの家のほとんどが崩壊していた。ほとんどの家は一階がつぶれ、二階がのっかっていたので、生き埋めになっている人をさがし、救う。その後、出せるだけ衣服や毛布を出し、パジャマで出てきた人に貸す。その後、まさか関西にこんな大きな地震が来ると思わなかったというような話をし、車のラジオでニュースを聞く。magnitude8.2震度６（実際には７かもしれない）と聞き恐怖を感じる。その後、まわりがどうなっているかを見に行くと、JRの高架が落ち、辺り一面の家がほとんどつぶれている。近所から避難場所を聞き、行くと、マクドナルドのハンバーガー用のパンをくれた。その後、父は三宮センター街の店に行き、３人でかたづけを始めようとする。しかし、どの部屋も足の踏み場もなく、どこから手をつけていいかわからない。とりあえず足の踏み場を確保しようと、かたづけ始めるが気がめいってしまう。何とか足の踏み場は確保したものの気がつくと、ガラスがささり、血が出てくる。昼過ぎに、父が帰ってくる。三宮駅、ダイエーなどがこわれ、アーケードが落ちたのを知る。もうこの世の終わりかと思ったほどだ。腹がへるが、ローソンやスーパーはしまっていて、国道２号線も大渋滞だ。とりあえず、寝床を確保しようと、ふとんをほしてガラスを払う。かたづけている間でも、何十回と余震が続き、ほっとするひまはない。敷地内の土地が割れて段差が出き、家の下の方一周にひびが入る。寝床と足の踏み場を確保した後、リビングルームのかたづけに入るが、思い出の品や大切な家財道具、高価な食器やつぼが割れていると思うとはかどらない。少しずつ片づけるが、出てくるのはため息ばかり。へそくりは出てこない。携帯ラジオを見付け、耳を傾けると、被害のすさまじさを聞く。夕方になり、また近所の公衆電話をさがしに出ると、この家で、小学５年生の子供が生き埋めになっているのを聞く。直下型地震の恐しさ。無力な自分の前にふりかかる天災。何ともむごいものだ。結局、使える公衆電話は近くにはなかった。夜が迫ってくるにつれて、寒さが厳しくなり、空腹感が増す。昼間見た焼野原のことを考えると戦災のようだ。電気が付かないまま夜をむかえる。完全に真暗で、ダウンジャケットを着ていても寒い。ほんとうに電気、ガス、水道というライフラインとは貴重だ。懐中電灯で照らしながら、携帯ラジオを聞く。家族４人とも、パニックというよりは、茫然として、何も言うことはない。悪い夢を見ているようだ。結局、暗いせいか、すぐに眠くなり、８時に床につく。しかし、昼間聞いたヘリコプターの音やずっと鳴り続けている消防車や救急車、パトカーの音が耳について離れない。おまけに、余震のたびに、家がぎしぎしとなり、いつつぶれるかわからない状態だ。眼鏡も枕元においておくと、どこへ飛んでいくかわからないので、かけたまま寝る。疲れてはいるが、もちろん眠れるはずもない。時々うとうとと眠っても、すぐに目を覚ます。そうこうするうちに、15年11ヶ月の人生で最も長い一日が終わる。

由井倫太郎　　神戸市兵庫区菊水町

５：46僕は夢の中にいた。ジェットコースターに乗っていたと思った。地震の揺れの最後の

方にやっと家が揺れているとわかった。真っくらで時間は全然わからなかった。僕は深夜の2時くらいだと思っていた。妹が母親を呼んでいた。僕はベッドに寝ていて、何も倒れてこなかったので、たいした地震ではないと思っていた。しばらくして両親が僕達をよんだ。停電していて電気はつかなかった。うちには懐中電灯が2つあったのだが、どこにあるかわからなくて何も見えない状態だった。父が手さぐりで玄関までいき、ドアをあけた。周りの人達も外に出ていた。となりの人が懐中電灯を貸してくれたので、はじめて家の中がわかった。まず自分の部屋はたいしたことはなかったが、キッチンでは食器が9割方われていた。そして冷蔵庫の位置が動いていた。後で押してみたがびくともしなかった。居間では、テレビが落ちていた。みんな服を探して完全に着込んで、ラジオをつけたがこわれていてつかなかった。携帯のを探し出しつけてみると、最初大阪震度4、京都2…という風にきこえてそんなものかと思った。時計をみると6時前だった。日は出ていなかったが真っ赤な煙が見えた。少しはなれた所のように思った。しばらくしてラジオが震源地が淡路島で、マグニチュード7.2、神戸は震度6だった。被害状況は何もわかっていなかったが、たいしたことはないと思っていた。電池の予備がないので、すぐ自動販売機までいったが故障していた。コンビニなら開いていると思ったが駄目だった。それから食べる物を探した。六甲のおいしい水2ℓが4本と缶ジュースが1箱あったので安心した。それからスナック菓子などお菓子類がかなりあった。缶づめはシーチキンのが4個だけだった。前日の残りのごはんをおにぎりにしてリュックに入れた。7時ぐらいに電話が通じた。近くに住んでいる体の不自由な祖母を父が見にいった。そこはうちの病院の4階でうちより被害が少ないし、火の手がこわかったのでそこに逃げた。それから水が出ないことに気付いた。火事がおこっているのに、消防車のサイレンがまったく聞こえなかった。どんどんもえうつっていった。風呂屋の地下に重油があり、火が燃えうつると大変だと消防士がいっているのをきいた。消防士はそんな事はまずないと言っていた。小学校のプールの水を使ってバケツリレーをやっていたが、焼け石に水だった。1時間もしないうちに風呂屋も燃えた。そこら辺一帯は全て燃えて、僕達の住んでいるマンションの前までもう来ていた。火とマンションの前に道路があり多分大丈夫だと思っていたが、一応金庫などを車に運んで避難した。その火はそこ1ヶ所だけでなく少なくとも5つは煙のあがっている所があった。朝の9時頃停電がなおってテレビをつけた。死者10人程だったのでたいしたことなかったと思っていた。1時間たつごとに被害状況が発表された。だいたい100人ずつぐらいふえていった。夜になっても火は消えなかった。不安な夜を病院の4階ですごした。次の日起きてみると家の前ギリギリで火が消えた。テレビの被害状況がかなりの死者を報告していた。1日に6、7回は体の感じる余震がきた。余震はたいしてこわくなかった。うちの病院は、薬が足りないようだった。そして水も足りなかったので自衛隊を呼んだ。1トンの水を持ってきてくれたが、周りの人と使うとすぐなくなった。そういう日が5日程続いた。そうしているうちに水が出るようになり、市場も少しずつ開きはじめた。食べる物には困らなかった。風呂が一番欲しかった。10日程して銭湯があいた。あとはガスだけになった。それと交通機関も無茶苦茶になっていた。友達の家に下宿して学校に行っている。

山崎　良憲　　伊丹市南野

まだ夜明け前で、真っ暗だった時、熟睡していた私は地震の揺れを感じて瞬間的に体を起こした。最初軽く揺れていたのがしだいに強くなり、家がきしみ出してきた。ガガガガと非常に大きな音がして、私は「うわー」と叫んだ。家がつぶれるのではないかと思ったが、つぶれないでくれることを願って、じっと揺れがおさまるまで待っていた。10秒ほどしてやっと揺れがおさまり、私は同じ部屋で寝ていた兄と母に「大丈夫か？」と言いながら電灯をつけようとした。その時私は部屋の状態が普段と違っていることに気がついた。まずいくら電灯のひもをひっぱても電気がつかないのである。しかも、足元には大きな家具があるようであった。私は、この下には母親が寝ているのだと思い出した。もう一度「大丈夫か？」と言ったが返事がなく、驚いたが、よく耳を澄ましてみるとかすかに母の声で「タンスどけて」と言うのが聞こえた。タンスはかなり重くて、部屋は本当に真っ暗で何も見えなかったが、なんとか少しタンスを持ち上げて、母は少しのすき間からはい出て来た。兄はのん気なもので、地震があったことを知らなかったらしく、私が騒いでいるので「うるさいなあ。どうしたんや。」と言って起きたくらいである。その兄も、とにかく部屋は真っ暗だがいつもとずいぶん状況が変わっていることに気がついたらしく、驚いていた。私は「早く外へ出よう。」と言って下の階に降りようとしたが、タンスや本棚で出口をふさがれていて、なんとか上によじ登って外に出た。外にいると寒いので、外にとめてあった車の中で夜明けを待った。

私は、実は地震の起こった日の前日、かぜをひいていて、ふとんに入った時も熱が38度５分くらいあった。しかし、薬ものんで暖かくして寝ていたから、地震が起こった早朝の時には大分かぜもなおっていた。もっともその時は、かぜのことなんかすっかり忘れてしまっていた。それで車の中に避難した時に初めてかぜによる疲れが出てきた。車の中で家族といろいろ話していた時、ラジオで地震の早報があった。所々で震度４や震度５の地震があったらしかった。しばらくして、続報が入った。『神戸で震度６』私は驚いたと同時に、非常に心配になった。神戸には私の祖母とおばが住んでいる家があるのだ。「おばあちゃん大丈夫かなあ。」と母が言った。

しばらくして夜が明けて、その時はじめて家の状況がわかった。家の外装は壁にひびが入ったり、家屋瓦がずれていたりする程度であまり大したことがなかったが、家の中はめちゃくちゃだった。あらゆる家具は倒れ、食器はほとんどわれていて、本棚の後ろの壁が１ｍぐらい割れていた。家の中をすこしかたづけてから、祖母の家に電話をかけてみたがやはりつながらなかったので、車に乗って様子を見に行った。神戸に行く途中で最初に見たのは新幹線の高架の落下現場だった。それを見て「こんなに揺れたんだなあ。」と改めて驚いた。他にも様々な被害状況を見たが、その中で最も恐ろしかったのは阪神高速道路が横倒しになった現場だった。私はそれを見た瞬間背筋がぞっとした。多くの通行止めがあり、なかなかたどり着くことが出来なかったが、なんとかして到着することができた。家は奇蹟的に無事で、祖母もおばも無事だった。

今は、水もガスも出てなんとか今まで通り暮らしています。

山本　貴之

（震災当時）　西宮市能登町
（現　　在）　高槻市北園町

AM５：46当たり前のように２階のベッドで快眠していたら、家の下を牛の大群が通っていくような縦揺れに気が付いて反射的に布団をかぶった。するとその３秒後には家全体がふり回されているような横揺れがきて、ベッドの上に作っていた棚からいろいろな物（夏物の服の箱や靴、ラケットetc…）が落ちてきて埋まってしまった。強い揺れがおさまってもしばらくは細かい揺れが続き、起き上がれなかった。しばらくしてから布団をけとばして上にのっている物をどけてから階段の方へ行った。その時両親は下にいて朝飯を食べていた。もし２階で寝ていたらたんすとテレビが倒れてつぶされていたらしい。弟と妹は２階で寝ていたが、戸を開けたら出てきた。後から見たらガラス片をかぶっていたらしいが大丈夫だった。地震で家が倒れかかっているため、ドアも窓も開きにくかったが玄関は体当たりしたら開いた。明るくなってから見ると横の壁がはがれて木がむき出しになっていて、柱がすべて傾いていた。横には祖父と祖母の家があって今は建てかえている最中だった。１階部分が完全に傾き、今壊している最中だ。その建てかえのために祖父と祖母は近所のマンションに住んでいて無事だった。また家の裏通りでは古い住居が並んでいたがすべてつぶれた。一番悲惨だったのは地震当時かぜをひいていた。熱も39′をこえることがあった。だから４～５日フロに入ってなかった。そこに〔’95 1/17 AM5:46〕がやってきた……。水も出ないガスも出ない……。後は想像にまかせます。

横手　広樹

西宮市門戸東町

前の日から39′の熱で寝こんでいた。17日、目がさめると家が揺れていた。様々な物がとんできたが、幸い当たらなかった。祖父が全員の無事をたずねていたが、妹の返事がなかった。心配していってみると、何事もなかったかのように寝ていたようだった。その後、懐中電灯でてらしながら階段を下りてがくぜんとした。何と家が傾いて、平行四辺形となっているのだった。古い日本建築のため、土壁はすべておち、柱もななめになっていた。家の外に出てみて、向かいの家がもっとひどく壊れているのを知った。明るくなってからは急がしかった。買い出しに39′の熱の体をひきずっていったものの、買える物はお菓子ばかり。もうその日は観念して、電気が通っていることを幸いに、つぶれかけの家の中でテレビゲームをした。そして、夕方に甲東小学校に避難し、そこで床についた。が、せきがでて眠れず朝５時ぐらいから起きていると、ふと呼びだしがあったので行ってみると、母のいとこが色々と食料をもってきてくれていたのだった。もう感謝感激雨あられといった感じだった。翌日からは地獄だった。家の中の使える家具を何日にも渡って運びだしつづけた。（今もまだやっている。）そのため、病状が悪化し、いとこの家に避難後はぶっ倒れてしまった。しかし今ふり返ってみると17日はおちついたものだったと思う。よくもまあいつくずれるかわからず、ガスもれしている家でのんびりゲームをしたものだなあと思う。一生に一度の体験ですむことを祈りたい。

P.S. 西宮市はなめているのか。神戸市や池田市などは市から見舞金がでているのに、西宮市は家が半壊していても義援金の10万円しかもらえないとは何事だ。被災者をもっといたわれ。

安部　大輔　　西宮市能登町

地震があった時、僕の寝ている上に本棚がたおれてきた。しかし、ふとんをかぶっていて、本棚がベニヤ板でできていたから、痛くなかった。自分の部屋は本棚の他に机の棚と戸棚がたおれてきた。この戸棚はガラスが壊滅状態だった。まだ暗かったがなんとかマンションの外に出て明るくなるのを待った。日が出てきてから家の中を見てみると、食器棚がたおれていて食器の半分以上が割れていた。まずここから家族全員でかたづけ始め、昼過ぎにはかたづいた。この日はずっと部屋をかたづけていた。父が夕方ごろに大阪にある会社へ出かけ、帰りに、電池やカップラーメンを買ってきた。マンションには色々な所にひびが入っていたが、後に調べてもらったら別に大したことなかった。マンションの周辺は倒壊した家などはなかったが、少し遠くへ行くと、いくつか倒壊していて細い道などは通れなくなっていた。また家から西宮北口へ行く途中には様々な家が全壊や半壊していた。作りかけの家がかたむいていた。この家は二週間後にはなくなっていた。テレビでも言っていたように、つぶれた家のほとんどが古い家だった。いつもいっている散髪屋はかたむいていた。家は電気はあるが水は出ない。

石田　有岐　　西宮市柳本町

僕はまだ終わっていない冬休みの宿題を、17日午前3時半までやっていた。1995年1月17日、午前5時46分。まさに寝鼻におそわれた。僕には何が起こったのか、本当に瞬時には分からなかった。ただ物が、おそらく大きな棚が僕の上にのしかかっていた。僕は容易に抜け出ることができた。起きて見ると周りは真っ暗。物は散乱しているようで、歩くこともうまくできない。すると、父の「大丈夫か！」という声が聞こえてきた。僕は眠気が冷めたが、状況は全くと言っていいほど理解できていなかった。その時母の声もしたのだが、母は何かの下敷になっており、僕がそれをどけた。姉の部屋は本棚が倒れたようで、本の下敷になっていた。声が聞こえたので命は無事だとわかった。姉の部屋の扉は開かず、ベランダから入った。その時、父は靴を持ってくるように指示した。ガラスがかなり散乱しているからだ。僕は家族の分を持って行った。家の中もその時は靴で入った。姉の部屋に行くと、父が必死で姉の上に乗った本をどけていた。僕は恐怖と寒さでふるえていたようだった。ベランダへ15分ほどかけて本を出し、姉は助かった。傷もないようだった。その後、父はガスの栓をしめるようにマンションの管理人室へ向かった。僕と姉と母は玄関にいた。その時、僕はほとんど寝ていなかったせいか気分が悪くなった。幸運にも服はとれたが、ものすごく寒かった。夜が明けるまで僕達3人は何度も「大丈夫？」と言い合った。夜が明けるまで僕は吐気をもよおしたためにぐったり座っていた。父はマンションの1件1件、ガス栓を調べていた。焦っているためか、父と母がけんかになったりもした。やがて空が明るくなり始めた頃、外を見るといくつもの煙。そして間近で火の粉

が上がっていた。近所の人で「助けて下さい！」という声も耳に入ってきたが、その時は自分の事で精いっぱいだった。しばらくして、父がもどってきて、コンビニへパンを買いに行くように命じた。僕は外に出た。まさに惨事だった。たくさんの家がくずれ落ち通れない道もあった。1件目のコンビニでは、レジが使えないという事で鍵をしめていたが、2件目で6コのパンを買えた。後々パンを買っていて良かったと思った。建物（僕の家）は大丈夫だったようなので中に入った。足の踏み場もない状態だった。外を見ると煙が上がっている所が約7件あった。僕達はその日のうちに寝る場所を確保するために、必死でかたづけた。タンスなども全て倒れていた。よく見ると父が生きていたのは本当に奇跡のようだった。食器類は約8割、割れていた。ゴミはゴミ袋15コ分くらい出た。ようやくリビングルームを確保できた。幸運にも電気を使えるようだった。水、電話、ガスはダメだった。ラジオと懐中電灯を枕元に置き寝た。
2日目は父の事務所である部屋をかたづけた。水はマンションのタンクからもらった。食物はカップラーメンだった。2～3日後、近くの西宮中央体育館で食物と水を供給してくれるというので取りに行った。近くに体育館があったため、食料と水は取りに行きさえすれば、困ることはなかった。僕は水を運ぶ係になって、エレベーターが使えないので階段を上がった。しかし、ある程度片づけると、昼間は暇だった。ボーッとしていてはいけないと思い、25日～28日は中央体育館に行ってボランティアをした。僕はほぼ管内放送と、物資運びをした。見ていると、いろいろな人間がいた。非協力的な人もいれば、ボランティアにも親切にしてくれる避難者もいた。実に貴重な体験だった。そしてこのような時は、人と人が助け合わなくては生きていけないということをまざまざと思った。もう2度とこんな悪夢は起きないことを願う。

遠藤　喜郎　　神戸市須磨区北落合

最近僕は不眠症で、寝ていても目を開けてボーっと天井を見ていることが多い。地震があった日もボーっとしていた。地震が起きる10秒前ぐらいも、いつものようにベッドの上で寝ながらボーっと窓の外、細かくいえば空を見ていた。すると天井につるされた電灯がカタンカタンといって、急に揺れだした。最初訳が分からなかったが、地震なんだということに気付いた。二階で弟といっしょに寝ていた。横にいる弟を見たら飛びはねているようだった。一階から父の「よう、ゆう、早く降りて来い」という言葉を聞いて、すぐ降りて行こうとした。弟が完全にパニックッていた。僕は意外と冷静で、“すごい恐い夢を見たんじゃないか”という思いがふと頭をかすめた。弟が僕の後につづく形となった。ドアを開けようとしたら、弟がパニックッていたせいかすごい力で僕を押し、ドアに顔をぶつけられた。まるで力士のような力で僕を押してきて、床に落ちている物でこけそうになった。「だいじょうぶだから、だいじょうぶだから」と僕は弟に叫んだが、あいかわらず、すごい力でおしてきた。階段を降りる時も押されて、落ちそうになりながら、なんとか一階に降りた。その時、僕は完全に弟に対して、怒り、どなって、ビンタをしたが、まだ弟はパニックッていた。とりあえず、家族全員（兄も来て）で、和室の父と母のふとんの中にもぐり込んで、地震の揺れと恐怖にたえた。父は地震が来るたびに「キタゾ！！」と叫んで、僕らを守った。その時の父に対して、初めて父にあこがれ、

すごい人なんだと感嘆と尊敬の気持ちでいっぱいになった。

後で地震は20秒間だったと分かったが、そんな程度の時の流れじゃないようにも思った。余震がだいぶおさまってから、父の指示で靴下をはいたり服を二枚着たりした。とにかく寒く、暗かった。父はガレージに行ってカーラジオで情報を聞いてきた。震源地は、淡路島ということ、須磨区・垂水区・兵庫区の辺が被害が大きいということだった。(後でこれはあまり正確な情報ではないと分かったが)

父は神戸市役所の防災課に勤めているということが、この時何よりもたのもしいことに思えた。父はその日明るくなったぐらいから役所に出かけた。神戸市対策本部の幹事のため、何回かテレビに出て、説明していた。とてもカッコよかったし、誇りにも思えたが、いつも聞きなれている父の声と、顔を見ることが少し恥ずかしかった。

最後に父に一声「親父、仕事を頑張って、早く神戸の街を元通りにするよう頑張ってネ。」

岡田　俊治　　神戸市須磨区横尾

地震が終わって電気をつけようとして停電に気付いた。電池でラジオをつけて聞いて、震度6だったのを知っておどろいた。家の近辺は何ともなかったので、電車が動いているか駅まで見に行くと、停電で動いていなかったので学校が休みだと思って家に帰った。それから石油ストーブを出して来て、それで暖をとった。それから外に出ると親指ほどの灰が降って来ていた。

金宮　健翁　　大阪市淀川区田川

その日は僕は自分の部屋で寝ていて、家族はとなりの部屋で寝ていました。午前5時46分地震が起こった。僕はすぐ目が覚めた。上の電気を見ると、ものすごく揺れている。隣の部屋では妹が大声をはりあげていた。僕は体を起こそうとしたが起こすことができず、声も出なかった。すると自分の横にあるたんすの上にあるガラス張りの人形が倒れてきて足元で割れた。幸い季節は冬で布団をかぶっていたのでけがはしなかった。もしその日、頭と足とを逆にして寝ていたらたぶん顔に大けがをしていたと思う。そして地震がとまりとなりの部屋にいくと、父と母と妹がいた。幸い誰もけがはなく無事だった。でも停電になった。時間はまだ朝はやいので明るくなく、懐中電灯を捜したがなかった。しばらく家族全員で同じ布団でくるまっていた。父は外に出て近所の様子を見ていた。30分ぐらい立ち電気もとおった。近所でも崩れた家はほとんどなかった。家の中もガラスが少しこわれたぐらいで、大したことはなかったのでよかった。

川本　琢也　　神戸市垂水区学ヶ丘

1月17日　午前5時46分まだ寝ていた。気がついたときにはふとんにもぐりこんでいた。頭のすぐそばには、たんすがあり、その上にはアルバムなどいろんな物がのせてある。それらの

物がすべて頭の上に落ちてきた。また足の横には机があり、机の上の本を立てているところが足の上に飛んできた。目が悪いからなんにも見えてなかった。地震がおさまると、懐中電灯を捜し出したけど、電池がなくて使えなかった。まわりの人がみんな外に出ていたから、外に出たが寒すぎたから車の中で夜明けをまった。須磨や長田の方は火事があったので、東の空は赤くなっており、雪といっしょに灰のようなものが降ってきた。食器棚や本棚がたおれて、食器は全滅だった。電気はつかなかったが、水もガスも出ていた。昼になると電気がついた。まずテレビを見ると、すごい状況が映っていた。最初に見たときの死者数は22人だった。1時間に100人ずつぐらい増えていった。家の中のかたづけが終わると、自転車で電池を買いに走った。4店ぐらい走ってやっと買えた。夜になると家のまわりがやけにガスくさかった。それから寝た。朝起きるとガスがとまっていた。昼になると水がとまってしまった。この日から、給水生活が始まった。いまだに水もガスもこない。

河野　雄介　　宝塚市千種

地震発生と共に真上からスピーカー等が降ってきた。まずその痛みで目覚め、次に激しい揺れを感じた。まず地震というものに恐怖し、次にやっかいなことになったという怒りを感じた。二階で寝ていたので、一階におりようとしたら何かに頭をしたたかにぶつけた。それはそんな場所にあるはずのないたんすであった。暗闇で階段がどこにあるのかもわからず、手さぐりで進もうとするが、足下にちらばる本やCDなどに足をとられる。やっとのことで階段をおりたが、1階の台所は凄惨だった。家族は全員無事であったが、犬をたんすの下に寝かしていたので、心配になって行ってみると、たんすは何かにひっかかってとまっていて、結局犬も無事だった。被害状況を知りたくて、電池式のラジオをつけたら、死者42人ということだったが、電気が復旧したのでテレビをつけてみると、1時間に200人の割合で死者の数が増えていき、始めてこの地震の実像を知った。その後、学校に連絡をとろうにも電話も通じないし、不安な時間をすごした。食料確保のために、近くのローソンに行ったが、もう何も売ってはいなかった。日頃から災害に対応できるように準備しておくのは大切だと思った。このことは家族にも当てはまるし、国の行政にも当てはまると思う。災害対策に多額の予算をとっていたとしてもそれが即実践に結び付かなければいけないと思った。しかし、それを国の行政のせいだけにすることもできないと思う。個人々々の意識が大切だと思う。

小柳　謙一　　宝塚市光が丘

午前5時46分頃、就寝中グラグラと揺れはじめ、目を覚ます。地中がうなるような感じで揺れが続き、たんすの上においてあった物が落ち、本棚も倒れる。日も出ていず、地震と同時に停電になったので、懐中電灯を捜しだす。次に、乾電池を捜しだしてラジオをつけて、情報を得た。このとき、震源は淡路島北部でM7.2、神戸で震度6と知るが、周辺の状況はつかめなかった。次第に明るくなり、部屋の中の様子も分かり出す。外に出ようとして窓を開けたとた

ん、ガスのにおいが鼻をついた。外では「ガスもれ、ガスもれ」と叫ぶ人がいた。すぐに外のガスの元栓を閉じる。すでに家の中のガス栓は、地震直後に父親が閉めていた。外ではガスの臭いがひどいので、しばらくの間、家にいることにする。犬を家の中に入れ、あいかわらず停電で、テレビをつけてもうつらない。水、ガス、電気すべてが止まっている。周辺の状況を見にいくため、ガスくさい中を歩き、友達と会う。大谷石でできた門などは全部つぶれ、道路には亀裂が入っていた。木造の家は壁がはがれ落ち、瓦は落ちていた。プレハブの家はまったくびくともしていなかった。すでにケガ人も出て、病院に運ばれた人もいた。病院はケガ人でいっぱいで医師が一人で、まったく役に立たないようであった。そのような状態の中、昼すぎに停電がなおり、テレビを見て、神戸の震災のひどさを見てあらためて驚く。水も止まったままであったために、風呂の残り湯でトイレを流す。その後、給水車は2、3日来なかった。夜になり、中学校に避難。しかし、その理由がよく分からない。他の地域と同じように行動しただけのもののようだと思った。ただ寒い学校に行かされただけであった。まったく無意味な行動であった。いったい誰がこんな指示をだしたのか、非常に腹が立つ。学校にいても、情報などもないため、見切りをつけて家に帰る。客観的に見るとまさに滑稽である。

小寺　崇士　　尼崎市西昆陽

1月17日、朝、5時46分。僕は地震の揺れで目を覚ました。同時に“ガシャン、ガシャン”と食器の割れる音。そして僕の体に2棹の整理だんすがたおれてきた。僕はたんすの下じきとなってしまい、約30分後父親によって助け出された。僕は近くの木造二階建ての祖母の家が心配になり、6時30分頃家を出た。うす暗い外の景色は一変し、新幹線の線路が落下しているのに気がつき、また道路は地割れを起していた。祖母の家に着くと、祖母は家の前にたたずんでいた。なんとか難をのりこえたらしい様子だった。祖父の家は大丈夫であったが、祖母のまわりの家には、数軒完全につぶれてしまっているものも見かけられた。僕は祖母の無事を知らせようと電話をしようとしたが、つながらないことに気付き、家へと自転車をはしらせた。明るくなった家の中を見て僕はさらにおどろいた。母は断水になるのではと思い風呂に水をためようとしたが、もうすでにマンションのタンクの水はかれていた。ガス、電車は当日、電話も4、5日するとかかるようになったが、水は2週間たった今でも出ていない。朝8時頃、電気が通うようになり、テレビをつけてみると、すべての番組が地震の情報でもちきりだった。そしてそのころ初めてこの地震の大きさを知り、また今までなれ親しんできた神戸の町並をわずか数秒にして取りさってしまったことを知った。親類の無事（数名は軽いけがや骨折）を確かめ、家のかたづけを始めた。たおれたタンスをもち上げ、割れた食器もかたづけた。今まで生きてきてこんなに家事を手伝ったのははじめてのことだと思う。そして、その日から近所にくる給水車の所への往復が日課となっていった。一つ助かったことに、家の近くの銭湯は地下水を使用しているため営業しているということだ。これによって水くみなどで被れきった体をいやすことができた。被れた一日であったが、今まで生きていて心に残っていることを上げろといわれると、たぶん上位にあげることができるだろう。

境内　貴志　　西宮市上甲東園

すごい揺れで目が覚めると、机の上の本とかが、飛び散っているのがわかった。揺れ終わると、家族の声をかけ合い、全員無事なのがわかった。起きて立つと、地面一帯に本がちらかっていて、本棚が倒れていた。それから、服はプラスチックケースみたいな所に入れているので、そこから上着と靴下をとりだしはき、ふとんにくるまって一階のリビングの所にみんな集まって、明るくなるのを待った。ラジオを聞いていると171号線と阪急の高架の所の道路が、下に落ちているとかいうのを聞いて、非常におどろいた。夜が明けて、明るくなると、家の周辺を少し見にいった。ほとんどの家の瓦がおちたり、コンクリート塀などが、倒れていたところもあり、そして傾いている家もあったが、幸いにも全壊している家はなかった。家に帰ってくると、まず台所は食器が落ちてガラスが割れていて危ないので、そこから整理しはじめた。又、ミネラルウォーターや食料なども出した。水に関しては、家にペットボトル6本があった。昼から、新幹線の橋げたが落ちているときいたので見にいくと、むちゃくちゃひどかった。全壊している所が何ヶ所かあった。六階建ての建物も傾いていた。コンビニや酒屋には、たくさんの行列があった。水は幸い近くのテニスコートの水道から出ているということを聞いたので、そこに行った。食料は最初の日は、家にあるもので何とかしたが、2日目は近くのスーパーが開いたときいたので、そこに買いに行った。電気がついたのは夜の3時半、それまではろうそくをつけていた。電気、水、ガスがない生活は非常に不便であることがはじめてわかった気がした。死者が5000人にも達する中で、家族や友達とかが無事であったことを幸せだと思う。今、現在、水は出るようになったが、ガスはまだなので1日も早く直してほしいと思う。この体験を今後の教訓にしたいと思う。

佐藤　隆太　　伊丹市春日丘

僕は地震が起きたことに全く気付かなかった。親が僕の名前を大声で呼ぶので目が覚めた。始めはもう起きる時間なのかと思い「起きてるよ～」などとほざいていたが家が、ガタガタと揺れているのを感じて地震だとやっと気が付いた。自分の体をふとみると、タンスが乗っかかっていた。さらに右手にある内壁が倒れて僕の上におおいかぶさっていた。しかし2コ同時に倒れて来たらしく、ちょうど互いに支え合って「人」の字になっていたおかげで何とか抜け出せた。階段はとくに被害がなかったので僕は姉と母（父は入院中）と共に下に降り、犬を連れて外に出た。外には近所の人がたくさん出て来ていた。特にけがをした人もなく、全・半壊した家もなかった。しばらくこの地震についての話をしていたが、近所の人のラジオでやっと正確な第一報が聞けた。それによると神戸で震度6で、伊丹に最も近い大阪では震度4であったが、もっとあっただろうというのが皆の一致した意見だった。明るくなるのを待って家に入ったが、その時に関して言えば想像を絶する惨状であった。特に一階の台所は食器棚が倒れ、中の食器が割れて全て散乱していた。コンロの上に置いていたやかんや鍋は全てひっくり返って

中身をぶちまけていた。TVが落下もせず、そのままであるのが奇跡であった。その奥の和室は本棚が倒れているだけで、奇蹟的に2つあるタンスは倒れていなかった。しかしその本棚はもし父がいれば、頭があった所に倒れており、ぞっとした。2階に上がると洋室の方はワープロもCDラジカセも転落せず、本棚も倒れていなかった。しかしガスも水も電気も停っており、台所が例の惨状のため、食事をとることが出来ないので、とりあえず僕は買い出しに出かけた。そこで僕はあの阪急伊丹駅の惨状を目の当りにしたのである。いつも見慣れ、そして通い慣れた駅は見るも無惨に崩壊していた。コンビニに到着して、パンと紙コップと紙皿をとりあえず購入したが、ラジオを聞くために必要な電池(単一8本)はさすがになかった。家に返って片付けをしたが床にガラスの破片が飛び散っており、スリッパをはいてやらなければならなかった。しかもそのとき気が付いたことであるが、大事なものが多数入った押し入れの引き戸が完全にずれて開かず、あわてた。地震のおかげで家はガタガタになるわ、水道管は破裂しまくるわと、かなりひどい目にあった。

白井　哲哉　　神戸市垂水区高丸

地震の起きる5分前ほどに、フッと目がさめた。まだ5時半だったのでまだ寝れると思い、もう一度寝かけた時、急に家が揺れ出した。初めの数秒は何がなんだかわからなく、その後地震だとわかった時、まずフトンをかぶった。そしてフトンをかぶっててはいけないと思い、外に出ようと思い起きあがろうとしたころに、地震はやんだ。もし自分の家がつぶれていたら、自分は家の下じきになっていたと思う。それで部屋を出るときに家族にむかっていろいろ叫んだ。そのとき父の声はかえってきたが、母の声はかえってこなかった。後できくと母は何がなんだかわからなくて、ボーとしていたらしい。その後、ぼくはベンチウォーマーを取り出して、それを着、家族3人で家をとびだした。父はすぐに懐中電灯を取り出してきた。そしてぼくは家の近所にある祖父母の家にあわてて行った。祖父母の家はかなり古いので心配だった。祖父母の家に行くと中はガスくさい所がいくつもあった。祖父母の家は外見はだいじょうぶだったが、どのドアもあかなくて入るのに苦労した。また祖父は地震前にもう起きていたが、部屋にとじこめられていたので、ふすまをこわして何とか出れた。懐中電灯はその家にはあり、すぐに見つけたが、なぜか電灯がつかなかった。

しばらくして夜が明けてきたが西の方で火事があったらしく、その煙がものすごい量で空を舞っていた。その煙のせいで太陽の光が照らされなくて、もうかなり明るいはずなのにうす暗くてぶきみな天気だった。明るくなるにつれて家の中をかたづけはじめたが、時間がたつのがとても早く感じられた。

2日後か3日後どちらか忘れたが、何人かの友人からどんどん電話がかかてくるようになった。名も知らない親せきからも電話がかかってきた。そしてB組の吉田君と三ノ宮まで自転車で見に行った。垂水から国道2号線にそってどんどん東に行ったのだが、垂水はまだかなりましな方で須磨あたりから、古い家はほとんど完全につぶれていて、須磨をこえて長田区に出ると、テレビで見るよりはるかにすごかった。その場所にいると、冗談が言えなくなるほどひど

い状態だった。あたりは焼け野原のような場所もあり、そこらじゅうに灰がとびちっていて、こげくさいにおいがし、迷彩色の車がものすごい数で並んでいた。

三ノ宮あたりにつくと、まわりはほどんどビルだが、無傷のビルなどはほどんどなかった。テレビで言っていたように、途中の階がつぶれているビルがかなりたくさんあった。また道は暴走族のようにバイクやゲンチャリがいっぱいで、中国のような感じだった。三の宮のあたりの公衆電話はたいへん混雑していたが、テレホンカードを入れても度数がへらず、ただだった。帰りは山の方を通って帰ってきたが、細いぬけ道のような所も車でいっぱいだった。また山のふもとの道では、山の土がだいぶくずれてきていた。

家の近辺では飲みものや食糧がなかなか手に入らなかった。とくにごく普通のカップラーメンがとてもおいしく感じた。この地震で水のありがたさがよくわかった。とくに風呂と便所は欠かせないことがよくわかった。風呂はガスが通じないので今だに入れないが、便所も毎回水を入れるのはとてもたいへんだった。また地震の後の火事がいたるところで起きていたので、自分の家も火事がいつ起きるかとても心配だった。

十石　和彦　　西宮市甲風園

物すごい揺れを感じて起きたときには、下半身はすでに本に埋まっていた。頭の上に何も落ちてこなかったのは、幸運だったと思う。机の上に置いていたラジオがこけて、電源が入り音楽が流れていた。まだ余震が続いていたが、布団から飛び起きた。しかし、窓をしめて寝たはずなのに、異常なほど寒かった。目をこらしていると部屋中の棚、たんすがほとんど倒れていた。たんすで区切られた向こうに妹が寝ているはずだったが、見えたのは倒れたたんすだけだった。その時色々と声を出したようだが覚えていない。しばらくして、父の声が聞こえ、次いで母の声も聞こえたが、2人共たんすや、テレビの下じきになって、部屋から出ることも難しいようだった。少し落ち着き、近くにあったジャンバーを着込み、懐中電灯を探した。いつも近くの引き出しに入れているはずだったが、見つからなかった。その時は、部活で使うために、学校に置いてきていたとは、少しも気付いていなかった。そのうち、懐中電灯を手に父と母があらわれ、3つのたんすの下じきになっていた妹を助け出し、父は壁がはがれて通行困難な階段を降り、祖父母の安全を確かめに行った。外から聞き慣れた声が聞こえてきたので、雨戸を開けベランダに出た。雨戸はいともあっさりと開いた。やはり、向いのおばさんの声だった。家が倒壊し、おばあさんとご主人が生き埋めになったというのだ。だがその時は、部屋からも出られない状態で、なすすべもなかった。たんすを踏みこえ、本をどけながら、家の外へ出たときは、まだ暗かった。だが、向かいの家が倒壊しているのは明らかだった。東西両方で火の手が上がっていた。明るくなり、周りが見えるようになって、初めて惨状が眼に入ってきた。向いの家は倒壊、100mほど先の家が燃えており、10人くらいの人がバケツリレーで消火していた。両どなりは無事だったが、同じ道に面した家では、2階のみが、崩れている家もあった。向かいの家でも近所の人達が集まり、救助活動が始まった。1時間程して、おばあさんは助け出されたが、ご主人は素人の手では難しく、昼過ぎになってやってきた救急隊に助け出された

が、病院で息を引き取った。向かいの家のことが一段落するともう夕方近くになり、夕飯の準備をすることにしたが、カップめんと餅ですました。水は少し買い置きがあったのがせめてもの救いだった。火鉢もかなり役に立った。夕飯が終わった後は、すぐに全員居間にひとかたまりになって寝た。

砂原　星　　神戸市東灘区住吉山手

5時46分、地震が起こった。阪神地区で地震が起こることは信じ難いが、自分は、大きく揺れた瞬間、大地震だと分かった。僕はすぐ布団を頭までかぶった。と、その時、自分の上に本棚がたおれたのが分かり、ガラスの割れる音もした。だが、正直、物が自分に当たって死ぬより、自分の家ごとつぶれるのがこわかった。自分の家はがけっぷちにあるので、家が落ちないかとそればかり心配だった。

とりあえず、揺れがおさまると、それぞれの部屋から家族が出てきた。家は落ちるかもしれないので、みんなで外に出たが、まだまっ暗で、周りにも人影はなかった。後で思えば、僕はスリッパははかないので、ケガをしなかったのが不思議だ。

時間と共に近所から次々と人が出てきた。僕も少し落ちつくと、家の中に、懐中電灯を取りに行ったが、家の中はメチャクチャで、少し時間がかかった。周りが明るくなるに従って、そのひどさが分かってきた。後で分かったことだが、家のあたりは、元来、土地が強いらしくて周りにも、完全につぶれた家はなく、ほとんどが傾くぐらいだった。しかし、隣は家ががけの方に傾き、プールのあった向いの家は、プールごと庭ががけの下だった。さらに少し歩いていくと、30cmほどズレた所があったり、電柱がたおれたりしていた。もっと驚いたことには、自分の家は、少し山の上なので、神戸の町を見渡せるが、多くの火の手が上がっていた。長田区までは見えなかったが、東灘区や灘区でも、かなりの火があった。

12時くらいになって、ようやく家に入って、かたづけを始めたが、それはまあ悲惨だった。ピアノが１m以上動き、ほとんどの物が落ちていた。自分の部屋はすぐかたづいたが、家は２週間ほどかかった。

高木　陽一　　西宮市西平町

グラ、グラときた時、自分は目を覚ました。それゆえコンポのスピーカーが倒れてることも知らず、机の本棚の上のプリント類が落ちていることも知らず、たいした地震だとも思わずに眠りにつこうとした。すると母親がこっちの部屋へ来いというので、部屋を出ようとしたときにスピーカーが倒れていることに気付いた。部屋を出ると、親が「ちょっと待て」という。コップが何個か落ちて割れていたのだ。簡単にガラスの破片を取り除いて、自分もスリッパをはいて居間の方に入った。時間が時間だったので、部屋はまっくらで、ただ月の光がさしこむだけ。外では多少人の声がする。しかし、自分自身はマンション自体が異常がなさそうだったので外へは出なかった。自分が靴下をとろうとタンスの傍に行くと、やけに白いものが散乱して

いる。タンスの上の置いてあった皿だったのだ。あわてて、身を引き、やっとこさ手をのばして靴下を取り出し、すぐにはいた。あまりにも寒かったのでふとんにくるまって夜が明けるのを待った。7時ごろだろうか電気が通じテレビをつけてみると、やはり地震の報道をしていた。それまではラジオで情報を得ていたのだが、情報量が少ないのは否めなかった。テレビを見ながら、窓を開けてみると、幾筋もの白い煙が見える。それがいかにも不気味だった。地震当日はマンションのタンクに水が残っていたこともあって水には困らなかったが、そのタンクの水を使い果たしてしまった翌日には、近くの小学校に水をもらいに行くことにした。もちろん、テレビで地震による被害の状況はあらかた分かっていたが、それはてっきり浜の方だけだと思いこんで、山の方はそんなにひどくないだろうと思っていた。実際、うちの周辺で倒壊している家はなく、せいぜい瓦が落ちているぐらいに過ぎなかった。しかし、少し下りてみると、いくつもの家が倒壊している。うちの地主さんの家も倒壊しており、道をふさいでいた。しかし、やはり印象的だっのは家で横にズレているのがあったことだった。もうこんな地震は起こってほしくない。それがこの地震に思った唯一の感想だ。

堤　大輔　西宮市一ヶ谷町

僕のうちはマンションである。7階建ての3階に住んでいる。そして地震が起こったのである。そのとき僕は目が覚めていて、トイレに行こうと考えていた。突然、部屋全体が揺れ始めた。すぐに布団をかぶった。しかし、いつもの地震と違うのに気づいた。揺れが大きく、そして、揺れの時間が非常に長いのである。僕はこのとき1分ぐらい揺れていたのだと思っていた。すぐ横に大きく、重いたんすが2つ並んでおり、たおれるのかなあと考えていた。しかし、布団をかぶっていたせいか、物がたおれた音もしなければ、気配もしない。だから、もう一度、寝ようと思って布団をとった瞬間、この地震のものすごさがわかった。本棚から本は何百冊と飛び出し、机からすべてのものが落ち、靴箱もたおれかけていた。たんすがたおれていたら、僕はまちがいなく死んでいたであろう。そして、なによりびっくりしたのが、ヒビが入っており、すきま風をかすかに感じた。他の皆は大丈夫か？部屋を出ようとした時、ドアもあけにくくなっていた。父が“歩くな”と叫んだので止まった。しかし、1分間ぐらいして、靴をはき動き出した。そのとき思ったのが玄関は大丈夫かということである。幸い、玄関のドアは開いた。よかった、助かった、全員無事だと思ったが、猫が3階のベランダから飛び下りいなくなった。書き出したらきりがないくらい家の中はひどい。うちの懐中電灯はこわれていた。そのとき、気づいたのである。地震の備えは全くしていなかったのである。とりあえず、外に出て、日が明けるのをまった。家の中に入ると光に照らしだされた光景は、この世の悪夢を感じさすものであった。すぐに猫を探しに家を出た。化学の大川先生の家を見た。うちよりもひどい。僕は猫が家族の犠牲になったのかなあと考えた。結局、猫は今だに見つからない。何時間もしたら、電気がついた。テレビをつけて見た。うちはましな方かなと思った。そして家のかたづけ、水くみという生活が何日も続いた。周りはというと、僕のマンションは1号であるがその前に2号がある。それは1号よりもひどく、鉄筋が見える所もある。近くにある酒・米・茶屋

もほとんどつぶれた。近くに空き地があるがそこは２つに分け、温泉がでていた。そして市立西宮高校もひどかった。本当に僕のうちは住めるだけましであると思った。あまり17日のことは思い出したくないが、これは事実とうけとめ、今後に生かしていきたい。今までのくらしがいかにぜいたくであるかが身にしみてわかった。

富松　浩隆　　神戸市西区糀台

私の家は明石大橋が見える高台に建っています。揺れはあまりなかったと思うんですが、やはり震度５、６はあったと思います。

その時私は２階の自分の部屋のハイベッドの上に寝てました。父と母は２階の和室。妹も２階の自分の部屋で寝ていました。そして揺れ始めて、初めに母が起きて「たんす、たんす！」と叫んで必死にたんすをおさえていて、そして父も妹も起きて私以外みんな２階の廊下に出てきました。おそらく私が一番おそく起きたのでしょう。あまりに揺れるのでびっくりして起きました。その時です。私が窓の外を見ると、淡路島の方で『ピカッ』というはげしい光が目に入りました。これを見た時は、地球がつぶれるんじゃないかと思ったほどです。そして、ゆっくり起きて、私も廊下にいきました。さいわい私の家は本だなとかたんすは倒れなかったからよかったです。でも本とか食器は落ちました。そして自分の家があまりひどくなかったので、学校には行けると思い、母は弁当を作りに台所におりていきました。そして、ラジオに電池を入れ、ラジオを聞いた時、はじめて事の重大さに気づきました。次々と自分のよく知っている地名がでてきて、そして震源地が淡路だと聞いたときは、よくこんな被害ですんだなあと思いました。明るくなって周りを見ても倒壊した家屋などはなく、道路にひびが入り壁にひびが入るぐらいでしたから、三宮や西宮の状況を把握するのに時間がかかりました。そして友だちとかに連絡してもなかなか通じませんでしたが、やっと垂水の友だちとつながり、話すと、その友だちの家は屋根がちょっと傷ついたそうです。とにかく学校がどうなってるか心配だったし、友の安否も心配でした。その後、家で退屈だったので、近所の友だちと自転車で板宿の方まで行って何か手伝おうと思ったのだけれども、「もう足りてる」と言われてすごすご帰ってきました。ゲキむかついたで、ほんまに！そして１月28日、夙川のいとこの家にいわゆるホームステイするために行きましたが、その惨々たるありさまにどきもをぬかれまくりでした。西区は死者１人でしたが、その１人は女子大生で偶然に長田の友だちの家に泊まりにいき、亡くなったそうです。かわいそうです。

中河原修平　　宝塚市千種

１月17日の朝、僕は何か揺れているぞ！と思い自然に起きた。僕は一瞬何が起こったかわからなかったが、すぐに地震だと察知した。僕は１階、母と妹は２階、父は単身赴任で茨城県つくば市に行っていたが、２階でタンスが倒れてガラスがわれるドンガラガッシャンという音がしたのが布団の中の僕に聞こえた。自分は母が大丈夫かと思い、地震がおさまった後、２階に

上がり、母と妹の無事を確かめた。鉄筋コンクリートで造られた家だったので崩れなかったが、自分は犠牲者や家屋倒壊した人がいるとは思わなかった。陽が昇り明るくなると、自分は本棚や帽子かけなど自分の部屋の倒れた物をなおしたが、遠くの本棚の上に置いていた物がベッドのすぐ近くに飛んで来ていて、とても驚いた。しばらくしてラジオをつけると淡路島の近くが震源ということがわかった。震度6ということもわかり、これが地震かと思った。自分は早々と12時前（昼）ぐらいに自分の部屋を片付け、母の部屋や居間を片付けた。スピーカーがふっ飛んでいたり、とにかくすごく、だいたい片付けると食器の数が半分以下になっていることなど、だいたいわかったが現実観はなかった。母の父つまり僕の祖父は祖母が入院していたため、西宮市苦楽園に1人でいた。祖父の安否を気付かい、母と共に自転車で3：00頃迎えに行ったが、その途中国道171号線や新幹線の高架が落下しているのや、家屋倒壊を見ておどろいた。また、消防車の人におばさんが「生きうめになっている人がいるのですが」と言うと、「そんな人いっぱいいます」と言われているのを見てかわいそうになった。そして2時間かけて祖父の家に着き、そこの食糧を祖父の車に積み込んで、自転車は置いたまま、祖父も乗せて家に帰った。その日のニュースはもちろん地震のことばかりで、奥尻島が地震で甚大な被害が起きた時「テレビでは奥尻のことしかやってへん」と言っていた自分を思い出し、自分がいま同じような状況にあることを痛感した。その日から水汲み、買い物の生活が始まった。祖父は力もなく、全くのん気で一日中ずっと家にいてニュースを見ていたので腹がたった。水汲みによって日頃我々がどれほど水を使っているのかを知り、日頃の生活のありがたさを身にしみて感じた。そんな中、父が先週の金曜日に帰ってきたが、あまりの被害の様子に言葉も出ないようであった。父にとって故郷である町のみじめな姿はどんなふうに映ったのであろうか。僕はボランティアに行こうと近くの公民館・小学校に行ったが、近くでは避難者はあまりおらず、人手が足りていると言われたので西宮の中央体育館に行き、ボランティアをしてきた。今回の地震は、日頃の生活のありがたさを本当に教えてくれた教訓以外の何者でもないような気がする。周囲の家で瓦屋根の家はほとんど瓦が落ちており、青いシートでおおっている家が多くあり、まるで海のようだった。周りの家を見て自分は被害者のうちに入らないと思った。いつもの生活に戻るにはまだまだ時間がかかると思うが、二度とこんな地震起こってほしくないと思った。頭も銭湯に行かないと洗えないし、トイレも流せないし、まるで戦争中の様だった。午前5時46分というほとんどの人が火を使用していない時間でよかった。誰も身内は死ななかったし、不幸中の幸いだった。

中島　孝太　　尼崎市南武庫之荘

1月17日、午前5時46分、自分が神になった夢が途切れ、大きな音とともに激しい縦揺れが襲い、しばらくすると大きな横揺れが襲ってきた。普段から地震なれをしていない関西人の僕でも、この地震の異常な大きさを感じ、ただごとでないことがすぐにわかった。物が落ちてくると危ないと思い頭から布団をかぶった。長い時間がたったように感じられたその時、体の上に大きな痛みと重みを感じた。上下に分かれたタンスの上部がふってきたのだった。続いて、

自分の顔に本棚が倒れてくるのが見え、とっさに布団をかぶり直撃はまぬがれた。この時自分の方に本棚が倒れてくるのを見たときは、すさまじい恐怖感をもった。幸いにして、たいしたケガもないままに地震は終わった。本棚とタンスの間からぬけ、自由になって自分の部屋から出ようとすると、妙に戸が重かったが、その時は気にならなかった。後でわかったことであるが、部屋の壁がずれていたのだった。まず親の無事を確認したあと、眼鏡をかけて明かりを捜した。懐中電灯で見た部屋の中はひどいものだった。台所では食器棚が倒れ、食器がくだけていた。外はガス臭かったが、引火する程ではなく、僕の家にはまだガスも通っていたので、カップラーメン（ホットヌードル、みそバター味新発売、ローソンで安売り中）を食べた。次第に外も明るくなり、外にいた近所のオバさん軍団も自分の家へ帰り始め、どの家でも片付けが始まった頃、インフルエンザで39′の熱があった僕は幸せそうに眠っていた。起きるとまず、神戸市中央区のローソンで深夜のバイトをしていた兄に連絡をとると、頭から油をかぶって火傷をし、車で病院に行ったらしく、とりあえず親戚縁者の無事が確認できた。火傷をした兄が帰ってきたのは５日後の土曜日のことだった。家族の無事を東京の父に知らせた後、友達を確かめに出かけた。緊張感のせいか、インフルエンザも直り、しばらくは余震におびえる日々が続いた。学校にも連絡でき、落ち着いた頃には、水もガスも通るようになった。ライフラインが通ると、もう普通の生活に戻ったが、それでも17日の恐怖は忘れられなかった。近くの文化住宅はつぶれ、マンションは傾き、避難所になるはずの小学校も傾き、立ち入り禁止となった。尼崎でも比較的、ひどい所であった。最近の日本での数々の大地震、ロサンゼルス大地震、ヨーロッパの大洪水と、地球はどこかおかしいのではないかと思える。しかし、生きててよかったと心の底から思った。

中西優一郎　　芦屋市翠ヶ丘町

地震の起こった時、ぼくは２階のベッドで寝ていたが、最初ものすごい大きい音がしたので雷が落ちたのではないかと思い、すぐに体を起こした。すると、激しい横揺れと縦揺れがやってきて、３つの本棚が倒れて壁にぶつかる音を聞いた。両親は２階の別の部屋で寝ていた。大きい揺れが終わると、すぐにぼくの部屋に入って来て無事を確かめた後、１階に降りていった。まだ朝の早い時刻で暗かったので、あたりはまったく見えなかった。そして、ぼくは机の上に置いてあった懐中電灯を照らして、自分の部屋の様子を見た。あらゆる本が部屋のあちこちに飛び散り、本棚が壁にぶつかったので壁に大きい穴があいていた。自分のベッドは、本棚から離しておいていて、またたんすではなくクローゼットに服をしまっておいたので、自分にかぶさってくるものは何もなく全くけがはなかった。次にカーテンを開けて外を懐中電灯を照らしてみた。すると、むかいの木造の古い家の１階部分がくずれて、２階部分がぼくの家の庭にころがって入ってきているのを見た。その時はじめて、この地震の規模の大きさがわかった。その後、余震にそなえて、家族全員がすぐに外出できるように服をきがえて、毛布をかかえて２階でじっとしていた。しばらくして、外を再び見ると、右手の方に火があがっているのがわかった。しかし、暗かったのでどのあたりで火事がおこっているのか、どのくらいの大きさなの

かわからなかった。とても不安であったが、まもなく夜があけて明るくなってきたので、その火事が遠い所のものだとわかり安心した。しばらくしてから、電気がついたので、むかいの家の人がどうなっているかを見るために父と共に行った。すると家の下敷きになっていたので近所の人達と一緒に何とか助け出した。その他町の様子を見て下敷きになっている人を助け、家にもどってきた。テレビで地震の情報を一通り聞いた後、塚口に住んでいるおじいちゃんとおばさんに電話をかけようとしたが、家の電話では通じないので近くの公衆電話に行った。とても長い行列ができていて、長い時間待った後やっと電話がかけられた。塚口の方が被害が少なかったらしく、みんな無事であることが確認できた。その後家にもどり、簡単に朝食をすまして早速後片づけにとりかかった。父と母は割れた食器の片づけをし、ぼくは自分の部屋の本の片づけをした。気の遠くなりそうな作業であったが、2日かかってやっと足の踏み場ができ、ガラスなどの危険な破損物を取り除くことができた。それからは、父が大阪の方まで買い出しに行き、ぼくは近くの池にトイレを流すための水をくみにいった。飲料水は数日後になって給水車が来るようになったので、バケツなどを持って並び、浴槽やポットなどにためた。ぼくの住んでいる芦屋ではまだ水もガスも来ない。復旧には1ヶ月ほどかかるそうである。学校は近いので通うのはつらくないが、寒い中での水くみの生活は当分続きそうだ。

能田　洋平　　大阪市東住吉区田辺

ドッカーンという音がしてから、ブルブルッと震えユッサユッサとなった。何だ何だ！！私はビックリ仰天！！した。今日から学校でうんざりだなあという気持ちの眠気もふっとんだ。「落ちつけ！落ちつくんだ！！洋平」と私は自分に言いきかせた。地震のひどいやつなんか、生まれて初体験だったので、これが、本格的な地震なのかということもよくわからなかった。しかしとにかく、皆が無事なのか心配だった。しばらくして、おさまった。しかしまた余震がやってきた。「はぁ、まいったね！こりゃ」と思った。もうやんだようになって、みんな1階へ降りて行ったようなので、降りていった。みんな、初めての経験に、驚いていたようだった。その時、時間は5時45分ぐらいだった。ニュースでは地震について報道していた。ぼくは「ほんまやったんかいな」と思った。なぜなら、関西では地震は起きないと信じきっていたからだ。ニュースでは、大阪震度4で、淡路島が震源地でマグニチュード7.3だといっていたと思う。でも、もっと恐ろしいことは、夜が明けて、明るくなってから、わかってくるのだった。あー、学校どうしようかなー、あっ！これを忘れてはいけない。芸術の課題作品だった。しかし、今日は休みかもしれない、犬の散歩がてら、地下鉄田辺駅へ行って見ると人だかりが出来ていて、駅員さんに「しばらく運転できまへん」と言われていた。これは大変だ。学校が休みだ。しかし、家の近所は、全々、何もこわれていなくて、いつも通りだった。テレビでは、高架がたおれて、家はこわれてしまった人もいた。何と神戸も震度が高くて6もあった。「なんてこったい！大変じゃー」と感じた。

ぼくは、こんな風だったが、山内先生は冷静でエライとおもった。

萩尾　真人　　宝塚市中山台

僕はまだ寝ていた。突然の出来事に何も出来ず、なすがままだった。自分の部屋では、かけてあった絵がとんできたり机がたおれたり、他の部屋からは陶器や食器の割れる音がはっきりと聞こえた。僕の家族全員とも怪我をせず、家もヒビが入った程度で無事だった。家族が集まって２階へ行ってみると、ピアノが動いたり冷蔵庫が動いたりしていた。急いでポケットラジオを見つけてみると、震度６と聞いて驚いた。実際すごい揺れだったけれども、そこまですごいとは思わなかった。その時の時点でガスも水道も電気も全て通じていなかった。これはすごい惨事になると思っていたのに、最初ラジオではたいしたことはないと言っていた。まさか死者を五千人も出すとは誰も想像していなかっただろう。発生時間が５時46分ということで外を見ると、どこも真っ暗だった。しだいに明るくなるにつれて家の中の被害がはっきり見えるようになると、この世の終わりかと思うような光景だった。ちょっと大げさだが、本当に僕はそう思った。じっとしていても仕方がないので、割れた食器やらの片付けを始めた。途中指を切ったりもしたが、何とか片付いた。でも床がめくれたりドアがゆがんだり、その時のすごさを物語るのに十分なものが残った。そのとき初めて外に出た。道路がめくれたりしていて、他人の家では塀が落ちて車がつぶれていたり、家がずれたり瓦が落ちたりしていた。僕の地域では、家のつぶれている所はなかったが、駅までいってみると、ビルが倒れていたり橋が落ちていたりものすごかった。その時点でローソン等の店ではもう行列が出来ていた。僕も必死になっていろんな物を買った。はっきりいってどれだけ地震対策をしていても、自然の恐ろしさははかりしれないと痛感した。

橋村　裕也　　神戸市東灘区岡本

地震の時は、自分は寝ていた。ドーンという音にびっくりして起きたら、突然揺れだしたので、本能的にふとんをかぶった。だれかに体をもたれて、揺らされているようだった。１回目の地震がおわると、自分は、家族が寝ていた和室に行こうとしたが、自分の部屋のコンポは床にとび散っていて、足の踏み場もないぐらいだった。どうにかして、和室にいくと、２回目の地震がすぐきたので、こたつにもぐった。それがおわると、どこからか、泣きそうな声で、「お願い、助けてー」という声が聞こえた。ちょっとして、地震がおちつくと、すぐさま外に毛布をもって出ようとした時、トイレの水がふきとんでいたのですべった。外に出てみると家の前にある旧谷崎潤一郎の家が、ペシャンコになっていた。16日に美術の宿題で写真をとっていたので、これが最後の写真となるだろう。外に出るとすぐ、私たちは、救助を求める人のところに走った。そこらへんはガスくさかった。その家は、１階に２階が落ちて、人がはさまっていたのだ。その人を助けるのには、２時間ほどかかった。祖父の家は大阪で、古いので、安否が心配だったが、電話がつながり、大阪は何ともないと聞き安心した。このころはもう、明るくなってきて、地震もおさまってきたので、家の片付けをしはじめた。この時、情報を得る手段

がなかったので、どこにも逃げるところがないと思ったのだ。夕方になり、朝から何も食べていなかったので、避難所に行ったら、食べ物はなかったが、暖かいお茶をもらえた。たったこれだけなのにとてもほっとした。夜になり、電気もなく、ガスもないので、とても寒くなったので、また避難所に行くと、そこは死体置き場になっていた。死体と寝るのは、あまりいやなので、家に帰って寝ることにした。

長谷川　裕　　神戸市東灘区森北町

震災前日いつも通りの夜を迎えていた。翌朝の大惨事を知るよしもなく……。運命の1月17日AM5：47、下から突き上げるかの様な衝撃で私は目を覚ました。そしてそれが何であり、何故起きたのかも知る間もなく、私は20秒間のはげしい揺れの中で一人、家が傾いていくのも感じていた。それから1分後ベッドから飛び起き部屋から出ようとした。ドアのノブに手をかけ開けようとした。“ドアが開かない！！”私はその瞬間死を予感した。人間おもしろいもので死を予感した時には、今まで自分が経験したことが走馬灯のように頭の中をかけめぐるものある。しかし、私はまだそこで死ぬわけにはいかなかった。なぜなら私には私を愛してくれる人がいたからだ！！。私は必死こいでドアに向かってタックルをぶちかました。そのかいあってか2発目には、ドアは静かに私の通過を許してくれた。私はすぐに母親が寝ころがっている部屋に行き、“生きてるか？！”と叫んだ。しかししばらく返事はなかった。どうやら母親は気を失っていたらしい（ホントに)。そしてしばらくして“どうにか生きてるよ”との返事があった。私はひとまず安心して、どうにか母を寝室から脱出させることに成功した。しかし、まだ家から脱出するという問題が残っていた。そこでまず、私が先陣を切って階段を降りようとした。しかし！そこには階段がなかった。どうやって降りよう！！私はまたもや死を予感した。しかし私の背後から“はやく行けよ！！”という弟のどなり声が聞こえた。私は死を覚悟して、階段の降り口から飛び降りた。それから数秒後私は、階段の真ん中へんでこけていた。どうやら階段がなくなっていたのは最初の一段だけだったようで、私の目の前には“何やっとんの”ど、私に声をかける母親がいた。そして私は一階に寝ていた妹を助け出し庭に脱出した。そして、その日の夕方には私たちは全員無事に芦屋のばあちゃの家に収容されたのだ。

浜田　和哉　　伊丹市梅ノ木

それは突然襲って来た。夜も明け切らぬ早朝に不意打ちを食らった。揺れが始まったと同時に目が覚め、揺られるにまかせていた。それはまさに地震体験車に乗っているようだった。ただギッシギッシと揺れ、部屋の扉もガガガと音をたてていた。でもその時から人生という流れの向きが大きく曲がった。揺られているうちに人生の流れだけでなく、たったあの数十秒のうちに世界までも変わってしまった。それは全ての感覚を失い、ただ恐怖におびえ、そして人生は変わっていたのだと今、冷静に考えてそう思う。揺れがおさまり気がつくと、前の晩つけっ放しにしていた机の電気が消え、ラジオが黙っていた。ベッドから体を起こし、ブラインドを

上げ、窓を開けた。外は暗かったけれど、でもほんのりうす明かるかったのが今でも頭の中にある。そして、親の「大丈夫か」という声に、まだふるえながら答えた。そして、親は懐中電灯を探していた。そして、いつものことながら見つからなかった。父親は「いつも出しっ放しにするからだ」と怒り出した。ぼくは「こんな時に怒ったってしょうがない、今は落ちつかなきゃ」と言ったら、意外に素直に父は理解した。電気がつかないのでラジオを探し出したが見つからない。父の「携帯ラジオ知らんか」という声に、「ぼくがウォークマン持ってるからそれを探してみる」と言った。昨日はたしか机の上に置いておいたはずだ、という気持ちで机の上をさわってみると、机の上はぐちゃぐちゃだった。いつもたいしてかたづいた机ではないが普通じゃない。イヤホンのコードに手が触れてたぐり寄せてみると床の上に続いていた。床の上をさわると、これまた、たくさんの物が落ちていた。中には、本棚の上に置いていたラジカセが無惨に落下していた。なんとかその下からウォークマンが出て来た。ラジオをつけてみると、深夜番組の終わりかけだった。女性のDJの「こんなこともあるんですね」という半分泣きかけの声がとても印象的だった。それからすぐさまAMに切り換えNHKをさがした。しかし暗くて、ウォークマンの液晶表示部分が見えず、イヤホンで聞きながらNHKを探した。何とか探しあてたNHKからは、「さきほど午前5時46分、淡路島を震源とした地震が発生しました。マグニチュードは7.2で各地の震度は神戸が震度5（？）、京都・豊岡も震度5……」などと繰り返すうち、神戸の震度が5であったり、6であったり、4だったり。また、まだはっきりしませんだとかいろんな情報が飛びかっていた。そんなことを耳にしながらぼくは開けた窓から、目を使って、ただ外を見ていた。何だか、半分ぼーっとしていた。ラジオを聞きながら、自分の中で何か整理しようとしていたのかもしれない。さっき、信じられないような地震が起きたということと、家の周りでは、見た感じ大したことはない。そしてラジオから流れてくる情報を統合して、情況を把握しようとしていたんだろうと思う。それから、部屋の外からスリッパが投げ込まれて来た。それをはいて部屋から出て来いということだった。その時父親は、どこから出してきたのかわからないが、ランタンを持っていた。部屋から出ようと倒れた洋服ダンスをもとに戻して、足場を確保した。入り口にあった飛び出たマンガの山を飛び越え部屋を出ると、またいろんな物が飛び出ていた。キッチンの食器はもちろん、百科事典、ファミリールームでは、本棚がまるごと倒れ、電話が出て、本が部屋の端から端へすっ飛んでいた。醤油もこぼれていた。自分の部屋のかたづけは、少し手がつけられそうにないので、ファミリールームをかたづけ始めてた。父親は家の惨状を写真に収めていた。17日は、その後、近くのコンビニに走った。食べられそうなものは売り切れだった。新伊丹駅のふみ切りが鳴りっぱなしだった。次に伊丹駅近くのコンビニに走った。伊丹駅はつぶれていた。一階のコンコースがなくなっていた。10時頃だったか、9時頃だったか忘れたが、自衛隊が来て、何となくものものしかった。近くのコンビニに食料はまだあった。店内の電気が消え、まっ暗だった。食料を買い込んで家に戻った。午前中は、それで終わって、午後は、近くに住む祖父母の家のかたづけに行った。その日は、ずっとテレビを見ていた。ガスも通り、水道も少々出にくく赤い水が出て来たが、トイレ用の水も確保できた。妹が、そんなにパンを食べるなと怒っていた。

翌18日、朝から、西宮の親せきの家に行った。塚口までバスに乗り、塚口から電車に乗った。

かなり混んでいた。親せきの家は西宮の能登町にあるが、つぶれていた。ケガ人はいなかった。帰りに、中学のときの友人のうちに行った。1階がつぶれていた。ケガ人はなかった。その日も買い物に出て、ロープとポリタンクを探しに出た。ロープはなかったがポリタンクはあった。

翌19日、ポリ.タンクとウェットティッシュを持って再び西宮へ。2つを親せきの家において、もう1つはB組岩井のうちへ持っていった。岩井の案内で西宮市内を歩いた。阪神高速の倒壊現場も見に行った。

その後何もする気にならず、ずっとテレビを見ていた。25日水曜日からボランティアへ行った。西宮北口にある「応援する市民の会」というのに行った。初日は、西宮大社小に炊き出しに行った。例のごとく、豚汁だった。2日目は、法心寺というつぶれたお寺に瓦の除去に行った。3日目は、青木まで行って、御影の方まで訪問手伝いをした。その後もけっこうボランティアにはちょくちょく行っている。

馬殿　直樹　　宝塚市逆瀬川

1月17日午前5時頃、目覚ましが鳴ったので目が覚めた。その日の実力考査の試験調べの見直しのために起きたのである。見直しているうちに疲れてきたので、また横になり、起きていたのが自分一人で静かだったので、そばに置いてあるラジオのスイッチを入れた。突然グラッと揺れたような気がした。その後すぐに回転するような大きな揺れが来てラジオは切れ、明かりも消えた。一階では茶わんのぶつかりあう音が聞こえた。そして揺れがおさまると、両親が懐中電灯を持って無事を確かめにきた。幸い、僕の部屋はタンスなどなく、押し入れに物は入れていたので何も変わってはいなかった。その後、一階へラジオをつけるために、電池を取りに行った。当然懐中電灯は親から貸してもらっている。階段を下りて床を照らすと、ガラスの器が2つ並んで置いてあった。上から落ちたのであろうが、まるで置いてあるようにきちんと並んでいたのである。さらに不思議なことに横にはプラスチックのおわんが割れていたのである。少し楽しい気分になり、目的の乾電池を手に入れ、自分の部屋に戻った。後で考えてみると、一階に置いていた鳥かごを見に行かなかったことに気づいた。鳥はいつものようにエサをついばんでいたのだが…。部屋に戻り食窓を開けたが、様子はいつもと変わっていなかった。明るくなってきたので、朝ごはんをたべた。その時ガスは通っていたのである。水も出ていた。しかし、テレビはつかなかった。外には一歩も出なかった。学校はあるのだろうかということが頭に浮かんだ。無ければよいと少し思った。10時過ぎにテレビがついた。各局ともすでにヘリコプターで中継をしていた。そこで初めて地震の激しさを目にした。よく見なれた町が完全に変わっていた。自分の家もほとんど何もなく、周囲も大して変化がなかったので、神戸のその惨状が意外に感じた。それまで僕は関西では地震は起こらないと思っていたので、スキを突かれたようだった。近くに阪急の逆瀬川駅があり、いつも電車のガタンゴトンという音が聞こえていたのだが、それが全く聞こえてこなかった。両親はあちこちに電話をしたり、自転車をひっぱり出して、辺りの様子を見に行ったりしていた。幸い近くでは、古いお寺が1軒壊れたり、民家の瓦が落ちたりしていただけだった。夜は、倒れるものがなにもない部屋を作ってそ

こで寝た。意外によく眠れたのである。

久永　哲平　　神戸市東灘区本庄町

「ドーン」というすさまじい音とともに激しい揺れが起こった。ベッドから振り落とされそうになった。揺れが終わると、起き上がって全員が無事かどうかを確認するために部屋を出た。辺り一面酒のにおいが充満していた。無事だということがわかると、弟３人と父は外へ出た。その後ぼくと母が毛布と上着を持って出た。１階で時計を見ると６時前だった。地震の直後から西の方で「だれか」という叫び声が聞こえた。父が行った。何人かが生き埋めになっていたらしい。南東の家は燃えていた。ぼくたちはしばらくマンションの前でくるまっていた。１時間ほどたってから、母と家の中に入るとそこは『地獄絵図』だった。食器はすべて落ち、棚は倒れ、冷蔵庫まで倒れていて中のものが飛び出していた。テレビも落ち、弟の寝ている２段ベッドまで倒れていた。ぼくの部屋も本棚が倒れ、ベッドの上には本がきれいに並べたようになっていた。一家６人が無事だったのが信じられなかった。母はベランダを見てびっくりした様子でぼくを呼んだ。ぼくは見えなかったが、高速道路が曲がっているというのだ。（昼、メガネを見つけてから見て、ぼくもびっくりした。）そのときすごい地震だったことを改めて実感した。今度降りて１階のガレージの方へ行ってみると、アスファルトの部分がすべて落ちていて、50センチ以上もの段差があった。協力してもらって１時間以上かかってやっと車を出すと、会社の事務所が無事かを確認するために六甲道の方へ行った。２時間かけて行くうちに、２号線沿いの家はほとんど崩壊していることがわかった。事務所は無事だった。帰りはさらに車が混んでいて、３時間かけて御影のあたりに着くと、ぼくと母は電話をするために歩いた。家の近くで電話を待っていると、同じクラスの日山君に会った。家は全壊して父親が亡くなったそうだ。その表情は暗かった。ぼくたちが無事なのが申し訳ないと思った。母が実家に電話をすると、家に帰ってある程度後片づけをした。暗くなる頃、ガスコンロなどを持って家を出て、晩ごはんを食べた。そして芦屋の青少年センターの前のグラウンドで車の中で寝た。次の日も同じような生活をした。ローソンが開いていたので、１時間以上ならんでいろいろな物を買った。救援物資もある程度もらった。車でラジオを聞いていると、被害の拡大の様子がわかって胸が痛くなった。この２日間はなんとなく過ぎていった。３日目にぼくたちは母の実家に帰った。次の日父は仕事の関係で神戸に戻った。ぼくと母と幼稚園の弟は１月29日に戻って来た。弟２人は今も地元の学校に通っている。まだ止まらぬ余震、消防車のサイレン。復旧作業が進んできて１月26日に電気、２月２日に電話がついたものの『普通の生活』に戻るにはほど遠い。不自由な生活を強いられているが、これからもがんばっていこうと思う。

日野　　元　　神戸市東灘区向洋町中

ドガン、ドコン、ズゴン、ドカドカ、物が次々落ちていく音で私は起きた。初めての大地震である。一体何事であるのか？夢なのか？と思った。ベッドの外（私は２段ベッドの上にねて

いた）を見ると本棚が倒れていた。自分が何んか知らないが助かったと思ったとたん、家族の安否が気になった。そしてすぐさまベッドを飛び下り自分の部屋を出た。家族は全員無事であった。昨晩からインフルエンザでうなされていた弟は、地震が起こったとき目を覚ましていたらしい。それが弟の命を助けたのである。というのはあのまま弟が寝ていたとしたら、そこにはTVが落ちてきていたからである。余震が度重なって起る。正直いってすごく怖かった。14階立てマンションの14階に住んでいたこともあって、揺れがはげしく折れるのではないかと思った。その反面なぜかワクワクする気持ちがこみあげて来た。この感情は、今となっては一体何がそうさせたのかいまだにわかっていない。余震がおちつくと部屋の中が非常に寒いことが気になり出した。そう、停電になったのである。明かりも何もないので懐中電灯をさがすことにした。それで自分の部屋に戻った。あらためて見ると自分の部屋はめちゃくちゃであった。本棚が倒れて本が錯乱し、机のひき出しもあいていた。その瞬間私は宝物である「巨匠芦田豊雄先生のイラスト付き自筆サイン」がどうなったのかと、あわてて電灯を捜しサインを捜した。折れ曲がっていたりしたらどうする？などと思いながら本をどけていき捜していくと、なんと無キズのままであった。奇跡だ！そのことを考えるともう他のことなんかどうでもいいじゃん！などという気持ちがおこった。それほど大切だったんですよ、あのサイン色紙は！そして太陽が昇って、あたりが明るくなると、家の状態がわかった。ありとあらゆるものが落ちていた。棚が落ちて開かないドアもあった。その事態を惨事だ！と思っていたが、他の所はそれどころではないぐらいの大惨事であったのを知ったのは、電気が通るようになった5日後ぐらいだった…。

夢だよなあと自分に言いきかせていたが、やけにリアルだしオールカラーであったものなので現実と信じる。第1章「地震が起こっちゃったけどどうする？」終わり。

腹がすいたのでパンを食う。ちょうど昼だった。朝まで後かたづけ、意外とめんどくさい。自分の部屋をかたづける。父は言う。本棚はアブナイから横にたおせ！そのおかげで本は部屋の床におきっぱなし。これからの事を考えると不安だったがもういいや！第2章「あとかたづけの中に人生の何かを悟る←たらいいな」終わり。

だんだん食糧がなくなってきた。電気もまだきていないので何もできない。このまま私は死んでいくのか！初めての配給。おにぎり1個。これだけ？と思ったがなんともこれがうまい。第3章「おにぎり1個と私」終わり。

近所のガスタンクが破損しガスもれにて避難勧告をうけた。それによって小学校の体育館へ我々一行は向った。第4章「学校へ行こう！」終わり。

ということでこの地震日記は終わりに近づいている。スペースの都合上全部50章にわたる日記の中で第4章までしか記載することができなかったが又の機会に。

P.S. 私は今、歴史に残る大事件に巻きこまれたわけだが、非常にうれしく涙が流れる。こんな体験はもう二度とないと思うとさらに悲しくなる。山内先生も先生なりにこの大事件について色々考えていると思いますが、どのようにお考えになっているか知りたいところであります。

《先生のお考え》　一言「差別としての大震災」、より貧しき者がより悲惨な状態になる。天災とは言え、日頃からの備えによって生存の可能性が高まる。（山内記）

福井　慎次　　大阪府池田市五月丘

寝ていると突然揺れだし、目が覚めた。屋根からつり下がっている電気が今にも落ちそうなぐらいに揺れている。それが落ちるのに備えて布団を楯に構えていたが、結局何事もなく地震は終わった。それから余震がくると思ったので下におりた。下では電気もつき、一応落ちついた。近くの小学校の避難装置のベルが鳴りひびいてうるさかった。そしてラジオをつけて、落ちていたテレビを元にもどしてテレビもつけた。地震がおこったのが自分の近くだけでないのを知り少し安心した。なぜなら、自分だけ朝早く起こされ、学校で眠い思いをしなくちゃならないと思ったからだ。しばらくして、阪急電車が止まっていると放送されると、学校は休みだと思ってうれしく思い寝た。9時頃に起きてみるとテレビでは地震のことしかやっていなかった。神戸の方がもっともっとすごい被害をうけたことを知った。昼頃になるとこわれていた水道管も修理されいつもと変わらない生活にもどった。でも、神戸の方の被害の大きさを見るとただおどろくばかりだった。山内先生のことが心配で心配でしようがなかった。それから学校がしばらく休みになることを知り、幸せだった。ただ、知り合いの人に死んだ人がいなければいいと思った。まだその頃は死者は千人をこえてなかったのであまり思わなかったが、日がたつにつれどんどん増えていったので、地震のこわさを思い知った。

福田　正樹　　芦屋市若葉町

地震が起こった当日の朝、僕は3時過ぎまで読書をしていたため、地震があっても起きなかった。父と母が「正樹、逃げるよ」と言っている声で目が覚めたので、布団から出ようとしたが、布団が重くて持ち上がらなかった。よく見れば、本棚が倒れてきていたのだ。しかたがないので、布団からずるずるとぬけ出し、たんすが扉をふさいでいたので、それをどけて、階段で中央公園に逃げだした。幸い、シーサイドタウンは火災もおこらなかった。しかしあちこちでガスのにおいがし、中央公園中央部は水道管がわれたのか、泥が一面に広がっていた。道路もあちこちでわれ、泥がふきだしている。「液状化現象ってやつか」と思いつつ、午前7時過ぎまで中央公園にいた。六甲山の方向を見ればあちこちで火の手が上がっていた。

その後、午前8時半頃から母と共にミニコープへ行き、一時間程ならんで、当座に必要なものを買った。水はやかんに残っていた2ℓほどだけだったので、電気ポットでそれをわかし、家族4人でお茶がわりにジュースを飲みながら、買ってきたカップラーメンを食べ、昼食とした。家の中は「倒れる物はすべて倒れた」といった感じで、リビングだけ片付けたあと、僕と弟は寝てしまったが、父は一人で台所と寝室を片付けていた。その日は9時ぐらいに寝たが、その時は被害がこれほどとは思っていなかった。

翌日、早朝に起きて給水車に水をもらいに行って帰ってきた父が、マンションの主柱が折れて、上の所は下部にのっているだけで、また縦揺れがくれば危ない！といって逃げる準備をさせた。行き先は西神中央の祖父母の家である。前日に公衆電話で無事を確かめていたので、決

まるのは早かった。あとは道路だった。結局、芦屋－西宮北有料道路－三田－三木と回ってついに目的地に着いた。あの混乱の中で４時間で着いたのはすばらしかった。その後、母の高校時代の友人が大阪に空き家をもっていたので、１月末からそこに、家の修理が終わるまでの予定で住んでいる。

藤田　和敏　　神戸市中央区脇浜

阪神大震災の起こった当日、５時46分。僕はぐっすり眠っていた。はじめすごい衝撃とともに揺れはじめ、布団もろともみんないっしょにシャッフルされているような感じだった。はじめは揺られて気持ちがよかったが、そのうちに目が覚めて一体何なんだと訳がわからなかった。このまま家が倒れて死んでしまうのではないのだろうかと思うぐらいだった。そして、その地震が終わるとすぐに居間に行こうとしたが、その部屋に入るためのドアが開かなかった。それは何もかもが倒れてしまっていたからだった。しかし、なんとか入って行き中を見てみると、そこはまるで夢であるかのごとく何もかもが散乱していた。そして、全く違う場所にあった物が全く別の場所まで移動していた。その次に僕は、自分の部屋に行き、着るものを取りに行こうとした。そこでも居間と同じような感じだった。そうしていると、ビルの上の人たちが下りて来たが、みんなは夢を見ているような顔だった。８階の人は相当揺れたみたいだった。何とかみんな無事であることを確認し、落ち着いてくると、親せきに電話をしたり、部屋を片付けたりと色々なことをしていった。すると、いつのまにか夜が明け隣を見に行ったりすると、何と隣の家が我々の家に倒れかかっていた。この光景を見た時この地震の凄さを知った。そして、何だかんだあって今に至っている。

藤本　龍介　　加古川市加古川町木村

１月17日午前５時46分。その時私は眠っていた。が、ふと目を覚まし、その瞬間強い揺れを感じた。私のベッドの上に本棚が倒れてきた。30秒ぐらい揺れたあと一度おさまり、その後も強い余震が続いた。父と協力して本棚を立て直し、テレビをつけた。その頃はまだこんなひどい状況になっているとは思っていなかった。アナウンサーが「今、信じられない情報が入って来ました。阪神高速道路がおよそ300mにわたって倒壊し、車が数十台すべり落ちたということです。」と言っていたのが今でも印象に残っている。その30分後、私はヘリコプターからの映像で信じられない映像を目にしたのだ。それでも５千人も死ぬなどとは思っていなかった。それから私は、テレビに釘づけになっていた。父は会社に行くと言って駅へ行ったが、電車が動いているはずもなくすぐに帰ってきた。その後、夕方ごろになって、義援金の受け付けを郵便局でしていると知り、日本赤十字社を通して募金した。父や母は、いつまでもテレビ見ていても仕方がないから勉強しなさいと言い、私も机に向かったが、とてもそんな気持ちになれなかった。私は生まれて初めてあんな強い地震を体験し、精神的にかなり動揺していた。もうこんな体験はしたくないものだ。

細谷洋一郎　神戸市中央区北野町

ベッドにたたきつけられるようにして、目を覚ました。そして激しい横ゆれがあったが、ぼくは何が起こったのか分からず、その場で茫然としていた。地震がおさまったので机の下にもぐろうとすると、机の上の棚がたおれていて、あと１メートルで私に当たるところだった。夜が明けてから一階に降りてみると、テラスの床が沈んでいて、側面の壁との間にすきまができていた。食器類はほとんど飛び出て割れていた。家族は全員無事。

外へ出てみると、家の周辺には木造の家がないせいか、倒壊した家はないようだった。しかし、北野町の名所である異人館に行ってみると、壊れているものがたくさんあった。１日目は庭でたき火をして料理をした。２日目は、近くに水を確保しに行って、後は同じ。３日目、東京在住のおばが、救援物資を持ってきてくれた。その中に灯油のストーブがあったので、寒い夜をすごすのも楽になった。４日目にやっと電気がきた。少し安心して、友達と三宮を見物にいった。柏井ビルが道路に横だおしになっているのは、やはりすごかった。生田神社周辺の東門筋や三宮駅前の立入禁止のところに立入った。すごかった。

１週間目に大阪のホテルへ行くことになった。ちょうどその日に水が出るようになった。大阪に行くのは４時間近くかかったが、１週間ぶりの風呂は気持ち良かった。異常に垢が出た。来る途中で２号線沿いの倒壊した家々が見えた。東灘、灘のあたりは、やはり軒並ダメだった。大阪は何ら普通どうりなのに、腹が立った。

ホテルで３日間すごした後、一度家へ帰ることになった。帰り道では、43号線の阪神高速の解体が進んでおり、ガレキを積んだトラックがたくさんいた。途中で小便をしたくなった。我慢していたが、渋滞で、家につけず、立ちションをしてしまった。

前川　佳輝　大阪府豊中市上野東

地震が発生した後、揺れがおさまるまで玄関でまった。しばらくの間余震が恐かったためそこから動かなかった。６時頃居間に行き、テレビをつけ被害の程を調べた。我が家は幸い震源地から遠く、また家具が揺れの方向に対して水平だったため被害は軽微であった。具体的には食器が３、４個、洗面台と机の上のガラス板に傷がついただけであった。大阪府の震度は４であったが、私の感じた限り４より多少大きいのではないかと思えた。６時半頃電話をかけようとしたが使用不可能であった。ただし電気、ガスについては被害がなかったので、ほぼ通常どうりの生活を送ることができた。昼頃外にでかけた。倒壊している家はみかけなかったが、瓦が落ちるなど一部損壊している家は数多くみられた。やはり比較的建築年数がたっているものが多いように思えた。駅前にでてみると多くのビルの窓ガラスが割れていた。特に昔からあって、くり返し増改築をおこなってきたビルの被害はことさらひどかった。家に帰って情報を集めるためテレビを見ていると、思っていたよりも被害がひどいことが判明した。母は避難用のリュックをつくり余震に備えた。またその夜は服・懐中電灯を横において床についた。しかし

神経が敏感になっていて結局ほとんど眠らなかった。

宮本 圭二　西宮市段上町

1月17日5時50分頃。

うつらうつらと夢を見ていると、突然目が覚めて現実に引き戻され、部屋が揺れているのに気付いた。最初、ただの地震だと思い、少しでも多く眠ろうと再び目を閉じた。だが、揺れはいっこうに衰える様子を見せず、それどころかどんどん強くなっていく。さすがに異変に気づき、急いで起き上がり、布団を引き寄せしゃがみこむ。隣の部屋で寝ていた両親が驚きの声をあげるのが聞こえた。揺れは容赦なく強烈になり、タンスや鏡台が次々倒れていった。しばらくじっとしていると揺れがおさまった。隣の部屋から、両親が安否を確認する声をかけてきたのでそれに答えた。部屋の出入口をふさぐようにして倒れていたタンスを乗り越えて隣の部屋へ行く。父母と合流すると、すぐ下の2階の部屋にいる兄に声をかけると、応答があった。1階にいる姉も無事らしいとの事だった。暗がりの中、慎重に階段を下りて行き、兄と合流する。ガラスの破片等、様々な物が散らばっているので、靴下とスリッパを履き、そんなこんなで姉とも合流して外へ出る。近所の人々も外へ出て来ており、互いの無事を確認していた。近くにある、報徳学園の学生寮が派手な煙をあげていたが、それ以外では特に火災は見あたらず、また、半壊の家はいくつかあったが、全壊したものは無いようだった。このあたりは、それ程被害がひどくないようだ。ただ、どこかからガスがもれているのか、道に嫌な臭いがたちこめており、それにもかかわらず、平気でタバコ等に火をつけていた人間は多かった。しばらく近所の人々と話をした後、家へ戻った。電気とガスが通じなくなっており、部屋の中も無茶苦茶になっていたが、家そのものに被害はなく、蛇口をひねると水も出た。家の中に戻ってからは、家族で、懐中電灯やラジオや貴重品を用意したり、昼寝をして睡眠をとったり、自転車に乗って辺りの状況を見て回ったりしている内に、日が暮れた。大きな余震があると危険だということで、その夜は、駐車場にある車の中で寝ることになった。ただし、父と兄は狭いからといって、家の中で寝た。車の中には、毛布はもちろん、ラジオも持ち込み、震災関連の放送を流しっぱなしにしていた。翌日は、自分個人としては、自転車に乗って辺りを見て回ったり、飲食物や電池を買って来たり、学校へ電話をかけて無事を知らせたりした。その日は、暗くなっても家族全員が家の中にいて、そこで夜を過ごした。その次の日の、1月19日は、親戚が訪ねて来て、飲食物の差し入れ等をしてくれた。また、この日になると、電気も通じるようになり、郵便業務も再開したようだった。(新聞は、地震のあった時から通常通りだった。) 1月20日以降しばらくは、適当に周囲の状況を見て回ったり、家の中でくつろいだり、友人の所へ電話をかけたりといったことをする、同じような日々が続いた。

森　直人　神戸市中央区港島中町

地震がおきた瞬間、僕は深い眠りの中にあった。なぜかなだれの夢を見ていて、窒息する～

と何かわけの分からない事を思って、地震がきたとは知らずに、無意識のうちに身を縮めていた。いわゆる反射神経だけだったのだ。まだ暗くて一体何が起こったかわからない。続く余震によって、僕はうっすらと、「あ、大きい地震がきたんだな」と悟った。家はマンションなので、家はつぶれなかったという事はわかった。すぐラジオをつけた。となりのおばちゃんとかは、下に行こうとしたが、僕は暗いうちは家にいた方がいいと思った。懐中電灯で家の中を見たが、食器だな・たんすは全て倒れ、リビングにある蛍光灯のカバーもわれていた。本当に暗かったので、これ以上はわからなかった。室温が異様に下がってきた。窓も割れたと思ったが、開いただけだった。寒くなってきたので、ふとんに入って寝た。

明るくなって、惨状が目の当たりになった。何と僕のベッドの上に、本だながおちてきていたのだ。あの瞬間、身を縮めていなかったら、僕の足の上に落ちてきて、折れていただろう。家族は全員無事だった。兄は、昨日東京に帰った所だった。畳の部屋にいた、文鳥もたんすとミシンの棚の間にあって無事だった。僕の部屋も、本棚からみんな本が出てしまっていて、どこから手をつけたらいいかわからない状態だった。壁の角のところの壁紙は、この建物がゆがんでまたもとにもどったという事を物語っていた。窓は完全にしまらないようになっていた。食器は半分以上が割れた。電気、水、ガス全てが止まって、どうしようもなかった。その日一日は、片づけをする気がおこらなかった。その日午後に、一時水が出たので、風呂にいっぱいためた。トイレに行っても水が出ないので、そのままにしておいた。外に出る気もしなかった。買物にも行かなかった。何か全てにおいて、やる気と活力をそぎ取られたような感じだった。

松山　成雄　　芦屋市浜風町

最近、日本で大地震が続いていた。東北地方である。自分もいつかは地震を体験してみたいものだと思っていた。17日午前５時46分。ゴーという音とともに、床が上下に揺れはじめた。１階でガラスの割れる音と、埋立地なので、砂が流れる音が聞こえた。そして起きた。父が単身赴任のため家にはいなかった。皆で１階におりて、停電し、水の流れが弱いことに気付き、水をためた。なにか、家が傾いているような気がした。戸がかってに閉まる。家は鉄筋のため、ひずみはなく、液状で地盤ごと傾いた。ラジオを聞き、震源が近いことと、M7.2であることを知った。僕一人で外に出た。近所の友達の父とうろうろした。近くに２つの煙を見た。その人とは普段はめったにしゃべらない人だが、なぜかよく話した。辺りは、砂だらけであり、地割れがひどかった。立橋には段差ができていた。近所は埋立地で、ほとんどすべてが鉄筋で新しい建物なので、倒壊した家もなく、ケガ人もいなかった。明るくなるまで待った。８時ごろから、近くの店が品を売ってくれた。そして、小学校の時の同級生と自転車で埋立地の外に出て、はじめて被害の大きさに気付いた。古い家のならぶ浜町などを行くと、ほとんどの家がつぶれ、道がふさがれていた。そしてパンクした。あとは歩いて近所の阪神高速で何かあったらしいと、おっさんが話しているのを耳にはさみ、そこへと向かった。高速道路が途中から見えなくなった。よくみると、山側に倒れていた。車はスリップのあとを残し、下にころげ落ち、血がまだかたまっていなかった。まわりはふとんに身をくるんだ人たちが、茫然と立っていた。

そして午後、学校のことを知るために、中学校へと向かった。予想通り、先生方に会い、10日ぐらいは学校は無理と聞いた。けど、笑いながらであったし、自分も２、３日ぐらいの休みと思っていた。断水のため、ダイエーに行くと４時間待ちで、入れるわけがなかった。午後４時頃、停電が直ったが、テレビはケーブルのため、衛星放送しか映らず、NHKだけをみていた。長田区や三宮、地震のすごさが、続々と知らされた。17日の食事は食糧がなく、お菓子のみであった。明日はダイエーに並ぶ決心をした。８時にダイエーに行ったにもかかわらず、２時間待ちで、パンも何もなかった。だがダイエーは、ヘリをチャーターして、今後食糧の宝庫となる。ちょうどそのころ高層住宅（ゴーストタウンになっていた）がやばいといううわさを聞いた。後に、NHKにも報道されることになった。

真鍋　崇　豊中市北条町

強い震動で目を覚ました時は、雷が自分の家の周辺に落ちたのかと思った。窓が勝手に開き始め、隣のお姉ちゃんの部屋から何か大きな物が倒れた音がする。真っ暗な闇の中で、家の中がどうなっていることなどは、ほとんど気にしなかったことは事実だ。気になったことは、やはり、家族の安否であった。懐中電灯など近くになかったし、むやみに動くだけの勇気も度胸もないぼくにはただ、名を叫ぶことしかできなかった。なんとか家族４人が一部屋に集まった頃には、家の外で近所の人の話し声がする。幸い、近所の家屋も自宅も倒壊することなく、近所の方々も我が家も無事であった。明るくなるにつれて、その状況をようやく理解し始めたぼくは、友達のことが気になってしょうがなかったが、電話は通じず、どうしようもできないことを情けなく思うことに精いっぱいだった。家の中は、お姉ちゃんの部屋のたんすが２つ倒れたのと、水道管が少しこわれたことぐらいであった。AM７：40頃には、もう電気もガスも正常についた。それからというもの、お父さんは近所の家で水道管が壊れた家の水道管を、我が家のとついでに、修理し始めに出た。お母さんは、病院関係の仕事なので、仕事を無断で休むわけにはいかないと、もうAM８：00前には家を出ていた。ぼくとお姉ちゃんは、午前中はずっと、余震におびえていてほとんど何もできなかったが、午後になって、お父さんが帰ってきてからは、家の中のかたづけである。その日の夜から（結局数夜だったが…）なるべく一家４人が固まっていれるようにと、一つの部屋で寝た。家の玄関の鍵はかけないで、雨戸は閉めず、窓の鍵もかけないで夜を過ごすようにした。その日、結局、家の電話は通じず、近くの公衆電話から、10～15人程度に電話をかけたが、ほぼ、電話が通じず、無事を確認できた友達はたったの２人であった。２日目は、物の買い出しに出た。缶詰・インスタント、冷凍食品、パン・お茶・お菓子（チョコなど）、もちろん水も用意した。家に１つしかなかった懐中電灯も、３つに増やし、両親で１つ、ぼくと姉が１つずつ携帯した。（今でも寝る時には、すぐ側においている）防寒着を含む各人の服と貴重品と、買い出しによって買ってきたものを、車のトランクに入れた。（今でも入っているものはある）ぼく自身は、徐々に、友達と連絡をとることができるようになって、毎日（遊びがてらであるが…）友達と集まった。たった１回ではあるが、水やパンを大量に芦屋にいる友達に届けたこともあった。

まあこれが、情けない行動ではあるが、ぼく及び家族の行動である。これを書いている現時点でも、何万人もの被災者（もちろん友を含む）が、つらくて苦しい生活をしている。心からお見舞い申し上げます。頑張ってほしいと思います。

森本　晃　西宮市一里山町

僕は土曜日（14日）に雪の中でクラブ活動をしていたため、風邪をひき2日間ねこみ、17日は学校に行くつもりはなかった。そして、17日の5時半頃風邪のせいか、うなされていた。その後、トイレに行って気分をおちつけようとしたが、やはりまたうなされて、ふとんの上でころげ回っていた。そして、僕は叫んだ。まるで家ごと（マンションではあるが）揺さぶられているようだった。とりあえず、家族（父と母）が無事なのをたしかめ、外へ出た。しかし後から考えるとよく全員無事であったと思う。父も母も僕のトイレの音で目が覚めたようだった。父も母もタンスの下じきになっており、母は自力で脱出できなかった。部屋の中は酒のにおいがし、ガラスが散乱し、父は足を切った。しかも懐中電灯も置いてなかったので、外に出るまで時間がかかった。それから、駐車場の車に入り、暖房とラジオをつけた。夜がゆっくりと明けるのを待った。マンションの住人は全員無事なようであった。夜が明け、明るくなり、ゆっくりゆっくり父と母が片付け始めた。僕は風邪がぶりかえし、車の中でラジオを聞いていた。風邪が少しひいてから、家に入ってびっくりした。自分の部屋の惨状は凄まじかった。僕の寝ていたところだけが何も落ちていなかったのである。数日前から、ふとんの敷く場所を変えていたのはまさに幸運であった。そうでなかったら、本の下じきになってどうなっていたやら…。数日間は片付けながら、ボーッとしていた。そして、不安な夜を3日送ってようやく電気がついた。これで、片付けはいっきにはかどった。次の日、僕は自転車で駅前まで（阪急甲東園駅）行って唖然とした。よく利用していた商店街がつぶれ、マンションの2階が1階になっていた。母もそれを見て、大阪の叔母のところへ避難しようといったのである。このころには、警察につとめている父はポートアイランドまで行って仕事をしていた。この父と連絡をとり、京都で下宿して、こちらに物資を届けてくれた兄と大阪へ行った。そこでようやく人心地がついて戻ってきた。それからは近所の小学校で手伝いのようなものをした。いっしょに手伝いをしている人とも仲良くなれ、大分落ち着いた。そして、今学校にいるのである。　後で考えると、冬のあの時間帯に地震あったので、まだ助かったのであり、ラッシュ時であったなら、これ以上の大惨事になっていたであろう。
P.S.水は1月31日についにきた。

山口　洋一　神戸市東灘区岡本

揺れを感じた後、なぜか足元が重くなった。本棚が倒れてきていた。非常に歩きにくかったが、自分の部屋から懐中電灯をとり出して、部屋の外にどうにかして出た。この世の終わりかと思った。家族はとりあえずみんな無事だった。外を見ると3ヵ所で火が上がっているのが見

えた。とりあえず全員廊下に出て夜明けを待った。午前9時ごろに電気がついて、テレビが見れた。死者は十数人とかで、まあ今日は学校にいけないだろうと思った。9時40分ごろまでテレビをボーッとみた後、自分の部屋にもどってかたづけを始めたが、10時ごろに再び停電した。部屋が冷えきっていた。おなかがすいたので、冷や御飯2杯とビスケットを食べた。いつになっても電気がつかないので再び部屋をかたづけに行った。部屋は本で埋もれていた。しかし、その本のほとんどは僕の本ではなかった。だから、この際これらの本を捨てることに決めた。幸い、切手アルバムは全て無事だった。本を部屋の外に出すと、壁にひびが入っているのがわかった。2mmくらいの幅のひびだった。そしてトイレに行ってみると流れない！！たまたま残っていたお風呂の水で流すことが出来た。午前12時ごろ？待望のラジオが見つかった。そのうち、歯科医院は無事かどうか見に行こうと思って出ていって、10m程くだった所でまず道路に大きなひびが入っているのに驚いた。次にその辺の家の塀がくずれているのに驚いた。その家の向かいの家が全壊しているのに驚いた。また10mくらいくだると、マンションの1階がへしゃげていた。そして歩いていくと、家が2、3軒つぶれていて道が歩きにくかった。それから先はしばらくたいしたこともなかった。しかし、JR摂津本山駅をこえると家がつぶれまくっとる！！本山中町のあたりの木造住宅はことごとくつぶれていた。おそろしい光景だ。その辺で放浪している人が多かった。茫然としながら15分くらい歩いて、病院につく1分くらい前、うちの病院のむかいの宮路病院の一階がぺちゃんこにつぶれているのが見えた。何人かその中で死んだそうだ。うちの病院は建物は大丈夫だったけど、中はむちゃくちゃだ。うちの病院のまわりの建物は6割くらいつぶれていた。ニッサンのビルも傾いていた。うちの病院の裏の木造はつぶれて1人死んだらしい。病院の裏のロイヤルマンションが20度くらい傾いていてこわい。宮路病院に行くと「〇〇さ〜ん、大丈夫ですか。」とか聞こえて、本当にこわかった。違う道を通って帰ろうとすると、あちこちで住宅がこわれていかにも倒れそうな家の前を通るのはこわい。ガスの匂いもけっこうする。道路は亀裂だらけでこわかったが、なんとか家にたどりついた。午後3〜4時ごろ、まだ3ヵ所で火が上がっており、救急車と消防車のサイレンとヘリコプターの音が一日中聞こえていた。家がつぶれた友達がうちに泊まりにきた。電気がついていない所で、みんなふとんを着てまるまっていた。ラジオを聞きながら、死者が800人とか言うので、1000人くらいいくかしら？と思った。暗くなってきたので8時ごろふとんをしいて寝た。しかし、なかなか眠れなかった。そうしているうちにPM10：30ごろに電気が復旧して、テレビもついた。それでこんどの地震がものすごいものだったことを知った。眠くなってきたから、PM11：30ごろに寝ることが出来た。〈第1日目終わり〉

2／2現在、水道もガスも通じておりません！！

山瀬　正覚　　尼崎市武庫の里

家は2階建て、築30年の木造建築。尼崎市北西部の住宅地にある。地震が起こった1月17日の午前5時46分には、父母が1階、3つ年上の姉、自分と弟は2階で寝ていた。目が覚めると部屋全体が上下左右に激しく揺れていた。「地震だ」と思って驚いたが、たいした事はないと

考えていた。ひとしきり振動がおさまると、隣の部屋から姉が「大丈夫？」と大きな声でたずねた。とりあえず布団から抜け出そうと思って、下半身に洋服を入れているタンスが倒れてきていたことに気付いた。これで目が覚めたらしい。兄弟３人で１階へ降り、父と母と共に家の外へ出た。まだ日は昇っておらずあたりは暗かったが、周りの家からも次々と人が飛び出してくるのがわかった。無事を確認して話し合っているとガスのにおいがしたので、父がガスの元栓を閉めに戻った。しばらくすると明るくなってきたので、飼っている猫２匹を探して保護し、家族全員車の中へ入り、再び地震が起こっても大丈夫な場所まで移動した。通学に使っている阪急武庫の荘駅まで自転車で行こうと思ったが、登校する状態ではないと判断した。朝10時頃まで車の中で待機していたがお腹が減り、ラジオで情報もわかったので買い出しに出た。

山田　真弘

（震災当時）　西宮市上大市
（現　　在）　大阪市都島区

16日から17日にかけて私は夜を徹して、１階で宿題をやっていた。結局、宿題は終わらなかったけれども、途中であきらめて２階の自分の部屋に行って眠りについた。これが５時半過ぎ、あの地震の約10分前のことであった。

揺れが始まった瞬間、私はそれがすぐおさまるものだと思っていた。しかし、それはおさまるどころか、信じられないほど激しい揺れが襲ってきた。何がなんだかわからず、夢の中の事ではないかとも疑った。しかしこれが現実のようだ。動くこともできず、布団をかぶり、頭をかかえて、早く揺れがおさまることを願うばかりだった。父はその時のことを「まるで胴上げされているようだった」と、後になって冗談ぽく話していた。

どれだけの時間がたったかしれないが、揺れがおさまると、まず父の「大丈夫か」という声が聞こえた。これほど真剣な声を聞いたことがなかった。その声は少し上ずっていたようにも思える。奇跡的に家族にけがはなかった。しかし寝ている場所が少し悪かったら、母はたんすの下敷きになっていただろう。なんとか布団からはいだし、懐中電灯を見つけ、家の外に出た。近所の家からも人が出てきた。そしてやっと自分が生きていることを確認した。近くでは助けを求めている所があり、何人かと共に家の外へ引きずり出すことができた。しかし、中には１階部分が押しつぶされて２階部分が下に落ちていて、我々の手におえない所も何件かあった。残念ながら、そこの人は数日後遺体で発見されたということだった。しばらくして心に余裕がでてきてから家の中の様子を確かめた。たんすは倒れ、荷物が落ち、本はとび出し、台所では食器類等あらゆるものが割れていた。家は傾いて窓が開かず、壁が落ちて外から家の中が見え風呂場は壊滅していた。（後でわかったが、屋根の瓦もふっとんでいた）そしてとにかくガス臭かった。その光景を目のあたりにして、地震の恐怖に足がふるえた。

しばらくは何をしたらよいのかもわからなかった。とりあえず家の中に散らばったガラスを捨てに行き、飛び出した本や荷物を整理していた。午後からは水道局へ水をくみに行った。他に何をしていたかはっきりわからないが、たぶんラジオの情報を聞きながらボーッとしていたように思う。

夜になると人々は近くの避難所へ行き始め、あたりは人気も明かりもなく、まさしく廃墟で

あった。私の家族も避難所へ向かった。避難所である小学校では、一般および特別教室が避難者に開放されていた。体育館は屋根が落ちて使えなかったからである。避難所には電灯がある。ただそれだけで有難かった。

その日は非常に長い一日だった。とくに大した仕事をしていたわけでななかったが、大変疲れていた私はすぐに寝つくことができた。そして当分、避難所での寝泊まりが続くことになった。

最後に、今回の地震で最もショックだったのは、旧友が亡くなったのを知った時だった。小学校の時はいつも遊んでいたほどの仲だった。一階に寝ていた彼は2階部分が落ちてきて下敷きになったということだった。この話を聞いた時、助けに行きたかったと悔やんだ。自分ではどうにもできないかもしれないが、彼の上に被いかぶさった瓦を一枚でも取り除いてやりたかったと思った。大事な友を奪った地震が憎くてしょうがない思いである。

山本　尚明　　神戸市東灘区魚崎北町

朝、すさまじく揺れる振動で目が覚めた。僕の意識としては、英語の予習などをしなくてはいけないと思っていたので半分意識はある状態であったが、何が起こっているのか分からなかった。ただ、「なにするねん。」と思った。僕は揺れている間、ベッドにしがみついていた。揺れが鎮まった後、僕はとっさに津波がくると思った。北海道の地震のことを思い出した。部屋がどうなっているとか分からなかった。ベッドサックを飛び越えて、親の寝室へ行った。それから少しどう行動したかの記憶がない。ベッドで親子3人固まって、余震でふるえていた。ふと「おばあちゃん大丈夫か。」と心配になった。5分ぐらいたっただろうか、おばあちゃんの声はしない。おばあちゃんの寝ている所が、本棚の横なので、これは死んでしまったのではないかと心配した。そう心配している内に、おばあちゃんはマッチとロウソクを持って階段を登ってきた。心配された当の本人はいたって冷静であったのである。それで、ひとまず安心したが、まだ余震はひんぱんに続いていた。そして、まず懐中電灯を取りに行くことに決めた。その時だっただろうか、お隣の木村さんの御主人の「無事ですか。」という声と、懐中電灯の光が見えた。けが人がうちに運ばれるだろうと思った。あたりでは、悲鳴があちこちから聞こえていた。体中の震えが止まらなかった。時間がたつにつれて、恐ろしさが増してきた。昨日、うたた寝をしたのが幸いだった。服のまま寝ていたし、おフロの水も残っていた。しかし、半分くらいは、激しい揺れのため、台所まで流れ込み水びたしにしていた。外で声がまた聞こえ、光がいくつも見えたので、まず外へでようと思った。あたりは、ガラスの破片ばかりだったので、まず靴下を探した。幸い僕の部屋のタンスは倒れていたが、上の段は取り出せたので、靴下は確保できた。そうして、まず僕は下へおりてみた。懐中電灯を持って、台所を照らしてみた時、はっと息をのんだ。こんなことがありえるのだろうかと思った。自分の部屋を見た時は、せっかく片づけをしていたのにと腹だたしかったが、この時は、腹だたしさよりも恐怖が勝っていた。外に出るのも、ひと苦労であった。応接間が比較的ましだった。ピアノが歩いて、サイドボードが倒れているだけだった。地震直後から臭っていた異臭は、ここで割れたワインの

ためだった。応接間の雨戸は幸いすぐ開いた。改めてこの家が丈夫な設計であると思った。そうして僕は外に出た。外へ出てみると、信じられない光景が眼下に広がっていた。隣りの家も、その反対側も、向かいの家も倒壊していた。向かいの山本商店は特にひどく、一部中の部屋がむきだしになり、倒れた部分が坂一面をふさいでいた。これは、みんな死んでしまったと思ったが、三分の一ぐらいの人は逃げ出せたようであった。そして、もう三分の一は自力で家の下から這い出てきたり、家族に助けられたりし、残りの三分の一が生き埋めになっているようであった。僕も、この倒壊した家屋の、残りの三分の一の生き埋め救出作業に加わった。助ける手がかりとなるのは、家族の証言か本人の声しかなかった。どこで寝ているかとかは、家族以外の人では分かりようがない。声が出せるかどうかが、生死の境い目であった。ただ声をたよりに、きりひらいていった。倒れている家でも、10人ぐらいでロープで引っ張ると、持ち上げることができた。火事場のバカ力とはまさにこのことである。この救出作業はとても慎重に行われた。下手にくずれると、僕達が家の人を殺すことになるからだ。作業中でも余震は続いていた。さすがに、埋まっていた人を外へ助け出せた時はうれしかった。自分も一つ生命を救う作業に参加できた満足感もあったが、生き埋めになっているが僕らの力では助けられない人もたくさんいたので、地獄の中にいる気分をふり払うことはできなかった。近所が一段落してから、親戚の家や友達の家が大丈夫か見て回った。ある親戚の家は、電信柱が改築したての家に貫きささり、石垣や奥座敷は見る影がなくなっていた。また、ある親戚の家へ行く時、避難しようとしている友達にあった。お互いまだショックを受けた状態だったので、あまり言葉をかわすことができなかった。通りは、パジャマにガウンを着た状態で歩いている人が多く、きちんと服を着ていた僕は浮いて見えた。ただ、みんな呆然として歩いているのが心に残っている。現実と心に受け止めながらも、別の世界にいる感じがしていた。僕がいつもテニスでお世話になっているおじさんの家は行くと、おじさんが呆然と立っていた。家は、すさまじく倒壊していた。おじさんのお父さんである人には、僕もよくかわいがってもらったが、その人が生き埋めになったまま助けられない状態だった。おじさんの目は真っ赤であった。虚無的で、悲しみを通りこした目だった。この時、僕は初めて今回の地震での身近な人の生死に接したのである。昔の日々が思い出され、目頭が熱くなった。薬局を経営している親戚の家は、最初見つけることができなかった。建物という建物がくずれているので、景色は全くといっていい程変わってしまい、どの筋にあるのもがれきの山という感じであった。近所の親戚、友達の家がどのような状況であるか確認した後、僕は買い出しに走った。自動販売機は使えなくなっている。あたりでは、使える電話に並んでいる人があちこちにいた。コンビニに行く途中、酒屋のおばちゃんが、自販のカギを開けてジュースと取り出し売ってくれているのに遭遇し、一本百円でウーロン茶などを売ってもらった。こんな震災時であるので、値段はめちゃくちゃになっているだろうと思っていたので、意外だった。しかし、やきいもを一本三千円で売っている人がいて、みんな争ってそれを買っているという話も聞いた。このような時に、本性が出るものだと思った。あるコンビニでは、地震でガラスが割れており、そこから人々が入りこんで、物を奪ってしまい、もぬけの空になっている所もあった。幸い今年は水不足のため、天然水を買いこんでいたので水に対しての心配はなかった。コンビニでは、どこも長蛇の列になり、商品も、店の

人がかってにつめこんで、これはお弁当の入った袋ですとか、おにぎりの袋ですとか言って、一袋千円で抱き合わせ販売をしていた。並んでいる人は、いたって冷静であったが、サイレンの音はやむ間もなかった。家に帰ってから、ラジオを聞いても、地震の規模の話ばかりで、今ここが陸の孤島となって情報が伝わっていないことが分かった。夕方頃、家の近くの商店街の火事は手がつけられない状態になっていた。いつも、靴を買いに行っていた、靴屋が出火元であった。消防車もなかなか来ないし、来てからもほとんど水がないので、もうだめだと思った。火は徐々に広がり、もう自分の家も燃えてしまうんだと思った。そうこうしているうちに夜をむかえたが、真っ暗の中に、火事である所が、不気味な程赤く染まっていた。火事がすぐそこまで近づいたら、すぐ逃げれるように、家の中でも土足ですごした。逃げる荷物もまとめて、少し仮眠しようと思ったが、寝むれるものではなかった。暗闇の中で火事が迫り、そして余震で揺れる。もう生きた心地がしなかった。そんな錯乱状態の中、親戚のおじちゃんが車で迎えにきてくれた。今思えば、阪神高速道路の下の43号線をずっと通ってきたと言うからすごい人である。足手まといになるからというので、僕とおばあちゃんは北千里のおじさんの家に連れていかれることになった。しかし、車で逃げだすことは、みんなが考えることで、わずか百メートル進むのに三時間ぐらいかかった。そして、10時間後何とかおじさんの家についた。そこで、初めてテレビを見た時、こんなにすごい地震であったことが初めて分かった。テレビにうつる場所はほとんどなじみの場所であったので、まだ何か信じられなかった。そのニュースの中、僕の住んでいる場所に避難勧告が出た。両親が大丈夫かとても心配だった。これが僕の地震の当日の行動である。いろんな友達が見舞にきてくれたりしたのが、うれしかった。まだまだ書き足りないが、今までで一番長く、恐ろしかった一日だった。この後、両親は西宮北口まで歩き、姉の京都の下宿で家族が合流した。少しの間、京都に避難した。家に本格的に帰ったのは、地震発生一週間後ぐらいだったが、まだ電気は復旧しておらず、ろうそくと懐中電灯で生活をした。約三週間たった今でもまわりの状況はあまり変わっていない。ただ人が恐怖から立ち直り、復興へと向かっているのは、しっかりと感じられる。これから町の復興もしっかり体験していきたい。人と人との助け合いの大切さを身にしみて感じた。だんだん生活にもなれてきたが、まわりの壊れた家を見ると、まだ震災は始まったばかりなのだと思う。これからは、違った問題が、この町を襲ってくる。がんばらなくてはならない。

吉田　義正　　神戸市東灘区岡本

一階のベッドで寝ていた自分はベッドの所にタンスがたおれた音で起きた。すさまじい揺れが数秒間か、あるいはもっと長い時間続いた。自分は布団を頭にかぶってじっとしていた。上から何かしらないが、木の破片のようなものがたくさんふってきた。自分は家が倒壊してきているのだと思った。揺れがおさまった。自分はベッドの上に正座して辺りを見回した。家の部品の木々のかけらと思っていたものは、ベッドの上の棚に山積みにしていたマンガだった。両親の呼びかける言葉は聞こえたが、自分の口は開かなかった。ただ茫然とした。やっと我にかえって庭のほうに出ていった。家族５人のうち、父・母・姉、それと自分は無事だった。愛犬

も無事だった。しかし兄は朝早くからテレビ局のバイトに出ていたため、その安否はわからなかった。6時ぐらいになると、しだいに空は白み始めた。部屋の中はまったくの暗黒であったが、だんだんとその姿をあらわしてきた。Tシャツ一枚だった自分は、急に寒さを感じたので、丁度その辺に落ちていた兄のダウンジャケットをはおった。母が懐中電灯をもってきた。自分はそれを使って家の中を見てまわった。ガラスというガラスはすべて割れ、戸も一部開かなくなっていた。玄関の所の水槽が割れて、それがほこりやらガラスやらにまざって、玄関はドロまみれになっていた。自分は自分の部屋でウォークマンを探し当て、ラジオをつけた。震度6、阪神高速の一部は横倒しになっているなどの報道が流れていた。兄はいつもバイトのときは車で大阪までいくので、その安否が気づかわれた。自分は外に出てみた。そのときはまだ道にはだれもいなかった。意外に整然としていた。自分は自分の家だけがこんなにボロボロになったのではないかと心配になった。しかしそれは間違っていた。その後自分は玄関とそのすぐ横の応接間だけをかたづけて自転車で出かけた。JRの線路をくぐるとその風景は一転した。ちゃんと建っている物の方が少なかった。道にガレキが横たわっていて自転車でも通ることはできない。自分は自転車をおりた。マンションの一階部分はなくなっているものがほとんどだった。駅前の広場には布団をかぶった老人達が集まっていた。自分は現実が信じることができないまま家に戻った。家のかたづけが一段落したので、午後2時ごろ昼ごはんにした。タバコを吸っている人がいた。ガスの危険はないと思ったので、石油ストーブをつけてモチを焼いて食べた。

渡辺　大輔　　西宮市上甲東園

17日、朝突然激しい揺れに襲われ、何かすごい音がした。（本棚の倒れる音）そして、布団をかぶりながら、電気がついていなかったので、壁伝いにドアを探し、家族全員名前を呼びあって、安否を確認し合った。そして全員居間に集まり、まだ暗かったので懐中電灯を探し、その懐中電灯とろうそくで、1時間あまりすごし夜が明けた。家のシャッターを明け外の光を取り入れると、家の中のひどい有様がよくわかった。特に台所はひどく、食器類はすべて台所の床に投げ出され、ほとんどの食器がわれた。台所は足の踏み場もないような状態になった。一段落した後、僕は父と共に自転車で駅前の方に行った。すると駅前の方は我々の住んでいる上の方よりもはるかにひどい被害であった。特に木造の古い文化住宅などは完全に倒壊し、水道管は破裂して、水が噴出しており、辺り一面ガスのいやな臭いがたちこめていた。また駅前の商店街とビルはひどく、商店街は元の形をとどめていなかったし、ビルは一階部分が押しつぶされて傾いていた。そして駅から線路ぞいに行くと新幹線（山陽新幹線）の高架が阪急の線路に落ちていたのであった。私自身これには実に驚いた。新幹線という国が大きな予算をかけ、安全性も完璧のはずのものが、これほどまで簡単に崩れてしまうものなのかという思いだった。父と共に、仁川の方にあるローソンに食料を買い出しにいった。そこにはもう長蛇の列ができており、そこに並んで色々な食料品を買った。家に帰り、AMラジオでずっとニュースとつけた。その当時ではそんな甚大な被害が出ているようには聞こえなかったのだが…。こういう時程、テレビが見たいと思ったが、その次の日の夜3時まで電気はまったく来なかった。結局地

震当日は、朝以外はなにも動かずにずっとラジオを聞いていた。段々被害が大きくなっていくのがよくわかった。次の日の3時に初めてテレビを見た時には、その凄惨さは目を覆うばかりであった。やはり今回の地震で痛感したのはライフラインの確保は最重要であると感じた。

中 村 祥 規　西宮市大森町

17日の未明、突然「ドーン」という音ではね起きた。すぐとなりで、高層ビルの基礎くいを打っているような馬鹿でかい音であった。すぐさま横揺れが始まり、時折縦にも揺れてきた。布団を頭からかぶろうとしたのだが、なぜかしら引っぱっても動かない。しかたなく枕を頭に乗せて揺れの収まりを待った。揺れが収まると立ち上がろうとするのだが、足元が重い。腰を起こすと2mもある大きな本棚が布団の上に乗っていた。これでは布団を引いても動かないのは当然である。寝ている時間で本当によかった。頭にぶつけたら大怪我をするところである。布団の中から本棚を蹴とばし何とか立ち上がって、とりあえず電気をつけてみようとする。手探りで電灯を探すのだが、何も触れるものがない。鎖が千切れ落下していたのだが、そのときは何故なのか全くわからなかった。手探りで眼鏡を探り出し、両親の寝る一階に下りた。妹二人は既に階下に下りていた。このような地震は始めてであると私が言うと、母に自分もそうであると言い返されてしまった。ラジオと懐中電灯を探そうとしているうちに夜が明けた。父は数百メートル離れた所にある祖母の家に向った。祖母の家は60年以上の経つ古い木造だったが辛うじて全壊は免れた。明るくなってきたので、雨戸を開けてみてやっと中の詳しい状況がよく解った。家中の棚や家具がほとんど倒れていて踏み場もない状態となっていた。テレビも台が吹っ飛び、結局これは粗大ゴミとなってしまった。家の中の片づけに昼頃まで追われた。外に出てみると道路が波打つようにでこぼこになっており、電信柱も傾いていた。地盤が沈んだのかマンホールが数10cmほど飛び出ていた。付近の家は築15年ほどの家がほとんどのようだが、特に表だった被害は無かったようだった。昼過ぎになって祖母の家に行った。祖母の家は屋根が一部抜け、二階部分が傾き隣の家によりかかっていた。しかし、この時でも、震災の被害があれほどのものとは思いもしなかった。先述の通り祖母の家はかなり老朽化していたので、よほど特別なものだと思ったのだ。しかし、後々から見るとよくあの程度で済んだなといった感が強い。ここから父の空きマンションに家具は運び出すことになり、結局これに3日を費した。この日は夕方までなにも食べられなかった。電気はいつ通電したのかわからないが、夕食時にはついていたようだった。水道、ガスはそれぞれ3週間から1ヶ月程度を要した。水に関しては、近くの農家の方が農業用水の井戸水を提供して下さったので恵まれた方だったと思われる。数日後には、パイプをつないで取水口を増やすなど工夫をこらして下さり本当によくして頂いた。ガスも以前からカセットコンロがあったので重宝した。結局、震災の重大さを認識したのは、夕方の6時頃だったと思う。それまではこの地震は単に家の中が散乱し、道に亀裂が走る程度のものでしかなかった。地震で道路や線路の橋梁が落ち、ビルが崩れるなどといったことが起きるとは思いもせず、危機感は全く無かったし、対処法も考えてもみなかった。夜になって初めて広げてみたごく日常的で平凡な朝刊に「神戸　震度6」と書かれていたのを見つけて、日常生活は単なる可能性の高い偶然であることを改めて思い知った。

瞬時の変貌 －1月19日、西宮北口から高校へ－

西　村　大　典　　大阪市東淀川区上新庄

あれから2日経った1月19日午前7時20分頃、阪急西宮北口行普通列車はリュックを背負った人々を乗せ、十三駅を出た。思っていたよりは人は少ない。ぼくは窓の景色を見るために敢えてドアロに立った。

園田にあった、文化住宅の屋根の瓦が半分以上落ちていた。家にひびが入っている、道路が割れている、電線がたれ落ちている…。ブラウン管を通してではない、生の映像が次々と目に飛び込んで来た。後で考えると、渇き切った武庫川の、長い橋を越えたそこは別世界であったようだ。早々遠方にぺしゃんこの家が見える。六甲山の方に目をやる。ああ、校舎は無事のようだ。車内アナウンスが“終点”西宮北口駅の到着を告げた。針は7時40分を指している。間部賢寛との待ち合わせ時刻よりも5分早い。西宮北口の待ち合わせの定番の時計台に行く。間部は来ていないようだ。次の電車が入って来たようである。先程よりも多くの人が階段を上って来た。皆ポリタンクやらペットボトルやらに水を入れて来ている。回りの、同じ待ち合わせをしている人の格好も同じようなものである。筆記用具だけの入った小さなリュックサックを背負っているぼくは、この場所においては実に異端的存在であった。2本ほど電車が到着した後、予定よりも5分遅れで間部が到着した。彼は学生服という、非常ににかわったいで立ちであった。

北出口から出て、線路沿いを歩いて行った。西向きに歩いているのは我々だけであった。たくさんの荷物を抱えた、子供連れの母親や老夫婦といった人々とすれ違うと、『実力考査を受けに学校へ』などという理由で被災地にやってきた自分に、内心実に忸怩たる思いであった。平木小学校横を通った。多数の車が止まっており、またテントも立っていた。寝間着にコートを着ている人が数人見受けられた。川に突き当たり、北へ百メートル程行ったところにある橋を渡った。途端、左手の家を見て驚いた。積木を崩したかの如く、家がつぶれているのである。右手のアパートは一階がなくなっているし、二階建ての文化住宅の、二階部分の通路とそこに上がる階段がすっかり落ちてしまっている。自動販売機は横倒しだし、道路は凸凹激しいしという状況である。これが数秒－ミカンの皮をむいたぐらいの、伸びをしながらアクビをするぐらいの、そんな間－で起こったことなのかと目を見張るばかりである。しばらく歩くと、国道171号線に出てきた。右手にはテレビに大々的に放送された西宮市立体育館がある。実際どういう状況か見ておきたかったのだが、単なる冷やかしにすぎないのでは、と思い止どまった。171号線を南西に行くとローソンがあり、しまっているにもかかわらず、水を求める人々の列ができていた。それを左に見ながら横の細い道を通って行った。異常な車の量だった。しかしタクシーは1台もなかった。始めは歩道を通っていたのだが、途中、家屋の塀が倒れかかっており、車道に出るしかなかった。ところが渋滞しているとはいえ、それも危険であるため、道を1本変えようと横道に入った。しかし、ここも家屋の横倒れにより通行不可能であった。西田公園の横を通り、線路に出た。ひどい。ひどすぎる。ジェットコースターの線路かと思うぐ

らいに曲がって高架から電車の線路が下に落ちているのである。不思議に南側の線路、つまり神戸行の走るほうの線路は何の異常もなかった。その下を、非常に多数の人々が何か磁石に引っ張られるような、そんな無力感あふれる歩き方で一路西宮北口に向かっている。彼らの目は、右手に見えているはずの落ちている線路や、それにつぶされた車などにいっていないのか、いかせていないのか、進行方向しか見ていなかった。夙川に着いた。2ヵ月半ほどしたら咲くであろう桜が倒れていた。土手に上がる石段も目茶苦茶であった。ぼくと間部は約1週間前の始業式の日に夙川沿いを甲陽園から歩いていた。そのため、そこの変わりように呆然とした。－鳥の鳴き声がし、写生する人がいて、走り回る子供達がいる－あの日と唯一変わらない晴れ上がっている空は、無情に青かった。その後、夙川駅の改札に回ると、5時47分発須磨浦公園行普通が入ってきたばかりの位置でとまっていた。中華料理の『大胡』のビルが傾いていた。羽衣橋にひびが入っていた。車は全く通っていなかった。越木岩筋を北に行った。ふと時計を見ると8時35分を指していた。途中、レストランのようなところに列ができていた。ガラスの破片が落ちていたり、自転車では通れないような段差ができていたりと、そこの荒れようも凄かった。北夙川小学校の横を通ると、「○○さん、横浜の□□さんからお電話です」といった放送が聞こえてきた。安否確認の電話らしい。しばらく進むと、豊楽公園に着いた。1週間前に来たときに幼少を懐かしんで乗ったブランコは無事であった。突然寒さの為にもよおしてきた間部がトイレに入った。しかし、そこは色とりどりの先客が既に便器に居座っており、用を足すことは到底不可能であった。やはり数日の寒さのせいか皆下痢腹のものばかりであった。仕方なくそこを後にし、上に上って行き、越木岩神社に入った。鳥居が落ちていた。他は無事であった。便所があった。しかし、そこはくみ取り式故に人気が高く、人が既に入っていたためにできなかった。ちなみに、甑岩はさすがに霊石であった。割れていなかった。しばらく歩き、やっと目的地の学校に着いた。9時半前だった。先生の車は1台もなかった。事務員さんだけがいた。生徒で直接学校に来たのは我々だけであったそうだ。その後、校舎中を徘徊した。教室はさほど荒れていなかった。4階の窓から下界を見下ろすと、夙川グリーンタウンの後方から煙が立っていた。神戸方面の六甲山の山の端からも立っていた。ヘリコプターが3機飛んでいた。この辺のことを黒板の後ろに来た記念として記して学校を後にした。当然のことながら実力考査は無かった。

帰る途中、倒壊した家屋から人が助け出されていた。大阪から帰ってくる人が目立ち始めた。何事も無く西宮北口に着いた。電車からは朝の人とやはり同じ格好をした人が降りていった。そして、食料と水を夢見て大阪を目指す人を沢山乗せて電車は静かに走りだした。電車内も静かであった。妙に…。

倒壊した家屋、電車、落ちた橋、民族大移動のごとくに歩く人々…等。これは決して忘れないだろう。ぼくは写真一枚も撮っていない。何かうそを撮るような気がした。後で見ても「ああ、すごかったんだな」と言葉で表せてしまう、それじゃ5500にも上る死者がウソになってしまう、そんな気がしたからである。しかし、体全体で被災地のそのときの現状を吸収（？）したのは確かである。それ故この災害で人はまた、サルからヒトへの進化の続きをするのであろう、というのがぼくの考えである。

自分は何をし、どう慌てたか　－自為録－

田　治　宏　敬　　西宮市甲陽園目神山町

1月17日5時46分の約1分前、私はふと目が覚めていた。恐らく地震の直前に鳴るという砲声のためだろう。地震の直前に偶然起きていたという人は結構居るらしい。その時点で私はまだ4時間ぐらいしか寝ていなかったわけだから当然寝ぼけており、夜中起きていたような間隔で、明日マラソンがあるのに寝不足じゃまずいじゃないか、と思っていた。すると激しい地鳴り。早朝の住宅街をこんな猛スピードでトラックが通るとは何事、と考えていたら揺れが来て、内心、あ、なるほどと合点していた。ところが揺れが収まるどころか激しくなるばかり、ついには目の前にあった本棚が向こう側へ倒れてしまった。この本棚は平時から小指で押せば傾くほど不安定なものだったが、外から入ってくる明かりの中（この時はまだ通電していたのだ）で眼鏡を掛けずに見ていたものだから、隣の妹の部屋とを仕切る壁が崩れたと思い、気が動転してしまった。そのとき妹の叫び声がする。妹を呼びかけようにも声にならない。揺れが収まってから勘違いに気付いたが、それから停電。眼鏡はどこかへ行ったし懐中電灯は崩れてきた書籍の下だ。取り敢えず家族の無事を確かめ合う。父と姉は完全にパニック状態で、布団の中で震えている。母は完全に寝ぼけており、地震だったということを微かに覚えている程度だった。手探りで自室に戻り、眼鏡と懐中電灯を捜す。この時の光源はたった一つ、ノートブック型のマッキントッシュからでる小さな発光ダイオドーの緑色の光。バッテリー搭載だからだ。ついでにマックを起動しておけば、その画面のバックライトで充分な光源になったのだが、そんなことは到底思いつかなかった。ちなみにその日の8時頃だったが、マックを起動してあの『にこにこマック』が表示されたときの安堵感は、同じくマックユーザーの山下正昭教諭と相通ずるものがある。これだからマックはいい。ところでその小さな発光ダイオドーの光では埒が開かない。そこで居間にライターがあったことを思い出し、ライターで懐中電灯を捜す。何とも皮肉な話だが、今考えると、結構危険なことをしたものだ。そうして眼鏡と懐中電灯2つは見つかった。

＊　　　＊　　　＊

まず懐中電灯のうちの1つを家族に手渡し、水道の出るうちにトイレに行き、洗顔と歯磨き、アトピー患者の私は保湿クリームをたっぷり体に塗りたくって、それなりの身支度をし、あらゆる事態に備える。その後はラジオを聴きながらビデオカメラで撮影。真っ暗な大阪平野で火事が数件ある。しかし家の中は案外大丈夫だ。自室のウエッジウッドのカップもなんとか棚から落ちずにいた。そうしているうちに段々夜が明けてきた。

＊　　　＊　　　＊

通電されたのが6時52分頃。テレビの映像が入るが、大して被害は伝えていない。今や有名になってしまった、NHK神戸放送局の映像が繰り返し流される。しかしそれから数時間後にヒステリックな報道合戦へと移っていくのであった。

7時半頃だったと思うが、家から数百メートルのところにある福本君宅へ行く。「マイセン、

大丈夫ですか～？」と聞くと、そちらも大丈夫。福本君が今日は学校は休みだろう、と言うので私も休むことにした。自宅周辺では道路も全く大丈夫だったので、学校があるかもと思っていたのだが、当日はマラソンがあるのでズル休みを決め込んだ。

＊　　＊　　＊

お昼近くになって、テレビで徐々に被害の全貌を写し出す。被害が予想以上にひどいことを知らされ、新幹線の高架橋が阪急今津線の上に落下している映像を見て、それどころじゃなくなった。祖母の家はその近くだ。築40年の祖母の家自体はほぼ無事（とはいえ、半壊と判断された）だったが、倒れてきたタンスの間から祖母は救出されたという。

＊　　＊　　＊

実生活への影響が出始めたのは翌日だった。朝起きると水道が出なかった。前日に風呂に生活用水を、ありったけの鍋に飲料水を貯めていたが、昨年の渇水でも断水しなかったものだから、これには流石に焦った。しかし私の住む甲陽園目神山町では夕方には試験通水が行われ、もう１回の夜間断水があっただけで水道は復旧した。北山ダムという水源地がそこから北約１㎞にあるからだ。

ダイエーが被災地30店舗で店頭販売を行うという情報をラジオで聴き、夙川へ行く。夙川駅付近を機動隊が封鎖しているという異様な中、ダイエーの店頭に並んだが、間もなく係員が現れ、「グリーンタウンは傾いていて危険地域に指定されているため、営業できません」。後に聞いたところによると、グリーンタウンを東側から見ると周囲の建物との兼ね合いで、傾いて見えたために生まれたデマだそうだが、慌てふためいて逃げるようにして去った。もなかの成田家が全壊しているのを視界に納めつつ。しかし苦楽園に行くと、いかりスーパーが店頭で食料品を販売していた。これほど有り難いことがあったろうか。さらにパンも有り合わせの材料で焼き、売っていたのである。ヒビだらけの歩道に並んで、ジュース・フルーツ・豆腐・パンを買い、近くのタキヤ薬局も店を開けていたのでティッシュやトイレットペーパーを買った。この時気付いたのだが、私のようにティッシュやトイレットペーパーを買う人は自宅が無事で避難していない人、そのような生活用品は買わず、薬を買う人は避難している人なのである。

その日の夕方、尼崎の会社を様子見に行った父に電話して、ポリバケツに水を入れて持って帰ってもらう。同じ頃、プロパンガスの業者の方がボンベを担いで来てくれた。これで１ヵ月はもつという。プロパンガスも時として役に立つ。都市ガスだけがいいとは限らないのだ。

これで１週間はやりくりできることが分かり、どっしりと構えていたら商店が営業を再開し、もうドタバタすることはなかった。２月上旬には電気給湯器の修理も済み、お湯も出るようになった。

＊　　＊　　＊

あの地震は私達に何を残したのだろうか。少なくとも大きな教訓を残してくれたと思う。狭い範囲で見るならば災難の塊だが、大きな長期的な目で見るならば結果的にプラスであったと思えるようにしたい。

大震災・私の言い分

東　海　太　郎　　尼崎市東園田町

「17日午前５時46分ごろ、近畿地方を中心に西日本から東日本にかけての広い地域で、かなり強い地震があった。…」手元にある１月17日の「朝日新聞」夕刊の一面の本文の出だしである。大見出しは「近畿烈震　死者439人」であった。「439人」、である。ところが今はついに5500人を突破してしまった。だれがこのような事態を予想していただろうか。（一部に「予言していた」などとぬかす大バカどもがいるが、あんなものは大ウソか偶然に決まっている。）そもそも、「近畿地方には地震が無い。」というのが、少なくとも一般人にとっての常識だった。ただ、そのスジの学者の中では、「近畿地方は実は地震の巣だ。」というのが常識だったそうで、６年程前の理科年鑑に出ているのを私も読んでいて知ってはいた。しかし、実際におこるまでは、「ふう～ん」てなもんであった。まったく、人生感まで変わってしまう。

なんたって鉄道がズタズタに寸断されまくったのは痛かった、私ごときでも（尼崎の園田在住）通学に普段の倍くらいかかる。しかも、事態が新たに進展するのは８月末との予定…。気が遠くなる。だいたいなんや、あの「バス」という乗物は。気分は悪うなる。とくに夙女の連中とハチあわせすると悲惨だ。おまけに時間的に無茶苦茶不安定と三拍子そろっている。えっ、文句たれる人やったら歩けって、甘い。私は、友達との関係で、下校時は歩いて西宮北口まで行くことがしばしばあるのだ。それはさておき、今回のことで、皆様「鉄道」というもののありがたみがわかったのではないだろうか。私も、それを再認識した。（私は鉄道ファンだ！！）私のおじで甲陽線の車掌をやっている人がぽつりとこぼした一言が、鉄道各社の言い分を代弁しているような気がする。

「みんな今までぐちゃぐちゃ文句言うとったけれど、これで鉄道のありがたさがわかったやろ…。」

さて、もしこのクラスの地震が首都圏をおそうといかなる事態に陥るか、あるいは、あの地震があと１時間、あるいは２時間後に発生していたらどうなるか、考えるだけでも背筋が冷たくなる。今回のような時刻におきただけでも5500人もの人命が失われたのだ。警察・消防はともかくとして、自衛隊の初動出動の遅さはなんだ。国内の活動ですら満足に出来ないのに、海外派遣なんぞもってのほかだ。ただでさえ存在自体が憲法違反である（という風に私は思う）のに、その上役立たずなんて存在価値は無い。廃止してしまって代りによく言われる「災害救助隊」を設置して、かような大災害に備えればよい。

また、今回の地震では、建造物に関する多くの安全神話が崩れさった。それなのに電流会社や国は愚かにも「原発は安全だ。」を繰り返すばかり。私自身も地震前まで原発については消極的賛成の立場であった。もちろん今ある原発をすべて廃止する、というのははっきり言って不可能である。しかし、現在建設中あるいは計画中のものを凍結あるいは中止することは不可能なのだろうか。政治家や電力会社の幹部といった連中は万一事故が起きても海外脱出とか出来るかもしれないが、結局苦しむのは庶民なのだ。それでもいい、と言うのか。（いいと言うんだろうなあ。）

とまあ色々脈絡の無いことを書いてきたが最後に、震災で亡くなった人々の冥福を祈り、そして最後まで読んでくださった人々に感謝の意を表しつつ筆をおくことにする。

阪神大震災における情報の役割と現状

松 村 新 一　西宮市松生町

1月17日に起こった兵庫県南部地震は、街の風景のみならず、多くの人の価値観や認識まで変えてしまった。その中で最も変わったものの一つに、「情報の重要性」がある。ここでは、その「情報」にスポット・ライトを当てたいと思う。

今回の震災において、政府が地震対策委員会を設置したのは地震の約6時間後であった。このことについて非難をされた方も多いであろう。しかしこれは政府が悪いのではないと私は思う。震災による情報の混乱がなければ、政府ももっと早く動けたのではないか。

地震直後にテレビやラジオをつけていた人は思い出して欲しい。地震後数時間は、死者の数は数十人から数百人だったはずである。これは、警察署そのものが被災し混乱していたことに加えて、こんなエピソードもある。芦屋市の警察署が報告した数字が、あまりにも他市区とかけ離れたものであったため、データを切り捨てられたのだ。このようにしてまとめられた数字が、現実と近い値を示すわけがない。そして、この「逆の意味で」現実離れした数字が、東京にいる閣僚達に、「建物の被害は大きいかもしれんが死者は案外少ないな。」という甘い憶測をうながしたのである。(但し、隣の大韓民国は、直接国土が被災してはいないが、日本の衛星放送を見て、在日韓国人への地震対策委員会を、日本よりも2時間も早く設置したのである。これを考えると、情報量の多少よりも危機に対する意識の違いが大きいのではないだろうか…。平和ボケだった日本人と、常に38°線という爆弾をかかえている韓国人との差が浮き彫りになった時である。) ともかく、このように周りへ流す情報は、多少の想像を含んでもいいから、もっと全体的な視野で把握するべきである。

結論がどうもあやふやだが、次の話題に進みたいと思う。これも地震直後にテレビをつけていた人ならわかると思うが、特にテレビは当初、「高速道路が倒れた」「火事が燃え広がっている」といった、状況を伝えるばかりであった。つまり、被災して家も水も食料もない人々が、どこに行けば水や食料や寝床があるのかといったことが伝わらなかったのである。なぜこんなことになったかといえば、テレビ局は全て東京を情報拠点にして(サンTVを除く)、放送をわざわざ全国ネットにしたからである。神戸から東京へ情報を送るタイムラグに加え、全国に放送されるため、マイナーな情報はカットされ、派手な映像のみがお茶の間に流れるのである。そんなことで被災者の欲する情報が提供できるか。在阪民放局5社+NHK大阪は、独自の情報を流すべきだったのである。

最後に、震災にはつきものと言える「デマ」について書こうと思う。今回の震災で各テレビ、ラジオ局は、デマの抑制と、火事場泥棒の報道をしないという2つの点に、大きく力を入れていた。この点については、各局を評価できる、サンフランシスコ大地震や関東大震災のような暴動が起きなかったのは、そのおかげだろう。だが、もう少しでそんな暴動が起きていたかも知れない事件があった。

地震後に開かれた参議院において、あろうことか、某タレント議員が「長田区の火事は外国

人が火をつけたといううわさがある」という主旨の発言をしたのである。当然この発言には根拠がなく、議事録から削除され、N氏は、東京の民団（在日韓国人の方々で構成されている団体）本部に謝罪した。だが、もしこの発言が世間に広まれば、関東大震災の悲劇をもう一度引き起こしかねないものなのである。そんな発言をした議員が、辞職もせず今ものうのうとしているのもおかしな話だと思うのだが…

まあ、「情報」について長々と書べてきたが、以上のことが、これからどう改善されるか（あるいは改善されたか）によって、これから起こるかも知れない震災やテロに打ち勝てるかどうかが決まるだろう。

震災余録　－あとがきに代えて－

山　内　英　正　　芦屋市浜町

震災から４ヶ月がたった。我が家の回りでは、16軒の家が「鉄の爪」で取り壊されて撤去された。さらにまだまだ解体作業が計画されている。至る所に空き地ができ、子供がキャッチボールをし、犬が跳ね廻っている。袋小路の私道には抜け道があちこちにできている。倒壊家屋が道の半分までを占め、いまだに放置されている所もある。今まで地域の世話役を引受け、我が町芦屋に住んでいることに誇りをもって住んできた、多くのお年寄が亡くなり、肉親を頼って町を一時的に去っていった。町内に残っている人は皆、震災以前に比べて話好きになり、他者を思い遣る心が増したように感じる。

周りの家が倒壊して一軒だけ残されたＯさんは、我が家から少し離れた所に住んでいるため、普段話をしたことがないが、怖い怖いと言いながら干し芋をもって来てくれた。Ｎさんの家は、明治43年に建築された邸宅であったが、何とか倒壊は免れた。Ｎさんの奥さんはパン作りの名人であり、よく持って来てくれる。離れになっている昔の下男部屋は無事だったので、震災後しばらく春山さん一家がここで暮らしていた。春山さんの家は昭和９年の阪神大水害で１階の半分までが水に浸かった。水に浸かった箇所から上部が壊れ、春山珠子さんが亡くなった。ここは日本美術史家で朝日新聞社に勤務されていた故春山武松氏の邸宅であったため、貴重な文化財や資料が埋まってしまった。大部分の貴重品は掘り出された。妻は春山たづ子さんから戦前撮影された仏像写真や新聞の切り抜き、さらに珠子さんが生前使っていた絵筆と額縁をいただいた。この額縁は、古川博史氏（東京、明星学園中学校教諭）と妻が神戸市中央区三宮町の「たじま画廊」で開いた「ふたり展」（３月23日～28日）で、活用させていただいた。

古川氏は１月５日から７日までの３日間、神戸の異人館街を中心にスケッチをして回った。この時に描いた風見鶏の館の煙突は倒れ、生田神社本殿は倒壊した。心を痛めた古川氏はこの時のスケッチのうち９枚を絵葉書にして、義援金活動を行った。「ふたり展」における売上げとあわせて約300万円を各方面に贈った。我が家は全員、毎日絵葉書セット作りや発送に追われた。ちなみに妻の絵も４点売れた。古川氏は展覧会の２日目と３日目の晩に、六甲でボランティア活動をしている人のマンションに紹介で泊めてもらったが、４日目の晩はいたたまれなくなってそこには泊まれなかった。そこの責任者の女性曰く、「神戸に来るなら10日ぐらい風呂に入らない覚悟で来なさい。絵は音楽のようにうるさくないから、まだましだ。５、６本のガスボンベはいらない。持って来るなら100本単位で持って来ないと、平等に分けられない。」朝食はカロリーメイトだけなので、これではボランティアをするのに体がもたないのではないかと思い、野菜を買って帰ると、「同情されたくない。」と言われた。

５、６本のガスボンベでも、それはそれなりに利用方法があるのだから、均分するため100本単位でなければならないというのもおかしな話である。人はそれぞれ自分の生活スタイルがあり、それぞれ問題意識が異なるのだから気にすることはない。絵で心が慰められる人もいれば、慰められない人もいる。神戸市立博物館や兵庫県立近代美術館は現在も閉館中である。美

術展や音楽会も心の復興のためにも、決して後回しにされてはならない。結局は文化の成熟度の問題、どこまで地域の人々の精神に響くのかと言うことである。私は2月14日、大阪国際交流センターで催されたチャンパ王国展を見に行った。震災後最初の博物館・資料館巡りである。趣味？の世界に身をおいてみて、自分の生活は普通に戻りつつあることを実感した。

震災にあうと所有欲や物欲が少なくなるためか、書籍を棄ててしまう人が多くでた。Bさんは自分の卒論を製本したもの以外はすべて棄てたという。Tさんからは勤務先のS高校の図書館が、大量に古い本を廃棄するという話を聞いたので、あわててかけつけた。本の山を見て思わず絶句した。何という学校だ。社会科の研究室で保存すべき本をTさんと2時間かけて選んだ。廃棄本の中から春山武松氏が朝日新聞社から刊行された、『日本上代絵画史』(1949年)・『平安朝絵画史』(1950年)・『日本中世絵画史』(1953年)が見つかった。これも縁と思い頂戴した。

震災当日から私は学校再開の日まで備忘録をつけた。娘たちは日記をつけた。震災後しばらくは、時間があったにもかかわらず本が読めなかったという人が多い。私の書斎と書庫の中は目茶苦茶になり、余震が恐かったので約1ヶ月間は中に入ることは断念した。幸い締切り過ぎの数編の原稿書きの資料は、すべて居間に置いていた。読書は著者と対峙するので、私もほとんどできなかった。しかし執筆は自分自身と対峙するので、家族の犠牲が無かったこともあり、原稿用紙やメモ用紙に向かうと心が落ち着いた。また、震災関連の原稿も色々と書いた。古川氏からは社会科の教材にするので、地震体験記を頼まれた。備忘録をもとに当日の出来事を、1月27日に「阪神大震災－長い一日－」と題して執筆した。これは古川氏発行の『ミタクィエ　オイヤシン』第32号（明星学園中学校第8学年社会科通信、1月30日）に掲載され、さらに『むさしの』第191号（東京歴史教育者協議会武蔵野支部、3月7日）に抄録された。ミタクィエ　オイヤシンはアメリカ＝インディアンの言葉で、『すべて縁あるもの』という意味である。さらに高松市在住のコラムニストで近代史研究者の因藤泉石氏からも、早速原稿依頼がきたので、前述の原稿に加筆して、「阪神大震災－二日間の出来事－」と題し、『ことひら』第50号（琴平山文化会）に投稿した。題は編集をお任せした因藤氏によって、「阪神大震災・ああ被災血涙記－芦屋・西宮－生と死の瓦礫の中で」となっている。まもなく刊行される予定である。また、私は、震災当日いち早く、恩師で万葉学者の犬養孝先生のお宅（西宮市今津山中町）にかけつけ、2日目の1月18日には先生を明日香村にお連れした。後日談を含めて、このことは「阪神大震災－被災地通信－」(『あすか風』第10号、犬養万葉顕彰会、4月1日）にも書いた。

犬養先生は今年米寿を迎えられたので、門下生によって記念論集『万葉の風土・文学』(塙書房）が、今年6月に刊行される。先生は旧制中学校時代に関東大震災を体験されており、折しも一昨年（1993年）は関東大震災70周年にあたったため、東京で研究会が催され、関西でも新聞文化資料館主催の資料展が開かれた。私は先生の貴重な体験談をまとめるため、昨年5月5日に先生の家で聞き書きを行った。いずれ関西でも大地震が起きるだろうから、日頃から充分に身の回りの安全対策だけはしておかなくてはと申し上げた。この時、1年もたたないうちに本当に大地震に遭遇するとは夢にも思わなかった。しかし、各自が1本ずつ懐中電灯を枕元

に置いて寝る習慣があったこと、箪笥はすべてクローゼットに収納していたこと、娘たちのベッドはたとえ本箱やチェストが倒れても直撃を受けないように配置していたこと、何よりも全国の数多くの知人・友人から救援を受けたことなど、我が家は液状化で若干傾きながらも、日頃の対策が少しは役に立ち、幸運であったと言わねばならない。犬養先生からの聞き書きは、「関東大震災の思い出－犬養先生に聞く－」と題して、記念論集に所収されている。

電気は地震後1時間ほどできたが、ケーブルテレビの電線が切れたため、テレビはすぐに写らなくなった。水道は2月12日、ガスは3月8日に復旧した。震災後の2ヶ月間、我ながらよく活動したと思う。地域・学校・身の回り、することはたくさんあった。精神的に落ちこむことはなかったが、体は疲れていたのだろう、震災4日目頃から1週間、右の耳が聞こえにくくなった。震災資料の収集や原稿書き、地域におけるささやかな活動が、集中力の低下を招かなかった原因であろう。

我が家の復興にも大勢の人々の助けを受けた。斜め向かいに住んでいるバーマン氏には、風呂のタイル修理をしていただいた。バーマン氏は自宅の屋根瓦をすべて落としてカラフルなスレート拭きにし、ジャッキで梁を持ち上げて壁を塗り直すなど、さすがにドイツ文化圏の人である。書斎と書庫の整理復旧作業は2月19日から始まった。この日にＮＨＫ大阪放送局文化部ディレクターの廣岡篤哉氏が震災見舞いにやって来た。昨年の12月5日、午前8時35分から始まる「くらしのジャーナル」の特集「わたし流　しあわせ学」に、妻が主人公で家族全員が登場した。書斎と書庫の様子は放映ビデオの中に残されている。地震のため、部屋の周囲の木製造り付け書架以外は、すべて倒れるかねじ曲がった。本は所狭しと人の背丈ほどの高さに降り積もっていた。もっとも番組撮影の折には、本を廊下や脱衣場に移動させて、漸くカメラマンが書庫に入れたぐらいだから乱雑さの程度問題かもしれない。この日、灘高等学校第2学年の光法雄介君もボランティアとして手伝いに来ていた。廣岡氏は本の整理よりも、犠牲となった金魚1匹の探索に執念を燃やした。金魚はミイラとなって当日の作業終了間近に現れた。本に押しつぶされていなかったので、家族全員ホッとし、すぐに埋葬してやった。夜7時頃、芦屋市立宮川小学校にウドンの炊き出しを求めて行った。終了間際であった。もうこの時期にはメニューがウドンではあまり人が来ず、町内を案内係がマイクを持って何度も回っていた。大阪から来ていた炊き出し部隊は、余り物の刻んだネギとナルト巻を大きなビニール袋に入れて、妻に持って帰って欲しいと言った。5日間ほど重宝した。

この後しばらく書斎と書庫の整理は中断していたが、甲陽学院高等学校第1学年の富松浩隆君と西村大典君が、3月は3日・4日・12日・21日、4月は1日・6日、計6日間も手伝いに来てくれた。おかげで新学期が始まるまでに、一応の片付けが終わった。壊れた本箱を廃棄したため、現在も書斎と書庫に本をうず高く平積みにしたままである。年内かけてゆっくりと整理分類したい。

学校の授業再開は2月1日であった。高校1学年の必修世界史の最初の授業は、クラスによって2月2日、あるいは4日になった。私は生徒に震災体験を書いてもらった。地震発生時から、その日1日の出来事を、事実に基づいて家族や地域のことを記述するように注文をつけた。全員の生徒が登校できる状況ではなかったし、殊に大変な被害を受けた生徒はまだ勉学どころ

ではなかった。どうしても提出できなかった生徒にはあえて強要しなかった。歴史の授業における作文なので、思いよりも事実そのものを書くように言ったが、生徒の文章からは様々な思いが伝わってくる。1994年度第1学年169名の文章に、第2学年の出版委員4名の文章を加えた。また、西村大典君は1月19日に西宮北口駅から高校まで徒歩で往復した。その時の見聞録を寄稿してくれた。3学期はクラブ活動が停止されたため、出版委員も充分に動くことができず、編集は顧問の私がせざるをえなかった。『甲陽』第33号は、後世に残る貴重な証言記録集になるだろう。甲陽学院は教職員の協力によって、学校としての震災記録誌を現在編纂中である。

甲　陽　第33号 ©

1995年５月15日　印刷
1995年５月17日　発行

発　行　甲陽学院高等学校出版委員会
662 西宮市角石町3-138
0798-73-3011
印　刷　大和出版印刷株式会社
658 神戸市東灘区向洋町東2-7-2
078-857-2355

編集後記

一九九六年一〇月中旬、甲陽学院中学校の新校舎建設ならびに震災復興にともなう第二期工事が、中庭整備をもってして完了した。中庭の草木も日々、甲陽生と共に成長している。森具川と道路をまたぐ白亜のオーバーブリッジを見ていると、大震災が嘘のように思える。森具川にはまだ魚は戻っていない。体育館に避難した人々は、今どのように生活されているだろうか。香櫨園・森具地区の新たな町造りも本格化してきた。本校は私学であるが、地域の学校としての役割を担うことができた。

人には忘れてはならないことがある。しかし、悲しみや苦しみを忘れようとしても忘れられない人もいる。本校でも中学一年生の奥野正弘君が御両親とともに天に召された。これから訪れるであろう高校・大学生活を味わうこともなく逝ってしまった。親族を失った甲陽生もいる。偶然にも生きている私たちは、今なお困難な立場にいる人々を忘れてはならない。

甲陽学院も多大な被害を受けたが、一九四〇年に建築された木造の西校舎は倒壊しなかった。震災前、第二・第三棟を取り壊す折に、解体業者があまりの頑丈さに驚いていたことを覚えている。学校法人が如何に安全性に心していたかを物語っている。しかも中学校は新校舎が建築された一年半後に、震災に遭遇したため、幸いにも仮設校舎で授業を行うことから免れた。

本書は刊行が遅れ御迷惑をかけたが、第二期工事完了までの写真を掲載することができた。定点観察のため何度も学校周辺を撮影した。本文は執筆者のその時の思いがこめられているので、原文を尊重した。学校関連資料は本文にも適宜挿入しているが、巻末にも一部をまとめて掲載している。また、『甲陽だより』第五五・五六号の抜粋と『甲陽』第三三号のすべてを復刻して所収した。ただし、『甲陽だより』の誤記された人名は抹消した。

本文には被害状況の説明よりも、授業再開過程を先に掲載している。授業を大切にする甲陽学院の姿勢を汲み取っていただきたい。

（山内　英正）

甲陽学院震災記

発行　1997年１月30日Ⓒ

編　者　「甲陽学院震災記」編集委員（山内 英正）
発行所　学校法人辰馬育英会
　　　　甲陽学院高等学校・中学校
　　　　西宮市角石町３－138　TEL 0798-73-3011（高校）
　　　　西宮市中葭原町２－15　TEL 0798-33-5012（中学校）
印刷所　大和出版印刷株式会社
　　　　神戸市東灘区向洋町東２－７－２　TEL 078-857-2355

00096109024